秋田県文化財調査報告書第397集

上ノ山Ⅱ遺跡

――一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ――

２００５・３

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７cm、凝灰岩。

上ノ山Ⅱ遺跡

―― 一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ ――

２００５・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、一般国道7号琴丘能代道路をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道７号琴丘能代道路建設に先立って、平成14年度と平成15年度に能代市浅内地区において実施した上ノ山Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、鍛冶炉、土師器焼成遺構等が検出され、平安時代の集落が営まれていたことがわかりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所、能代市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年３月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　清

例　　言

1　本書は、一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る上ノ山Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は、平成14年度と平成15年度に発掘調査した秋田県能代市浅内字上ノ山に所在する、上ノ山Ⅱ遺跡の調査成果を収めたものである。

3　発掘調査成果については、既にその一部が公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1地形図『能代』・『森岳』と25,000分の1地形図『能代』・『森岳』、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所提供の『工事路線計画図』である。

5　土層断面等の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』2002年版に拠った。

6　本書に使用したグリッド配置図等は、エルディコンサルタント株式会社に委託したものである。

7　本書に使用した空中写真は、平成14年度調査範囲は株式会社ハイマーテックに、15年度調査範囲はデジタルビジネス秋田に委託したものである。

8　第５章「自然科学分析」は、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した成果報告である。

9　出土した鉄製品の一部は、保存処理業務を平成14年度出土分は株式会社京都科学に、15年度出土分は株式会社ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センターに委託した。

10　本書を作成するにあたり、次の方々から御指導、御助言を賜った。記して、感謝申し上げる次第である。〔敬称略、五十音順〕

　穴澤義功　　五十嵐俊雄　　伊藤邦弘　　菅原祥夫　　高桑弘美　　村田晃一

11　本書の草稿執筆は第１章から第３章を菊池晋と佐藤信が、第４章を菊池、佐藤、片岡稔彦、菅原ゆかりが、第６章を菊池が行った。

12　編集は菊池と菅原が行った。

凡　　例

1　遺構番号は、種類毎に略記号を付し、種別を問わず検出順に通し番号とした。平成14年度調査は１からの通し番号を付し、15年度調査においては854からの通し番号を付した。ただし、調査の結果、遺構でないと判断したものについてはこれを欠番とし、両年度に跨って検出された遺構については、原則的に14年度検出の遺構番号に統合した。

2　遺構図および本文に用いた遺構の略記号は下記のとおりである。

ＳＫＴ‥‥陥し穴状遺構	ＳＩ ‥‥‥竪穴住居跡	ＳＫＩ ‥‥竪穴状遺構
ＳＢ‥‥‥掘立柱建物跡	ＳＫ‥‥‥土坑	ＳＮ ‥‥‥焼土遺構(鍛冶炉を含む)
ＳＪ‥‥‥土師器焼成遺構	ＳＡ‥‥‥柱穴列	ＳＤ ‥‥‥溝跡
ＳＸ‥‥‥性格不明遺構	ＳＫＰ‥‥柱穴様ピット	

3　遺構図および本文中のＰは、竪穴住居跡･掘立柱建物跡･柱穴列などに伴う柱穴等を示し、当該の遺構内でP1、P2、P3～のように番号を付し各柱穴等を指定している。また、竪穴住居跡などに伴う溝跡はSD01、土坑はSK02～などのように当該の遺構内で01から通し番号を付し、個別の遺構の番号とは区別している。この他、遺構図中のRPは土器、RMは鉄関連遺物、Ｓは礫を示している。

4　遺構図の縮尺は基本的には1/40であるが、それ以外のものにもそれぞれにスケールを付してある。

5　各遺構の軸方位は、座標北を基準とし、座標北から東側にずれる場合はN－　°－E、西側にずれる場合はN－　°－Wとした。また、竪穴住居跡の主軸方位は、原則として、カマドが付設された壁の中軸線と座標北がなす角度を読み取った。

6　遺構図で用いたスクリーントーンは下記のとおりである。

焼土範囲　　カマド火床　　カマド範囲

7　土層番号は、遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構埋土には算用数字を使用して区別した。

8　本文および遺物観察表で使用する遺物の番号は、(挿図番号－遺物番号)で示してある。

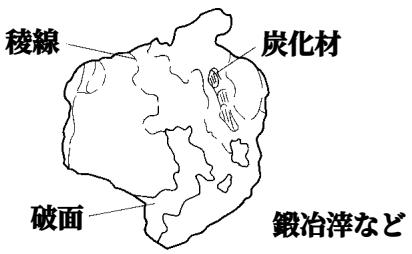
9　遺物図の縮尺は、基本的に1/3であるが、それ以外のものにもそれぞれにスケールを付してある。

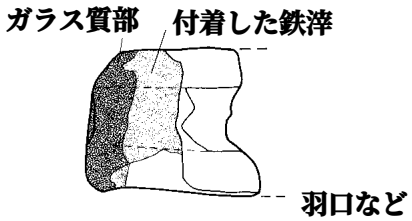
10　図版の遺物写真の縮尺は、不同である。

11　遺物図の遺物断面のうち、黒く塗りつぶしたものは須恵器である。

12　観察表の〔　〕は欠損品の残存値を、(　)は推定値を示している。

13　鍛冶関連の遺物図についての凡例は下記のとおりである。





14　鍛冶関連の遺物観察表には磁着度とメタル度の計測値を記載している。

磁着度の計測には、6mmを1単位とする同心円を描いた評価台紙の中心に、高さ35cmから糸に吊り下げた標準磁石(フェライト磁石)を用いた。磁着度の数値は、遺物を評価台紙の外側の同心円から順次中心に近づけ、磁石が動き始めた位置の同心円の距離単位を読み取ったものである。

メタル度の計測には、埋蔵文化財用特殊金属探知器ＭＲ－50Ｂ(基準値設定者穴澤義功)を用いた。表示は、金属の残留度の高い方から「特Ｌ」・「Ｌ」・「Ｍ」・「Ｈ」とし、鉄を含んでいるものの既に酸化したものについては、「錆化」とした。

目　　次

序
例　　言 …… ii
凡　　例 …… ii
目　　次 …… iv
挿図目次 …… vi
表 目 次 …… vii
図版目次 …… viii

第１章　はじめに
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査要項 …… 2

第２章　遺跡の環境
第１節　遺跡の位置と立地 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　発掘調査の概要
第１節　遺跡の概観 …… 8
第２節　調査の方法 …… 8
第３節　調査の経過 …… 9
第４節　整理作業の方法と経過 …… 11

第４章　調査の記録
第１節　調査区の層位 …… 13
第２節　検出遺構の概要 …… 15
第３節　縄文時代の遺構と遺物 …… 16
１　陥し穴状遺構 …… 16
２　縄文時代の遺物 …… 22
第４節　平安時代の遺構と遺物 …… 25
１　竪穴住居跡 …… 27
２　竪穴状遺構 …… 71
３　掘立柱建物跡 …… 74
４　土坑 …… 85

5　土師器焼成遺構 …… 103
6　焼土遺構 …… 108
7　柱穴列 …… 112
8　溝跡 …… 122
9　性格不明遺構 …… 131
10　柱穴様ピット …… 132
11　出土遺物(平安時代) …… 132
第５節　鍛冶関連の遺構と遺物 …… 137

第５章　自然科学分析
第１節　放射性炭素年代測定 …… 148
第２節　樹種同定 …… 150

第６章　まとめ …… 152

報告書抄録

挿図目次

第１図　琴丘能代道路と関連遺跡 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 3
第３図　地形区分図 …… 4
第４図　周辺遺跡位置図 …… 6
第５図　調査区および周辺地形図 …… 12
第６図　調査区の基本層位（１） …… 13
第７図　調査区の基本層位（２） …… 14
第８図　時代別遺構分布範囲図 …… 15
第９図　陥し穴状遺構配置図 …… 16
第10図　陥し穴状遺構（１） …… 18
第11図　陥し穴状遺構（２） …… 19
第12図　陥し穴状遺構（３） …… 21
第13図　陥し穴状遺構（４） …… 23
第14図　縄文時代の遺物 …… 24
第15図　調査区西側および中央部遺構配置図 … 25･26
第16図　ＳＩ４２９竪穴住居跡（１） …… 28
第17図　ＳＩ４２９竪穴住居跡（２） …… 29
第18図　ＳＩ４３０竪穴住居跡（１） …… 30
第19図　ＳＩ４３０竪穴住居跡（２） …… 31
第20図　ＳＩ４３７竪穴住居跡（１） …… 32
第21図　ＳＩ４３７竪穴住居跡（２） …… 34
第22図　ＳＩ４３８竪穴住居跡（１） …… 36
第23図　ＳＩ４３８竪穴住居跡（２） …… 37
第24図　ＳＩ４４０竪穴住居跡（１） …… 38
第25図　ＳＩ４４０竪穴住居跡（２） …… 39
第26図　ＳＩ４４６竪穴住居跡・ＳＡ８０５
　　柱穴列・ＳＫ４４７土坑 …… 41
第27図　ＳＩ４５０竪穴住居跡 …… 43
第28図　ＳＩ５１６竪穴住居跡（１） …… 44
第29図　ＳＩ５１６竪穴住居跡（２） …… 45
第30図　ＳＩ７１８・ＳＩ７１９竪穴住居跡・
　　ＳＫＩ７４３竪穴状遺構 …… 47･48
第31図　ＳＩ７１８カマド …… 49
第32図　ＳＩ８９６竪穴住居跡 …… 51
第33図　ＳＩ８９７竪穴住居跡（１） …… 52
第34図　ＳＩ８９７竪穴住居跡（２） …… 53
第35図　ＳＩ９００竪穴住居跡（１） …… 54
第36図　ＳＩ９００竪穴住居跡（２） …… 55
第37図　ＳＩ９００竪穴住居跡（３） …… 56
第38図　ＳＩ１０００竪穴住居跡（１） …… 57
第39図　ＳＩ１０００竪穴住居跡（２） …… 58
第40図　ＳＩ１０００竪穴住居跡（３） …… 59
第41図　竪穴住居跡出土遺物（１） …… 62
第42図　竪穴住居跡出土遺物（２） …… 63
第43図　竪穴住居跡出土遺物（３） …… 64
第44図　竪穴住居跡出土遺物（４） …… 65
第45図　竪穴住居跡出土遺物（５） …… 66
第46図　竪穴住居跡出土遺物（６） …… 67
第47図　竪穴住居跡出土遺物（７） …… 68
第48図　竪穴住居跡出土遺物（８） …… 69
第49図　ＳＫＩ４４４竪穴状遺構 …… 72
第50図　竪穴状遺構出土遺物 …… 73
第51図　ＳＢ２５５掘立柱建物跡 …… 75
第52図　ＳＢ３１１掘立柱建物跡 …… 76
第53図　ＳＢ３２１掘立柱建物跡 …… 77
第54図　ＳＢ６０８掘立柱建物跡 …… 78
第55図　ＳＢ６１２掘立柱建物跡 …… 79
第56図　ＳＢ９０６掘立柱建物跡（１） …… 80
第57図　ＳＢ９０６掘立柱建物跡（２） …… 81
第58図　ＳＢ９０６掘立柱建物跡（３） …… 82
第59図　掘立柱建物跡出土遺物 …… 84
第60図　土坑（１） …… 88
第61図　土坑（２） …… 89
第62図　土坑（３） …… 90
第63図　土坑（４） …… 91
第64図　土坑（５） …… 92
第65図　土坑（６） …… 93
第66図　土坑（７） …… 94

第67図　土坑（８）…… 95
第68図　土坑（９）…… 96
第69図　土坑（10）…… 97
第70図　土坑（11）…… 98
第71図　土坑内出土遺物（１）…… 99
第72図　土坑内出土遺物（２）…… 100
第73図　土坑内出土遺物（３）…… 101
第74図　土坑内出土遺物（４）…… 102
第75図　土師器焼成遺構配置図 …… 103
第76図　土師器焼成遺構 …… 106
第77図　土師器焼成遺構出土遺物 …… 107
第78図　焼土遺構（１）…… 110
第79図　焼土遺構（２）…… 111
第80図　焼土遺構出土遺物 …… 112
第81図　柱穴列（１）…… 115
第82図　柱穴列（２）…… 116
第83図　柱穴列（３）…… 117･118
第84図　柱穴列（４）…… 119･120
第85図　柱穴列（５）…… 121
第86図　溝跡（１）…… 123･124
第87図　溝跡（２）……125
第88図　溝跡（３）……127･128
第89図　溝跡（４）……129･130
第90図　性格不明遺構・柱穴様ピット …… 133
第91図　溝跡・性格不明遺構・柱穴様ピット
　　出土遺物 …… 134
第92図　遺構外出土遺物（１）……135
第93図　遺構外出土遺物（２）……136
第94図　鍛冶炉（１）……137
第95図　鍛冶炉（２）……138
第96図　鍛冶炉周辺遺構配置図 …… 139
第97図　鍛冶炉重量別遺物分布図（１）……140
第98図　鍛冶炉重量別遺物分布図（２）……141
第99図　鍛冶関連遺物構成図……142
第100図 鍛冶関連遺物構成図記載遺物（１）…143
第101図 鍛冶関連遺物構成図記載遺物（２）…144
第102図 鍛冶関連等遺物 …… 145
第103図 ＳＫ８２木材樹種 …… 151
第104図 上ノ山Ⅱ遺跡昭和58年度調査および平成14・15年度
　　調査区(西側)遺構配置図……153･154

表目次

第１表　上ノ山Ⅱ遺跡と周辺の遺跡一覧 …… 7
第２表　遺物観察表（縄文時代） …… 24
第３表　竪穴住居跡ピット計測表（１） …… 60
第４表　竪穴住居跡ピット計測表（２） …… 61
第５表　竪穴住居跡出土遺物観察表（１） …… 69
第６表　竪穴住居跡出土遺物観察表（２） …… 70
第７表　竪穴住居跡出土遺物観察表（３） …… 71
第８表　竪穴状遺構ピット計測表 …… 73
第９表　竪穴状遺構出土遺物観察表 …… 73
第10表　掘立柱建物跡柱穴計測表 …… 83
第11表　掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 83
第12表　土坑観察表（１） …… 85
第13表　土坑観察表（２） …… 86
第14表　土坑観察表（３） …… 87
第15表　土坑内出土遺物観察表 …… 102
第16表　土師器焼成遺構出土遺物観察表 …… 108
第17表　焼土遺構観察表（１）…… 108
第18表　焼土遺構観察表（２）…… 109
第19表　焼土遺構出土遺物観察表 …… 112
第20表　柱穴列観察表（１）…… 113
第21表　柱穴列観察表（２）…… 114
第22表　溝跡･性格不明遺構･柱穴様ピット
　　出土遺物観察表 …… 134
第23表　遺構外出土遺物(平安時代)観察表…… 136
第24表　鍛冶関連遺物構成図記載遺物観察表
　　（１）…… 143

第25表　鍛冶関連遺物構成図記載遺物観察表（２）…… 144
第26表　鍛冶関連等遺物観察表 …… 145
第27表　鍛冶関連遺物構成比（１）…… 146
第28表　鍛冶関連遺物構成比（２）…… 147
第29表　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（１）…… 149
第30表　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（２）…… 150

図版目次

図版 １　平成14･15年度調査区
図版 ２　竪穴住居跡(１)
図版 ３　竪穴住居跡(２)
図版 ４　竪穴住居跡(３)
図版 ５　竪穴住居跡(４)
図版 ６　掘立柱建物跡
図版 ７　土坑
図版 ８　鍛冶炉
図版 ９　土師器焼成遺構
図版 10　柱穴列、溝跡
図版 11　出土遺物(１) 土師器(１)
図版 12　出土遺物(２) 土師器(２)
図版 13　出土遺物(３) 須恵器・土製品
図版 14　出土遺物(４) 鉄製品、鍛冶関連遺物

付図１　上ノ山Ⅱ遺跡遺構配置図（１）
付図２　上ノ山Ⅱ遺跡遺構配置図（２)、柱穴様ピット計測表

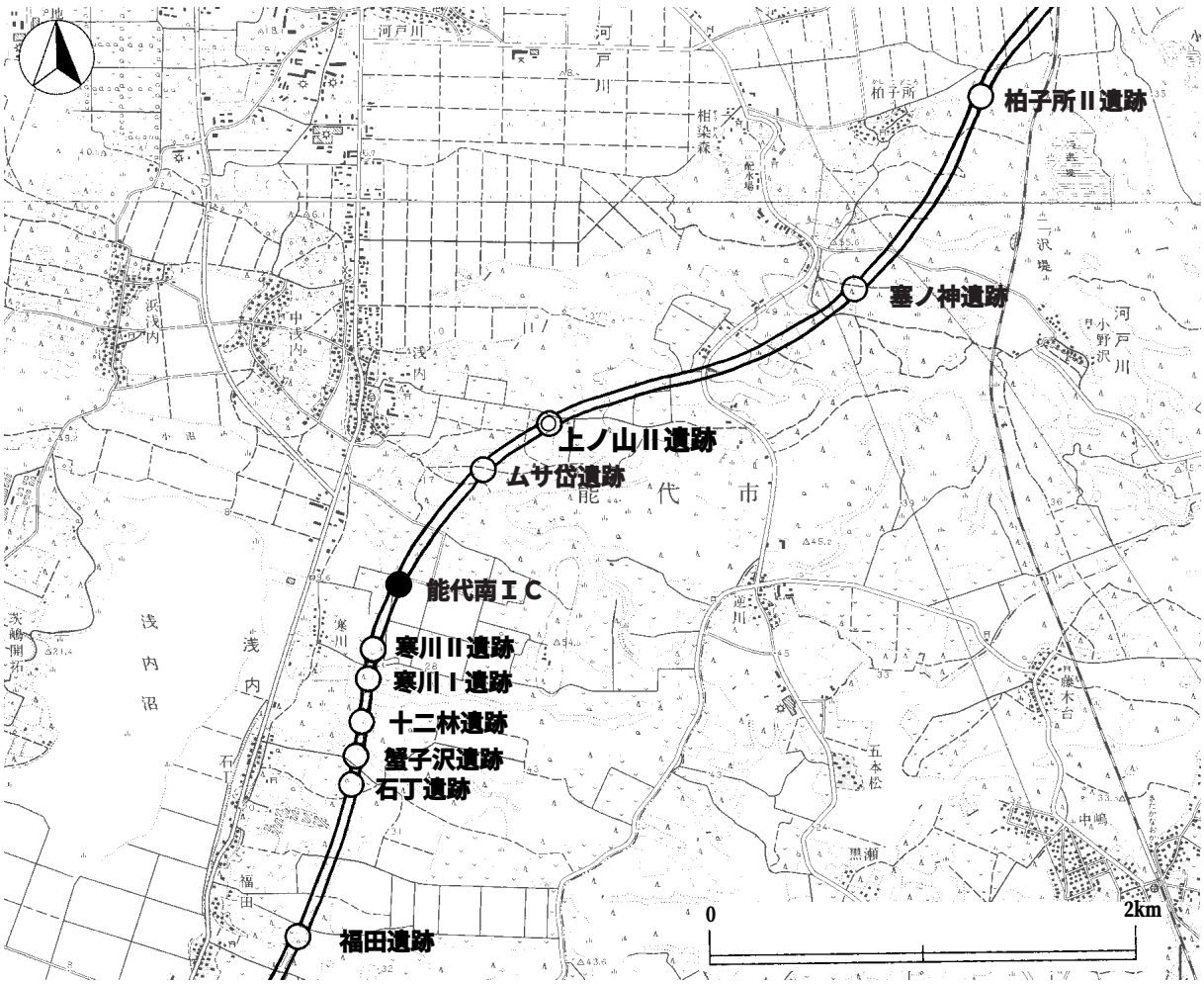
第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

上ノ山Ⅱ遺跡は能代市南部の浅内地区に位置する（第１図）。発掘調査の原因である一般国道７号琴丘能代道路建設事業は、一般国道７号線の自動車専用道路として、山本郡琴丘町から能代市を通過し山本郡二ツ井町に至る全長33.8㎞を整備する事業である。一般バイパスとしてすでに事業化されていたが、平成元年度に高規格道路網の整備促進の一環として、自動車専用道路に規格変更され、平成４年度に八竜ＩＣから能代南ＩＣまでの4.1㎞が、暫定供用区間として開通した。能代南ＩＣ～能代東ＩＣ間（6.7㎞）の区間延伸は平成６年度に決定し、平成12年度に工事が開始されている。

これを受けて秋田県教育委員会は、平成12年度に能代南ＩＣ～能代東ＩＣ間を対象とした遺跡分布調査、平成12～13年度に確認調査を実施し、この結果、平成13～15年度にかけて、ムサ岱・上ノ山Ⅱ・塞ノ神・柏子所Ⅱの４遺跡の発掘調査が実施された（第１図）。

上ノ山Ⅱ遺跡の確認調査は19,300㎡を対象として、平成13年８月から９月にかけて実施された。その結果、古代の竪穴住居跡、土坑、柱穴、焼土遺構、溝跡が検出され、さらに須恵器・土師器などが



第１図 琴丘能代道路と関連遺跡

出土し、平安時代における集落跡であることが予測された。なお、遺構が検出されなかった確認調査対象範囲北東側の3,800㎡と本工事によって現表土上に盛土される確認調査対象範囲南側の2,180㎡が本調査の対象範囲より除かれた。また、本工事の関係で、平成14･15年度の２カ年にわたって調査が実施されたが、平成14年度の調査において、既に遺構確認面下まで切り土が及んでいた調査区西側を南北に横断する農道部分を調査対象範囲より除いたため、調査面積は12,790㎡となった（第５図）。

第２節 調査要項

遺 跡 名 称　　上ノ山Ⅱ遺跡(うえのやまにいせき)
遺 跡 略 号　　３ＵＮＹⅡ
所　在　地　　秋田県能代市浅内字上ノ山70－3外
調 査 期 間　　平成14年度：平成14年５月20日～９月６日
　　平成15年度：平成15年５月20日～９月30日
調 査 目 的　　一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る事前発掘調査
調 査 面 積　　12,790㎡（平成14年度：9,610㎡ 平成15年度：3,180㎡）
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者
[平成14年度]　　菊池　　晋(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 学芸主事)
　　佐藤　　信(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 学芸主事)
　　小澤　昌広(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員)
　　齋藤　恵里(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員)
　　佐藤　広志(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員)
　　髙橋　浩樹(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員)
　　楢岡　　淳(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員)
[平成15年度]　　菊池　　晋(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 学芸主事)
　　片岡　稔彦(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 臨時職員(調査･研究員))
　　菅原ゆかり(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 臨時職員(調査･研究員))
　　※職名は調査年度当時のものである。
総務担当者
[平成14年度]　　土橋　謙一(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 主事)
[平成15年度]　　藤原　康悦(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 副主幹)
調査協力機関　　国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所　能代市教育委員会

【参考文献】

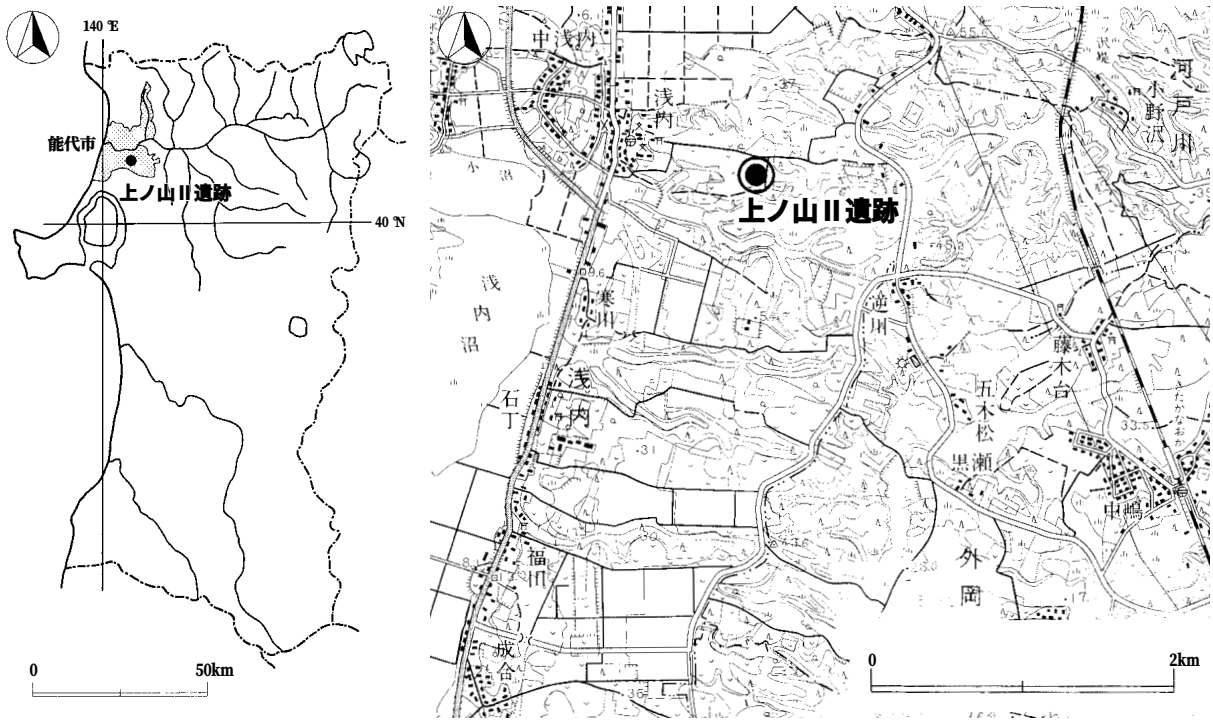
秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財報告書第324集 2000･2001･2002(平成12･13･14)年

第２章　遺跡の環境

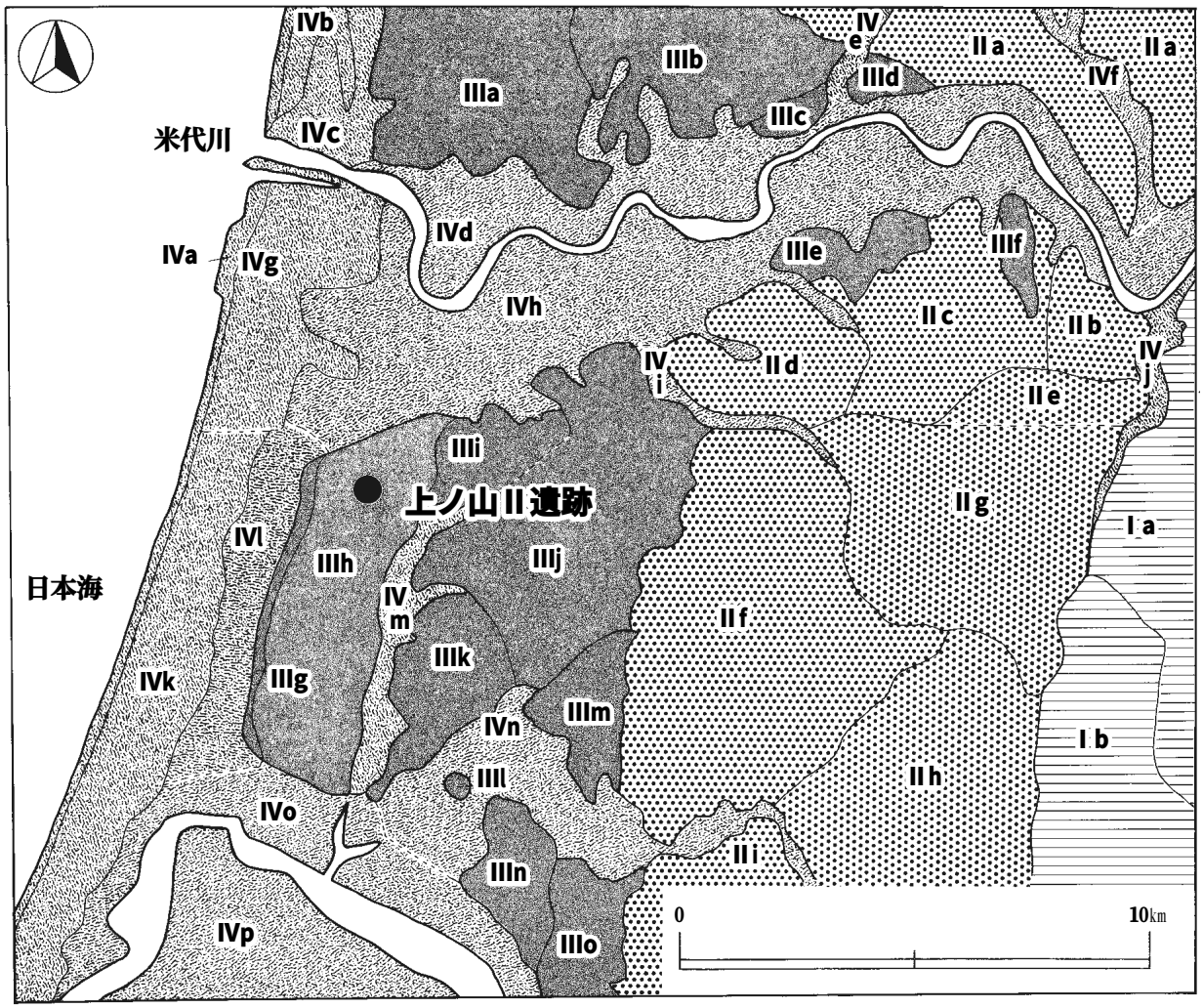
第１節　遺跡の位置と立地

上ノ山Ⅱ遺跡の所在する能代市は出羽丘陵北部の西寄りに位置し、東は奥羽脊梁山脈より分岐する太平山山地に連なる七座山山地－房中山山地、南は台地や低地、西は日本海、北は白神山地に連なる山地に囲まれた地域である。能代市の中心部を西流し日本海に至る米代川は沖積平野を形成し、この地域を南北に二分している。米代川下流域南部の地形を東から西へ見ると、七座山（標高287m）がそびえる七座山山地、内川低地、標高約100～200mの羽立丘陵地、標高約80～100mの桧山・山本丘陵地を経て、標高50～60mの志戸橋野台地、間に鵜川川低地を挟み、成合台地・大曲台地、さらに浅内海岸低地、日本海岸砂丘（能代砂丘）、海浜低地、日本海へと概ね東高西低の地形を示す(第３図)。

遺跡が位置する成合台地は、東側の鵜川川低地と西側の浅内沼が属する浅内海岸低地の間に挟まれた武蔵野面相当の台地で、南北約８㎞、東西2.5㎞に展開している。土壌統は大部分が表層腐植質黒ボク土の大川口統であるが、西縁に埋没腐植層のある淡色黒ボク土の切明統がみられる区域もある。標高30mほどの台地上面はかつて、北東から南西へ緩やかに下降する斜面地であったと考えられる。この地形は、一部耕作地などに利用されることはあっても、大きく変化することなく近年に至ったものと思われるが、昭和51年に始まる国営能代開拓建設事業により大規模な切り土と盛り土が行われ、水田や畑地などの整地された平坦面によって構成される農地に姿を変えた。現在台地は人家が疎らで、主に農地、植林地などに利用されている。上ノ山Ⅱ遺跡はこの成合台地の北部、米代川河口左岸から南東へ約７㎞、日本海までは西に直線で約４㎞の北緯40°9′33″、東経140°1′58″に位置する。



第２図　遺跡位置図



Ⅰ　山地
Ⅰａ　七座山山地
Ⅰｂ　房中山山地

Ⅱ　丘陵地
Ⅱａ　常磐種梅丘陵地
Ⅱｂ　七折山丘陵地
Ⅱｃ　茂谷山山地
Ⅱｄ　轍山丘陵地
Ⅱｅ　小掛丘陵地
Ⅱｆ　槍山・山本丘陵地
Ⅱｇ　羽立丘陵地
Ⅱｈ　谷地の沢丘陵地
Ⅱｉ　石倉山丘陵地

Ⅲ　台地・段丘地
Ⅲａ　東雲開拓台地
Ⅲｂ　大野豊栄台地
Ⅲｃ　常磐台地
Ⅲｄ　天内台地
Ⅲｅ　大台野台地
Ⅲｆ　烏野台地
Ⅲｇ　大曲台地
Ⅲｈ　成合台地
Ⅲｉ　浅内台地
Ⅲｊ　志戸橋野台地
Ⅲｋ　金光寺台地
Ⅲｌ　泉八日台地
Ⅲｍ　豊岡台地
Ⅲｎ　横長根台地
Ⅲｏ　森岳・寒城台地

Ⅳ　低地
Ⅳａ　海浜低地
Ⅳｂ　落合砂丘地
Ⅳｃ　落合海岸低地
Ⅳｄ　米代川下流右岸低地
Ⅳｅ　常磐川低地
Ⅳｆ　種梅川低地
Ⅳｇ　能代砂丘地
Ⅳｈ　米代川下流左岸低地
Ⅳｉ　檜山川低地
Ⅳｊ　内川低地
Ⅳｋ　日本海岸砂丘地
Ⅳｌ　浅内海岸低地
Ⅳｍ　鵜川川低地
Ⅳｎ　三種川低地
Ⅳｏ　八郎潟湖岸低地
Ⅳｐ　大潟人工干拓低地

第３図　地形区分図

【参考文献】

秋田県農政部農地整備課　土地分類基本調査　能代 1983(昭和58)年

秋田県農政部農地整備課　土地分類基本調査　森岳・羽後浜田 1984(昭和59)年

第２節　歴史的環境

能代市の遺跡は台地上に多く確認されている。その数は約180遺跡を数え、縄文時代前期の大型住居跡が検出された杉沢台遺跡（国指定史跡）をはじめとして、注目される遺跡が数多い。能代市の米代川左岸に位置する成合台地においても、昭和58年度の農林水産省東北農政局の国営能代開拓建設事業および昭和62年度の建設省の一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る発掘調査などの結果が多く報告されている。ここでは、上ノ山Ⅱ遺跡が立地する成合台地及びその周辺における遺跡の分布、概要について記す。

１　旧石器時代

成合台地周辺の旧石器時代の遺跡としては、本遺跡から北西約0.5㎞に位置する此掛沢Ⅱ遺跡（第１表－16、以下同表番号）がある。この遺跡は、米代川流域において初めて確認された旧石器時代の遺跡であり、旧石器が1,750点以上出土し、中でも米ヶ森型台形石器が多く米ヶ森型技法が能代地域まで及んでいたことを証明している。その他の旧石器時代の遺跡では、本遺跡から南東へ約1.2㎞の逆川遺跡（31）で石核・石刃等が約20点出土している。

２　縄文時代・弥生時代

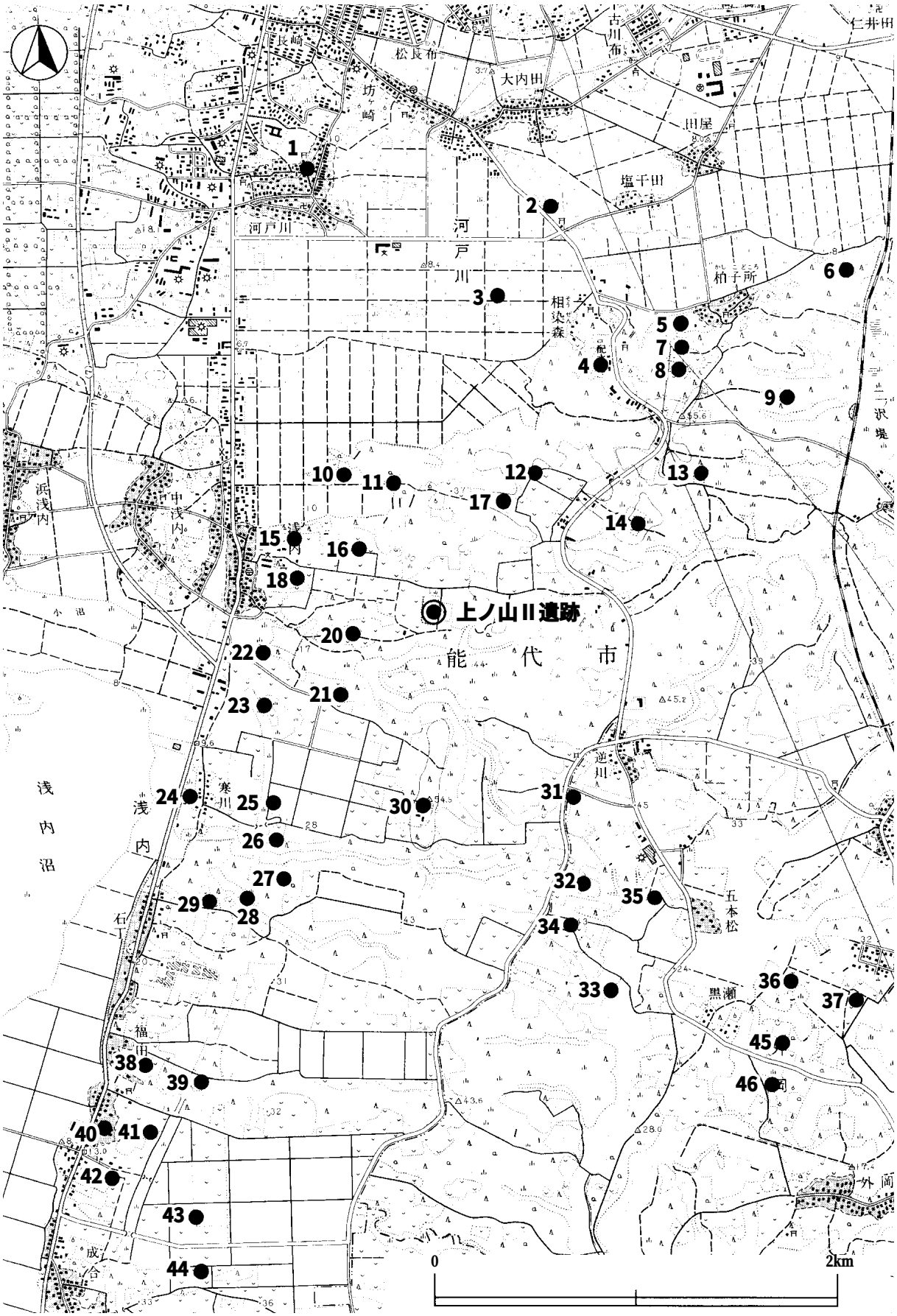
昭和61年度に、本遺跡から南西に約1.5㎞に位置し、成合台地上にある寒川Ⅰ遺跡（25）と寒川Ⅱ遺跡（26）が発掘調査された。寒川Ⅰ遺跡は縄文時代早期末葉の竪穴住居跡とそれに伴ってトランシェ様石器31点などが出土し、その他縄文中期の竪穴住居跡、縄文後期の竪穴住居跡と土器棺墓・土坑墓、弥生前期の捨て場が見つかっている。その南側に隣接する寒川Ⅱ遺跡においては、後北C_2式の土器が埋設された土坑墓が検出されている。寒川地区においては、多時期にわたる多様な遺構・遺物等の検出が認められ、集落が断続的に営まれていたと考えられている。この他、平成13年６月から７月に能代市教育委員会によって調査された相染森遺跡（４）は、本遺跡の北東約1.6㎞に位置し、縄文時代中・後期の土器および石器等が出土している。

平成14年度に調査された柏子所Ⅱ遺跡（６）は、本遺跡の北東約2.8㎞に位置する。この遺跡は縄文時代後期後半の遺跡であることが判明し、トチのアク抜きを行ったと考えられる水さらし場遺構と竪穴住居跡・土器埋設遺構・捨場などが見つかっている。当該期の人々の生活の様相を知る上で貴重な遺跡である。

縄文時代晩期の遺跡では、能代市で初めて発掘調査が行われた柏子所貝塚（７）がある。本遺跡から北東へ約２㎞に位置するこの遺跡は、昭和30年１月に県指定史跡に登録され、昭和30年10月から33年８月にわたって３回の発掘調査が行われた。その結果、縄文晩期大洞Ｂ～C_4式期の貝塚であることが分かった。また、７基の土坑墓からは８体の人骨が見つかっており、当該期の埋葬方法を知る貴重な遺跡である。

３　古 代

本遺跡から南西約2.6㎞に福田遺跡（39）、同じく南西約1.5㎞に十二林遺跡（27）が位置する。これらの遺跡は、昭和62年に発掘調査が行われ、溝や柵列によって区画された集落跡であることが確認された。特に十二林遺跡は、居住域に須恵器窯や土器焼成遺構・製鉄炉など、生産を目的とする遺構が



第４図　周辺遺跡位置図

検出された。また、平成14年度に発掘調査が行われたムサ岱遺跡（20）では、竪穴住居跡が60軒以上検出され、さらに、墓域と見られる土坑群や、住居の主軸と方向が一致する柱穴列の他に、堀立柱建物跡、竪穴状遺構などが検出された。この遺跡は、本遺跡と南西側の沢を挟んで隣接し、出土した土師器・須恵器の形式が類似していることから同時期の遺跡であると推定される。両遺跡の関連を解明することで、当地域における古代大規模集落の様相がより明らかになるものと考える。

第１表　上ノ山Ⅱ遺跡と周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所　在　地	時　代	番号	遺跡名	所　在　地	時　代
1	河戸川	能代市河戸川字新屋布	中	24	寒川家下	能代市浅内字寒川家下	縄
2	塩干田	能代市河戸川字上相染下	古･中	25	寒川Ⅰ	能代市浅内字寒川家上	縄･弥
3	下相染下	能代市河戸川字下相染下	古	26	寒川Ⅱ	能代市浅内字寒川家上	縄･続縄
4	相染森	能代市河戸川字相染森台	縄･古	27	十二林	能代市浅内字十二林	縄･古
5	柏子所	能代市字柏子所	縄	28	蟹子沢	能代市浅内字蟹子沢	縄
6	柏子所Ⅱ	能代市字柏子所	縄･弥･古	29	石丁	能代市浅内字石丁家上	縄
7	柏子所貝塚	能代市字柏子所	縄	30	大館南沢	能代市浅内大館南沢	古
8	古屋布	能代市字古屋布	縄･古	31	逆川	山本郡山本町外岡字渡道	旧
9	西ノ沢	能代市河戸川字西ノ沢	縄	32	渡道Ⅰ	山本郡山本町外岡字渡道	縄
10	赤ハゲⅠ	能代市浅内字赤ハゲ	縄･古	33	渡道Ⅱ	山本郡山本町外岡字渡道	縄
11	赤ハゲⅡ	能代市浅内字赤ハゲ	縄･古	34	渡道Ⅲ	山本郡山本町外岡字渡道	縄
12	船沢	能代市浅内字船沢	縄･古	35	五本松	山本郡山本町外岡字渡道	縄
13	塞ノ神	能代市字塞ノ神	縄･古	36	中嶋Ⅰ	山本郡山本町外岡字中嶋	縄･古
14	塞ノ神Ⅱ	能代市字塞ノ神	縄	37	中嶋Ⅱ	山本郡山本町外岡字中嶋	縄
15	此掛沢Ⅰ	能代市浅内字此掛沢	縄･古	38	福田上野	能代市浅内字福田上野	古
16	此掛沢Ⅱ	能代市浅内字此掛沢	旧･縄･古	39	福田	能代市浅内字福田上野	古
17	此掛沢Ⅲ	能代市浅内字此掛沢	縄	40	頭無上Ⅰ	能代市浅内字頭無上	古
18	上ノ山Ⅰ	能代市浅内字上ノ山	古	41	頭無上Ⅱ	能代市浅内字頭無上	古
19	上ノ山Ⅱ	能代市浅内字上ノ山	縄･古	42	向上	能代市浅内字向上	弥
20	ムサ岱	能代市浅内字ムサ岱	旧･縄･古	43	成合C	能代市浅内字成合	縄
21	横長根A	能代市浅内字横長根	縄･古	44	成合D	能代市浅内字成合	古
22	横長根B	能代市浅内字横長根	縄･古	45	黒瀬Ⅰ	山本郡山本町外岡字黒瀬	縄
23	清水上	能代市浅内字清水上	縄･古	46	黒瀬Ⅱ	山本郡山本町外岡字黒瀬	縄

【参考文献】
能代市史編纂委員会『能代市史 資料編 考古』 能代市 1995(平成７)年
秋田県教育委員会『此掛沢Ⅱ遺跡 上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第114集 1984(昭和59)年
秋田県教育委員会『国営能代開拓建設事業 埋蔵文化財発掘調査 上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』
秋田県文化財調査報告書 第137集 1986(昭和61)年
秋田県教育委員会 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』
秋田県文化財調査報告書第167集 1988(昭和63)年
秋田県教育委員会 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』秋田県文化財調査報告書第178集 1989(平成元)年
秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(中央版)』1990(平成2)年
秋田県教育委員会『秋田ふるさと紀行ガイドブック 史跡・考古編』　1999(平成11)年
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布報告書』秋田県文化財調査報告書第324集 2002(平成14)年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

上ノ山Ⅱ遺跡は、能代市役所から南へ約5.9㎞、ＪＲ東能代駅から南西へ約4.6㎞に位置し、米代川左岸に広がる標高29～37ｍの成合台地に立地する。

上ノ山Ⅱ遺跡は、平坦な台地を利用した平安時代の集落跡を中心とする、推定範囲131,500㎡の広大な遺跡である。これまでに国営能代開拓建設事業に伴い、昭和58年度と昭和60年度に計6,915㎡が調査された。２度にわたる調査で、平安時代の竪穴住居跡39軒、掘立柱建物跡13棟、土坑70基、焼土遺構15基、溝跡18条、陥し穴2基が検出された。また、隣接する此掛沢Ⅱ遺跡とムサ岱遺跡からも平安時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が検出されており、平安時代の集落跡は上ノ山Ⅱ遺跡のある台地上に広く分布しているものと推定される。

今回の調査区は、本来、北東側から南西側に向かって緩やかに下る斜面地であったと推測されるが、調査区東側は、切り土と盛り土によって造成されたグラウンドとして利用されていた。また、中央部から西側にかけては、標高の高い北側斜面を切り土し、その土を低位の南側に盛土して造成した畑や水田となっている。北東端部に樹林地があるが、ここも大きな削平を受けていた。

なお、本工事の関係により、調査は平成14･15年度の２カ年に及んだ(第５図)。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。計画路線内の基準杭STA.NO.74+00を原点(ＭＡ50)とし、国家座標第Ⅹ系座標北を求め、このラインを南北基線として、これに直交するラインを東西基線と定めた。この東西南北に沿って、上ノ山Ⅱ遺跡の平成14・15両年度全調査区域に４ｍ×４ｍメッシュを組み、その交点にグリッド杭を打設し、グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す・・・・ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・・・・というアルファベット２文字と、南から北へ向かって昇順する・・・・48・49・50・51・・・・の２桁の数字を組み合わせた記号を記入した。各グリッドの呼称は南東隅の杭の記号を用いた。上ノ山Ⅱ遺跡の平成14・15年度調査区グリッドとムサ岱遺跡の平成14年度調査区グリッドは連続している。

検出された遺構には､平成14・15年度を通して､種別を問わず確認した順に1から通し番号を付した。また、番号を登録した後に遺構と判断されなかったものは欠番とした。

遺物は遺構内出土のものは、遺跡名・遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは遺跡名・出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入して取り上げた。

調査の記録は主に図面と写真によった。図面はグリッド杭を基準とした簡易遣り方測量を採用し、平面図・断面図ともに、原則的に１／20の縮尺で作成した。遺物出土状況などの細部の表現が必要なものについては１／10の縮尺で作成した｡写真撮影は、35㎜のモノクロ、カラーリバーサルを中心にネガカラーフィルムを交えて行った。また、両年度とも委託による空中撮影を実施した。

第３節　調査の経過

[平成14年度] 平成14年５月20日から９月６日まで実施した発掘調査の経過は次のとおりである。

14年度調査区の本調査に先立ち、４月25日より表土除去、５月15日よりグリッド杭打設を開始。

【第１週】５月20日～５月24日

５月20日、発掘器材を搬入し、東側北寄りの地区から粗掘りを行った。基本土層ラインを設定し、基本土層図を作成。

【第２・３週】５月27日～６月７日

北東部は切り土により遺物包含層が失われており、確認調査で検出された土坑１基のみが確認された。東側南寄り（MA50以南）で各種の遺構を、東端部の溝跡底面より、縄文時代の陥し穴状遺構を１基、さらにその北側などから３基の陥し穴状遺構を検出し、精査を行う。

【第４・５週】６月10日～６月21日

調査区中央部より竪穴住居跡や土坑などを検出し、精査を行う。西側の粗掘りを開始。

【第６・７週】６月25日～７月５日

中央部北寄りの地区から鍛冶炉が２基、同南寄りの地区から土師器焼成遺構３基、これと重複する掘立柱建物跡１棟を検出し、精査を行う。

【第８・９週】７月８日～７月19日

調査区東側の精査が終了し、７月12日に空中写真撮影を行い、同区域の引き渡しを終了。

７月12日、能代市立浅内小学校６年生が「ふるさと学習」（発掘体験）を実施。

調査区中央部より竪穴住居跡５軒を検出し、精査を行う。

【第10･11週】７月22日～８月２日

B区西側より竪穴住居跡３軒、掘立柱建物跡１棟、柱穴列４条などを検出し、精査を開始。

７月22日、国土交通省外国人研修員が視察のため来跡。

【第12週】８月５日～８月９日

調査区西側の粗掘りと遺構検出作業が農道部分を除き終了。以後遺構精査および各遺構の実測・平断面図作成が作業の中心となる。

８月９日、浅内自治会が見学のため来跡。

【第13･14週】８月19日～８月29日

調査区中央部～西側で検出された竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、土坑、柱穴列などの遺構精査・図面作成を行う。

【第15週】９月２日～９月６日

調査区西側の地形測量と図面点検を中心に作業を進め、これに並行し撤収の準備、調査区・コンテナハウス用地等の清掃を行う。

９月５日、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所と平成14年度全調査区の引き渡しを行う。

９月６日、発掘器材を撤収し、平成14年度調査を終了。

[平成15年度] 平成15年５月20日から９月30日まで実施した発掘調査経過は次のとおりである。

15年度調査区の本調査に先立ち、５月６日より表土除去、５月14日よりグリッド杭打設を開始。

【第１週】５月20日～５月23日

東区の北側より粗掘りを開始。また、同区西端に基本土層ラインを設定し、土層図を作成。

【第２・３週】５月26日～６月６日

東区より土坑、陥し穴状遺構などを検出し、精査を行う。西区の調査を開始し、同区に基本土層ラインを設定。西区中央部より竪穴住居跡１軒、土坑１基などを検出し、精査を行う。

【第４・５週】６月９日～６月20日

６月９日、東区の全調査を終了し同区を原因者に引き渡す。西区は引き続き、粗掘りと遺構検出作業を進める。

【第６・７週】６月23日～７月３日

西区西端部農道部分の遺構精査および図面作成に並行し、同区西側の粗掘りと遺構検出作業を進める。

７月３日、西区西端農道部分の調査を終了し、同部分を原因者に引き渡す。

【第８・９週】７月７日～７月18日

西区西側ＭＦライン以東、ＬＲライン以西の掘り下げおよび遺構検出作業を進める。同区域内より平安時代の竪穴住居跡、土坑、溝跡、柱穴列などを検出し、精査を開始。

【第10･11週】７月22日～８月１日

西区西側ＭＦライン以東、ＬＲライン以西の遺構精査および図面作成と同区東側ＫＭライン以西、ＫＴライン以東の掘り下げおよび遺構検出作業を並行して進める。

【第12週】８月４日～８月８日

遺構精査および図面作成を行う。

８月４日～６日、能代高校２年女子生徒１名が学校のボランティア活動として発掘作業に参加。

【第13･14週】８月18日～８月28日

西区西側の遺構精査および図面作成と、同区東側の掘り下げおよび遺構検出作業を並行して進める。

８月19日、能代工業高校３年男子生徒１名と引率教諭１名が遺跡を見学。

【第15･16週】９月１日～９月12日

全調査区の粗掘りを終了し、西区西側の遺構精査と東側の遺構検出作業および精査を並行して進める。

【第17･18週】９月16日～９月26日

遺構精査と図面作成をほぼ終了し、図面点検と地形測量を進める。空中撮影に備え調査区内の整備に努めるが悪天候のため空中撮影が最終週に延期。

９月26日、調査区内全ての精査及び地形測量、図面点検を終了。

【第19週】９月29日～９月30日

９月29日、空中撮影を実施。

９月30日、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所と調査区の引き渡しを行う。同日午後現場の撤収を完了、これをもって平成14年４月より２カ年に及んだ上ノ山Ⅱ遺跡発掘調査の全工程を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

平成14年度調査分の整理作業は14年９月中旬より開始した。現場で作成した遺構の平面図・断面図等より第２原図を作成した。遺物は洗浄、注記、分類、接合を行い、ある程度復元できた土器等については実測図を作成し、中には採拓を行った土器もある。

平成15年度調査分の整理作業は15年９月初旬より開始した。昨年度とほぼ同様の手順で整理作業を進めた。なお、遺構番号と遺物の実測番号には、平成14・15の両年度を貫く通し番号を付し、整理作業を進めた。また、両年度調査区に跨って検出された遺構については、原則的に14年度検出の遺構番号に統合した。

遺構並びに遺物の図面浄書、報告書本文原稿の作成等を含む、本報告書の編集作業は平成16年１月より開始した。遺物の写真は35mmモノクロフィルムで撮影した。

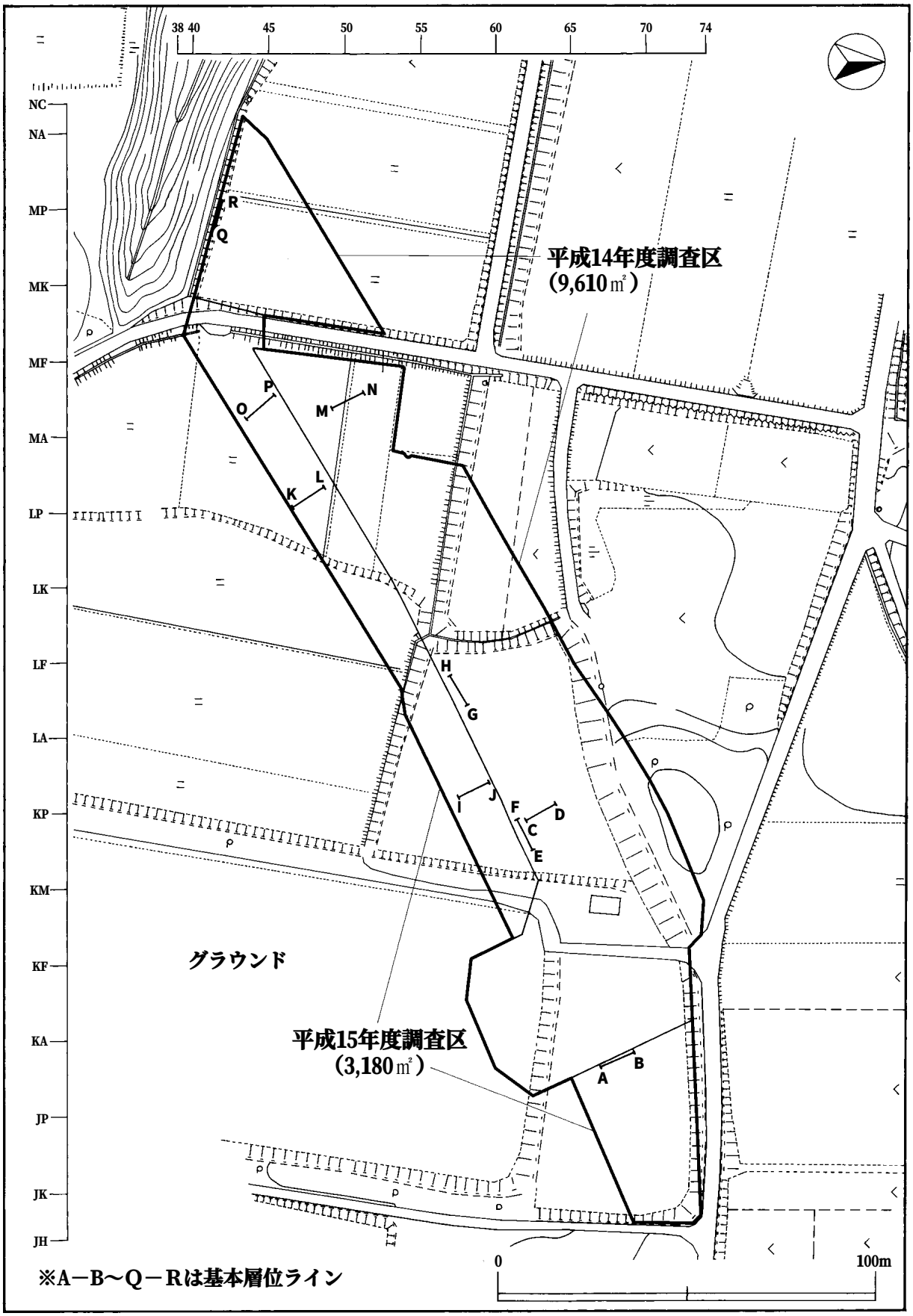
「平成14年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会」（平成15年２月：大曲市）では、遺構・遺物等の写真を展示。「平成15年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会」（平成16年２月：能代市）では、出土遺物と写真を展示した。

報告書の作成にあたっては、平成14・15の両年度にわたる全調査区を一括して記述することとする。よって、遺構の記述および、遺構図の記載ついては、遺構の種類ごとに両年度検出分を一括している。

また、遺物についても、両年度出土の遺物を一括し、遺構内出土遺物と遺構外出土遺物に分け、報告書への掲載にあたっては前者を遺構の種類ごとに先に掲載し、後者を後とした。ただし、鍛冶関連遺物構成図に載る遺物については、出土についての遺構の内外を問わず、構成図内の遺物番号を付し別途記載している。

以上の経過を経て、多くの方々より指導と助言、協力を受け、本報告書を刊行することができた。

【参考文献】
能代市史編纂委員会『能代市史 資料編 考古』 能代市 1995(平成７)年
秋田県教育委員会『此掛沢Ⅱ遺跡 上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第114集 1984(昭和59)年
秋田県教育委員会『国営能代開拓建設事業 埋蔵文化財発掘調査 上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』
秋田県文化財調査報告書 第137集 1986(昭和61)年
秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』　2003･2004（平成15･16）年2月
秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報』　2003･2004（平成15･16）年3月



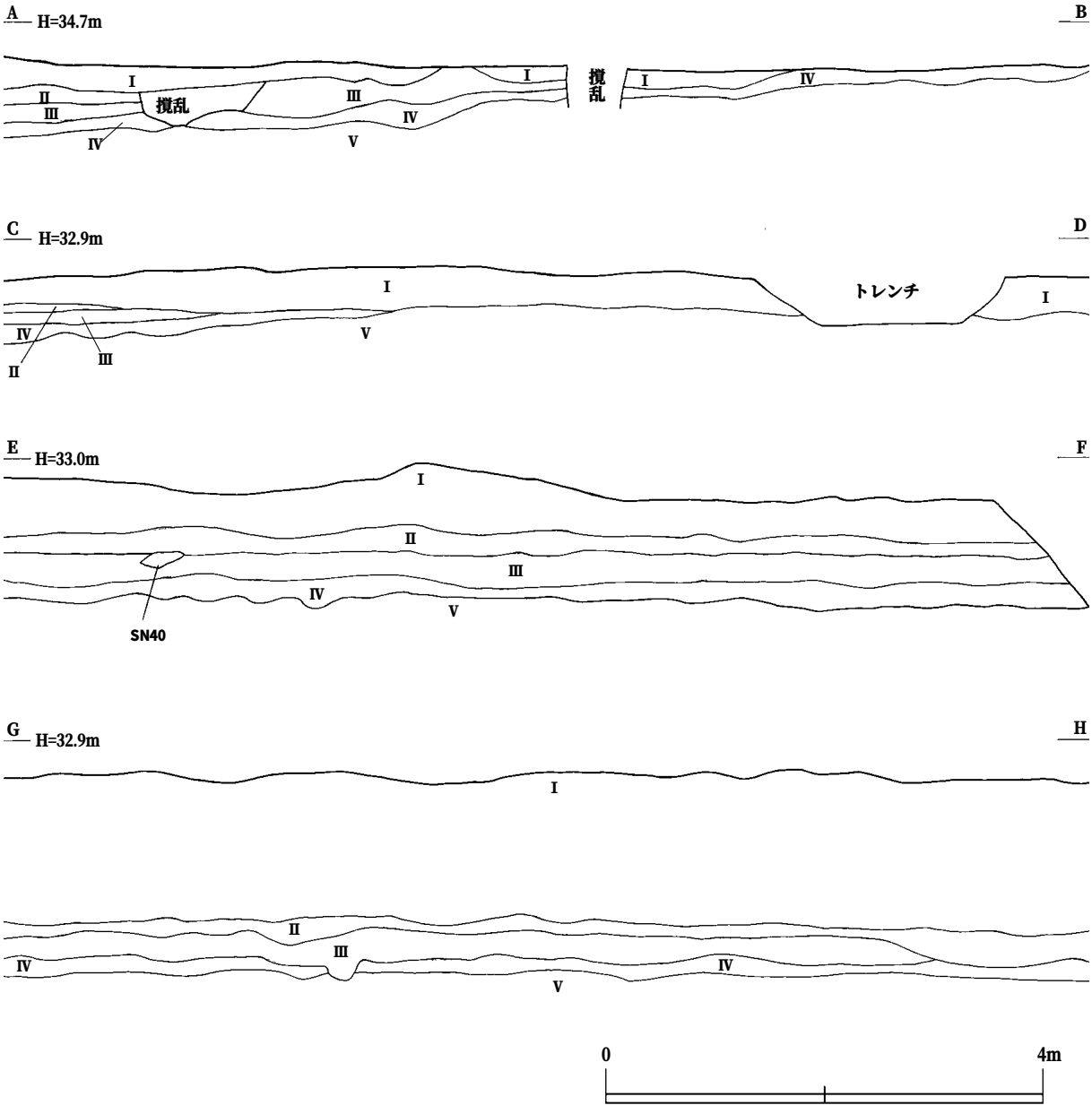
第５図　調査区および周辺地形図

第４章　調査の記録

第１節　調査区の層位

調査区はかつて、北東から南西方向へ緩く下る傾斜地であったと推測されるが、開拓建設事業やグラウンド造成の際の切り土と盛土により、水田や畑、グラウンドなど、それぞれの標高が異なる複数の独立した平坦面に姿を変えた。場所により程度の差はあるが、この影響は調査区全体に及んでいる。

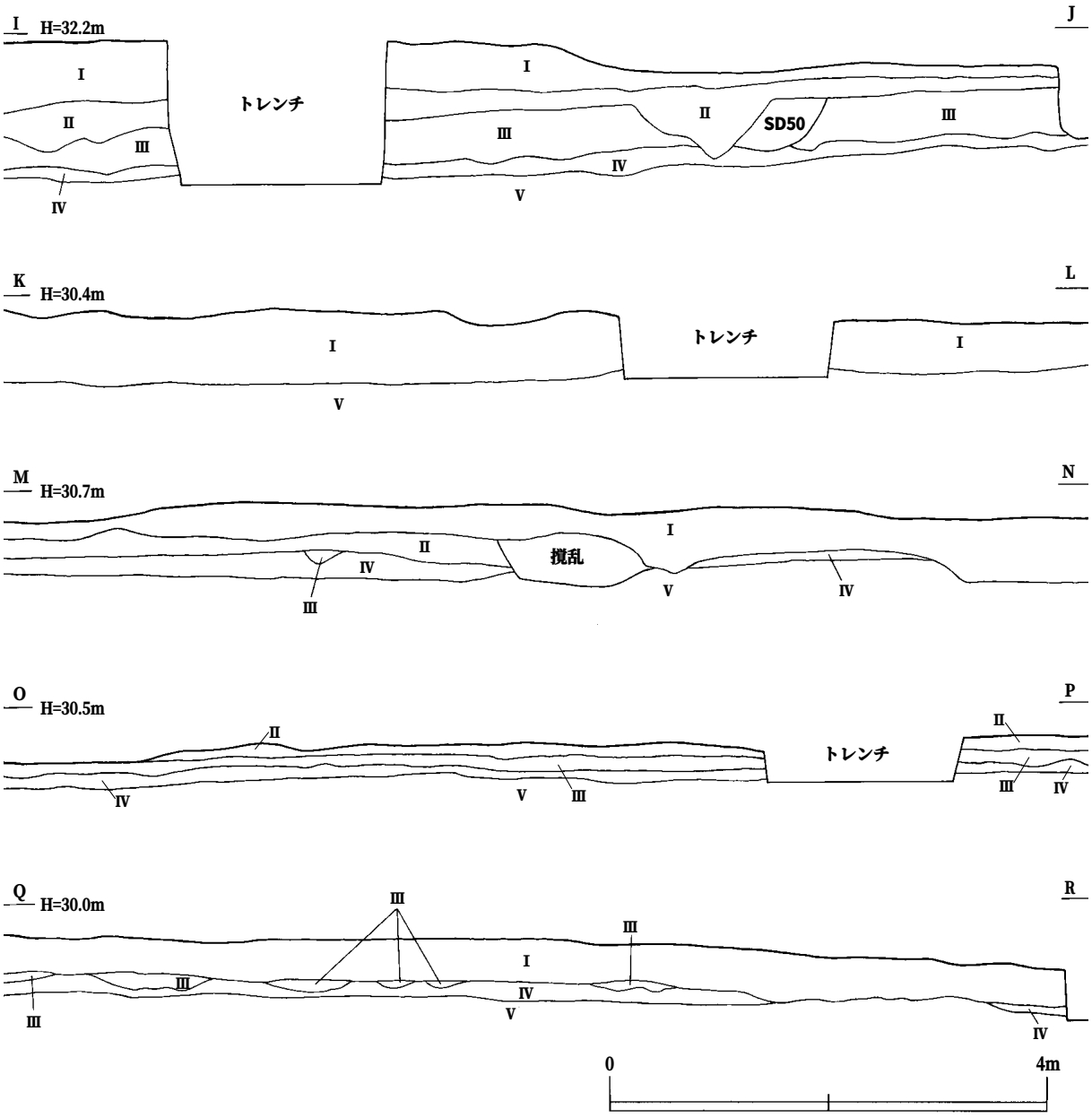
調査区の層位は、第Ⅰ層：黒色土（10YR1.7/1～10YR2/1）の表土・耕作土および盛土層。最上位層である本層は、調査前に本工事の関係で現表土面が失われたり、新しく盛土された区域があり、現表土



第６図　調査区の基本層位(１)

層とその下層の農地開発時の盛土を明確に分層することが困難であったため、第Ⅰ層として上記のように括った。第Ⅱ層：黒色土（10YR2/1）の旧表土層。第Ⅲ層：黒褐色土（10YR2/2～2/3）の遺物包含層。第Ⅳ層：暗褐色土（10YR3/4）の漸移層。第Ⅴ層：褐色土（7.5YR4/6）の地山層である。

第Ⅲ層が、土師器等を含む古代の遺物包含層である。当層が比較的良好に残存しているのは、原地形の標高が低く、農地開発時に盛土された調査区の中央部を除く主に南寄りの区域である（第5･6･7図：E-F･G-H･I-J･O-P）。同様に中央部北寄りグリッドライン57以北、LI以西の三角形の畑地部分も厚い盛土下に削平を免れた第Ⅲ層が残存していた。一方、切り土が第Ⅳ･Ⅴ層にまで及び、窪みや遺構を除き、第Ⅲ層が既に失われている区域も各所に見られ（第5･6･7図A-B･C-D北寄り･M-N北寄り･Q-R）、特にグラウンドがある東側と北東端部、中央部の南寄り、西側北寄りなどの区域は削平の影響が大きい（第5･7図：K-L）。なお、遺構の確認は主に第Ⅳ層上面～第Ⅴ層上面で行った。



第７図　調査区の基本層位(２)

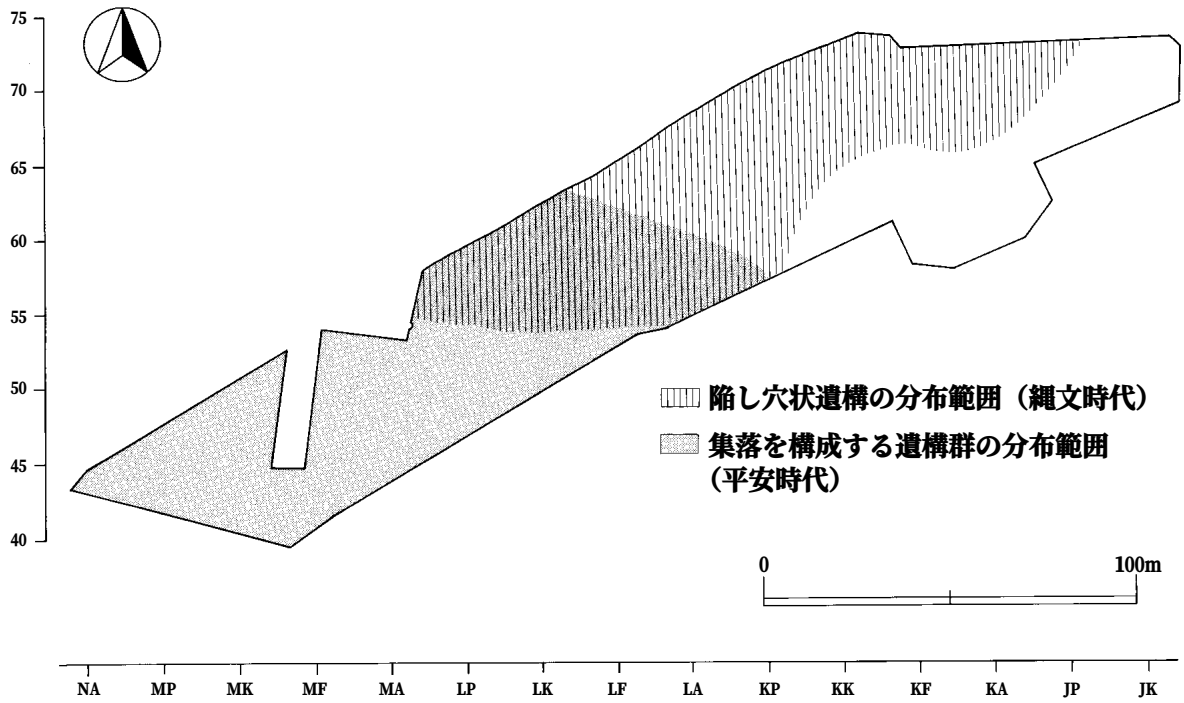
第２節　検出遺構の概要（第８・９・15図、付図１・２）

平成14・15年度の調査により、竪穴住居跡14軒、竪穴状遺構２基、掘立柱建物跡６棟、土師器焼成遺構３基、鍛冶炉２基、土坑85基、陥し穴状遺構13基、焼土遺構22基、溝跡14条、柱穴列20条、性格不明遺構３基、柱穴様ピット373基の合計557基を検出した。これらの年代については、竪穴住居跡など集落を構成する遺構群は、出土遺物などから平安時代と判断される。陥し穴状遺構は遺物の出土がほとんど無く時期決定の根拠を欠くが、形状等から縄文時代の陥し穴、あるいはその可能性が高いと判断した遺構である。調査区内の遺構の時代は概ね上記の二つの時代に大別されると考えられるが、時代を明確にできない遺構もある。

縄文時代の遺構と推定される陥し穴状遺構は、調査区の東側から中央部にかけて分布し、集落跡を構成する竪穴住居跡、掘立柱建物跡など平安時代の遺構群は主に調査区の西側から中央部にかけて分布している。両時代の遺構の分布範囲は中央部で重複する(第８図)。

平安時代の遺構が分布する西側から中央部にかけては、遺構数が多く分布も密であるが、周囲と比べると明らかに遺構の分布密度が低い区域が見られる。これは開拓建設事業の影響と考えられる。また、標高が高い調査区東側北寄りの区域と、グラウンドとして利用されていた東側南寄りの区域も削平の影響を強く受けている。

縄文時代の陥し穴状遺構と縄文時代の遺物については第３節で述べ、平安時代の遺構と遺物については第４節で述べる。ただし、明確な時期決定の根拠を欠き、平安時代以降と推定される遺構についても第４節に含めて述べる。また、鍛冶関連の遺構と遺物については主に第５節で述べる。



第８図　時代別遺構分布範囲図

第３節　縄文時代の遺構と遺物

１　陥し穴状遺構（第９図）

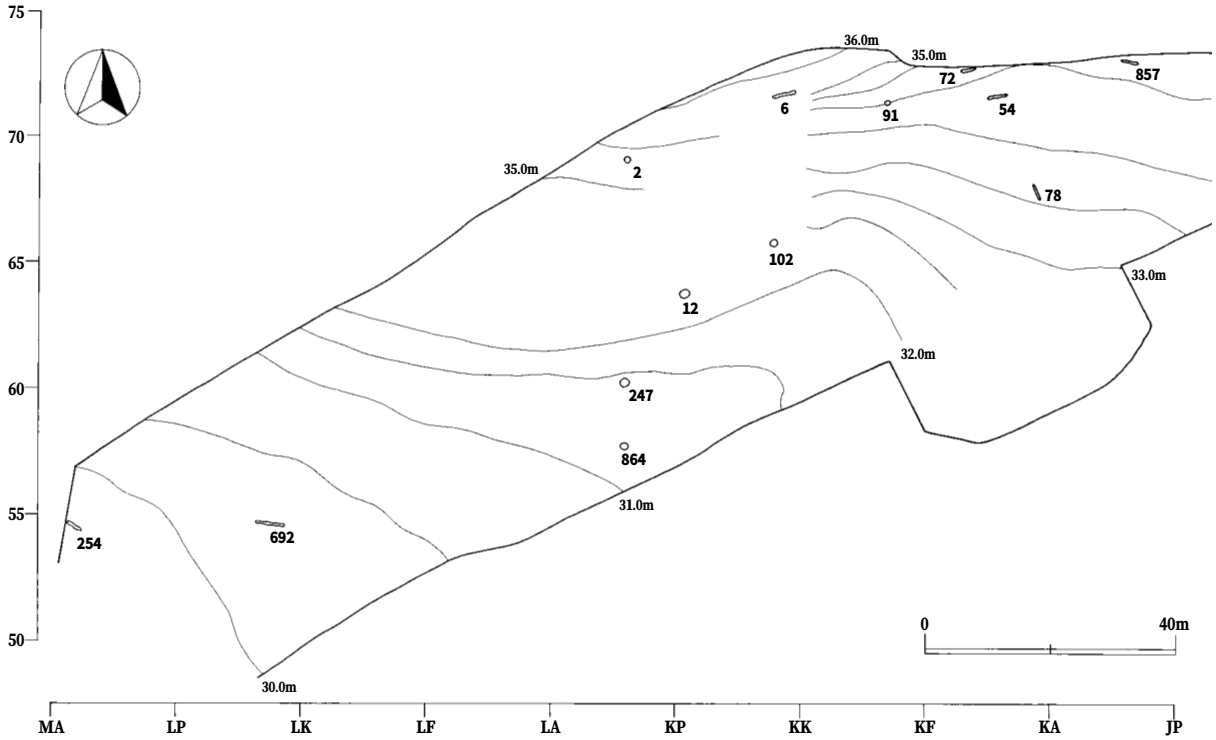
ここでは、時期を決定する遺物等の出土はほとんど無いが、形状、確認状況、埋土の状態、分布する範囲の地形的特徴などから縄文時代の陥し穴であると判断あるいは推定される13基の遺構を扱う。

陥し穴状遺構は前節で述べたように調査区の東側から中央部にかけての、概ね北東から南西に下る斜面に分布している。しかし、この区域は南側と北側の一部を除き、開拓建設事業時の削平が地山層に達している箇所が多く、上記の13基の陥し穴状遺構の中には、削平、切り土により上部を大きく失い、残存状況が決して良好とは言い難いものも含まれている(ＳＫＴ２・６)。

形状･形態的には、平面形が細長い溝状のもの７基（ＳＫＴ６･54･72･78･254･692･857)、円筒状に掘り込まれ、底面中央に１～２基の柱穴状の小穴を持つもの４基（ＳＫＴ12･102･247･864)、円筒状に掘り込まれているが底面が平滑で小穴を持たないもの２基（ＳＫＴ２･91）の３つのタイプに分けられる。

ＳＫＴ２（第10図）

調査区東側北寄りのＫＱ･ＫＲ69グリッド第Ⅴ層より確認した。当区域は以前の開拓建設事業により地山（第Ⅴ層)に及ぶ大きな削平を受けており、確認面からの深さは、約40cmに過ぎない。残存する上端の形状は隅丸方形に近い歪な円形で、径は86～98cmである。底面は径60cmほどの円形をなし、平坦であるが南方向に傾斜する。壁はやや外傾して立ち上がるが、北側はほぼ垂直に立ち上がっている。本遺構は既に上部が大きく失われてはいるが、平坦な底面から円筒状に立ち上がる形状や規模などから、ＳＫＴ91に類似した陥し穴である可能性が高いと判断した。遺物の出土は無かった。



第９図　陥し穴状遺構配置図

ＳＫＴ６（第10図）

調査区東側北寄りのＫＫ･ＫＬ71グリッド第Ⅴ層より、長さ約2.7m、幅30cmほどの溝状のプランとして確認した。当地区も上記ＳＫＴ２が位置する地区同様、重機等によって地山層に及ぶ切り土を受けており、残存する遺構の深さは確認面から僅かに5cm前後ほどしかなく、遺物の出土も皆無である。さらに南側の壁は底面から失われているため、底面幅は、厳密には不明である。ただし東西端の壁は微かに残存することから、長軸の長さについてはほぼ本来の数値を得ているものと思われる。長軸方向は、後述するＳＫＴ54･72とほぼ平行(N－80°－E)し、大きく削平を受けてはいるが、周辺の地形から、等高線に平行していたものと考えられる（第９図)。また、当地区周辺からは、明らかに平安時代と判断できる遺構が全く検出されていないことから、本来、縄文時代の陥し穴より数十cmは底面レベルが高いと思われる平安時代の遺構群は、大規模な削平により既に失われたとも考えられる。以上のことから本遺構は調査区東側に点在する他の陥し穴状遺構と同様に縄文時代と判断した。

ＳＫＴ12（第10図）

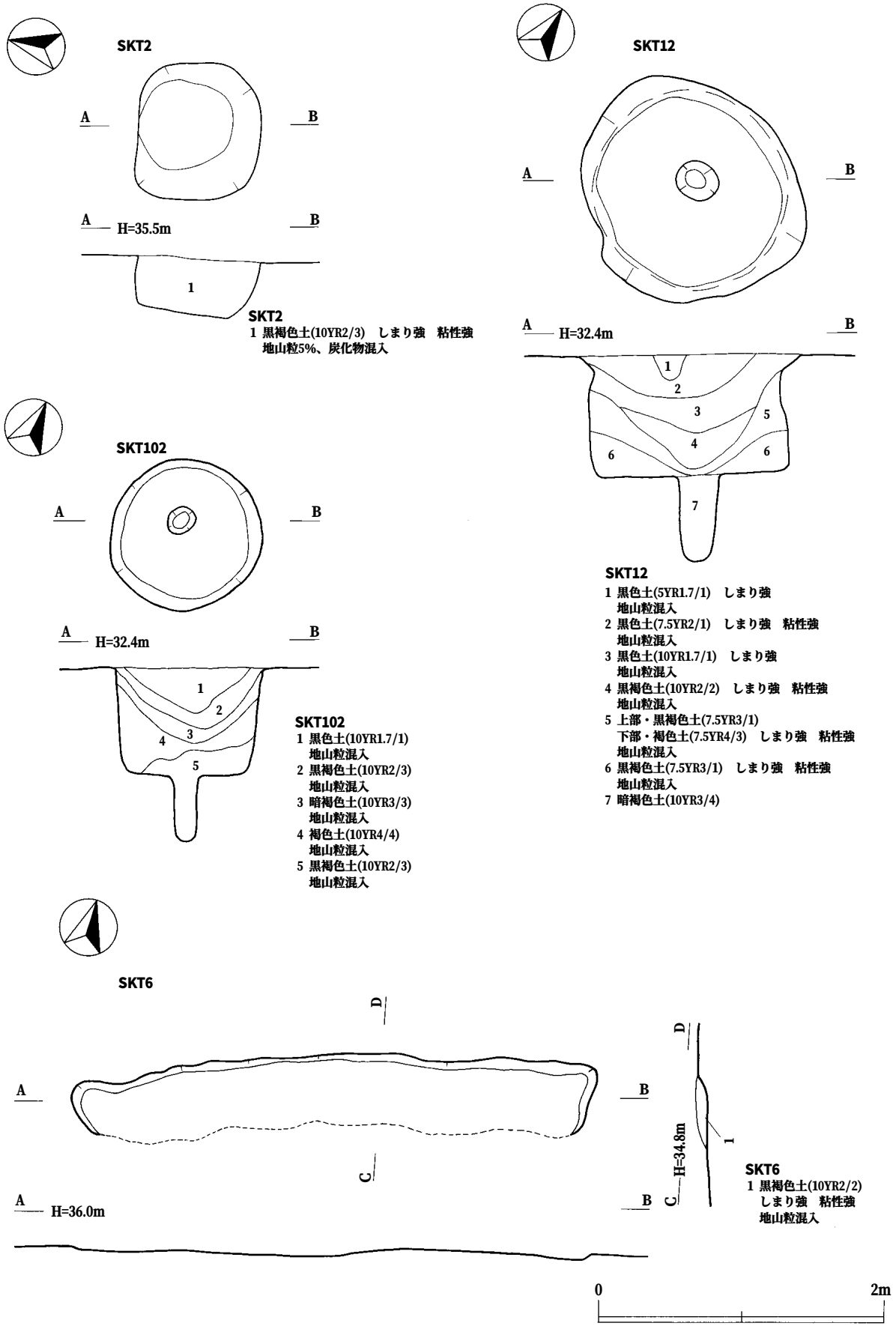
調査区東側中央のＫＯ63グリッド第Ⅴ層上面より、黒色土の歪な楕円形のプランとして確認した。上面長軸は1.68mでほぼ東西方向(N－86°－E)を向き、短軸は1.48m、確認面からの深さは85cmほどである。削平により上端部が失われていると考えられ、本来はもう少し高い位置から掘り込まれていたものと推定される。底面は径1.32～1.40mのほぼ円形で、平坦な底面の中央部には径27cm、深さ60cmの小穴がある。円筒状の壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、底面から70cmほど上のところで小さく内側にくびれ、ここから外側に開き上面に至る。埋土は７層に分かれ、自然堆積したものと考えられる。第２層より石匙１点（14－１）が出土している。

ＳＫＴ54（第11図）

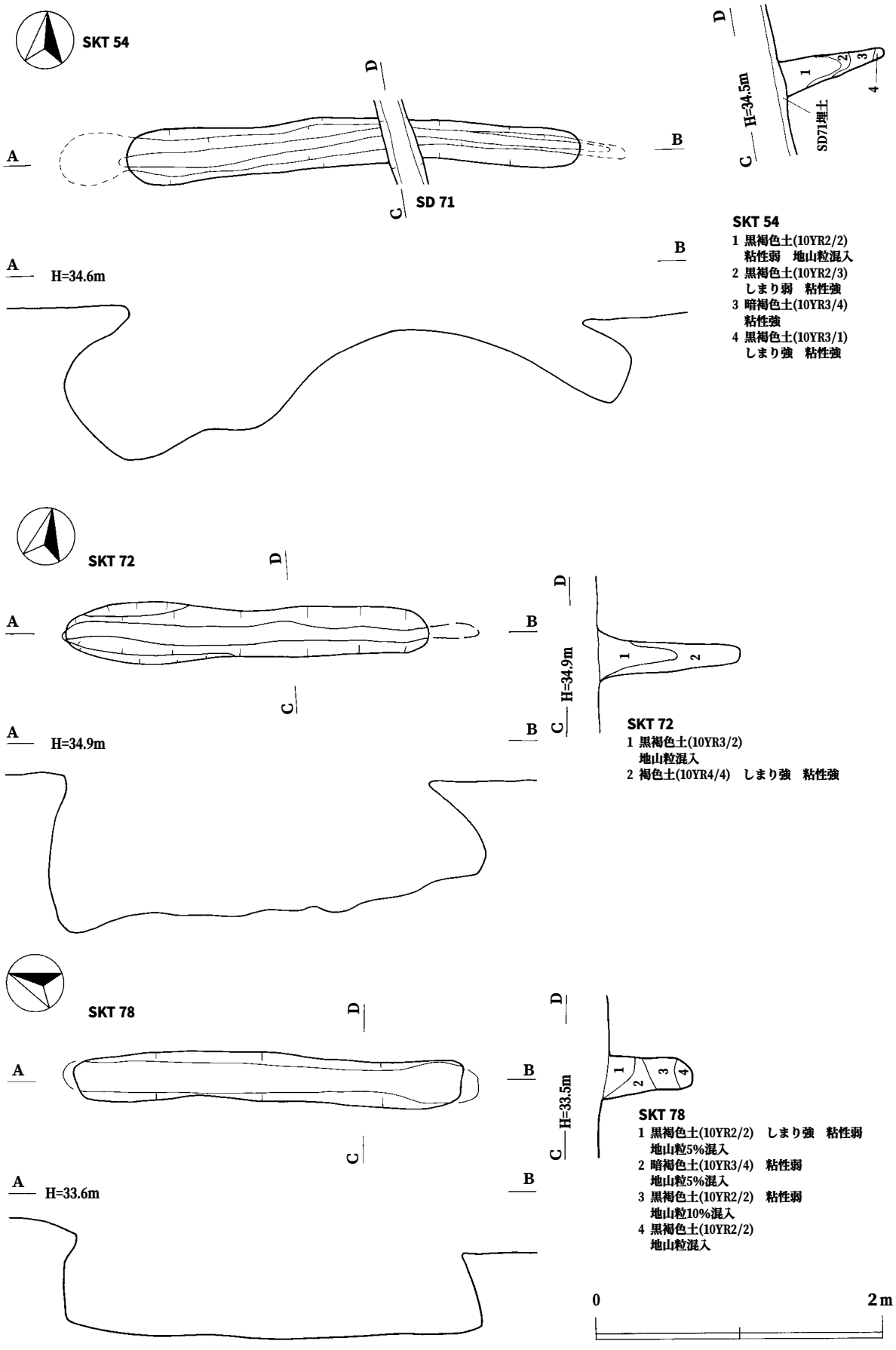
調査区東側北端部のＫＢ･ＫＣ71グリッド第Ⅴ層より確認した。開口部の平面形は長さ3.18m、幅26～39cmの細長い溝状で、中央部を溝跡(ＳＤ71)に切られている。底面の平面形は中央部で北側にわずかに折れる。また、長軸はほぼ東西方向(N－83°－E)を向き、地山面の等高線に平行している。長軸の断面形は、東西両端部とも開口部下位から底部にかけて外方へ袋状に張り出し、特に西壁が大きくオーバーハングしている。底部においてはこの西端が最深部にあたり、確認面からの深さは1.08mである。短軸の断面形は「Ⅴ」字状をなし、南北両壁とも底部からに開口部かけて一様な傾斜で立ち上がっていることを示している。埋土は自然堆積したものと考えられる。分層した４層の何れからも遺物の出土は無かった。

ＳＫＴ72（第11図）

調査区東側北端部のＫＤ72グリッド第Ⅴ層より確認した。平面形は長さ2.51m、幅40cm前後の溝状で、ＳＫＴ54の北西約６mにほぼ平行(N－82°－E)して位置する。長軸の断面形は、東西両端の壁がともに開口部下位から底部にかけて外方に張り出し、特に東壁が大きくオーバーハングしている。底面にはやや凸凹があり緩く西側へ傾斜している。最深部である底面西端は、確認面から1.12mの深さである。短軸の断面形は「Ｕ」字状の底面からほぼ垂直に南北両壁が立ち上がっている。本遺構からの遺物の出土は無い。



第10図　陥し穴状遺構（１）



第11図　陥し穴状遺構（２）

ＳＫＴ78（第11図）

調査区東側に位置する溝跡(ＳＤ24)の底面を精査中に、ＫＡ67･68グリッドより確認した。平面形は長さ2.68m、幅40cm前後の溝状で、遺構上部は、平安時代以降のＳＤ24によって失われていた(第86図)。このため、確認面であるＳＤ24底面からの深さは70cm前後と、付近に位置するＳＫＴ54･72に比べ浅い。長軸の断面形は、開口部下位から底部に向かって外方に広がり、両端の壁はともにオーバーハングしている。底部は起伏が少なくほぼ平坦である。短軸の断面形は開口部から底部までほぼ垂直に下がる「Ｕ」字状である。長軸方向は北北西－南南東方向(Ｎ－21°－Ｗ)で、地山面の等高線には沿わない。埋土は自然堆積と考えられ４層に分けられる。本遺構からの遺物の出土は無かった。

ＳＫＴ91（第12図）

調査区東側北寄りのＫＧ71グリッド第Ⅴ層上面より、黒褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫＴ６とＳＫＴ54のほぼ中間の斜面に位置している。平面形は径90cmほどの円形で、ほぼ円筒状に掘り込まれている。底面は平坦な径55cmほどの円形で、確認面から底面までの深さは約1.40mである。埋土は自然堆積と考えられ５層に分かれる。本遺構からの遺物の出土は無かった。

ＳＫＴ102（第10図）

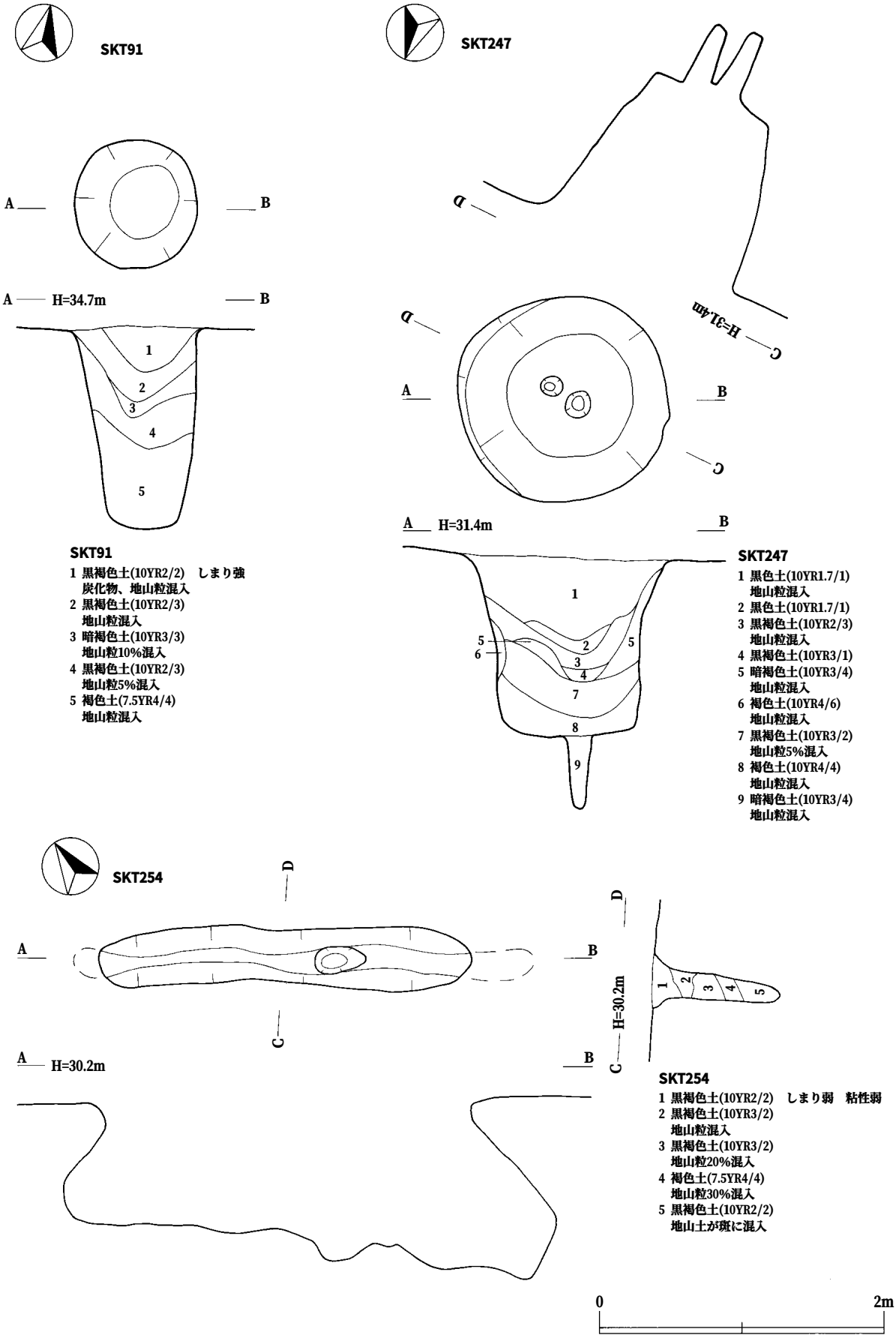
調査区東側中央のＫＪ65･66グリッド第Ⅴ層上面より、黒色土の落ち込みとして確認した。平面形は径１mほどの円形で、確認面からの深さは75cmほどである。削平により開口部が失われていると考えられ、本来はもう少し高い位置から掘り込まれていたものと推定される。底面は径85cmの円形で、平坦な底面の中央やや北寄りに径20cm、深さ50cmほどの小穴がある。円筒状の壁は底面から垂直に立ち上がり開口部に至る。埋土は大きく５層に分かれ、底面付近にやや乱れがあるが自然堆積したものと考えられる。遺物の出土は無い。

ＳＫＴ247（第12図）

調査区東側南寄りのＫＱ･ＫＲ60グリッド第Ⅴ層上面より、黒色土の落ち込みとして確認した。平面形は径1.5mほどの円形である。確認面からの深さは1.28mで、削平等の影響はほとんど受けていないものと思われる。底面は径95cmの円形で、平坦な底面の中央に径20cm、深さ50cmほどの小穴が２基ある。２基の小穴は同時に存在したものか、あるいは新旧関係があるかどうかは不明である。円筒状の壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり開口部に至る。埋土は９層に分かれ、自然に堆積したものと考えられる。本遺構からの遺物の出土は無い。

ＳＫＴ254（第12図）

調査区中央部北寄りのＬＳ･ＬＴ54グリッド第Ⅴ層より確認した。平面形は長さ2.6m、幅45cm前後の溝状で、長軸の方位はＮ－58°－Ｗである。長軸の断面形は、開口部下位から底部にかけて外方に張り出し、北西･南東の両壁ともにオーバーハングしているが、南東壁の方が大きく袋状に掘り込まれている。底面は長さ3.11m、幅17cmで、中央やや南東寄りに長軸35cm、深さ15cmほどの楕円形の窪みがあり、ここから起伏をもちながら南東側へ傾斜している。最深部である底面南東端は、確認面から1.27mの深さである。短軸の断面形は「Ｕ」字状の底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部下位で外方へ開く漏斗状である。埋土は５層に分層され、何れの層からも遺物の出土は無かった。



第12図　陥し穴状遺構（３）

ＳＫＴ692（第13図）

調査区中央部のＬＫ･ＬＬ54グリッド第Ⅴ層より確認した。平面形は長さ4.55m、幅20～30cmの溝状で、長軸の方位はN－77°－Wである。長軸の断面形は整った台形で、底面の長さ4.80m、深さ79cmである。また、平坦な底部の平面形は両端部の幅が広く、中央部が狭い形状をしており、中央部の短軸の断面形は上端部から底部まで一様な傾斜を持つ楔形である。埋土は２層に分層され、出土遺物は無かった。当地区周辺は、開拓建設事業の削平の影響を強い受けた区域の一つで、平安時代の遺構のほとんどは既に失われている。よって、本遺構は、本来の開口部から数十cmの深さにわたり既に失われてしまったものと推定される。

ＳＫＴ857（第13図）

調査区東側北端部のＪＰ･ＪＱ73グリッド第Ⅴ層より確認した。平面形は長さ2.54m、幅20～30cmの溝状である。長軸の方位はN－79°－Eで、地山面の等高線にほぼ平行している。長軸の断面形は台形であるが、東下端部は丸く掘られている。底面は平坦であるが中央部が緩く盛り上がり、底面の長軸は2.86m、確認面からの深さは48cmである。短軸の断面形は、南壁がやや外傾するが、底部から上端までほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は２層に分層され、出土遺物は無かった。当地区周辺は、かつてテニスコートとして利用されており、標高の高い北側ほど削平の影響を強く受けている。このため、本遺構の上半部、あるいはそれ以上の部分が既に失われているものと推定される。

ＳＫＴ864（第13図）

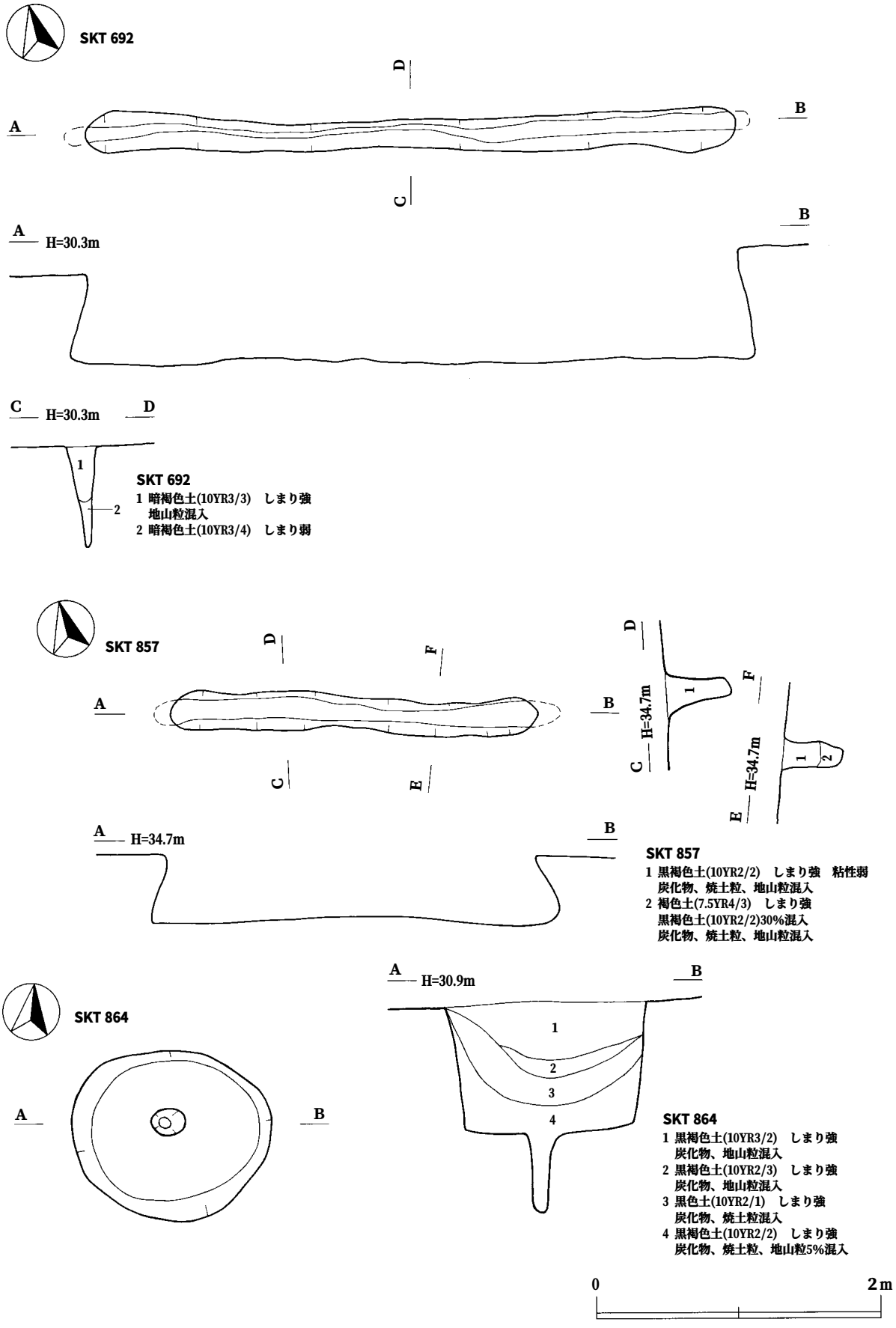
調査区東側南寄りのＫＱ･ＫＲ57グリッド第Ⅴ層上面より確認した。ＳＫＴ247の南10mに位置する。平面形は歪な楕円形で、上端の長軸は1.4m、短軸は1.2m、確認面からの深さは90cmほどである。長軸の方位は、ＳＫＴ12とほぼ同じくN－85°－Eで、形状も同遺構に類似する。底面は長軸が1.18m、短軸が0.98mの楕円形で、平坦な底面の中央部には径20cm、深さ55cmの小穴がある。円筒状の壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり上端に至る。埋土は４層に分かれ、自然堆積したものと考えられる。出土遺物は無かった。

２　縄文時代の遺物（第14図、第２表)

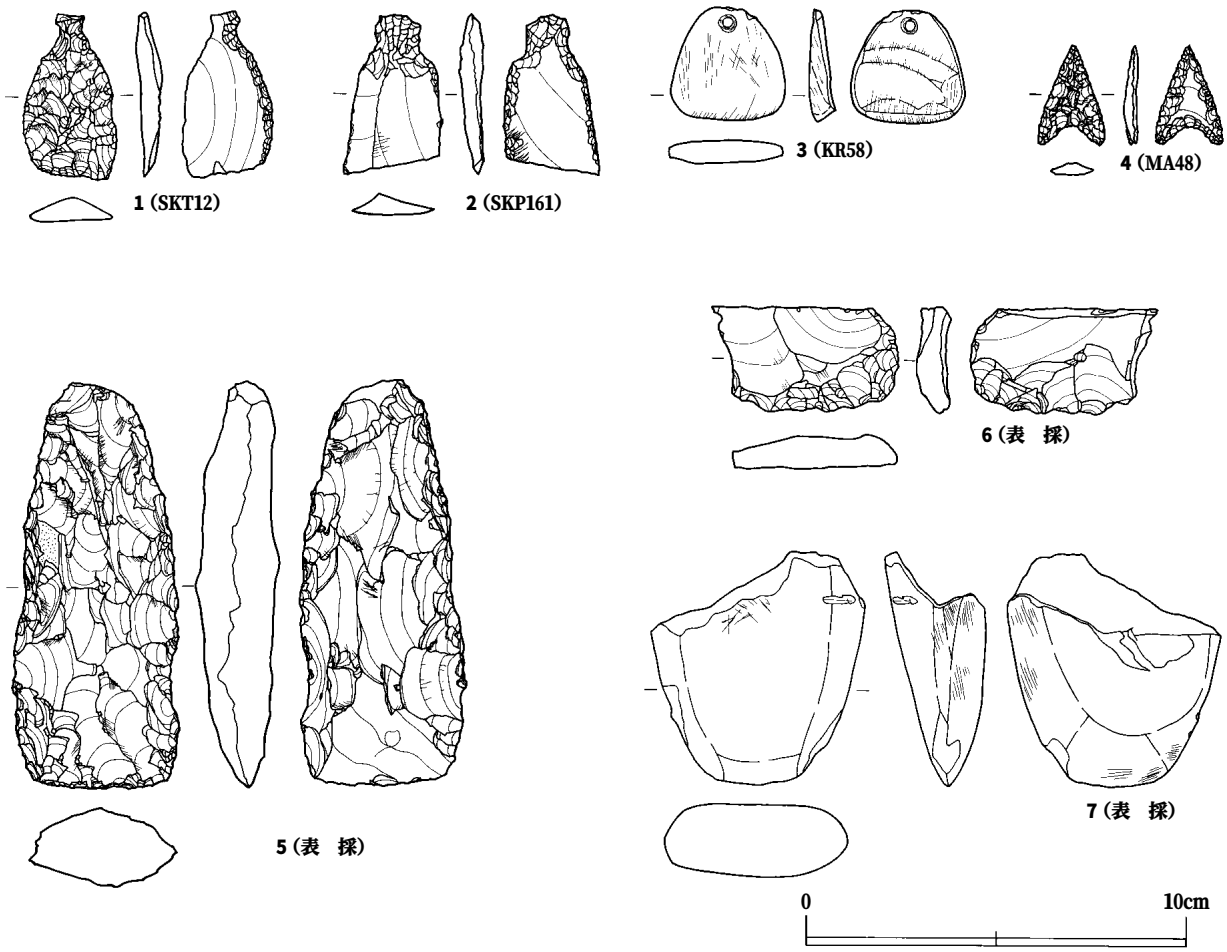
石器は調査区内から計24点出土している。内訳は、石匙２点、石鏃２点、石篦２点、掻器１点、磨製石斧１点、垂飾品１点、剥片15点である。この内、器種が明確で比較的良好な状態の７点について実測し図化した。

縄文土器は、16片出土しているが、器形を復元できるものは無かった。

出土状況については、遺構内から出土した石器は５点であるが、縄文時代の遺構からの出土は、ＳＫＴ12の第２層から出土した石匙(14－１)のみで、他の４点は平安時代の遺構(ＳＫＰ62･151、ＳＡ563-P3、ＳＢ906)から出土している。遺構内出土の縄文土器は１点であるが、平安時代の土師器焼成遺構(ＳＪ242)より出土している。また、出土地点は、遺構外からの出土を含めると、調査区中央部の63ライン以南・58ライン以北・ＬＡライン以西・ＬＩライン以東の範囲内に多く、この範囲から石器10点と縄文土器９点が出土している。



第13図　陥し穴状遺構（４）



第14図　縄文時代の遺物

第２表　遺物観察表（縄文時代）

挿図番号	出土 位置	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　　考
14-1	SKT12	石匙	珪質頁岩	4.4	2.4	0.7	6.3	正面に押圧剥離、裏面の片側縁に二次加工
14-2	SKP161	石匙	珪質頁岩	〔4.3〕	〔2.6〕	〔0.6〕	〔5.2〕	裏面の両側縁に浅い押圧剥離
14-3	KR58	垂飾品	緑色凝灰岩	3.0	3.0	0.7	8.6	磨製石斧の刃部破片を再利用
14-4	MA48	石鏃	珪質頁岩	2.6	1.8	0.4	1.1	正面に押圧剥離、裏面には先行剥離面を残す
14-5	表採	石篦	珪質頁岩	10.7	4.4	2.5	94.6	両面に二次加工、刃部は正面にのみ調整を行う
14-6	表採	掻器	珪質頁岩	〔2.8〕	〔4.9〕	〔1.4〕	〔14.2〕	剥片の周縁に粗い二次調整を行い刃部を作る
14-7	表採	磨製石斧	凝灰岩	〔6.2〕	〔5.6〕	〔2.7〕	〔68.9〕	全面に整形痕、刃部には使用痕

【参考文献】

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ－上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡』秋田県文化財調査報告書第180集　1989(平成元)年

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ－北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡・北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第205集　1991(平成３)年

秋田県教育委員会『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－片野Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第265集 1996(平成８)年

第４節　平安時代の遺構と遺物（第15図）

平安時代の集落を構成する遺構は、主に、溝跡ＳＤ50の南西側の調査区中央部から西側にかけて分布している。ＳＤ50の北東側の区域からも、土坑、焼土遺構等が検出されており、土師器等を出土する遺構もあるが、一部を除き、そのほとんどは時期決定の明確な根拠を欠く。これらの遺構は検出状況や埋土の堆積状況から平安時代以降と推定した。

１　竪穴住居跡

14軒の竪穴住居跡はすべてＳＤ50の南西側から検出されている。これらは、主軸方位や構造の違いなどから時期的な差があるものと考えられるが、出土遺物や検出状況、埋土の堆積状況から、何れも平安時代の集落を構成した住居跡と判断した。

なお、各竪穴住居跡に伴うピットの規模については「第3・4表　竪穴住居跡ピット計測表」に掲載している。

ＳＩ429（第16･17図、図版２･11･12）

位置：ＭＣ･ＭＤ47グリットに位置し、西に80cmほどの間隔を置き、ＳＩ430が存在する。

確認：第Ⅳ層においてピットを伴う方形の黒褐色土の落ち込みとして確認した。重複は無い。

規模と平面形：平面形はほぼ正方形で、東西南北のそれぞれの壁の長さは、3.0m、2.96m、3.12m、3.28mである。主軸の方位はＮ－70.5°－Ｅである。

埋土：12層に分層した。自然堆積したものと判断した。

壁：現状では、床面から確認面まで28～36cmの高さが残存し、ほぼ垂直に立ちあがっている。

壁溝：幅14～21cm、床面からの深さ５cm前後の溝がカマド部分を除き壁に沿って巡っている。

床面：平坦で、堅く締められていた。

カマド：本調査区内で唯一、西壁に構築されていた。西壁南端から北50cmほどのところから煙道が西外方へ約１mほど突き出ている。

柱穴：各隅部の４基(Ｐ１･３･５･６)、東壁を除く壁溝沿いに3基(Ｐ２･４･７)の柱穴を検出した。床面の中央やや南西寄りのP8も柱穴であった可能性がある。

出土遺物：カマドおよび床面から土師器の坏・甕などが出土した。これらの内、土師器坏５個体(41－８～12)、土師器甕６個体(41－13～17、42－18)、支脚(42－19)を図化した。また、埋土上位より製鉄炉の炉壁と思われる鉄関連遺物(102－158)が出土している。

ＳＩ430　(第18･19図、図版２･11･13)

位置：ＭＤ47･48、ＭＥ47･48グリッドに位置し、東に80cmほどの間隔を置き、ＳＩ429が存在する。

確認：第Ⅳ層において方形のプランとして確認した。重複は無い。

規模と平面形：東西壁が、3.88m、3.94mとほぼ等しいのに対し、南北壁は、3.7m、3.2mと南壁が長く、平面形は南壁を下底とする台形となる。主軸の方位はＮ－20°－Ｗである。

埋土：７層に分層できた。自然堆積と考えられる。

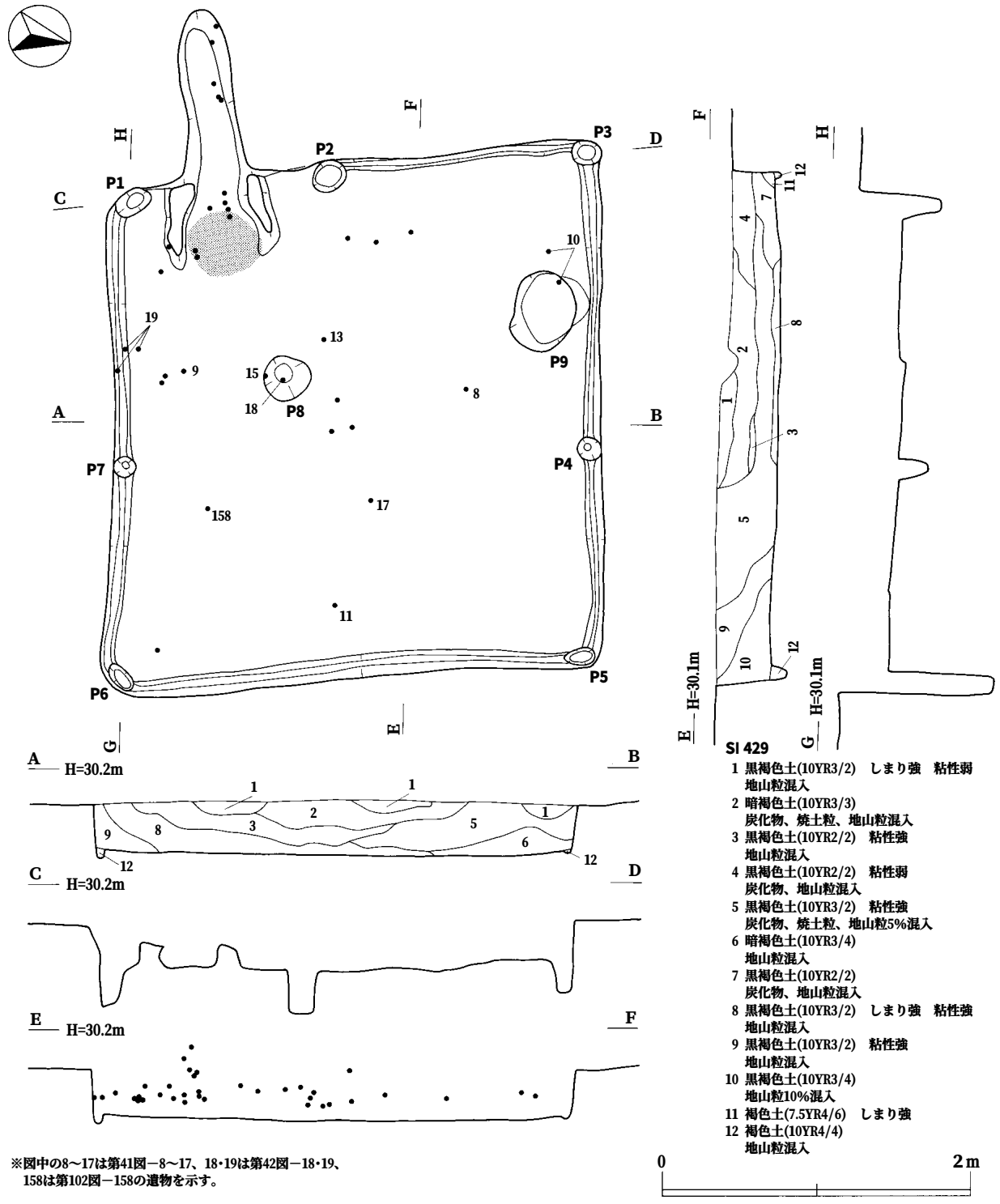
壁：現状では、床面から確認面まで 8 ～20cmの高さが残存し、ほぼ垂直に立ちあがっている。

壁溝：幅10～20cm、床面からの深さ10cm前後の溝が南壁沿いに検出された。

床面：ほぼ平坦で、堅く締まっている。

カマド：南壁東端より西約50cmに構築されていた。遺存状況は比較的良好で火床、煙道を検出した。

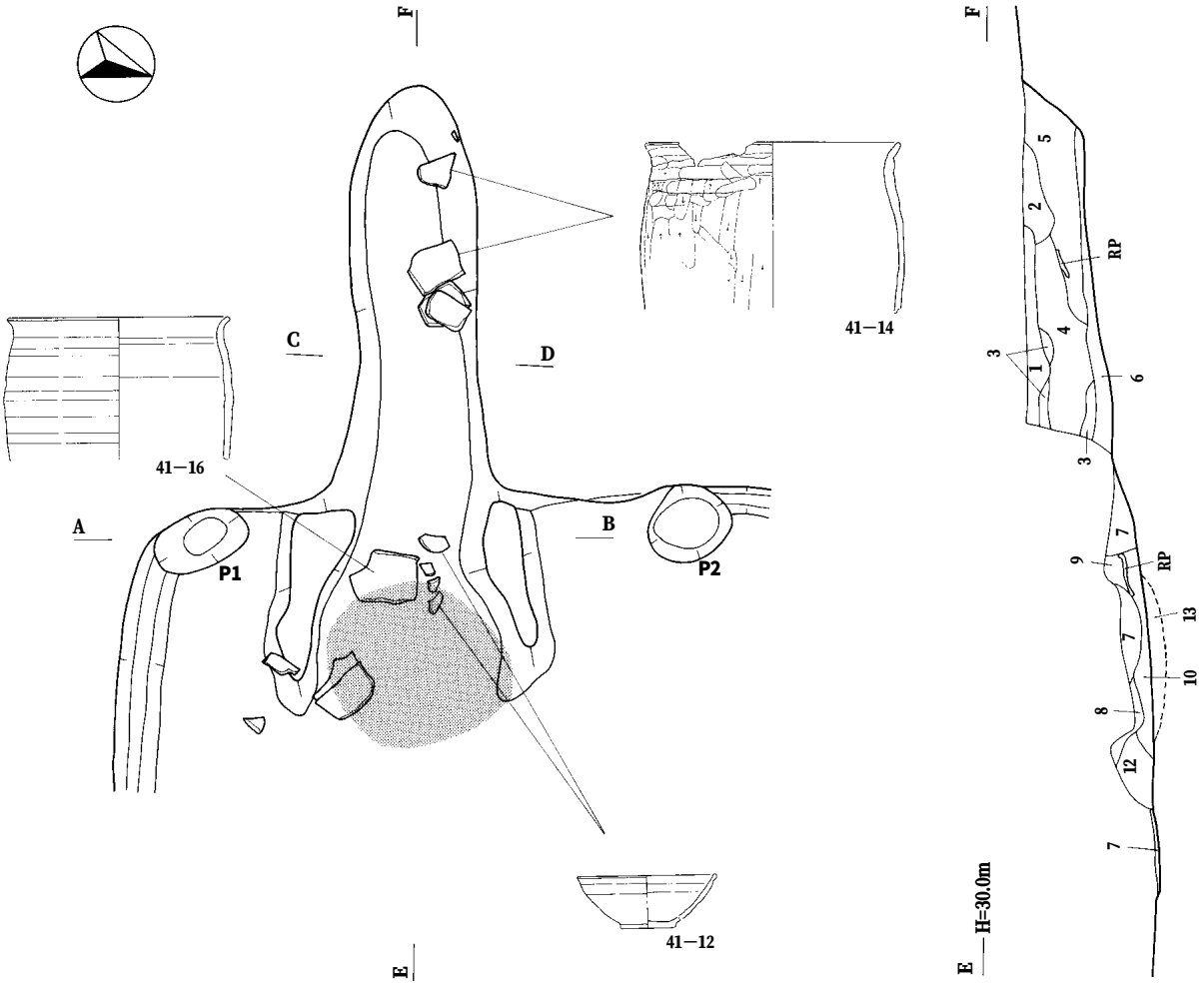
柱穴：南壁沿いに 3 基(P1～3)、東壁に 1 基(P4)、床面から 2 基(P5･6)、その他本住居跡に伴うと推定される 3 基(P7～9)を検出した。



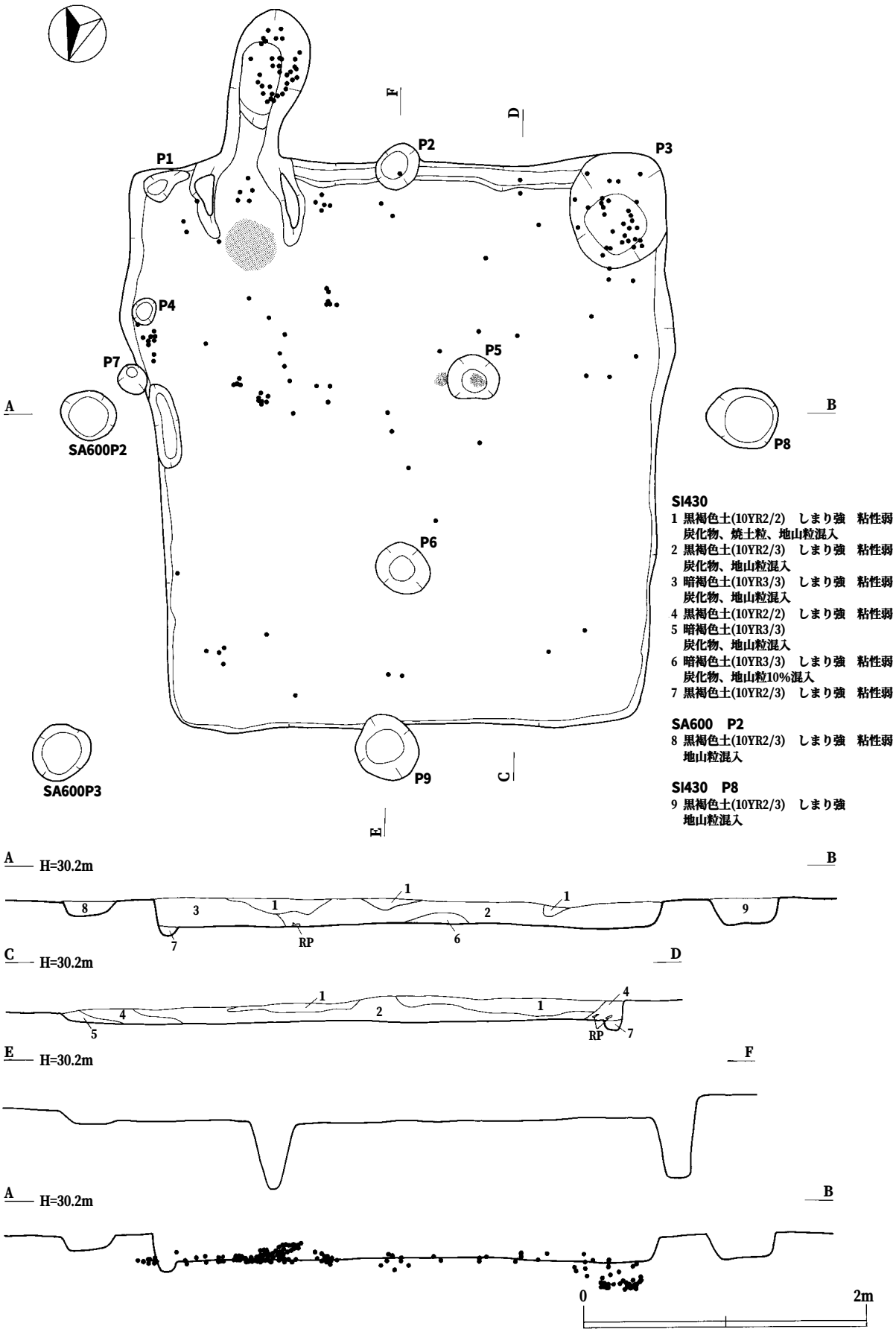
※図中の8～17は第41図－8～17、18･19は第42図－18･19、
158は第102図－158の遺物を示す。

第16図　ＳＩ４２９竪穴住居跡（１）

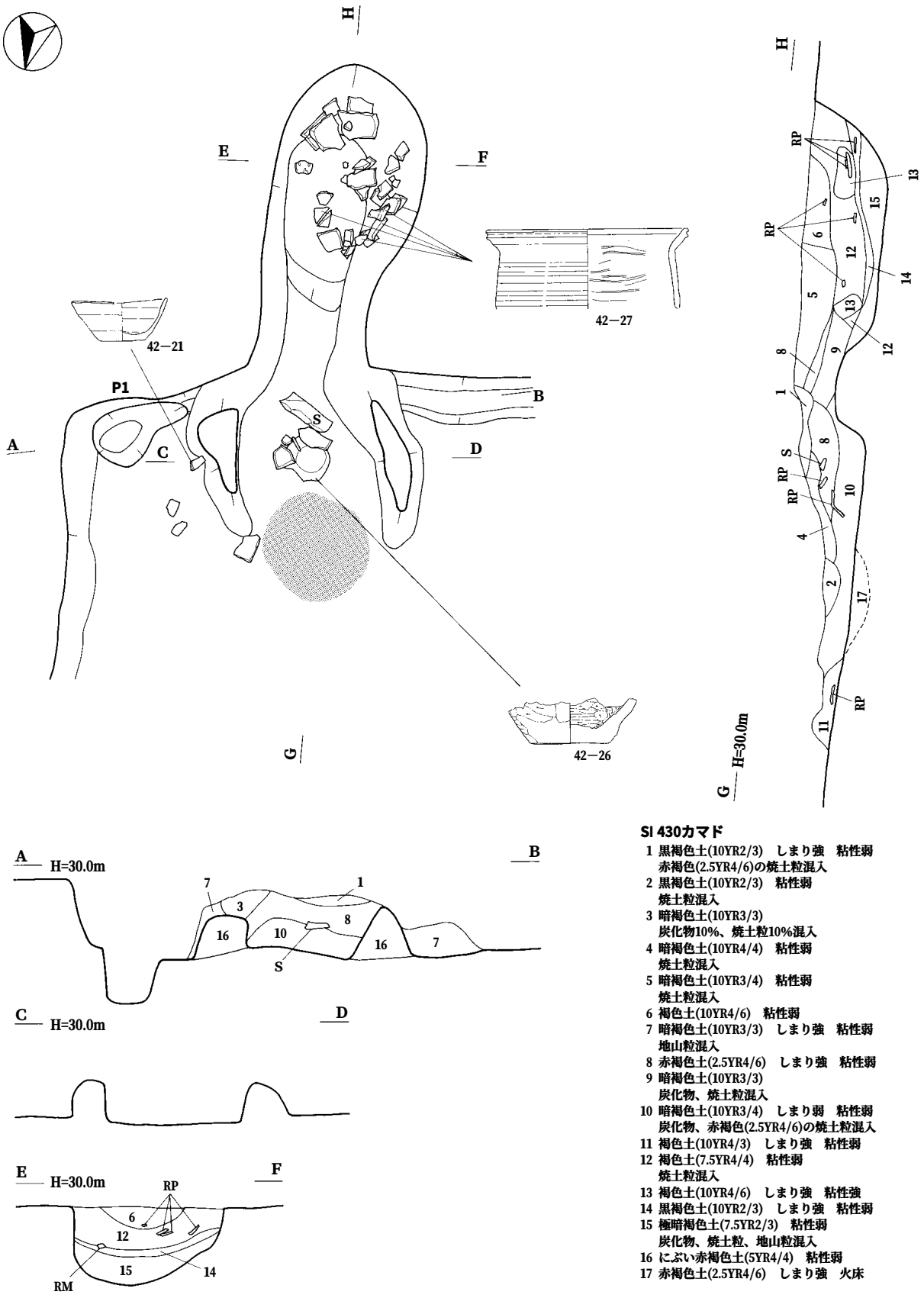
出土遺物：土師器、鉄滓などが出土した。この内、土師器坏(42－20～25)、土師器甕(42－26･27、43－28)、須恵器甕(43－29)を図化した。42－23の外底部には、籾痕が認められる。この他、P3より白色粘土塊が出土している。また、カマドより採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,095年±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。



第17図　ＳＩ４２９竪穴住居跡（２）



第18図　ＳＩ４３０竪穴住居跡（1）

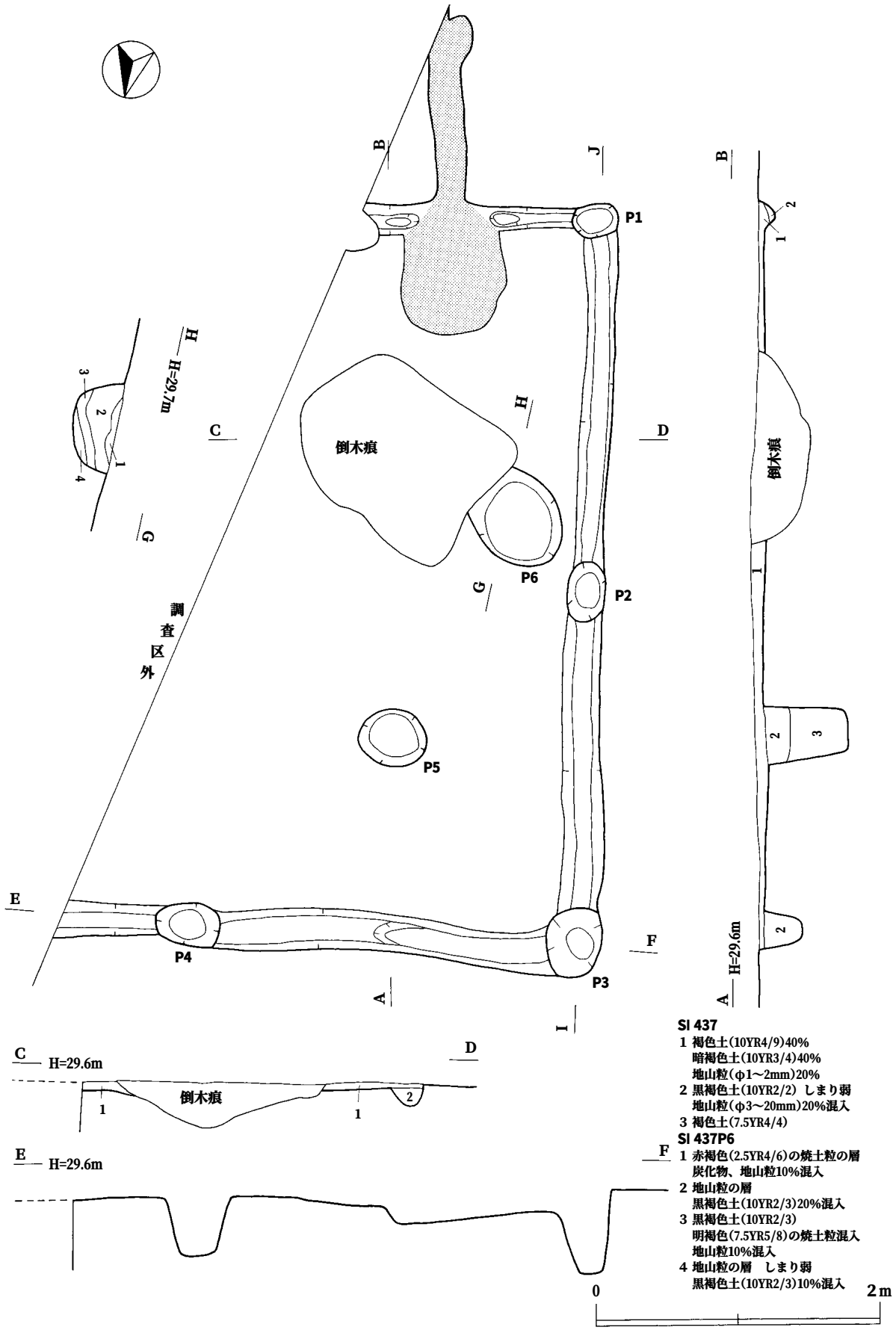


SI 430カマド

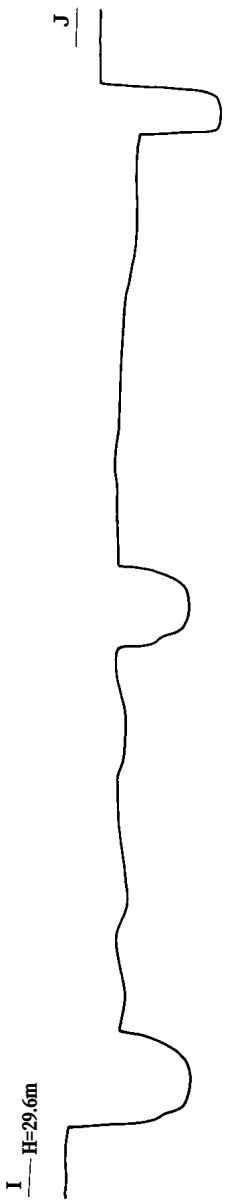
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
　赤褐色(2.5YR4/6)の焼土粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　焼土粒混入
3 暗褐色土(10YR3/3)
　炭化物10%、焼土粒10%混入
4 暗褐色土(10YR4/4)　粘性弱
　焼土粒混入
5 暗褐色土(10YR3/4)　粘性弱
　焼土粒混入
6 褐色土(10YR4/6)　粘性弱
7 暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱
　地山粒混入
8 赤褐色土(2.5YR4/6)　しまり強　粘性弱
9 暗褐色土(10YR3/3)
　炭化物、焼土粒混入
10 暗褐色土(10YR3/4)　しまり弱　粘性弱
　炭化物、赤褐色(2.5YR4/6)の焼土粒混入
11 褐色土(10YR4/3)　しまり強　粘性弱
12 褐色土(7.5YR4/4)　粘性弱
　焼土粒混入
13 褐色土(10YR4/6)　しまり強　粘性強
14 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
15 極暗褐色土(7.5YR2/3)　粘性弱
　炭化物、焼土粒、地山粒混入
16 にぶい赤褐色土(5YR4/4)　粘性弱
17 赤褐色土(2.5YR4/6)　しまり強　火床

0　1m

第19図　ＳＩ４３０竪穴住居跡（２）



第20図　ＳＩ４３７竪穴住居跡（1）



ＳＩ437（第20･21図、図版５･12）

位置：ＭＩ45･46･47、ＭＪ46･47グリッドに位置する。

確認：当地区は、以前の農地造成時に切り土が行われ、既に第Ⅲ・Ⅳ層が失われていたため第Ⅴ層上面で確認した。また、農地造成時に埋設されたパイプラインにより東半部が既に失われていたが、残存部の壁溝とカマドの煙道が明確なプランとして検出された。

重複：ＳＮ849・850・851と重複している。いずれも本住居跡より新しく、本住居跡との直接的な関係は無いものと思われる。

規模と平面形：西壁の長さが5.06m、南壁の残存長が1.66m、北壁の残存長が3.72mである。東壁が欠失しているが、一辺が５mほどの正方形であったと思われる。主軸の方位はＮ－12.5°－Ｗである。

埋土：単一層である。農地開発時の削平と重機による転圧により埋土は薄く、固く締まっていた。堆積状況は不明である。

壁：現状では、床面からプラン確認面まで４～９cmの高さが残存する。

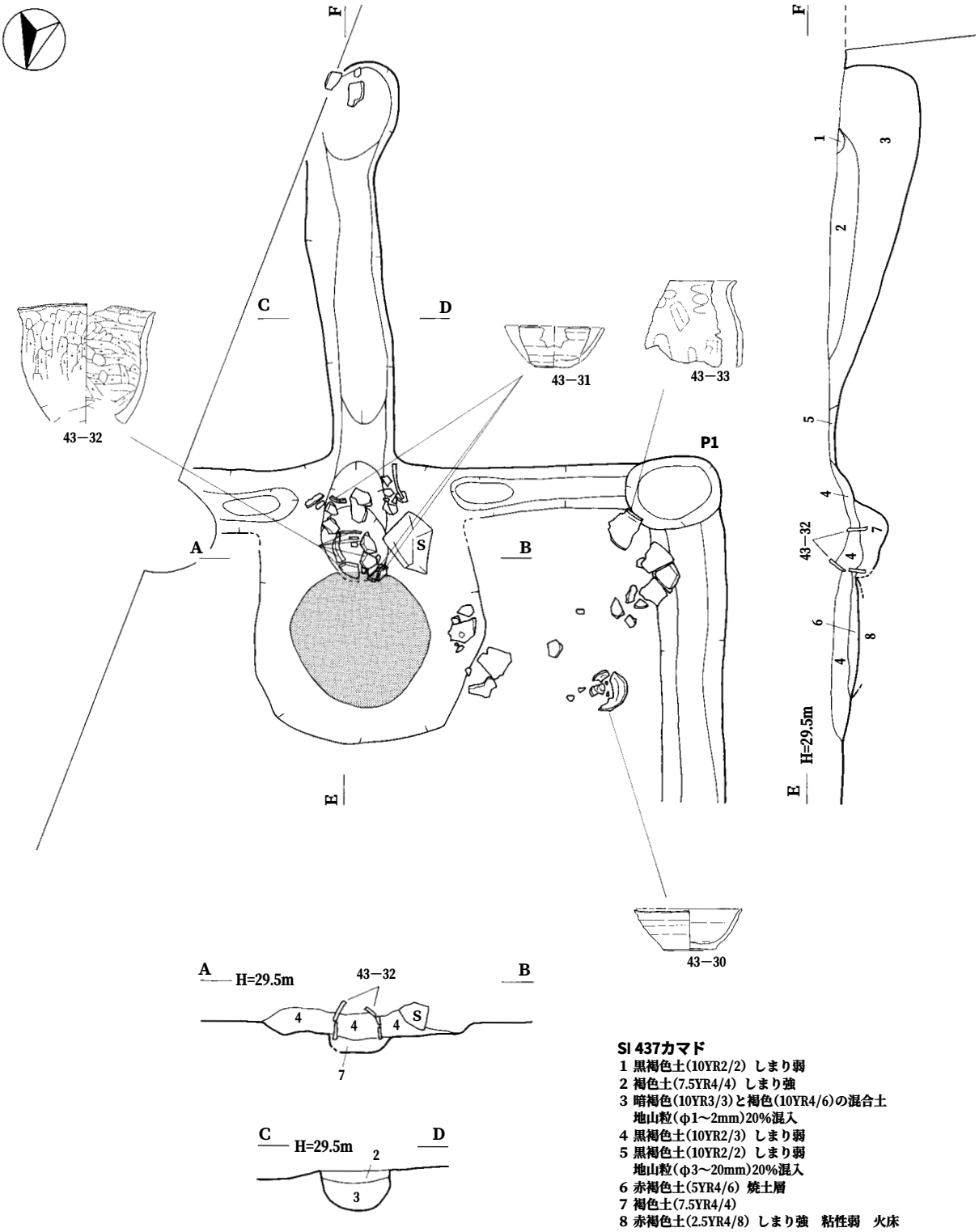
壁溝：残存する壁の内側に沿い、幅16～29cm、床面からの深さ6 ～25cmの溝が検出された。本来は全ての壁面に沿い溝が巡っていたものと思われる。南側の壁溝は浅く、北側は深い。

床面：床面近くまで削平が及びその上を重機により踏み締められていたが、かろうじて床面が残存しており、ほぼ平坦で固く締まっていた。ただし南西側カマド付近の床面は倒木痕による撹乱を受けている。また、床面精査中に当住居跡に伴うと考えられる２基の柱穴様ピットを検出した。１基は北西側の床面に位置し、柱穴あるいは貯蔵穴と思われる径42～46cm、床面からの深さ約60cmの底面からほぼ垂直に立ち上がるピット(P5)で、もう一方は西壁の中央部に近い床面から検出した径58～64cm、床面からの深さ28cmの断面が椀状のピット(P6)である。P5は自然堆積、P6は人為的堆積と考えられる。

カマド：南壁西端より東約１mに構築されていた。遺存状況は重機による削平のため良好とは言えないが、原位置よりやや東側に移動したと推定される西側袖石と、高熱により焼き締まった火床や支脚、煙道を検出した。煙道は南壁より1.4mほど南へ突き出し、先端部ほど深い作りになっている。

柱穴：南西隅、北西隅、その二者の中間、北壁の中央と推定される位置、更に前述のP5の、計５基の柱穴が検出された。壁の四隅とその中間に主柱を配置する構造であったと思われる。P1～4の床面からの深さは、P1が52cm、P2が52cm、P3が61cm、P4が53cmである。

出土遺物：土師器を中心に鍛冶滓などが、カマドとその周辺から出土している。43－30･31は土師器坏、43－33は土師器甕、43－32は、支脚に転用された土師器甕で、カマド燃焼部より倒立した状態で出土した。また、102－156は、支脚下の掘り込みより出土したフイゴの羽口の先端部である。支脚の高さ調節に用いられた可能性がある。



第21図　ＳＩ４３７竪穴住居跡（２）

ＳＩ438（第22･23･96図、図版４）

位置：ＬＬ57～59、ＬＭ58･59グリットに位置する。

確認：南側に煙道を持つ、方形の黒褐色土の落ち込みとして確認した。

重複：ＳＢ255、ＳＮ814、ＳＫＰ530･797･802･848と重複する。ＳＢ255－P6、ＳＫＰ797･802を切り、ＳＫＰ530･848に切られる。ＳＮ814は本住居跡埋土第２層上面に形成されている。

規模と平面形：平面形はほぼ正方形である。四壁の長さは、南壁4.8m、西壁4.92m、北壁4.84m、東壁5.0mである。主軸の方位は、Ｎ－5°－Ｗである。

埋土：煙道部およびカマド火床を除き６層に分層した。第２層以下は、埋め戻しによるものと考えられる。また、焼土層である第４層と前述のＳＮ814の存在から、本竪穴住居跡は廃棄後も、埋め戻しを重ねながら利用されていたものと推定される。

壁：現状では0.32～0.48mの高さである、床面からの立ち上がりはやや外傾する。

壁溝：なし。

床面：ほぼ平坦である。全体的に床面は堅く締まっていた。

カマド：南壁の東側に構築されていた。遺存状況は、人為的な埋め戻しがあったためか、決して良好とは言えない。両袖部および燃焼部を確認した。袖部は黄褐色土の盛り上がりが僅かに存在する程度である。第８層上面が火床にあたり、高熱により焼き締まっていた。煙道部は長く煙出孔に向かい、住居床面より徐々に深くなる。

柱穴：床面からは、ほぼ中心に位置するP10をはじめ４基、南壁沿いに４基、東壁沿い３基、北壁西側から１基の計12基の柱穴を検出した。

出土遺物：埋土中から土師器坏・甕の破片、鉄滓などが出土した。この内、土師器坏(43－34)と土師器甕(43－35)を図化した。また、カマドから採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,210年±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

ＳＩ440（第24･25図、図版３･12･13･14）

位置：ＭＫ45･46、ＭＬ45･46グリッドに位置する。

確認：第Ⅴ層上面で確認した。正方形プランに煙道と出入り口と推定される方形の小さな張り出しが取り付く黒褐色土の落ち込みとして確認した。

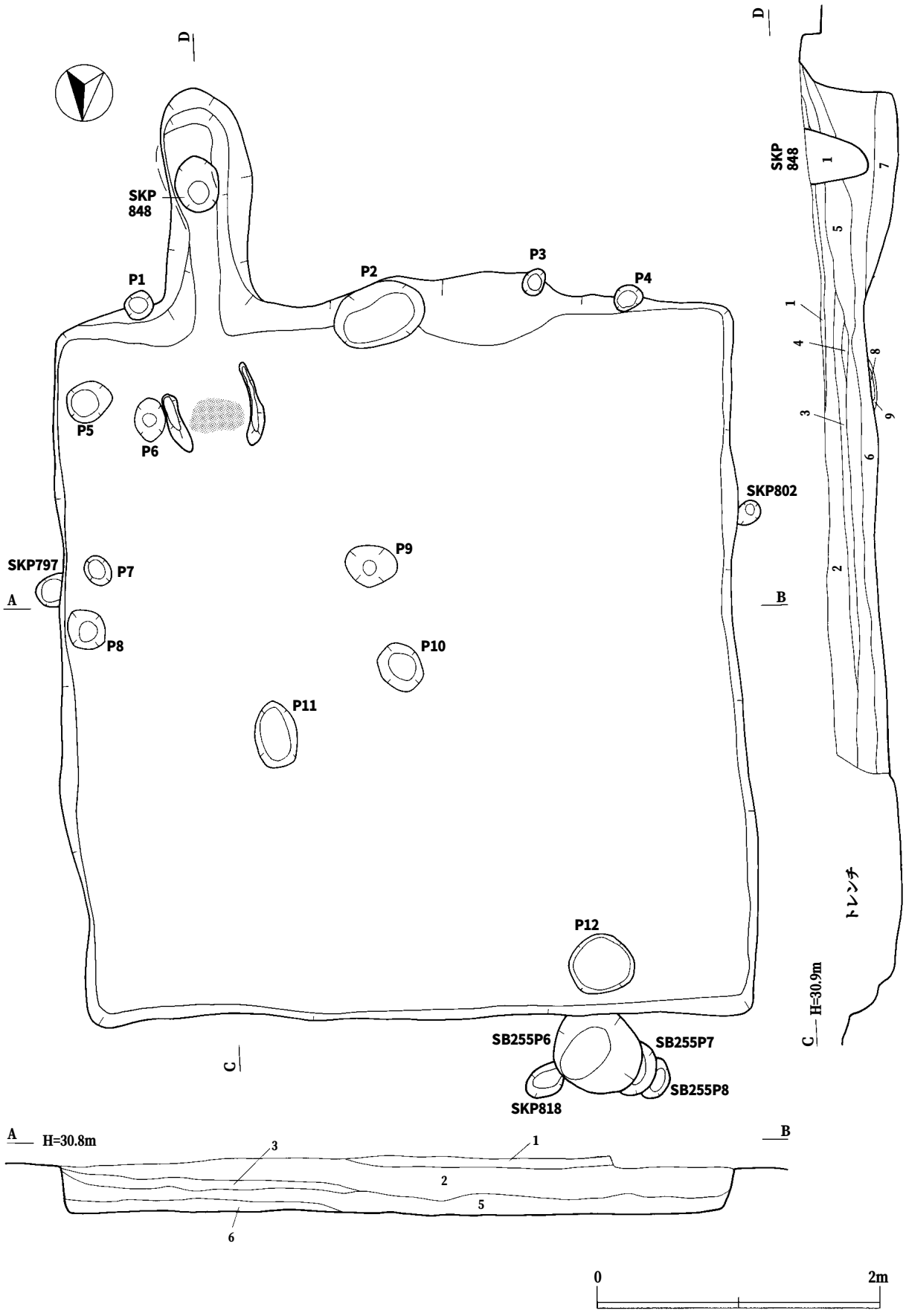
重複：なし。

規模と平面形：一辺４ｍほどの正方形で、壁長は四隅の柱穴の心々間で東壁4.08m、北壁4.0m、西壁3.88m、南側3.96mである。南壁西端の東約１ｍでカマドの煙道が南方に１ｍほど突き出、同壁東端より西0.5mほどには、幅約0.6mの出入り口のステップと推定される住居床面とほぼ同じ深さの掘り込みが取り付いている。主軸の方位はＮ－3.5°－Ｗである。

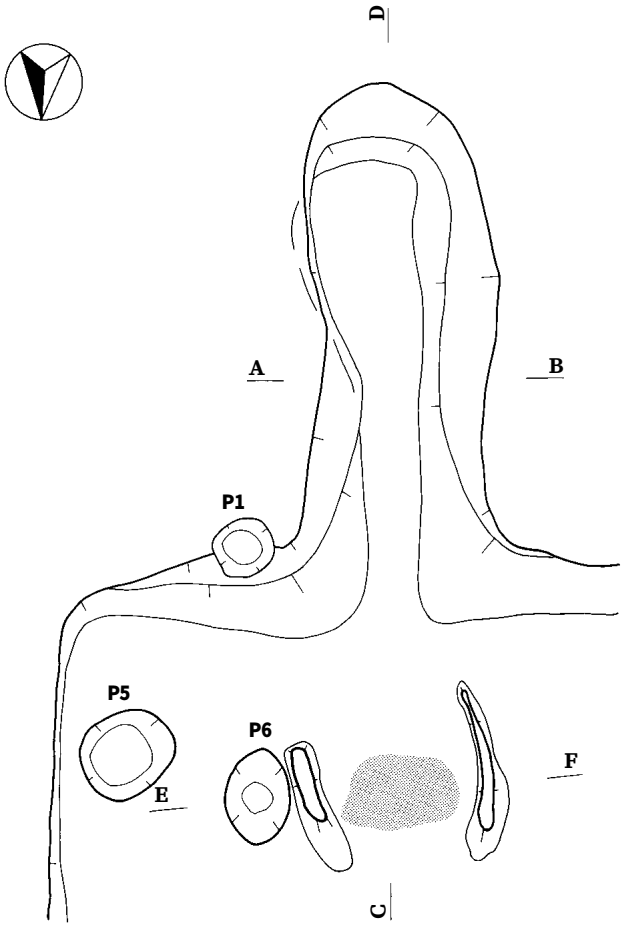
埋土：４層に分層した。自然堆積と考えられる。また埋土は南側から流れ込んだものと推定される。

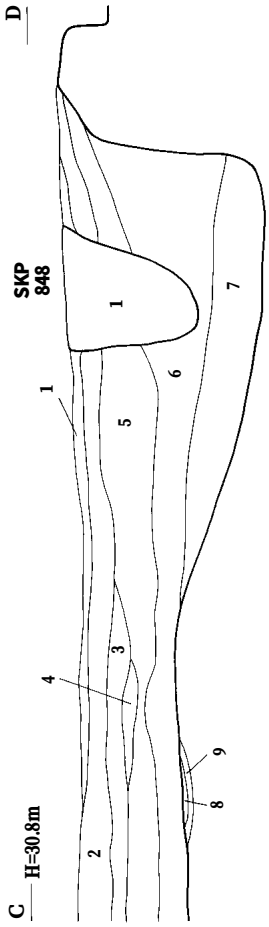
壁：現状では、床面から確認面まで15～23cmの高さで残存する。

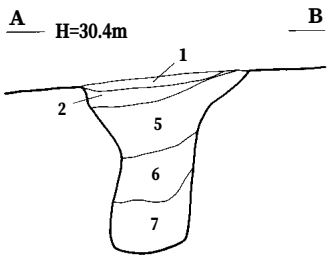
壁溝：壁の内側に沿い、幅13～23cm、床面からの深さ15～21cmの溝が巡っている。南壁では、カマド部分の60cmほど壁溝が途切れるが、出入り口部分下には壁溝の掘り方が確認されている。また、東西それぞれの壁溝底面に長さ30～40cm、深さ６～８cmの浅い窪みが一カ所ずつ見られ、壁材とは異なる四隅の主柱を補助する木材の痕跡の可能性がある。

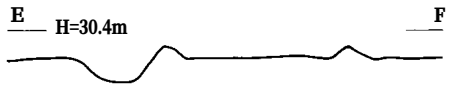


第22図　ＳＩ４３８竪穴住居跡（1）







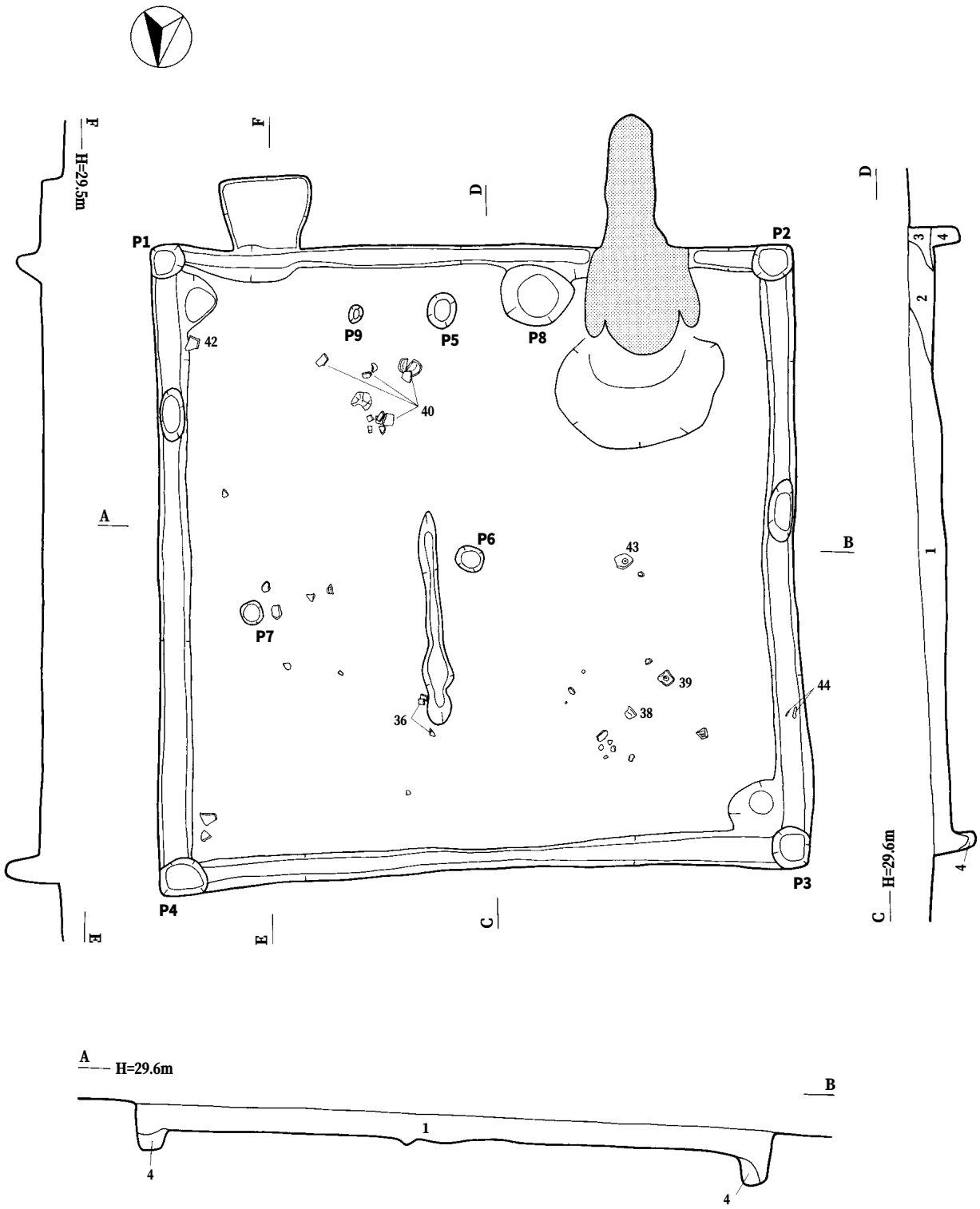


SI438
1 黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒5%混入
3 暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒(φ1～30mm)50%混入
4 明赤褐色土(5YR5/8)　粘性弱
5 黒褐色土(10YR2/3)
　焼土粒、地山粒(φ1～20mm)20%混入
6 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強
　地山粒(φ10～30mm)30%混入
7 黒褐色土(10YR2/2)
　地山粒10%混入
8 赤褐色土(2.5YR4/6)　しまり強　粘性弱
9 明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強　粘性弱

SKP848
1 黒褐色土(10YR2/3)

0　1m

第23図　ＳＩ４３８竪穴住居跡（２）



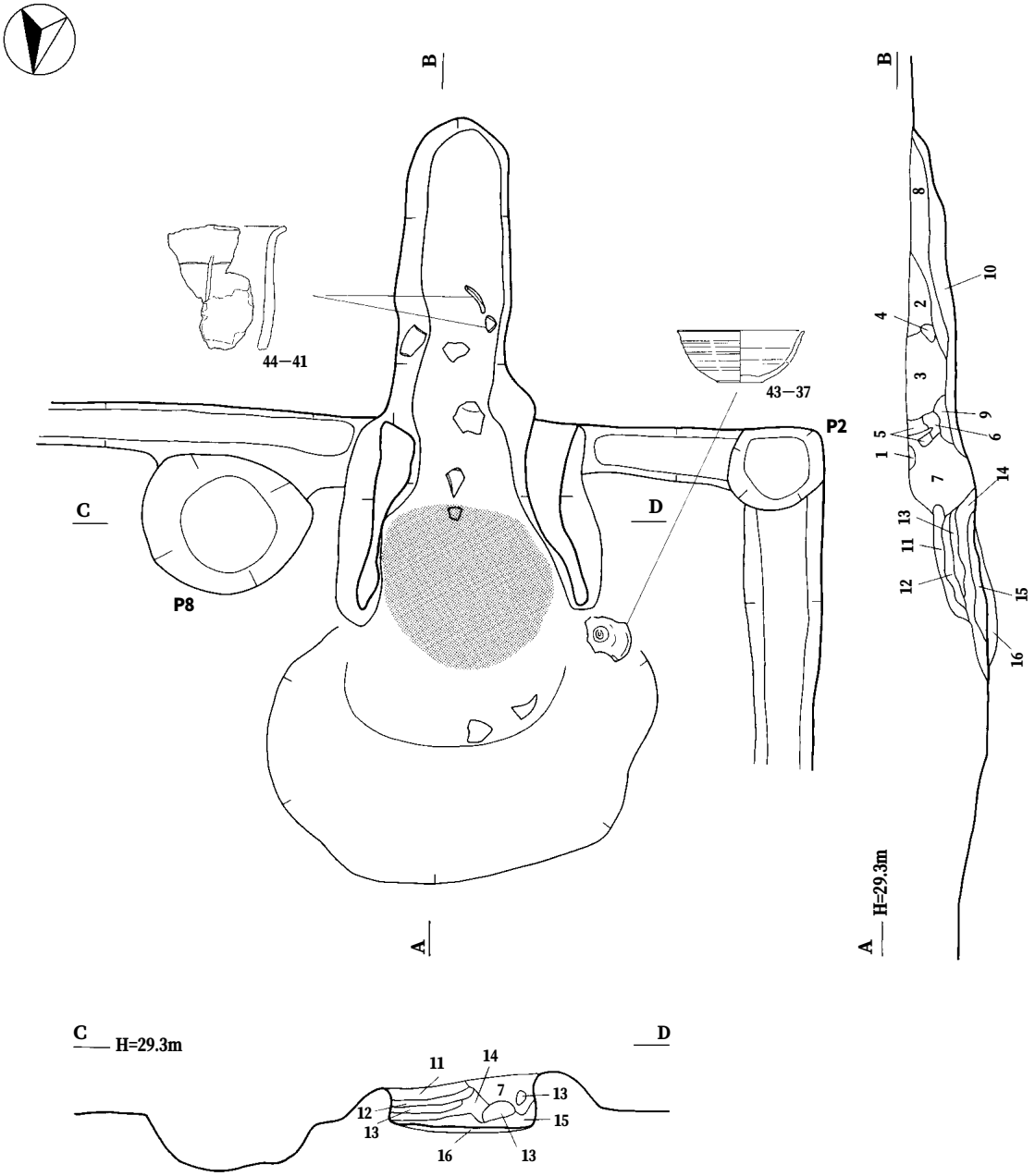
SI440

1 黒褐色土(10YR2/3)
　炭化物、地山粒(φ1～20mm)20%混入
2 褐色土(7.5YR4/4)
　黒褐色土(10YR2/3)30%混入
3 黒褐色土(10YR2/3)
　炭化物、地山粒(φ1～20mm)20%混入
4 褐色土(7.5YR4/4)　しまり弱
　黒褐色土(10YR2/3)10%混入

※図中の36･38は第43図－36･38、39･40･42～44は
　第44図－39･40･42～44の遺物を示す。

0　2m

第24図　ＳＩ４４０竪穴住居跡（１）



SI440カマド

1 黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱
　炭化物、焼土粒混入
3 黒褐色土(10YR2/3)
　炭化物、焼土粒、地山粒(φ1～10mm)20%混入
4 赤褐色土(5YR4/6)
5 極暗褐色土(5YR2/4)　しまり弱　粘性弱　レンガ状
　焼土粒混入
6 暗赤褐色土(5YR3/6)　粘性弱
7 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　炭化物、地山粒(φ1～5mm)20%混入
8 黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒混入
9 黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱
　地山粒混入
10 褐色(7.5YR4/6)の地山粒(φ1～10mm)の層
　黒褐色土(10YR2/3)30%混入
11 黄褐色土(10YR5/6)　カマド天井部
　炭化物、焼土粒混入
　にぶい黄褐色(10YR5/4)の火山灰混入
12 赤褐色土(5YR4/6)
13 赤褐色土(5YR5/8)
14 暗赤褐色土(5YR3/6)
　地山粒混入
15 明赤褐色土(5YR5/6)　しまり強　粘性弱　火床
16 赤褐色土(2.5YR4/6)　しまり強　粘性弱

0　1m

第25図　ＳＩ４４０竪穴住居跡（２）

床面：床面は堅く踏み締められていた。ほぼ平坦であるが、カマド前庭部付近がやや窪むほか、中央部に東西壁とほぼ平行する長さ1.4m、深さ4 cmほどの浅い溝状の窪みが見られ、間仕切りの痕跡の可能性がある。床面の精査中に５基の柱穴様ピット等を検出した。この内、ほぼ南北の中軸線上に位置するP5･6は、上屋構造を支える上で四隅の主柱に次ぐはたらきを持っていた可能性がある。特にP6は住居跡のほぼ中心に位置する。P7･9についても補助的な柱穴と考えられる。カマド東袖の横に並ぶように検出されたP8は、径40～48cmの断面が鍋状を呈している。性格は不明であるが、貯蔵穴や甕などを安置するためなど、カマド周りの何らかの施設と思われる。 ５基の柱穴の床面からの深さは、P5が35cm、P6が23cm、P7が７cm、P8が17cm、P9が13cmである。この他に南西隅と北西隅の柱穴に接するように窪みが見られる。南西隅の窪みは深さ９cm、北東隅の窪みは深さ22cmである。

カマド：南壁西端より東約１mに構築されていた。カマド天井および両壁が崩落し潰れた状態で、住居跡とほぼ同じレベルで確認された。火床、煙道を検出したが、支脚は出土しなかった。カマド断面からは、上層より、火熱により内面が赤変した天井部、カマドが潰れる前に堆積した埋土、火床面の順に観察できる。最終的な火床は第15層上面と考えられるが、煉瓦状に焼き締まった第16層がその下層に存在することから火床の高さを上方向へ調整した可能性が考えられる。また、第７層は煮炊き用の甕を据える穴から流れ込んだ可能性がある。

柱穴：四隅と床面から計８基の柱穴を検出した。４基の隅柱が主柱をなし上屋構造を支えていたものと考えられる。

出土遺物：主に土師器が出土した。43－36～38、44－39は土師器坏、44－40･41は土師器甕、44－42･43は須恵器甕、44－44は刀子である。この他、鉄滓、白色粘土塊が床面より出土しており、直接的な関係は不明であるが、周辺で鍛冶炉や土師器焼成窯の操業を裏付けているものと考えられる。また、床面直上から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,145年±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

ＳＩ446（第26図）

位置：ＭＳ43･44、ＭＴ42･43･44グリッドに位置している。

確認：第Ⅴ層で複数の柱穴と、これに伴うと推定される不定型な黒褐色土の落ち込みとして確認した。確認の時点で既に床の一部は露出していた。

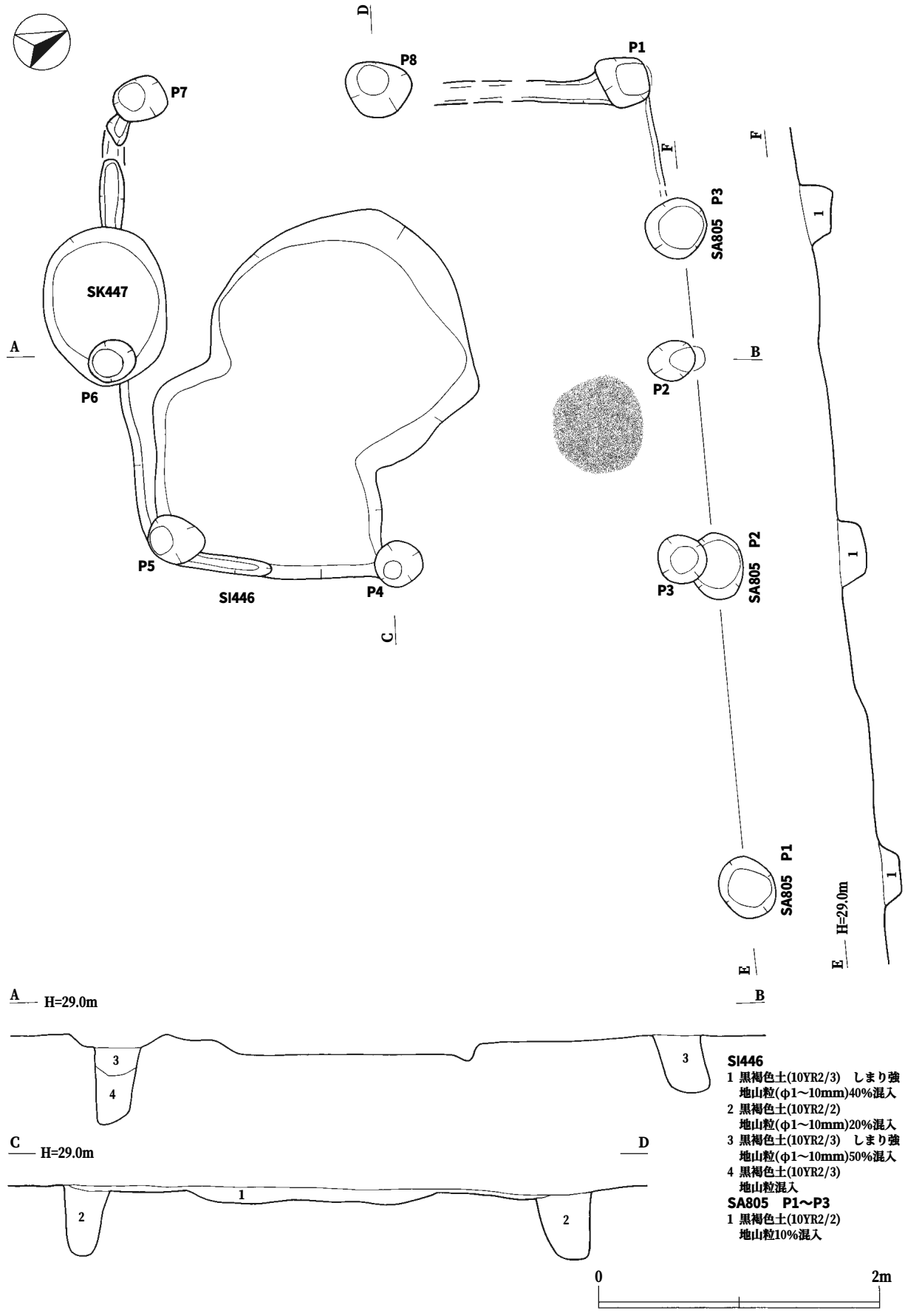
重複：ＳＡ805およびＳＫ447と重複する。本竪穴住居跡は、ＳＡ805より新しく、ＳＫ447より古い。

規模と平面形：削平の影響が大きく、確認面と床面のレベル差はほとんど無い。平面形は、四隅と各辺の中軸部に配置される計８基の柱穴によってほぼ正方形をなすが、壁あるいは壁溝は、各辺の一部分に残存する状況である。規模は、四隅の柱穴の心々間で、南東辺が3.70m、北西辺が3.54m、北東辺が3.44m、南西辺が3.22mである。主軸の方位は、Ｎ－30°－Ｅである。

埋土：現状では床面に堆積する埋土の層厚が僅かであるため、堆積状況等は判然としない。各柱穴の埋土は第Ⅲ層を由来とする自然堆積土と判断される。

壁：南西辺の東側などに数cmの段差が見られるが、壁溝の残存部とも見られ、明確に壁と判断できる箇所は無い。

壁溝：四辺の各一部に残存する。現状では、幅12～18cm、床面からの深さ５cmほどである。本来は四辺を巡っていたものと考えられる。



第26図　ＳＩ４４６竪穴住居跡・ＳＡ８０５柱穴列・ＳＫ４４７土坑

床面：ほぼ平坦で堅く締まっているが、南側が他に比べ数cm窪む。

カマド：床面の北東側に火床と思われる焼土範囲が見られ、ここにカマドが存在した可能性がある。煙道は確認できなかった。

柱穴：四隅と各辺の中央部に配置される８基の柱穴を検出している。各柱穴の底部は上端部に比べ、住居の外方に位置する傾向がある。つまり、各柱は直立せず、住居の中央部に向かって傾いて立っていたことになる。

出土遺物：柱穴を含め、本遺構の埋土中からの遺物の出土は無かった。

ＳＩ450（第27図）

位置：ＬＫ57･58に位置している。

確認：焼土を含む方形の黒褐色土の落ち込みとして確認した。

重複：ＳＫ531土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形：北東壁の大部分と北西壁北半および南隅が残存するのみであるが、一辺３ｍほどの正方形であったと推定される。主軸の方位はＮ－33°－Ｗである。

埋土：住居東側に残存する埋土は2層に分けられる。

壁：四壁で完全に残っているものは無い。現状における各壁の残存値は、北東壁2.8m、北西壁1.3m、南東壁0.84m、南西壁0.53mであり、床面から北東壁の確認面までは10cmの高さである。壁溝は確認できなかった。

床面：西側床面の一部は既に失われているが、ほぼ平坦であったと推測される。カマド前庭部付近に焼土(ＳＮ01)が確認されたが、本住居跡との関係や性格等については不明である。

カマド：上部および南東側は削平を受けていたが、南東壁のから東寄りに構築されていた。袖部と火床は確認できたが、煙道部は切り土により失われている。

柱穴：四隅およびその付近から６基、カマドに近い南東壁のほぼ中軸線上と、北東壁中央カマド寄りから各１基ずつの計８基を確認した。いずれも住居埋土の第２層を埋土としている。

出土遺物：カマドおよびその周辺から土師器、鉄滓が出土した。この内、土師器甕２個体(44－45･46)を図化した。また、カマド付近床面より採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,180年±40年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

ＳＩ516（第28･29図、図版４･11･12･13）

位置：ＭＲ41･42、ＭＳ41･42に位置している。

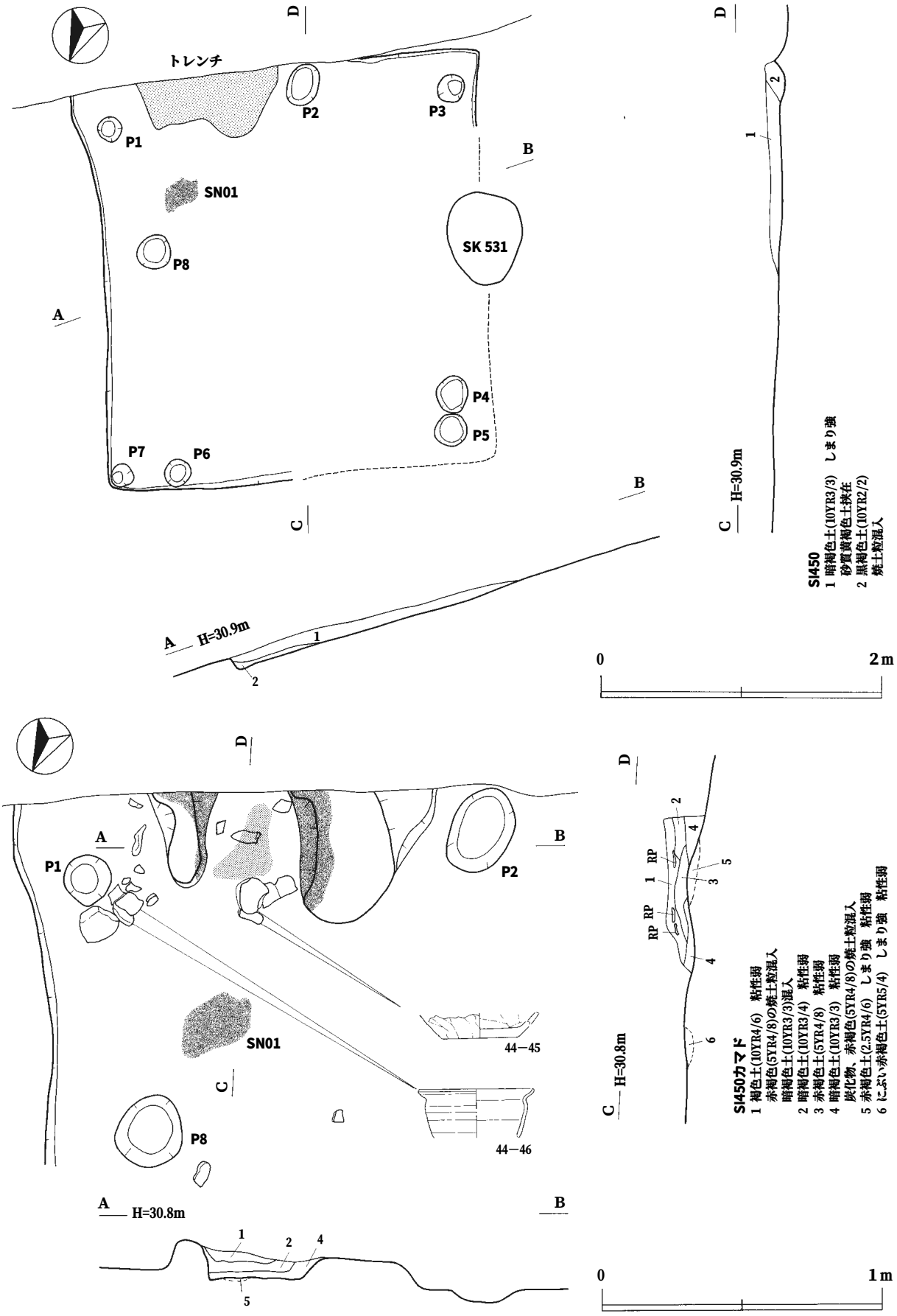
確認：第Ⅴ層上面で、方形の黒褐色土の落ち込みとして確認した。

重複：なし。

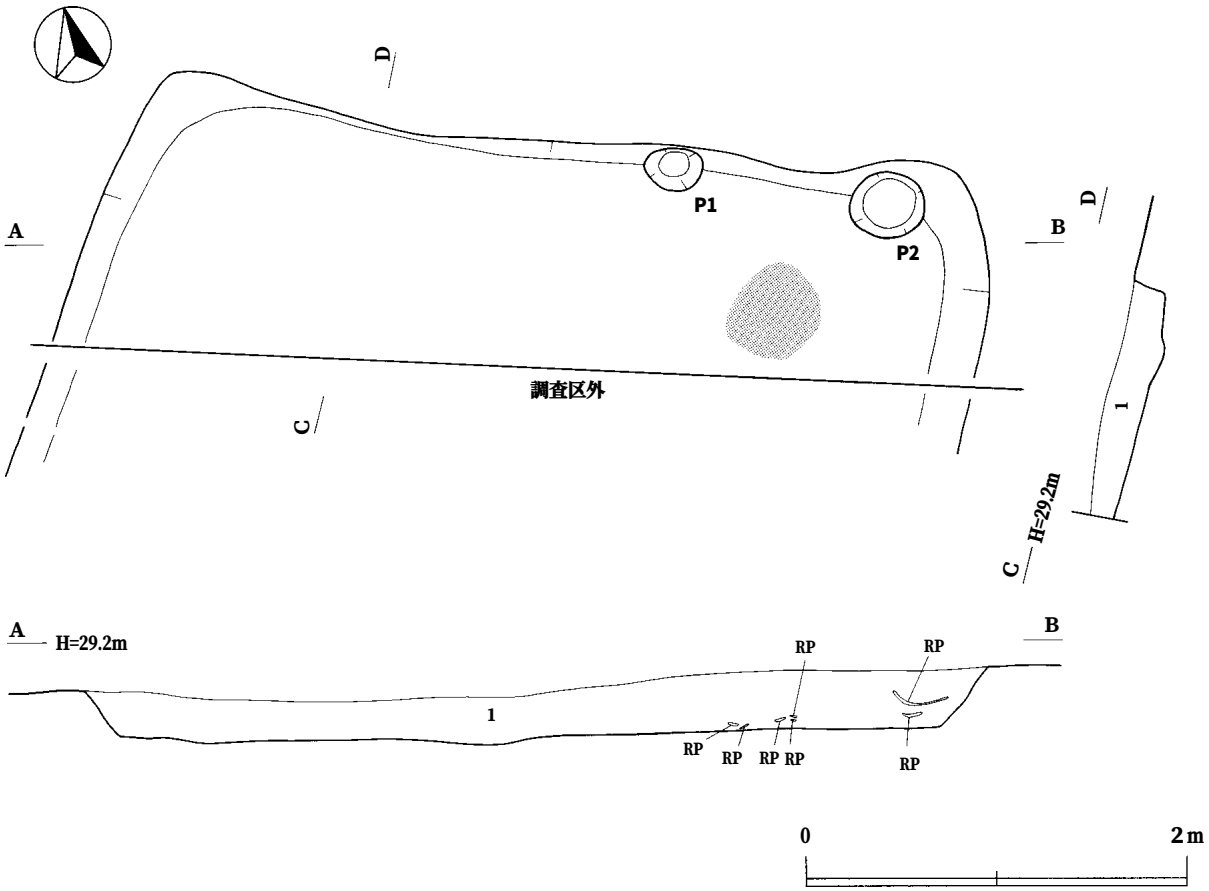
規模と平面形：北壁と東西壁それぞれの一部が残存するのみで、南西側の大半は、調査区の境界となる現代の水田側溝によって失われている。北壁の長さは4.08m、東西それぞれの壁の残存長は、0.95mと1.48mである。本来の平面形は、一辺が４ｍほどの隅丸方形であったものと推測される。唯一完全に残る北壁の中軸線の方位は、Ｎ－20°－Ｅである。

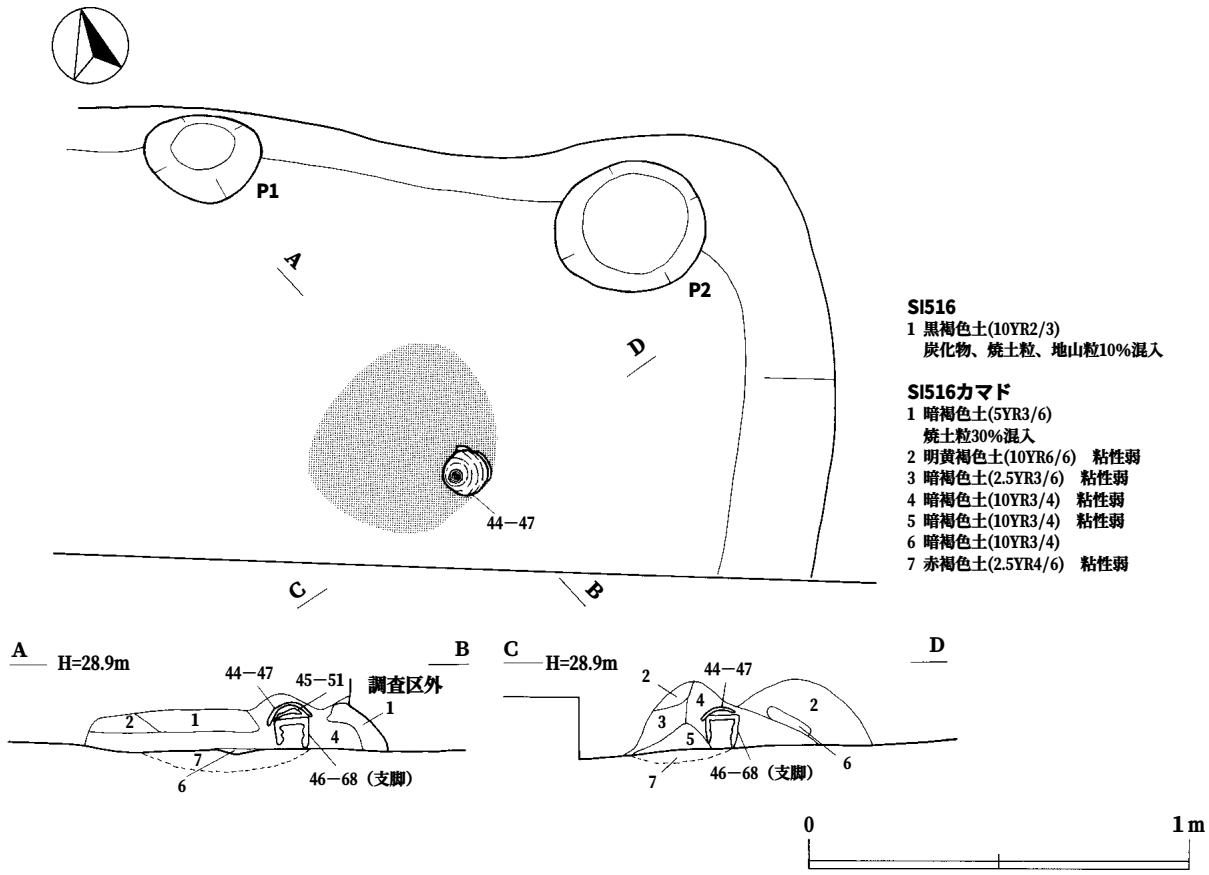
埋土：黒褐色土の単一層である。

壁：現状では、床面から確認面までの高さは20cmほどである。壁は床面からやや外傾して立ち上がっている。



第27図　ＳＩ４５０竪穴住居跡





SI516
1 黒褐色土(10YR2/3)
　炭化物、焼土粒、地山粒10%混入

SI516カマド
1 暗褐色土(5YR3/6)
　焼土粒30%混入
2 明黄褐色土(10YR6/6)　粘性弱
3 暗褐色土(2.5YR3/6)　粘性弱
4 暗褐色土(10YR3/4)　粘性弱
5 暗褐色土(10YR3/4)　粘性弱
6 暗褐色土(10YR3/4)
7 赤褐色土(2.5YR4/6)　粘性弱

第28図　ＳＩ５１６竪穴住居跡（1）

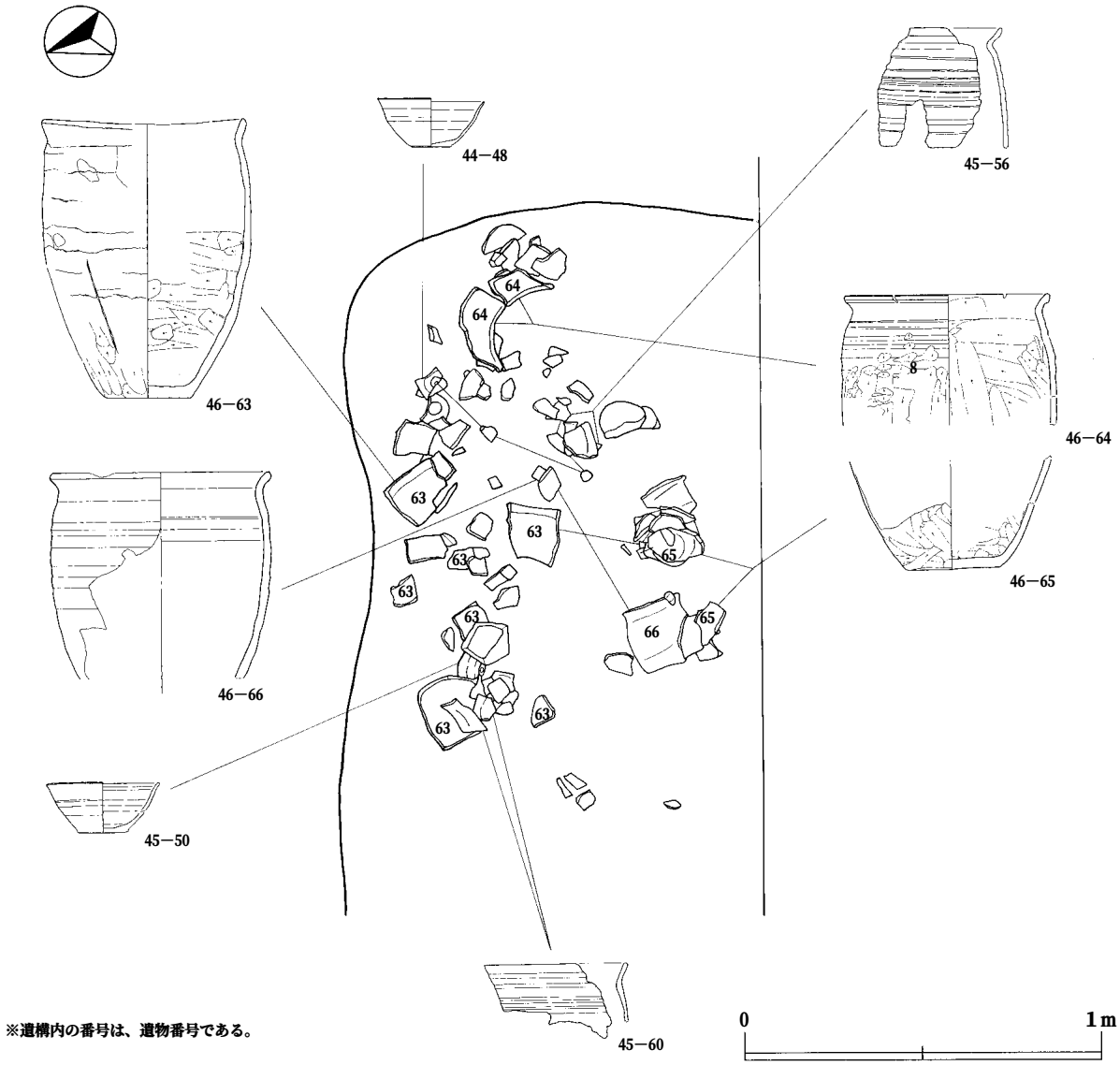
壁溝：なし。

床面：ほぼ平坦で、堅く締められている。

カマド：北東隅付近に構築されていた。火床と支脚が検出され、その位置関係から、東方向へ煙を出していたものと推測されるが、煙道は検出できなかった。第２層は崩落したカマド材の層で、第７層上面が火床である。また、支脚天井には、土師器坏２個体(上：44－47、下：45－51)が、重ねられ倒立した状態で置かれていた。この類例は、十二林遺跡SI86に見られる。

柱穴：カマドに近い北東隅と北壁から計２基を検出した。

出土遺物：全調査区で最も多くの遺物を出土した住居跡である。遺物のほとんどは土師器で、カマドが位置する住居北東隅から出土している。出土遺物の総量は整理用コンテナ(54×34×10cm)で４箱分である。この内、土師器坏６個体(44－47～49、45－50～52)、土師器甕13個体(45－53～62、46－63～66)、須恵器甕(46－67)、支脚(46－68)を図化した。また、床面直上から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,105年±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。



第29図　ＳＩ５１６竪穴住居跡（２）

ＳＩ718（第30･31図、図版４･11）

位置：ＭＡ48･49、ＭＢ48･49グリッドに位置する。

確認：方形の黒褐色土の落ち込みとして確認したが、埋土は床面近くまで削平されていた。

重複：ＳＩ719、ＳＫＩ743、ＳＤ756と重複する。ＳＤ756を切り、ＳＩ719･ＳＫＩ743に切られる。

規模と平面形：主軸の方位はＮ－11°－Ｗである。規模は、南壁が4.68m、北壁が4.58m、東壁が4.88m、西壁が4.96mである。向かい合う壁は、それぞれがほぼ平行で、ほぼ同じ長さであるが、平面形は、平行四辺形状に歪む。

埋土：6層に分層したが、床面直上まで削平されていたため、埋土は薄かった。

壁：現状では、床面から確認面まで４～11cmの高さが残存する。立ち上がりはやや急である。

壁溝：東壁をＳＫＩ743に、南壁と西壁をＳＩ719に切られるため、北壁以外は部分的であるが、四壁沿いに一巡していたと考えられる。また、カマドの下部からも壁溝を検出している。

床面：ほぼ平坦で、堅く締められていた。

カマド：南壁の東側に構築されていた。遺存状況は重機による削平のため不良であるが、袖部の一部および燃焼部を確認した。袖部には粘質土を利用しており、燃焼部の火床は高熱により焼き締まっていた。土製の支脚が出土したが、脆く、下部が僅かに残存するのみであった。煙道は南壁から突き出ていたものと思われるが検出できなかった。

柱穴：四隅と壁溝内から11基(P1～P11)、床面から10基(P12～P21)を検出している。上屋構造を支えた主要なものは、四隅(P1･3･6･11)と床のほぼ中心のP18であったと推測される。

出土遺物：埋土中から主に土師器の坏・甕などが出土した。この内、土師器坏3個体(47－69～71)、土師器甕(47－72)、P17から出土した支脚(47－73)を図化した。また、床面から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,380年±40年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

ＳＩ719（第30図、図版12）

位置：ＭＡ47･48、ＭＢ47･48グリッドに位置している。

確認：第Ⅴ層において、方形に巡る溝状のプランとして確認した。

重複：ＳＩ718と重複する。本住居跡が新しい。

規模と平面形：平面形は、北壁が長い歪んだ隅丸方形である。各壁の長さは、北壁が4.10m、西壁が3.74m、南壁が3.28m、東壁が3.22mである。南壁の中軸線の方位はＮ－６°－Ｗである。

埋土：柱穴等の埋土を含め４層に分層したが、床面直上まで削平されていたため埋土は薄い。壁溝と柱穴の埋土は、第Ⅲ層に由来するものと思われる。

壁：現状では、南壁において床面から確認面まで僅か数cm確認できるのみである。

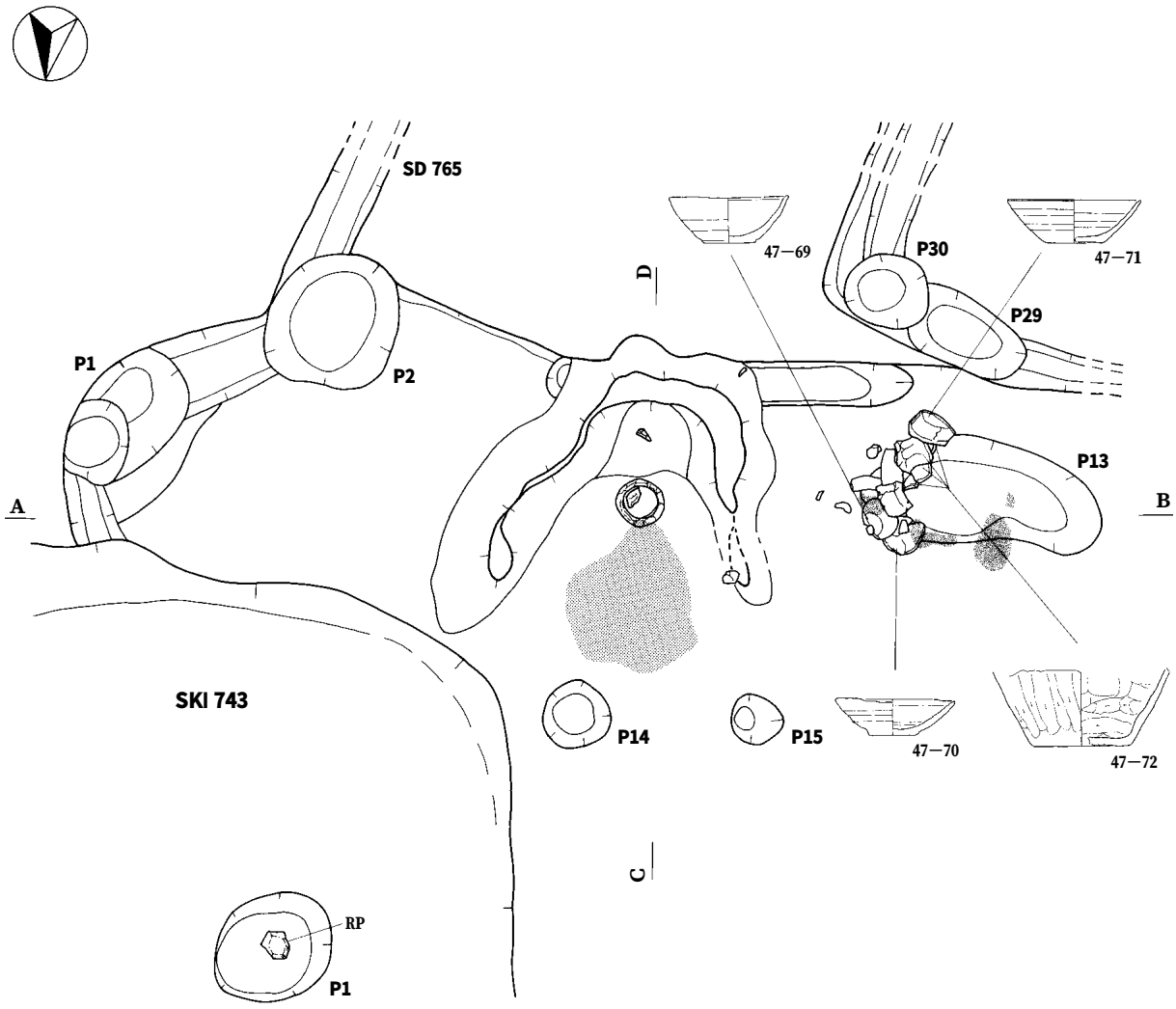
壁溝：幅12～19cm、床面からの深さ５～８cmの溝が方形に巡っている。

床面：ほぼ平坦であるが、中央部やや西寄りに径1.40m、深さ20cmほどの円形の窪み(P36)がある。土層観察からは、P36は住居跡よりも新しい可能性がある。

カマド：検出できなかった。

柱穴：四隅と壁溝内、床面から13基(P22～P34)検出された。主に四隅と各壁のほぼ中間に位置する柱が上屋構造を支えていたものと推測される。

出土遺物：土師器の破片が28点出土した。この内、土師器甕(47－74)を図化した。



SI718カマド

1 明黄褐色土(10YR7/6)　しまり強　粘性弱
2 赤褐色土(5YR4/8)　しまり強　粘性弱
　焼土粒5%混入
3 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱　焼土層
　褐色土を斑に含む
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性弱
　焼土粒、地山粒混入
5 暗褐色土(7.5YR3/4)　しまり強　粘性弱
　地山粒混入
6 褐色土(7.5YR4/3)　しまり強
　地山色の土を斑に含む
7 明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強　粘性弱　焼土層
8 褐色土(7.5YR4/4)　しまり強　粘性弱
9 にぶい赤褐色土(5YR4/4)　下面火床
10 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強　粘性弱
11 黒褐色土(10YR2/3)

0　1m

第31図　ＳＩ７１８カマド

ＳＩ896（第32図）

位置：ＬＨ54グリッドに位置する。北側は平成14年度調査区との境界である。

確認：既に削平されていた第Ⅴ層上面にて煙道部を有するカマドのみ確認した。住居北側のほとんどは、平成14年度調査区に存在することになるが、14年度調査では検出されなかった。

重複：現状では無い。

規模と平面形：カマドが位置する住居南東部のみの検出のため、詳しい規模については不明である。

埋土：調査前に埋土が床面近くまで削平されていたため、カマドの部分とピットを除き不明である。

壁：確認できなかった。削平により失われたものと考えられる。

壁溝：南壁に沿って一部確認された。その残存長は１ｍほどである。

床面：現状では、ほぼ平坦で堅く締まっている。

カマド：削平を受けていたが、煙道部と掘り窪められた燃焼部が確認できた。第６層上面が火床で、堅く焼き締まっていた。煙道は南壁より1.14m突き出しており、その方位はＮ－1.5°－Ｗである。

柱穴：南東の隅など、計５基が検出された。P5は支脚が位置していたピットであろうか。

出土遺物：カマド燃焼部や煙道を中心に土師器の破片、鉄滓などが出土した。また、カマドから採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,115年±40年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

ＳＩ897（第33･34図、図版５）

位置：ＭＤ42・ＭＥ41・ＭＥ42グリッドに位置する。

確認：方形の黒褐色土の落ち込みとして確認した。調査前に西側半分は削平されていた。

重複：ＳＡ1303柱穴列と重複している。住居内にあるＳＡ1303P1が住居の床面を掘り込んでいることから、本竪穴住居跡が古いと思われる。

規模と平面形：西側半分は削平されていたが、柱穴の遺存状況から、東壁3.30mで、その他の壁は南壁4.45m、北壁4.50m、西壁3.88mと推定され、東西方向に長い長方形プランと考えられる。

埋土：各柱穴の埋土を含め10層に分層できた。第８層上面が貼り床面と考えられる。P12が第８層下面から検出されていることから、住居を造り替えたものと推定される。

壁：現状では４cmから14cmの高さで外傾しながら緩やかに立ち上がる。

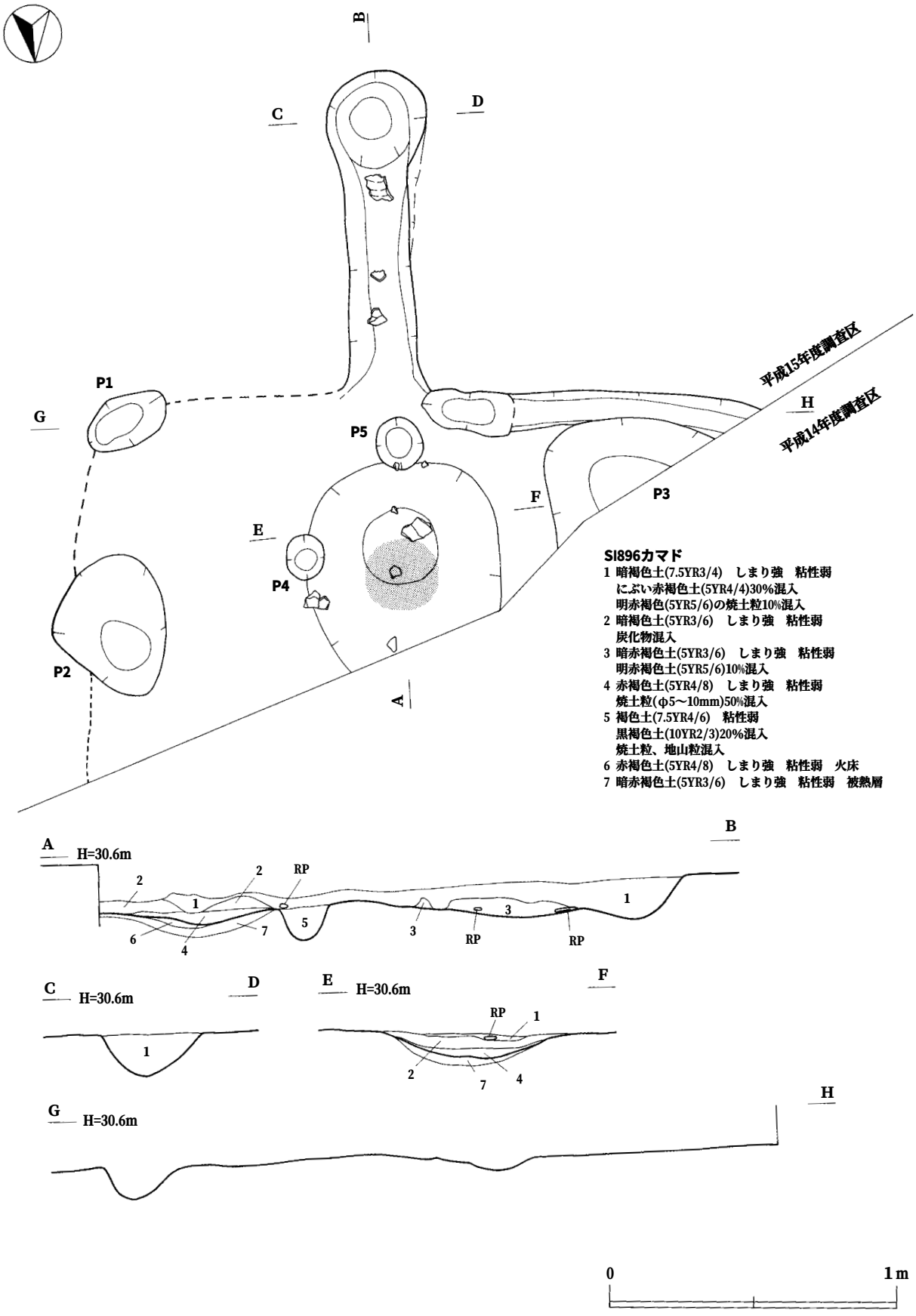
壁溝：東壁と北壁、南壁の一部で検出した。本来は幅15cm、深さ５cm前後の溝が壁沿いに四辺を巡っていたものと推定される。

床面：ほぼ平坦で硬く締まっている。

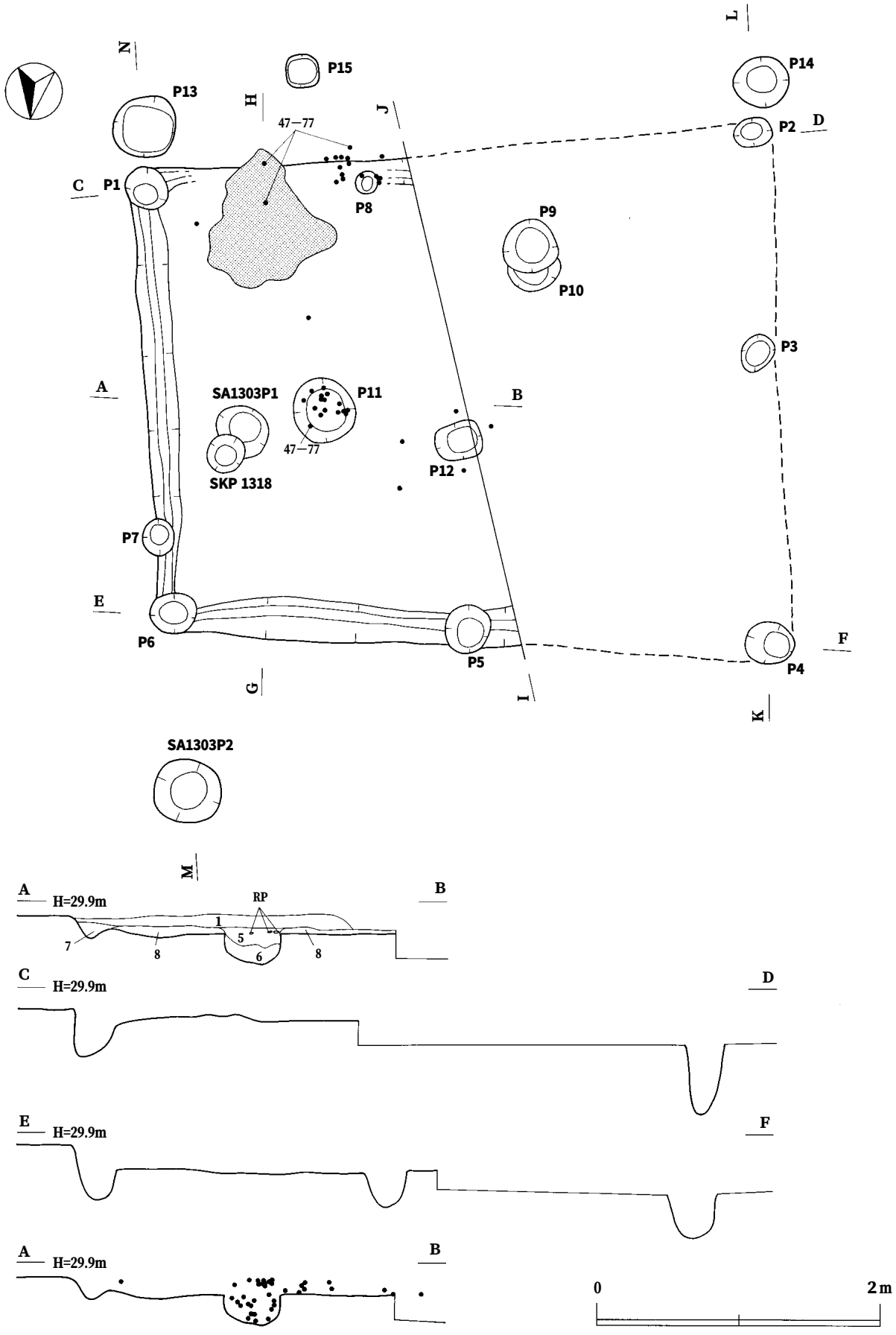
カマド：南壁東側に構築されていた。削平を受けていたため、煙道部は確認できなかったが、崩れた袖部と燃焼部、土師器の甕(47－78)を転用した支脚を検出した。第12層上面が火床で、高熱により堅く焼き締まっていた。カマドを持つ南壁の中軸線(主軸)の方位は、Ｎ－７°－Ｗである。

柱穴：四隅(P1･2･4･6)のほか、壁沿いから４基(P3･5･7･8)、床から４基(P9～12)、その他３基(P13～15)を検出した。また、P11からは土師器片16点が出土し、埋土に多量の焼土を含んでいたことから、不要になった土器や、カマド内の焼土を捨てたものと考えられる。

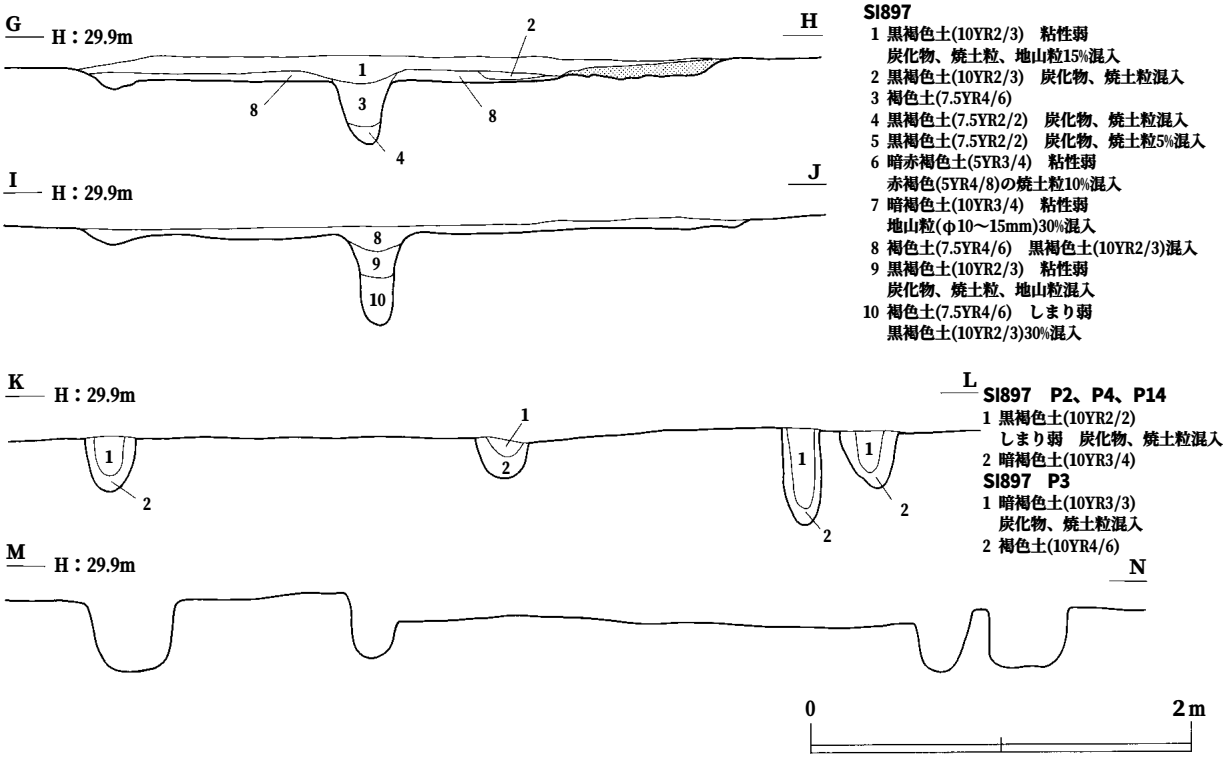
出土遺物：土師器片54点、椀形鍛冶滓１点、刀子片１点が出土した。この内、土師器杯(47－75)、土師器甕３個体(47－76～78)を図化した。また、カマドから採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,160年±45年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。



第32図　ＳＩ８９６竪穴住居跡

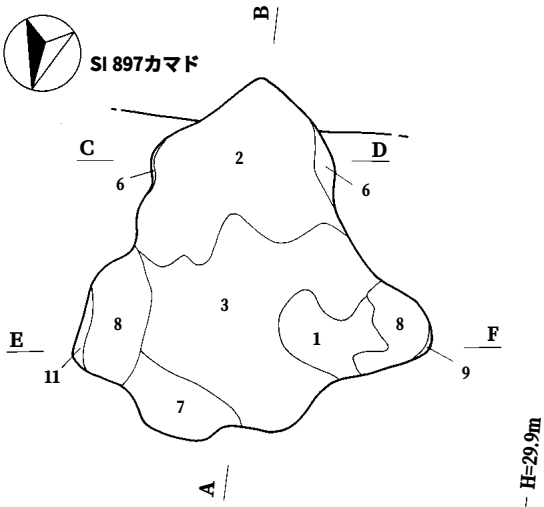


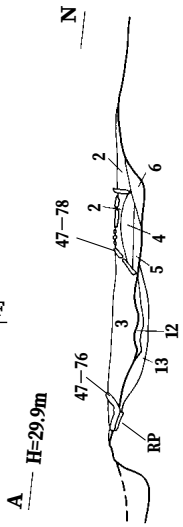
第33図　ＳＩ８９７竪穴住居跡（1）

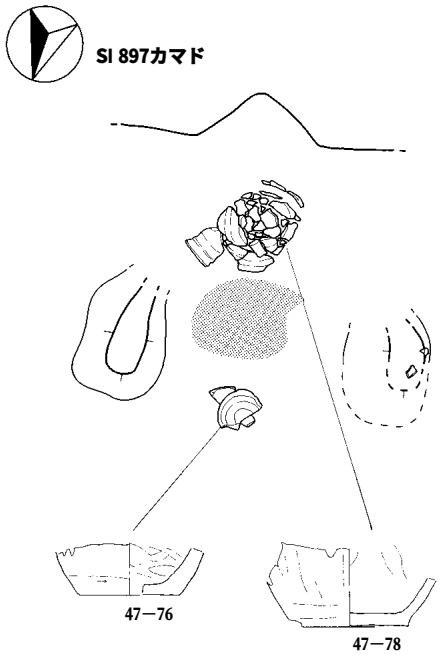


SI897
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
炭化物、焼土粒、地山粒15%混入
2 黒褐色土(10YR2/3)　炭化物、焼土粒混入
3 褐色土(7.5YR4/6)
4 黒褐色土(7.5YR2/2)　炭化物、焼土粒混入
5 黒褐色土(7.5YR2/2)　炭化物、焼土粒5%混入
6 暗赤褐色土(5YR3/4)　粘性弱
赤褐色(5YR4/8)の焼土粒10%混入
7 暗褐色土(10YR3/4)　粘性弱
地山粒(φ10～15mm)30%混入
8 褐色土(7.5YR4/6)　黒褐色土(10YR2/3)混入
9 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
炭化物、焼土粒、地山粒混入
10 褐色土(7.5YR4/6)　しまり弱
黒褐色土(10YR2/3)30%混入

SI897　P2、P4、P14
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり弱　炭化物、焼土粒混入
2 暗褐色土(10YR3/4)
SI897　P3
1 暗褐色土(10YR3/3)
炭化物、焼土粒混入
2 褐色土(10YR4/6)

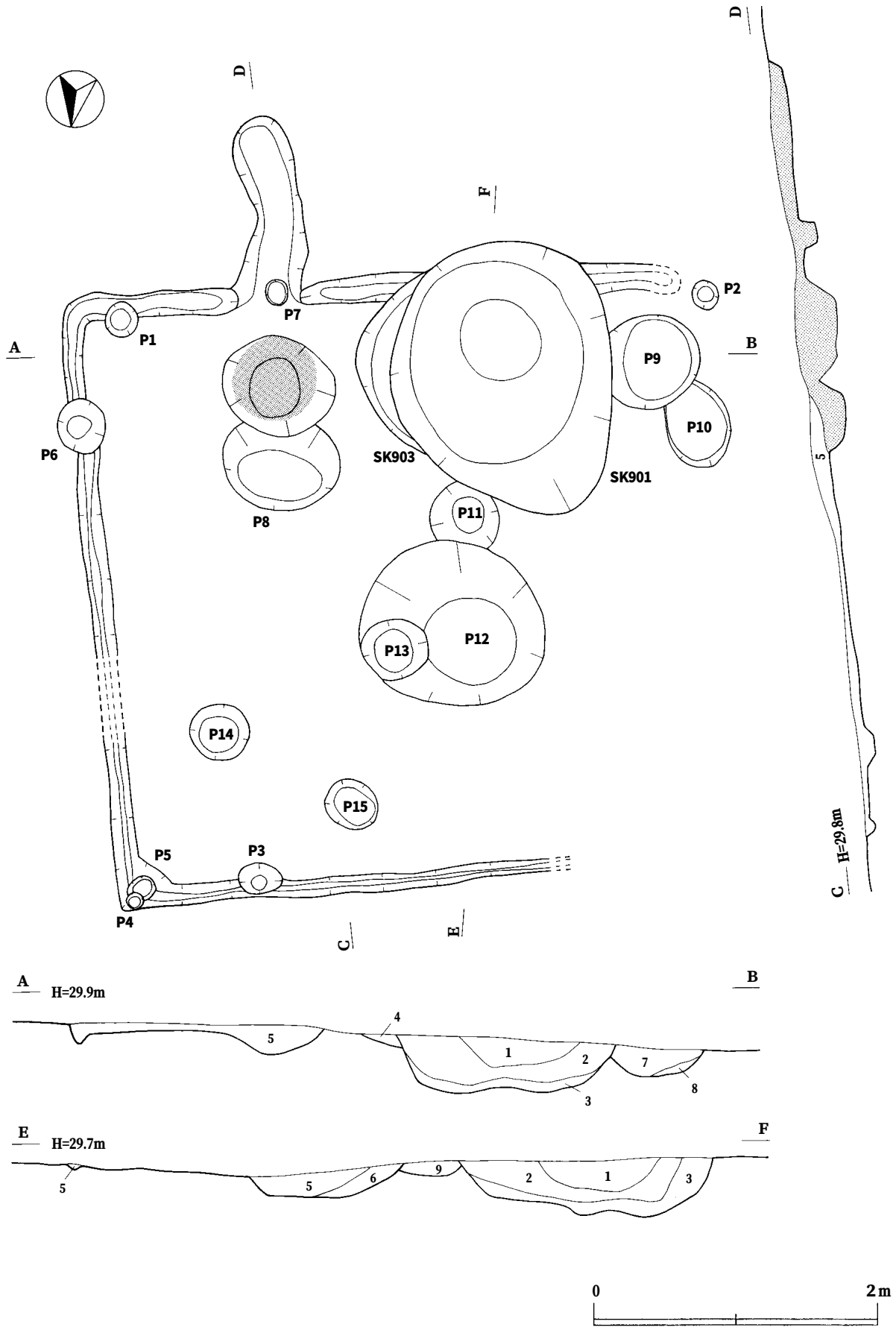






SI897カマド
1 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱　暗褐色土(7.5YR3/4)10%混入
3 暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性弱　赤褐色土(5YR4/8)焼土粒10%混入
炭化物、明褐色土(7.5YR5/8)焼土粒10%混入
2 暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性弱　炭化物、焼土粒混入
4 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱
5 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱　暗褐色土(7.5YR3/4)5%混入
6 暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性弱　炭化物、焼土粒、地山粒混入
8 にぶい黄橙土(10YR6/4)　しまり強　粘性弱炭化物混入
7 にぶい黄橙土(10YR6/4)　しまり強　粘性弱
暗褐色土(7.5YR3/4)と赤褐色土(5YR4/8)と明褐色土(7.5YR5/8)が斑に混入
9 暗褐色土(7.5YR3/4)　炭化物、焼土粒、にぶい黄橙(10YR6/4)20%混入
10 褐色土(10YR4/6)　粘性弱　　炭化物、焼土粒混入
11 暗褐色土(10YR3/4)　粘性弱炭化物、焼土粒混入
12 明褐色土(7.5YR5/8)　しまり強　粘性弱　火床
13 赤褐色土(5YR4/8)　しまり強　粘性弱　被熱層

第34図　ＳＩ８９７竪穴住居跡（２）



第35図　ＳＩ９００竪穴住居跡（1）

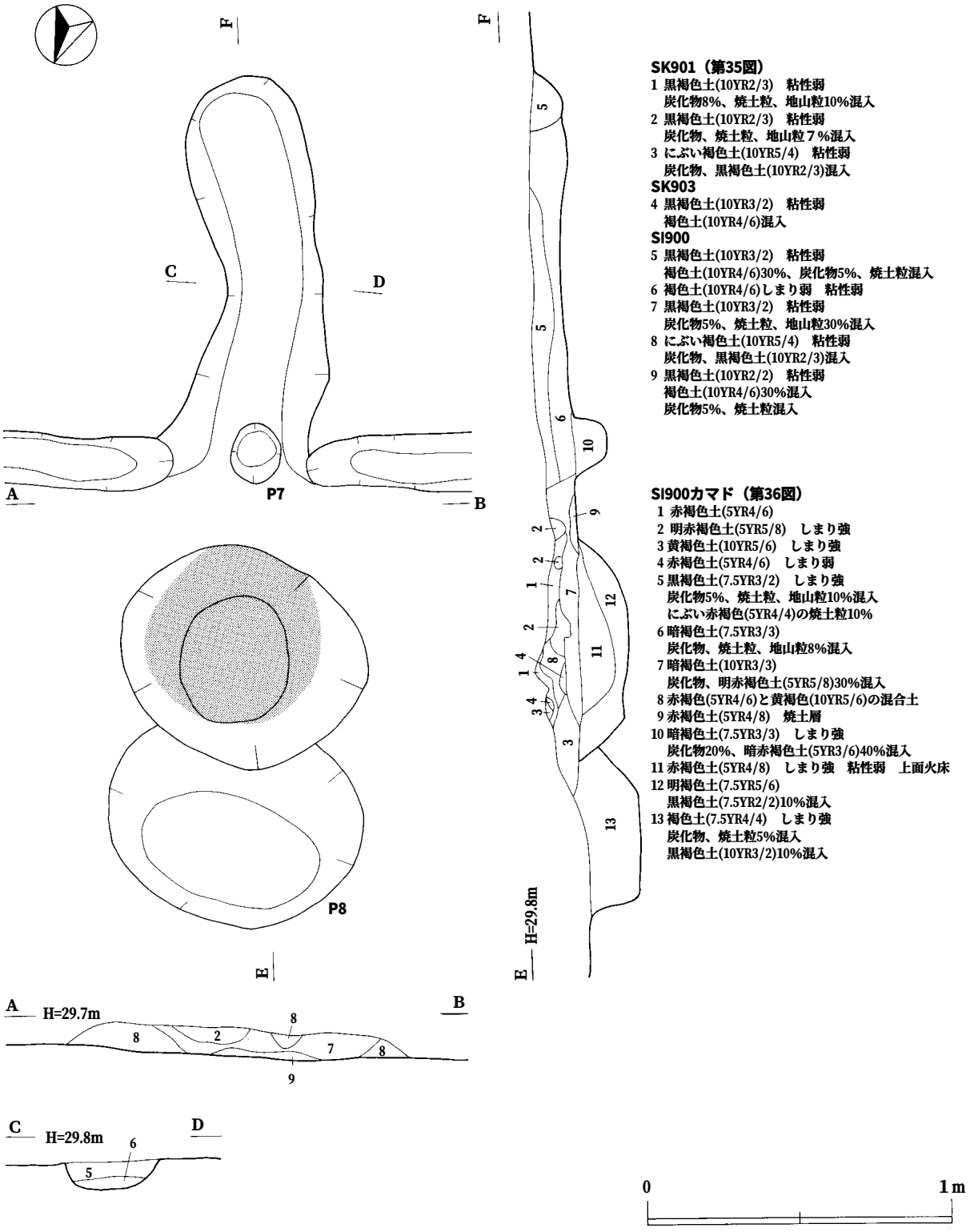
ＳＩ900（第35･36･37図、図版５）

位置：MH42･43･44、ＭＩ42･43･44グリッドに位置している。

確認：第Ⅴ層で、南側に煙道を持つ、黒褐色の方形プランとして確認した。

重複：ＳＫ901･903と重複し、本住居跡が901･903より古い。

規模と平面形：削平により西壁と南北壁の西側の一部が失われていた。本来は一辺が4.4mに近い



SK901（第35図）
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　炭化物8%、焼土粒、地山粒10%混入
2 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　炭化物、焼土粒、地山粒７%混入
3 にぶい褐色土(10YR5/4)　粘性弱
　炭化物、黒褐色土(10YR2/3)混入
SK903
4 黒褐色土(10YR3/2)　粘性弱
　褐色土(10YR4/6)混入
SI900
5 黒褐色土(10YR3/2)　粘性弱
　褐色土(10YR4/6)30%、炭化物5%、焼土粒混入
6 褐色土(10YR4/6)しまり弱　粘性弱
7 黒褐色土(10YR3/2)　粘性弱
　炭化物5%、焼土粒、地山粒30%混入
8 にぶい褐色土(10YR5/4)　粘性弱
　炭化物、黒褐色土(10YR2/3)混入
9 黒褐色土(10YR2/2)　粘性弱
　褐色土(10YR4/6)30%混入
　炭化物5%、焼土粒混入

SI900カマド（第36図）
1 赤褐色土(5YR4/6)
2 明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強
3 黄褐色土(10YR5/6)　しまり強
4 赤褐色土(5YR4/6)　しまり弱
5 黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり強
　炭化物5%、焼土粒、地山粒10%混入
　にぶい赤褐色(5YR4/4)の焼土粒10%
6 暗褐色土(7.5YR3/3)
　炭化物、焼土粒、地山粒8%混入
7 暗褐色土(10YR3/3)
　炭化物、明赤褐色土(5YR5/8)30%混入
8 赤褐色(5YR4/6)と黄褐色(10YR5/6)の混合土
9 赤褐色土(5YR4/8)　焼土層
10 暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり強
　炭化物20%、暗赤褐色土(5YR3/6)40%混入
11 赤褐色土(5YR4/8)　しまり強　粘性弱　上面火床
12 明褐色土(7.5YR5/6)
　黒褐色土(7.5YR2/2)10%混入
13 褐色土(7.5YR4/4)　しまり強
　炭化物、焼土粒5%混入
　黒褐色土(10YR3/2)10%混入

第36図　ＳＩ９００竪穴住居跡（２）

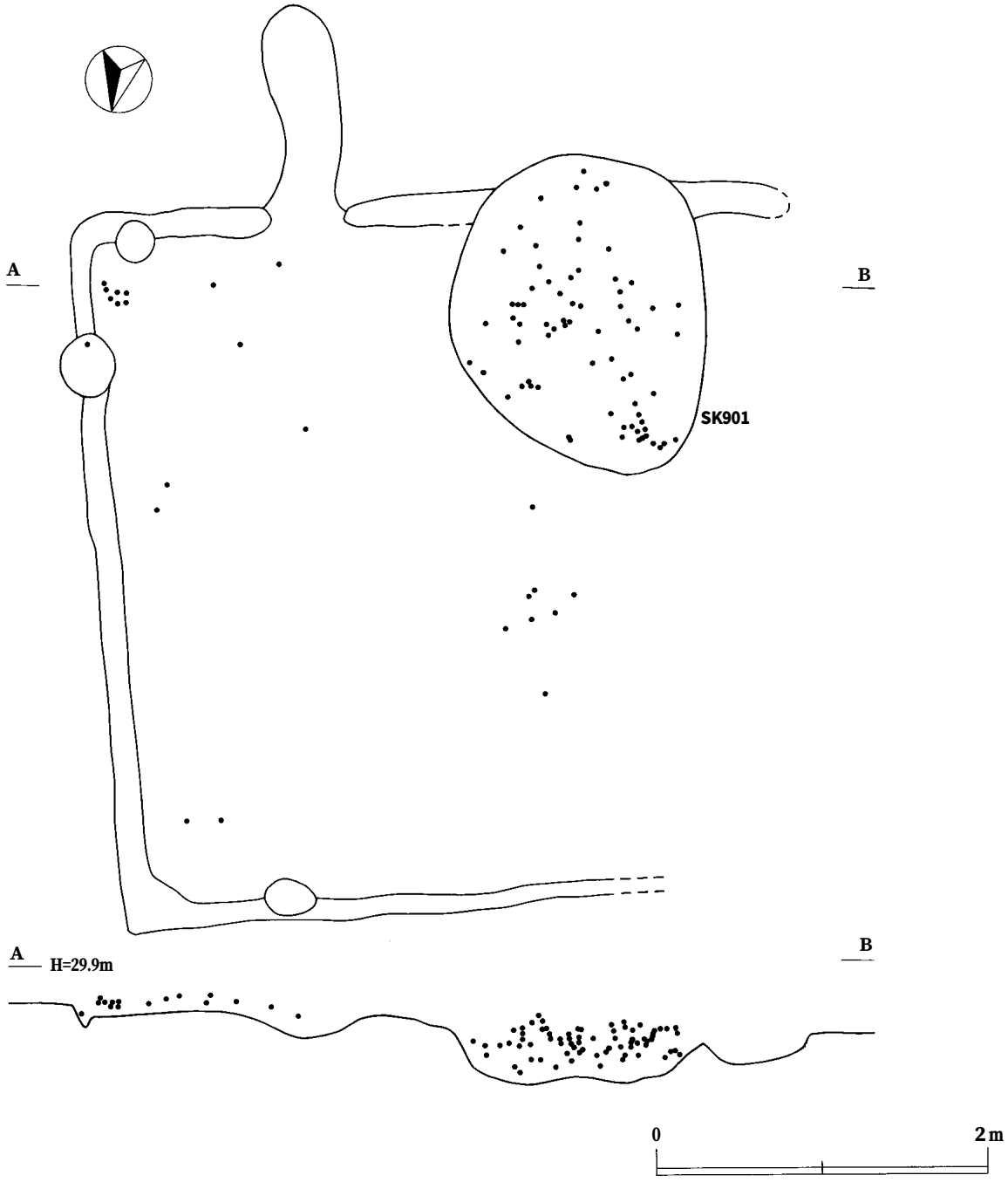
正方形であったと推測される。東壁の長さは4.38m、南壁の残存長は約4.20m、北壁の残存長は約３mである。主軸の方位は、Ｎ－15.5°－Ｗである。

埋土：褐色土が混入する黒褐色土の単一層である。

壁：現状では床面から確認面まで10cmほどの高さで残存するが、削平の影響が大きい西側ほど低くなる。壁の立ち上がりはやや急である。

壁溝：失われた西壁以外で確認した。本来は、幅20cm、床面からの深さ４～７cmほどの溝が一巡していたと推定される。

床面：ほぼ平坦で、堅く締められていた。



第37図　ＳＩ９００竪穴住居跡（３）

カマド：南壁の東側に構築されており、煙道と燃焼部が確認された。第11層上面が火床である。高熱により焼き締まり硬化していた。煙道は住居南壁際から約1.2m掘り込まれており、僅かに東に折れる。また、燃焼部の下部に、深さ16cmほどの中華鍋状の掘り込みが確認できたが用途は不明である。

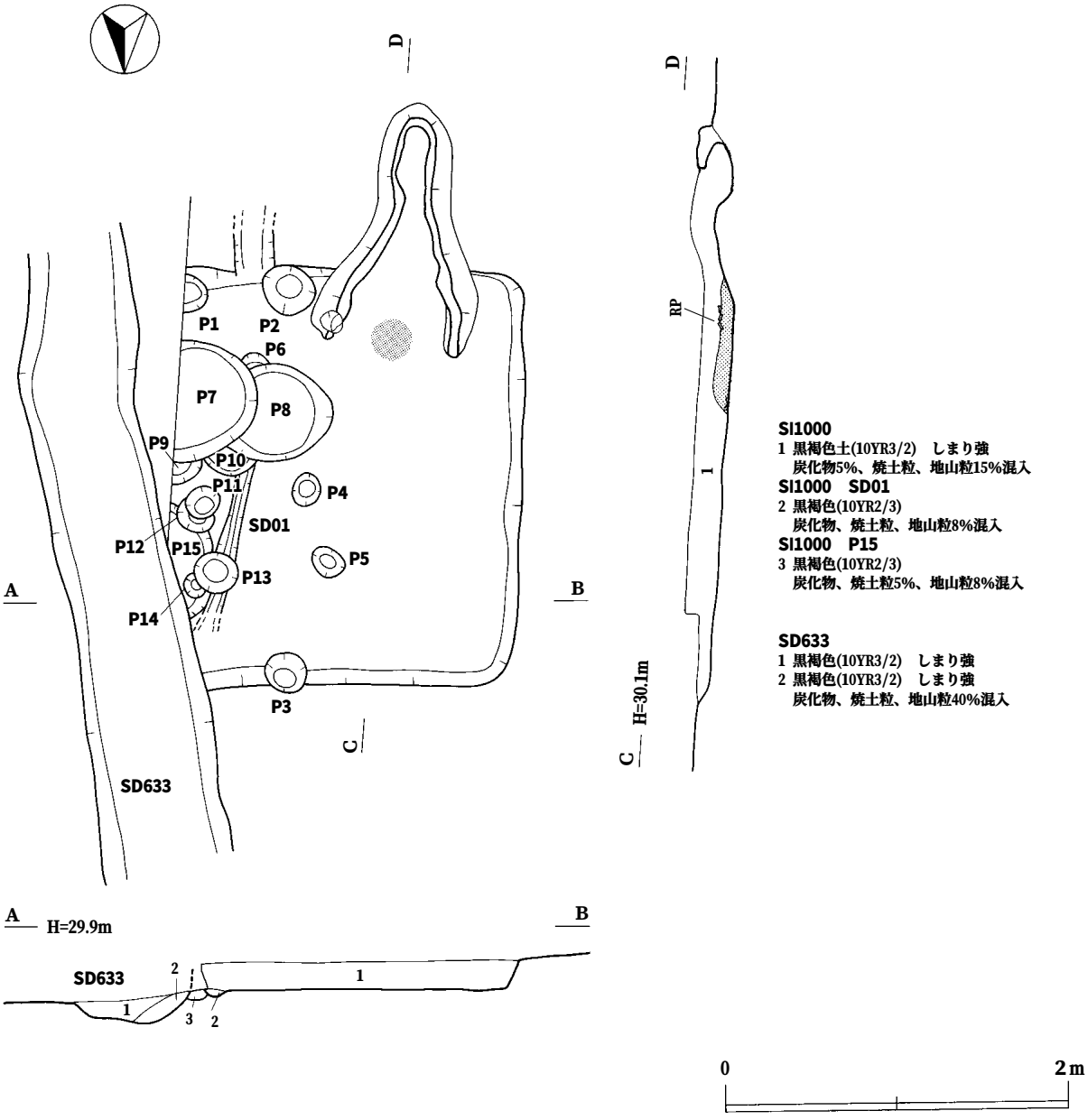
柱穴：壁沿いに７基、床面から８基の計15基のピットを検出した。P7を除く、壁沿いの６基が上屋構造を支える主要な柱穴であったと考えられる。

出土遺物：土師器の破片が出土した。この内、土師器坏(48－79)を図化した。また、カマドより採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,140年±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

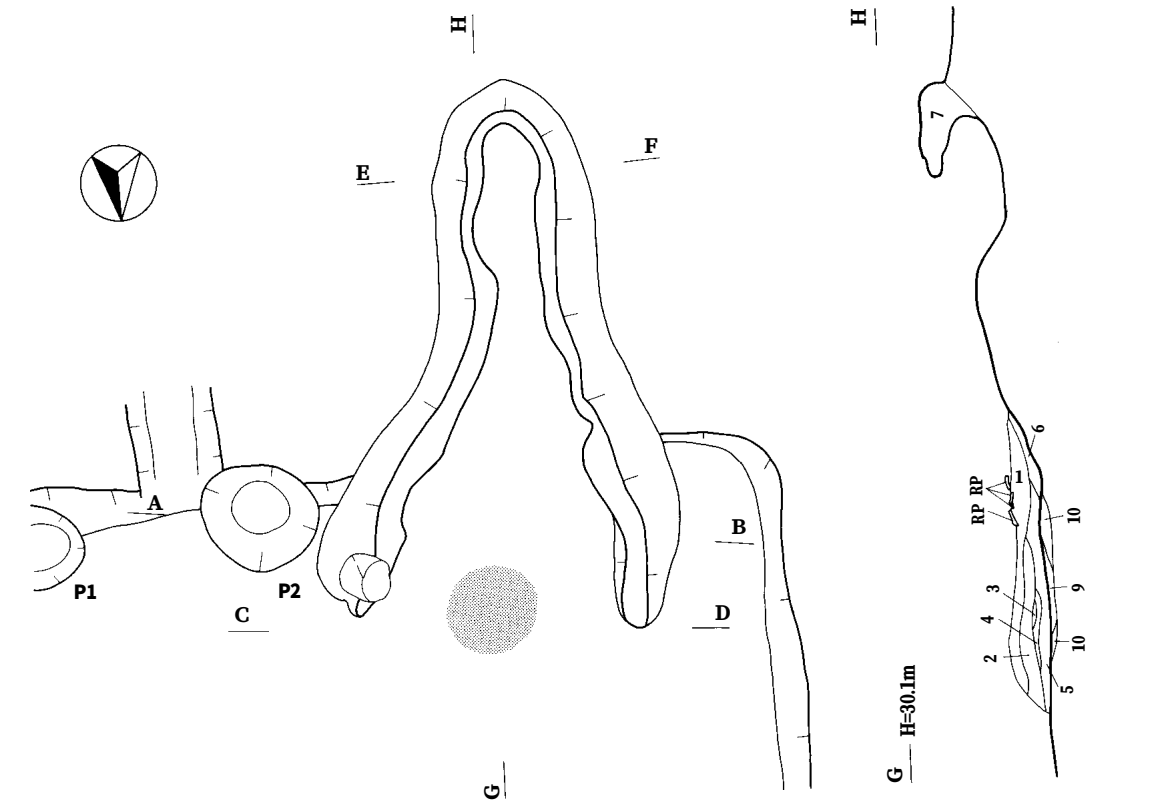
ＳＩ1000（第38･39･40図、図版5･11）

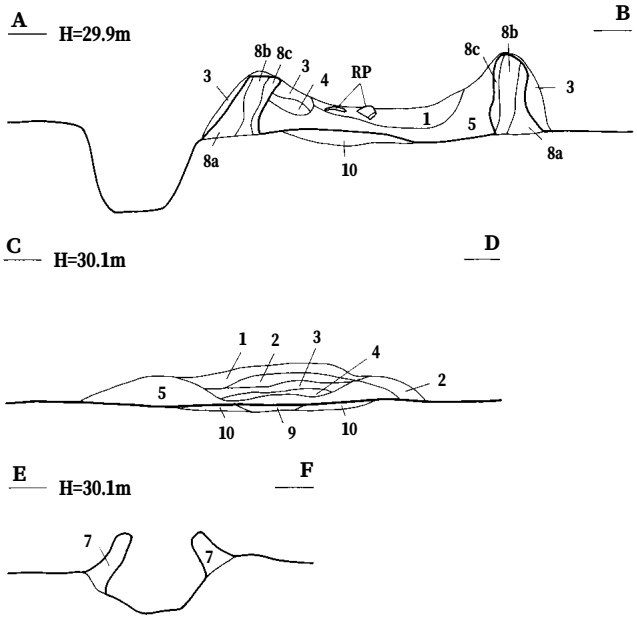
位置：ＬＲ46･47、ＬＳ46･47グリッドに位置する。

確認：トレンチで北西隅が確認できたためⅣ層上面を精査したところ、ＳＤ633に切られる方形のプランを確認した。



第38図　ＳＩ１０００竪穴住居跡（１）





SI1000カマド

1　褐色土(10YR4/4)　しまり強
　黒褐色土(10YR3/2)混入
2　赤褐色土(5YR4/6)　しまり強
　炭化物、焼土粒、地山粒混入
　明黄褐色土(10YR6/6)10%混入
3　赤褐色土(5YR4/8)　しまり強
　炭化物、明黄褐色土(10YR6/6)混入
4　赤褐色土(5YR4/8)しまり強　炭化物3%
　黒褐色土(10YR2/3)20%混入
5　極暗褐色土(7.5YR2/3)
　炭化物、焼土粒混入
　明黄褐色土(10YR6/6)8%混入
6　暗褐色土(7.5YR3/3)　粘性弱
　明黄褐色土(10YR6/6)10%混入
7　赤褐色土(5YR4/6)　しまり強　カマド煙道残存部
8a 褐色土(10YR4/4)　カマド袖残存部
　明黄褐色土(10YR6/6)10%混入
8b 明赤褐色土(5YR5/6)　しまり強
　褐色土(10YR4/4)10%混入
8c 暗褐色土(7.5YR3/4)　しまり強
9　赤褐色土(5YR4/8)　しまり強　粘性弱　火床
10　暗赤褐色土(5YR3/6)　しまり強　粘性弱　被熱層

第39図　ＳＩ１０００竪穴住居跡（２）

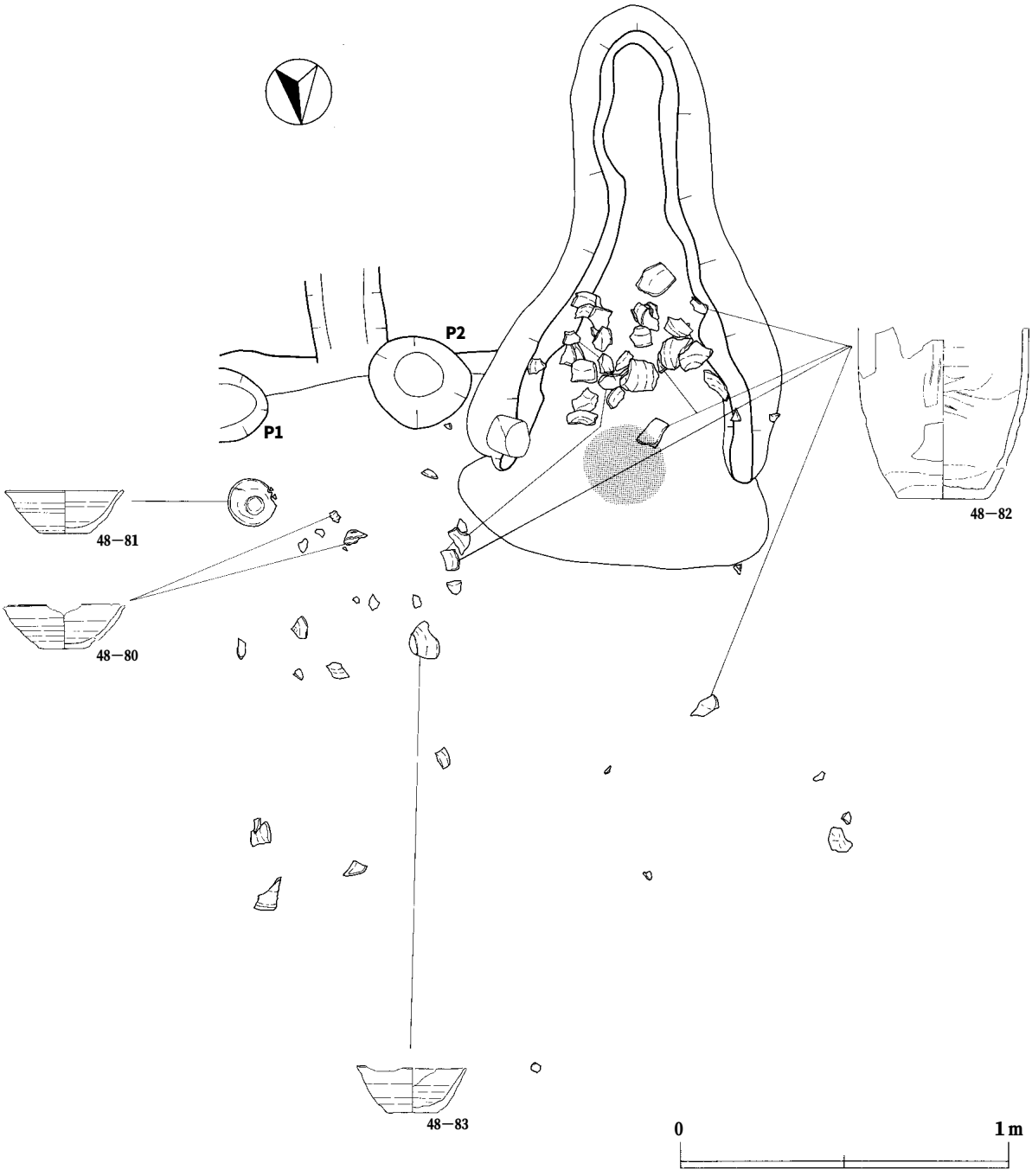
重複：ＳＤ633に切られている。

規模と平面形：確認調査のトレンチによって東側が切られているが、既に、ＳＤ633の構築によって東壁は失われていたと推定される。本来の平面形は、一辺2.5mほどの隅丸方形であったと思われる。西壁の長さは2.42m、南壁の残存長は約２m、北壁の残存長は約1.8mである。主軸の方位はＮ－3°－Ｅである。

埋土：地山土が混入する黒褐色土の単一層である。

壁：現状では、床面から確認面まで15～18cmの高さが残存し、床面より急に立ち上がる。

壁溝：なし。



第40図　ＳＩ１０００竪穴住居跡（３）

床面：平坦で堅く締められている。床面の東側から、ピット15基と、幅約10cm、深さ５cm前後の溝(ＳＤ01)が検出された。

カマド：南壁の西側に構築されていた。遺存状況は比較的良好で、煙道部、両袖部、燃焼部が確認された。袖部には自然石を芯材として使用し、粘土を貼り付けていた。埋土は10層に分層できた。第９層上面が火床で、第8a～c層がカマドの袖部である。両袖は燃焼部からほぼ垂直に立ち上がり、内側が火熱により堅く焼き締まっていた(第8c層)。煙道は、南壁際から0.92m掘り込まれており、底面は煙出孔に向かって緩やかに上り傾斜する。煙道の天井は崩落していたが、両壁の残存状況は良好で、両壁の内面は赤化していた。

柱穴：南壁と北壁のほぼ中央に位置すると考えられるP2とP3が、上屋構造を支える主要な柱穴と推定される。床面中央北寄りのP4･5なども上屋を支えていた可能性がある。

出土遺物：カマド周辺から土師器の坏・甕の破片が61点出土した。この内、土師器坏3個体(48－80･81･83)と土師器甕1個体(48－82)を図化した。また、床面から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,170年±40年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

第３表　竪穴住居跡ピット計測表（１）

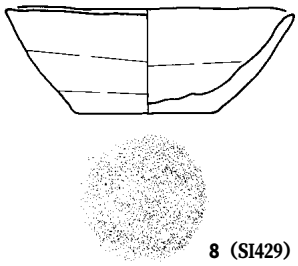
N0. Pit番号	地　区	規模（cm）			底面標高（m）	埋　土
		長軸	短軸	深さ		
SI429						
Ｐ１	MC46	24	16	54	29.39	黒褐色土
Ｐ２	MC47	22	22	60	29.33	黒褐色土
Ｐ３	MD47	20	16	48	29.47	黒褐色土
Ｐ４	MC47	16	14	18	29.43	黒褐色土
Ｐ５	MC47	20	12	40	29.50	黒褐色土
Ｐ６	MC47	20	12	75	28.91	黒褐色土
Ｐ７	MC47	14	14	51	29.44	黒褐色土
Ｐ８	MC47	32	30	23	29.37	黒褐色土
Ｐ９	MC47	52	40	38	29.27	黒褐色土
SI430						
Ｐ１	MD47	34	20	76	29.46	黒褐色土
Ｐ２	MD47	33	30	58	29.37	暗褐色土
Ｐ３	MD･ME47	84	74	42	29.57	暗褐色土
Ｐ４	MD47	20	18	11	29.64	不明
Ｐ５	MD47	38	30	5	29.73	不明
Ｐ６	MD47	40	34	48	29.28	黒褐色土
Ｐ７	MD47	20	16	72	29.22	暗褐色土
Ｐ８	ME47	50	42	17	29.80	黒褐色土
Ｐ９	MD48	45	45	10	29.74	暗褐色土
SI437						
Ｐ１	MJ46	32	30	52	28.84	黒褐色土
Ｐ２	MJ46	44	26	52	28.89	黒褐色土
Ｐ３	MJ47	40	40	61	28.77	黒褐色土
Ｐ４	MI47	38	30	53	28.87	黒褐色土
Ｐ５	MI47	46	42	60	28.78	図参照
Ｐ６	MI･MJ46	64	58	28	29.12	図参照
SI438						
Ｐ１	LL58	20	20	17	30.44	黒褐色土
Ｐ２	LL58	66	44	15	30.15	黒褐色土
Ｐ３	LL58	19	15	22	30.41	黒褐色土
Ｐ４	LM58	23	17	22	30.40	黒褐色土

N0. Pit番号	地　区	規模（cm）			底面標高（m）	埋　土
		長軸	短軸	深さ		
SI438						
Ｐ５	LL58	32	29	5	30.26	黒褐色土
Ｐ６	LL58	31	22	12	30.14	黒褐色土
Ｐ７	LL58	23	18	5	30.27	黒褐色土
Ｐ８	LL58	32	29	23	30.08	黒褐色土
Ｐ９	LL58	37	30	16	30.19	黒褐色土
P10	LL58	37	30	14	30.16	黒褐色土
P11	LL58･59	48	29	7	30.21	黒褐色土
P12	LM59	46	45	5	30.22	黒褐色土
SI440						
Ｐ１	MK45	22	16	24	28.98	褐色土
Ｐ２	ML45	24	24	50	28.86	褐色土
Ｐ３	ML46	26	26	48	28.81	褐色土
Ｐ４	MK46	28	20	43	28.94	褐色土
Ｐ５	MK45	24	20	35	28.87	褐色土
Ｐ６	MK45	18	16	23	28.96	褐色土
Ｐ７	MK45	16	16	7	29.14	褐色土
Ｐ８	MK45	48	40	17	29.05	褐色土
Ｐ９	MK45	12	9	13	29.09	褐色土
SI446						
Ｐ１	MT44	44	38	57	28.22	黒褐色土
Ｐ２	MS43	34	30	38	28.38	黒褐色土
Ｐ３	MS43	36	34	41	28.35	黒褐色土
Ｐ４	MS43	34	34	47	28.29	黒褐色土
Ｐ５	MS42･43 MT42･43	40	34	13	28.72	黒褐色土
Ｐ６	MT42･43	40	34	68	28.19	黒褐色土
Ｐ７	MT43	38	32	55	28.15	黒褐色土
Ｐ８	MT43	48	40	48	28.22	黒褐色土
SI450						
Ｐ１	LK57	18	18	7	30.59	黒褐色土
Ｐ２	LK57	30	22	6	30.54	黒褐色土

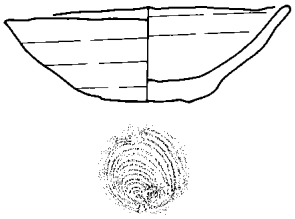
第４表　竪穴住居跡ピット計測表（２）

N0. Pit番号	地　区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	底面標高（m）	埋　土
SI450						
P 3	LK57	22	20	12	30.43	黒褐色土
P 4	LL58	27	23	5	30.55	黒褐色土
P 5	LL58	23	23	5	30.54	黒褐色土
P 6	LK58	19	18	6	30.52	黒褐色土
P 7	LK58	17	17	19	30.45	黒褐色土
P 8	LK58	25	25	12	30.51	黒褐色土
SI516						
P 1	MR42	32	24	11	28.28	黒褐色土
P 2	MR41･42	40	36	16	28.19	黒褐色土
SI718						
P 1	LT･MA48	40	26	38	29.60	黒褐色土
P 2	MA48	35	35	26	29.64	黒褐色土
P 3	MB48	23	22	16	29.71	暗褐色土
P 4	MB48	20	20	8	29.84	黒褐色土
P 5	MB48	20	18	8	29.79	暗褐色土
P 6	MB49	32	24	24	29.70	黒褐色土
P 7	MB49	20	20	15	29.81	黒褐色土
P 8	MA49	31	20	34	29.65	黒褐色土
P 9	MA49	28	17	24	29.76	黒褐色土
P10	MA49	24	22	21	29.78	黒褐色土
P11	MA49	27	21	39	29.63	黒褐色土
P12	MA48	35	28	11	29.76	暗褐色土
P13	MA48	65	29	8	29.84	黒褐色土
P14	MA48	19	18	13	29.78	黒褐色土
P15	MA48	15	13	9	29.84	黒褐色土
P16	MA48･49	27	22	33	29.62	黒褐色土
P17	MA48･49	77	57	26	29.69	黒褐色土他
P18	MA49	22	17	15	29.77	黒褐色土
P19	MB48･49	54	40	10	29.81	暗褐色土
P20	MB49	20	18	10	29.60	暗褐色土
P21	MA･MB48	156	90	22	29.67	不明
SI719						
P22	MA47	19	18	16	29.76	黒褐色土
P23	MA47	23	16	17	29.79	暗褐色土
P24	MB47	27	17	22	29.63	暗褐色土
P25	MB47	25	16	12	29.72	黒褐色土
P26	MB48	29	20	15	29.75	暗褐色土
P27	MA48	32	31	12	29.75	暗褐色土
P28	MA48	25	23	21	29.69	黒褐色土
P29	MA48	30	18	22	29.70	黒褐色土
P30	MA48	22	20	19	29.73	暗褐色土
P31	MA48	16	13	6	29.85	暗褐色土
P32	MA48	20	19	16	29.75	黒褐色土
P33	MA47	18	17	14	29.79	黒褐色土
P34	MA47	13	12	10	29.83	黒褐色土
P35	MA47	36	21	19	29.74	黒褐色土
P36	MA47･48 MB47･48	143	140	21	29.75	黒褐色土
SI896						
P 1	LH54	30	17	13	30.28	暗褐色土
P 2	LH54	46	30	11	30.35	暗褐色土
P 3	LH54	－	－	17	30.27	黒褐色土
P 4	LH54	16	13	11	30.34	暗褐色土
P 5	LH54	18	16	12	30.30	褐色土

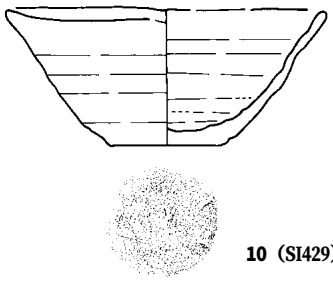
N0. Pit番号	地　区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	底面標高（m）	埋　土
SI897						
P 1	MD42	30	26	25	29.41	黒褐色土
P 2	ME41	26	20	49	28.99	図参照
P 3	ME42	27	20	21	29.28	図参照
P 4	ME42	34	28	29	29.18	図参照
P 5	ME42	33	29	25	29.39	黒褐色土
P 6	MD42	32	28	21	29.45	黒褐色土
P 7	MD42	25	22	2	29.70	黒褐色土
P 8	MD42	14	13	3	29.63	褐色土
P 9	ME42	38	37	19	29.25	褐色土
P10	ME42	27	26	14	29.27	褐色土
P11	MD42	44	42	21	29.46	図参照
P12	ME42	32	25	32	29.12	図参照
P13	MD41･42	43	42	30	29.42	黒褐色土
P14	ME41	38	35	29	29.18	図参照
P15	MD41	23	22	45	29.29	黒褐色土
SI900						
P 1	MH43	24	22	27	29.29	黒褐色土
P 2	MI42	21	18	16	29.31	黒褐色土
P 3	MH43･44	31	21	15	29.49	黒褐色土
P 4	MH44	11	11	13	29.51	黒褐色土
P 5	MH44	18	16	9	29.54	黒褐色土
P 6	MH43	39	33	8	29.47	黒褐色土
P 7	MH42	18	15	18	29.45	暗褐色土
P 8	MH43	83	68	26	29.39	褐色土
P 9	MI42･43	68	67	22	29.25	図参照
P10	MI43	62	45	11	29.37	黒褐色土
P11	MI43	52	47	20	29.41	黒褐色土
P12	MI43	128	114	21	29.29	図参照
P13	MI43	45	42	42	29.08	黒褐色土
P14	MH43	42	38	14	29.45	黒褐色土
P15	MI43	37	34	12	29.45	黒褐色土
SI1000						
P 1	LR46	－	－	1	29.65	黒褐色土
P 2	LR46	31	26	25	29.51	黒褐色土
P 3	LR47	24	22	32	29.41	黒褐色土
P 4	LR47	18	15	5	29.65	黒褐色土
P 5	LR47	20	14	5	29.67	黒褐色土
P 6	LR46	－	－	11	29.62	黒褐色土
P 7	LR46	－	－	11	29.64	黒褐色土
P 8	LR46	66	56	8	29.63	黒褐色土
P 9	LR47	－	－	7	29.65	図参照
P10	LR46･47	－	－	5	29.65	黒褐色土
P11	LR47	18	16	4	29.68	黒褐色土
P12	LR47	22	17	4	29.68	黒褐色土
P13	LR47	25	23	12	29.61	黒褐色土
P14	LR47	14	13	13	29.60	黒褐色土
P15	LR47	－	－	5	29.68	黒褐色土



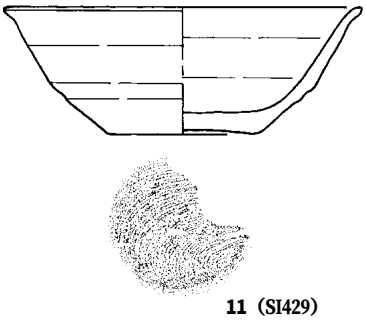
8（SI429）



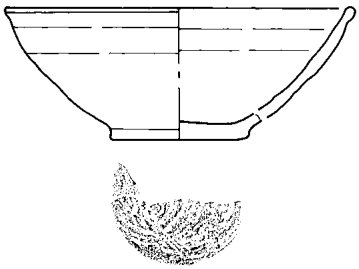
9（SI429）



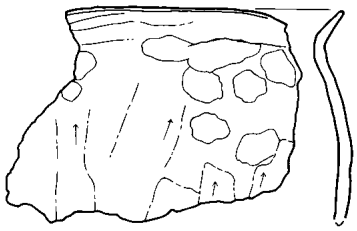
10（SI429）



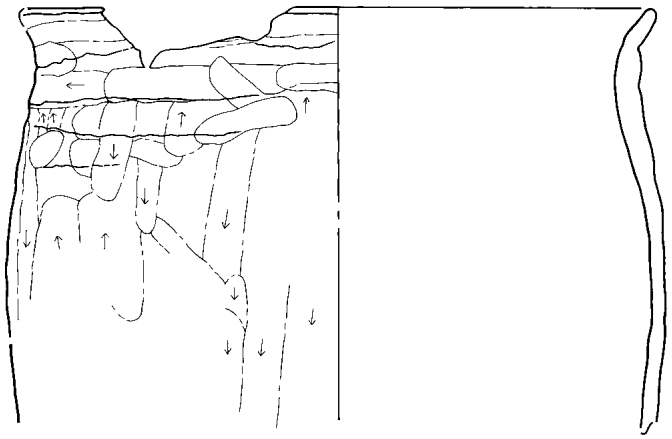
11（SI429）



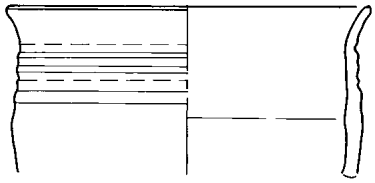
12（SI429）



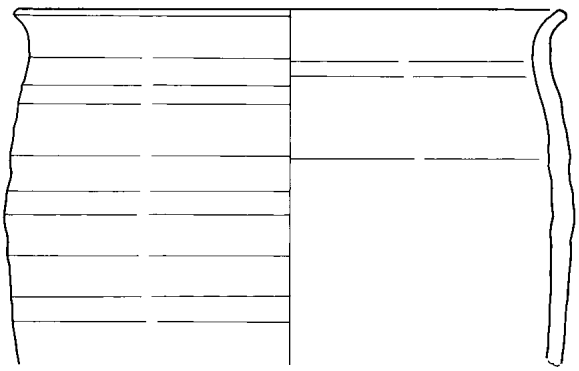
13（SI429）



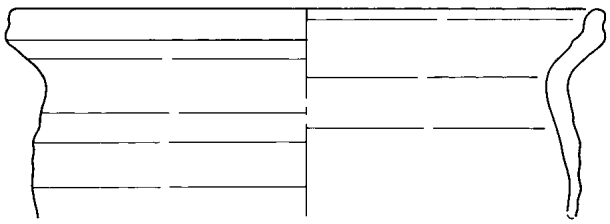
14（SI429）



15（SI429）



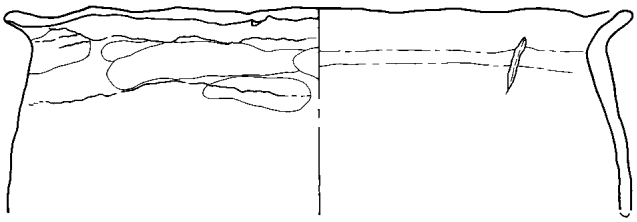
16（SI429）

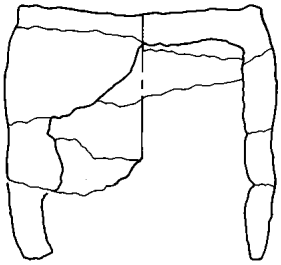


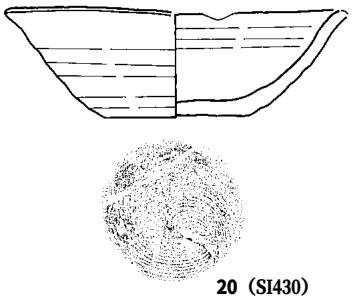
17（SI429）

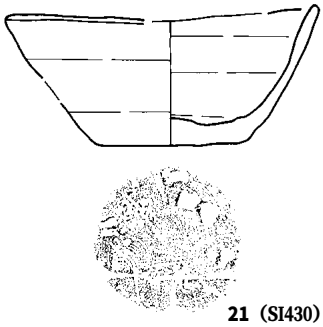
0　10cm

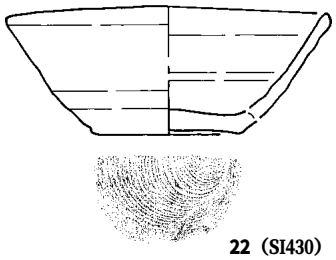
第41図　竪穴住居跡出土遺物（１）

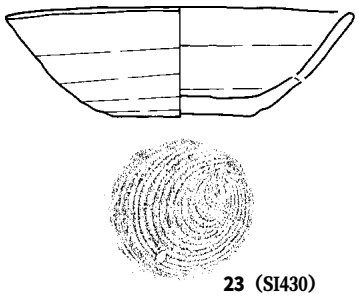

18（SI429）

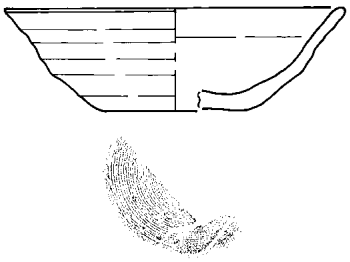

19（SI429）

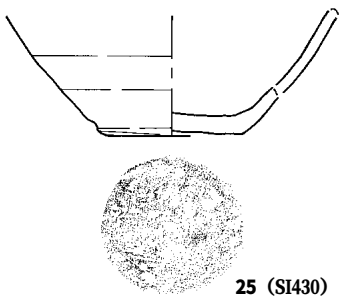

20（SI430）

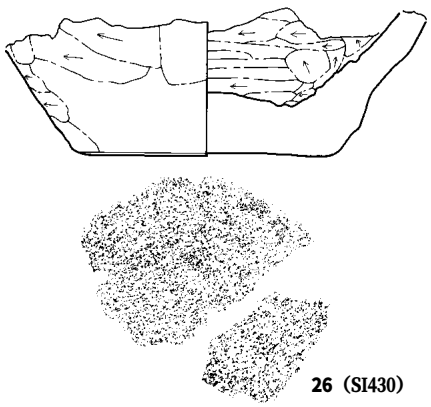

21（SI430）

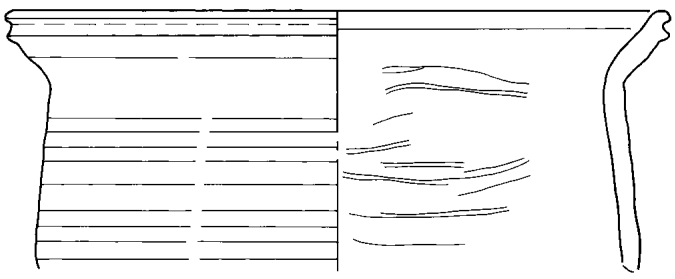

22（SI430）


23（SI430）


24（SI430）

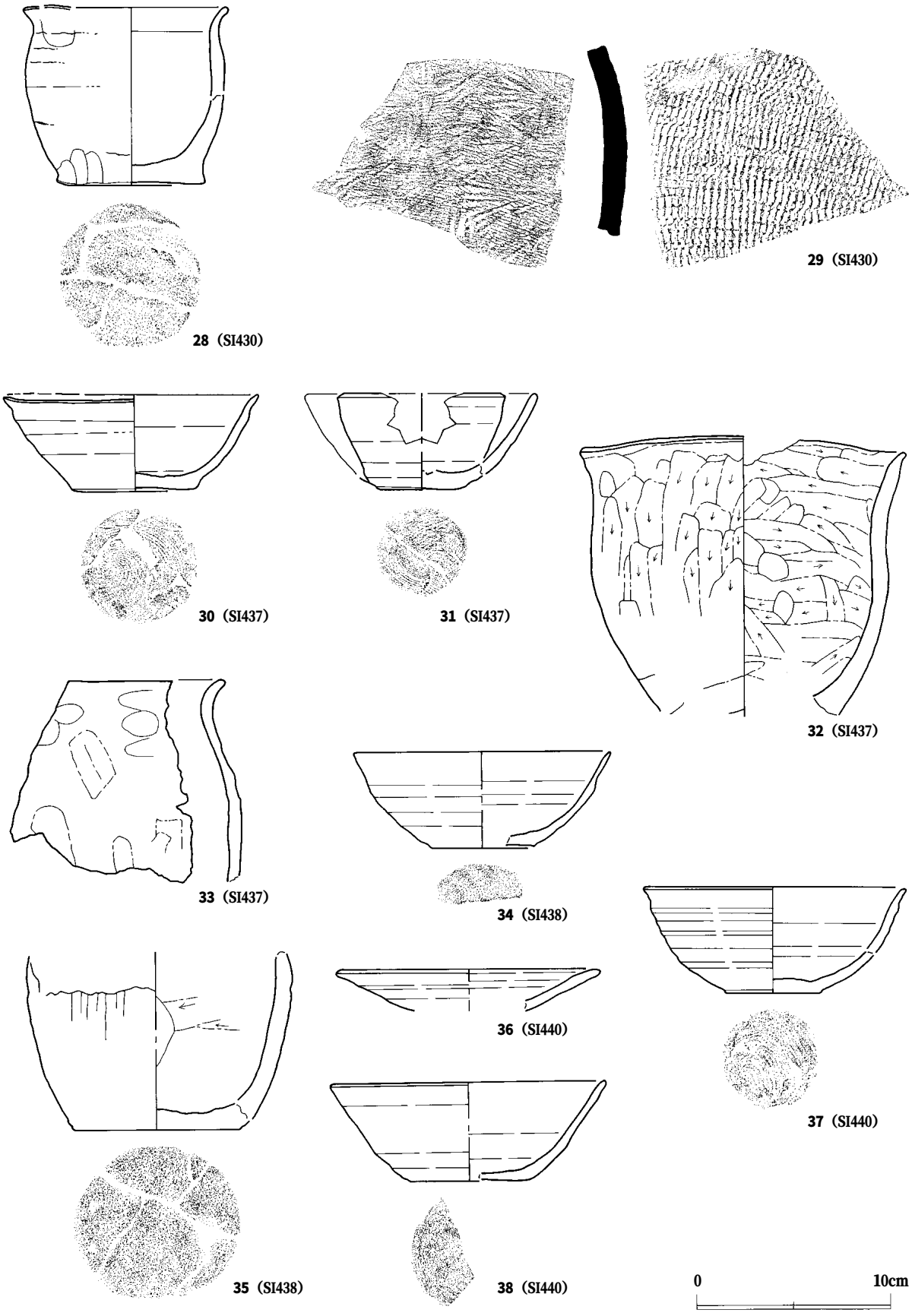

25（SI430）


26（SI430）

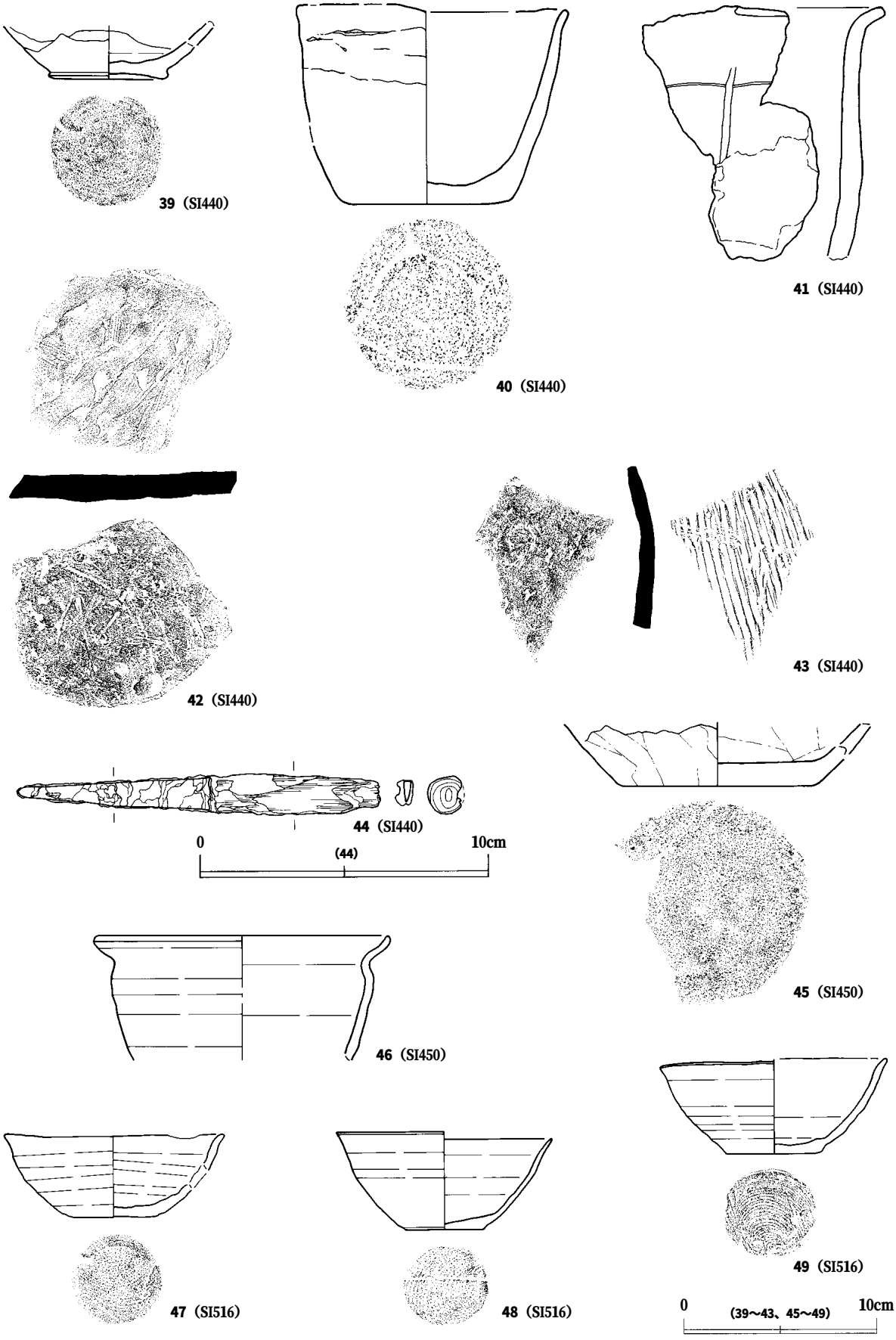

27（SI430）

0　10cm

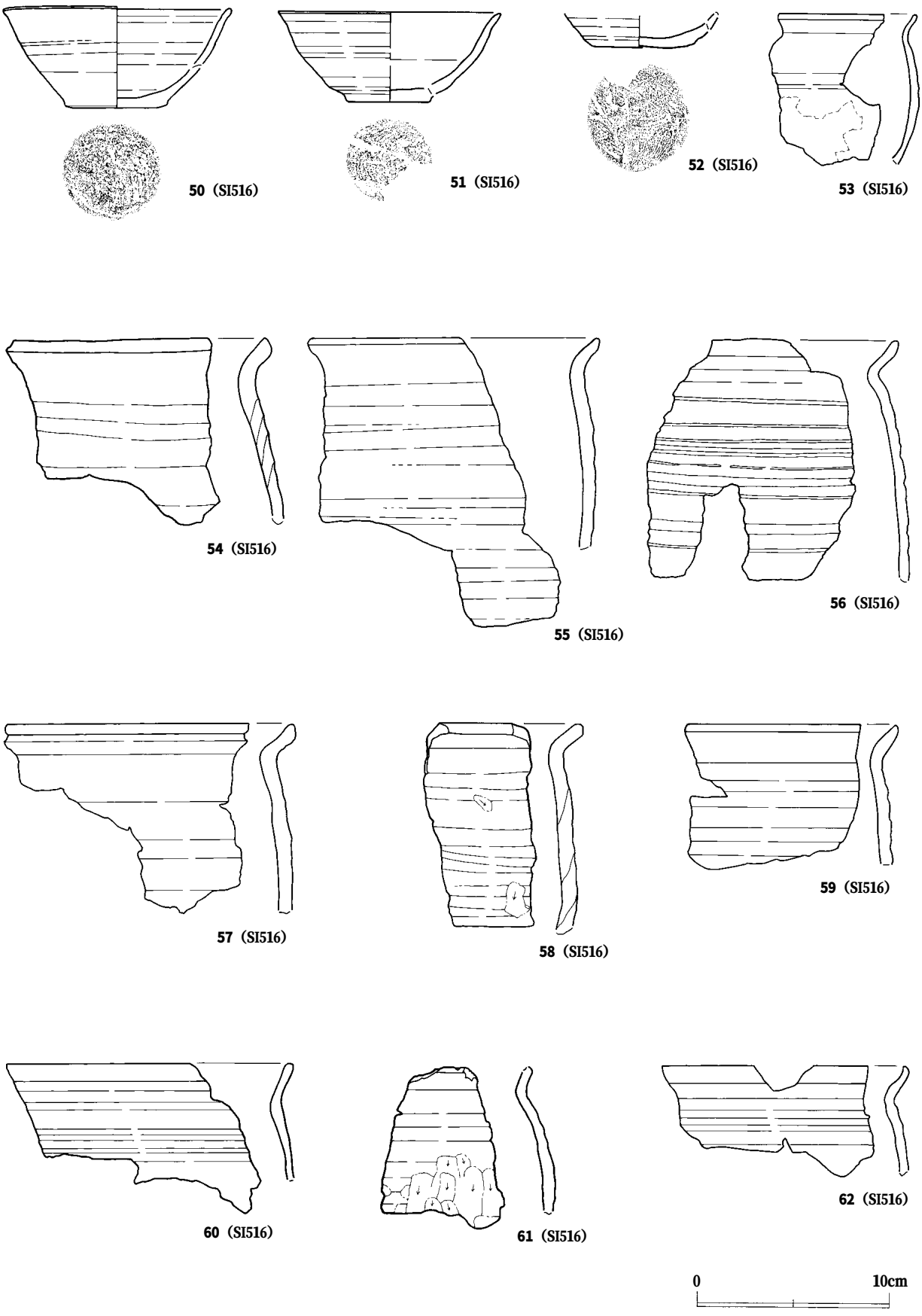
第42図　竪穴住居跡出土遺物（２）



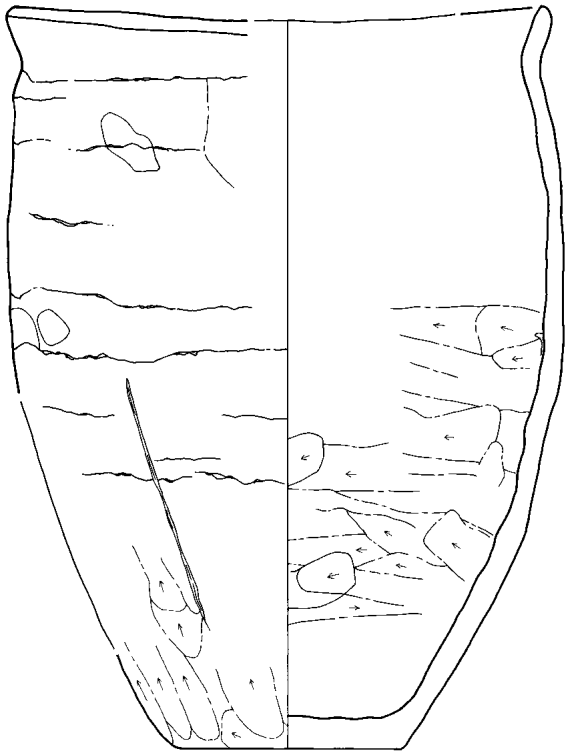
第43図　竪穴住居跡出土遺物（３）



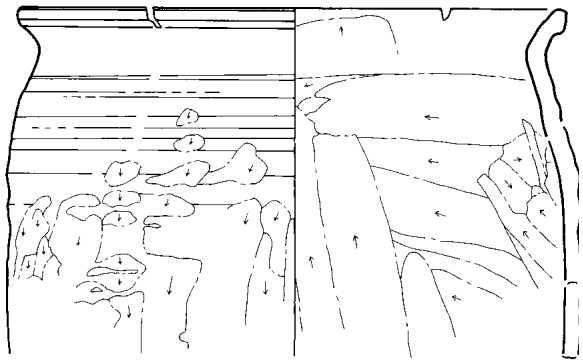
第44図　竪穴住居跡出土遺物（４）



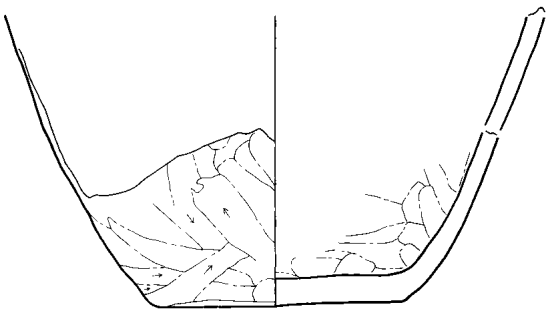
第45図　竪穴住居跡出土遺物（５）

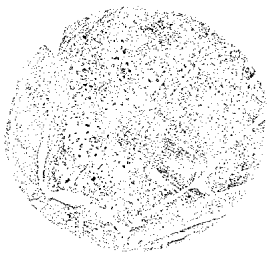


63（SI516）

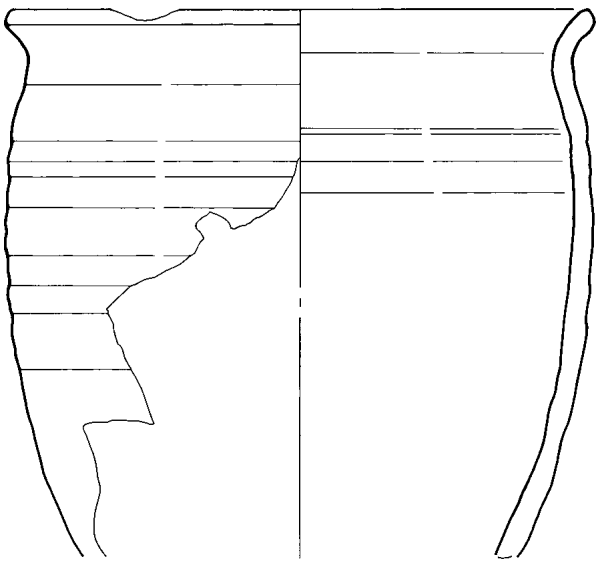


64（SI516）

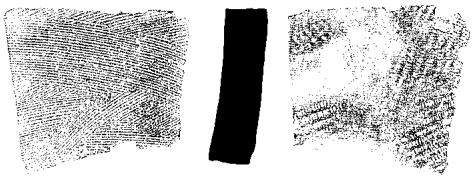




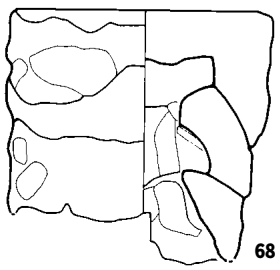
65（SI516）



66（SI516）

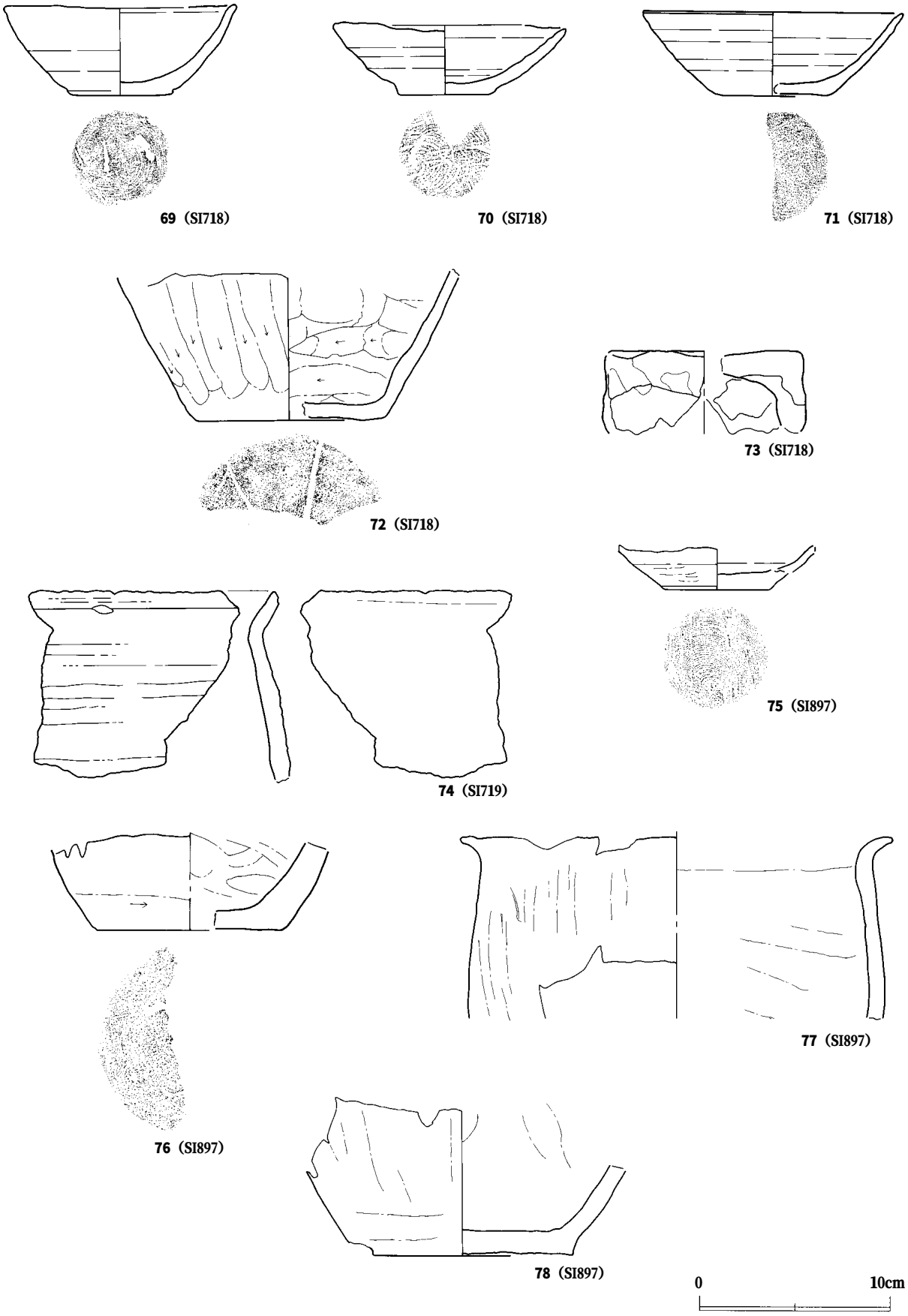


67（SI516）

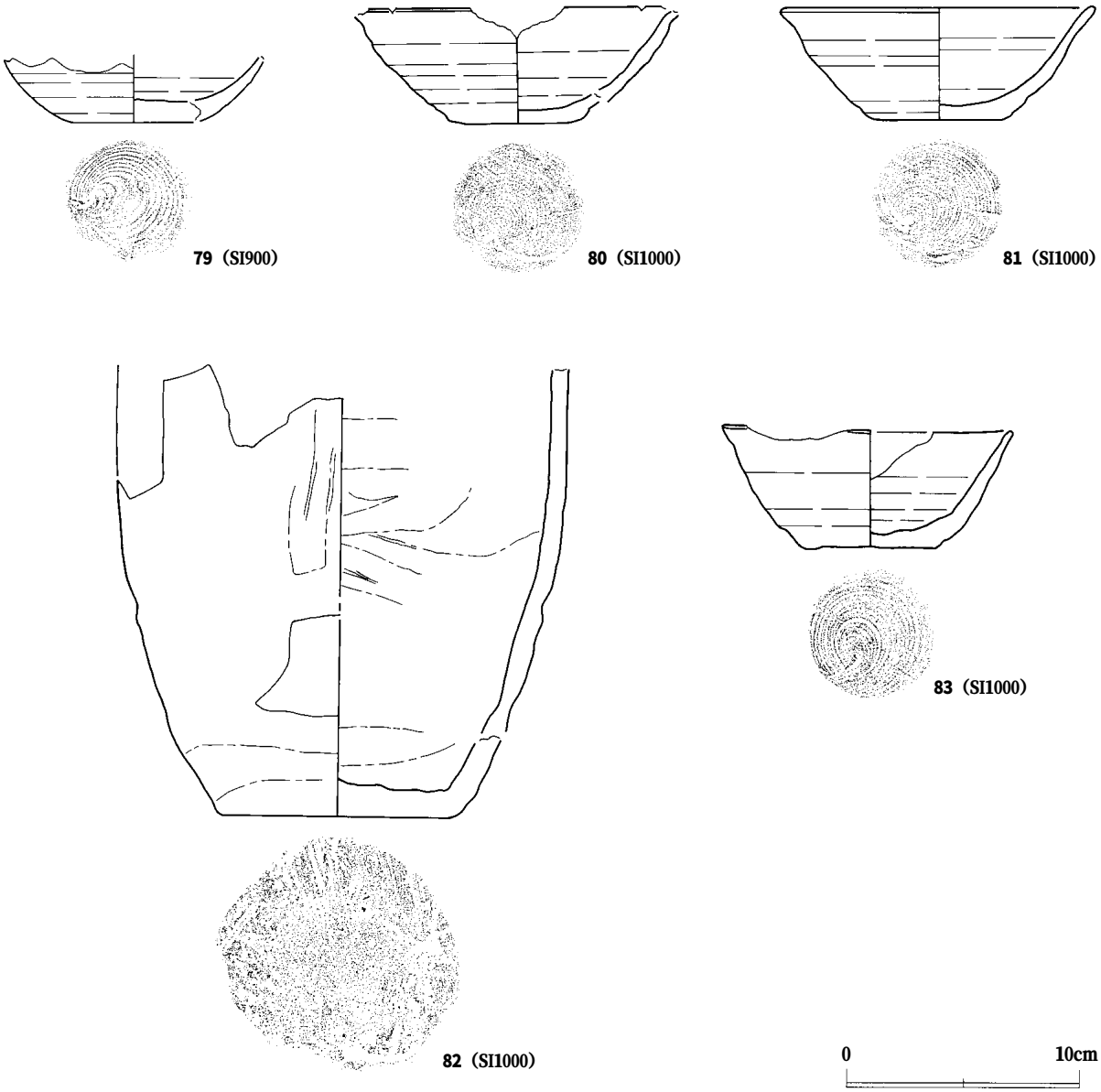


68（SI516）

第46図　竪穴住居跡出土遺物（６）



第47図　竪穴住居跡出土遺物（７）



第48図　竪穴住居跡出土遺物（８）

第５表　竪穴住居跡出土遺物観察表（１）

挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備　　考
41-8	SI429	土師器	坏	完形	11.3	5.2	4.1	回転糸切	内外面ロクロナデ	口縁部内外面に煤状炭化物付着
41-9	SI429	土師器	坏	口縁～底部	11.1	3.4	3.8	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面に黒斑
41-10	SI429	土師器	坏	口縁～底部	12.6	4.6	5.6	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面に黒斑及び口縁部内外面に煤状炭化物付着
41-11	SI429	土師器	坏	口縁～底部	14.0	5.7	5.0	回転糸切	内外面ロクロナデ	内面黒色処理(ミガキ痕不明)
41-12	SI429	土師器	坏	口縁～底部	13.6	5.2	5.2	回転糸切	内外面ロクロナデ	内黒
41-13	SI429	土師器	甕	口縁部	(12.6)	―	―		内面ナデ、外面指頭オサエ、ケズリ	内外面に黒斑、輪積痕
41-14	SI429	土師器	甕	口縁～体部	24.8	―	―		ナデ、ケズリ	内外面に黒斑、外面輪積痕
41-15	SI429	土師器	甕	口縁～体部	14.2	―	―		内外面ロクロナデ	口縁部外面に3条の沈線外面に煤状炭化物付着
41-16	SI429	土師器	甕	口縁～体部	21.7	―	―		内外面ロクロナデ	

第６表　竪穴住居跡出土遺物観察表（２）

挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備　　考
41-17	SI429	土師器	甕	口縁部	22.9	―	―		外面ロクロナデ	
42-18	SI429	土師器	甕	口縁部	24.5	―	―		内面ナデ、外面指頭オサエ、ナデ	輪積痕
42-19	SI429	土製品	支脚	天井～下端	天井径 9.5cm	下端径 9.3cm	器高 10.0cm	天井上面に砂付着	輪積痕、内外面指頭オサエ、ナデ	体部下半に逆U字状の切り込み
42-20	SI430	土師器	坏	口縁～底部	13.3	5.6	4.4	回転糸切	内外面ロクロナデ	
42-21	SI430	土師器	坏	口縁～底部	13.0	5.8	5.5	回転糸切	内外面ロクロナデ	
42-22	SI430	土師器	坏	口縁～底部	12.6	5.8	5.0	回転糸切	内外面ロクロナデ	
42-23	SI430	土師器	坏	口縁～底部	13.6	5.4	4.4	回転糸切	内外面ロクロナデ	外底部に籾痕
42-24	SI430	土師器	坏	口縁～底部	13.3	5.4	4.1	回転糸切	内外面ロクロナデ	
42-25	SI430	土師器	坏	体部～底部	―	5.6	―	回転糸切	内面摩滅、外面ロクロナデ	
42-26	SI430	土師器	甕	底部	―	10.2	―	砂底	内面ナデ、外面ケズリ	
42-27	SI430	土師器	甕	口縁部	26.0	―	―			
43-28	SI430	土師器	甕	口縁～底部	10.5	7.4	9.3	砂底	内面摩滅、指頭オサエ	外面輪積痕
43-29	SI430	須恵器	甕	体部	―	―	―		内面アテ目、外面タタキ目	転用硯、内面に墨付着
43-30	SI437	土師器	坏	口縁～底部	13.1	6.4	5.0	回転糸切	内外面ロクロナデ	
43-31	SI437	土師器	坏	口縁～底部	10.0	4.6	5.0	回転糸切	内外面ロクロナデ	
43-32	SI437	土師器	甕	口縁～体部	16.7	―	―		内面ナデ、外面ケズリ	外面に黒斑、支脚転用
43-33	SI437	土師器	甕	口縁～体部	―	―	―		内面ナデ、外面体部上半指頭によるオサエ、外面ケズリ	
43-34	SI438	土師器	坏	口縁～底部	13.2	5.4	4.9	回転糸切	内外面ロクロナデ	
43-35	SI438	土師器	甕	体部～底部	―	8.6	―	砂底	内面ナデ、外面ケズリ	
43-36	SI440	土師器	皿	口縁～体部	13.6	―	―		内外面ロクロナデ	内黒
43-37	SI440	土師器	坏	口縁～底部	13.5	5.5	5.0	回転糸切	内外面ロクロナデ	外部に黒斑
43-38	SI440	土師器	坏	口縁～底部	16.2	5.1	6.0	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面に煤状炭化物
44-39	SI440	土師器	坏	体部～底部	―	6.1	―	回転糸切	内外面ロクロナデ	
44-40	SI440	土師器	甕	口縁～底部	14.1	8.5	10.4	砂底	内外面摩滅	輪積痕
44-41	SI440	土師器	甕	口縁～体部	―	―	―		内面ナデ	
44-42	SI440	須恵器	甕	底部	―	―	―		内底面ナデ	
44-43	SI440	須恵器	甕	体部	―	―	―		内面アテ目、外面タタキ目	
44-44	SI440	鉄製品	刀子	完形	刃部長 6.6cm	柄部長 5.9cm	最大幅 1.5cm	重量 14.9g		柄部分に木質部残存
44-45	SI450	土師器	甕	体部下端～底部	―	10.4	―	砂底	内面ナデ、外面ケズリ	
44-46	SI450	土師器	甕	口縁～体部	15.2	―	―		内外面ロクロナデ	外面、口縁上部内面に煤状炭化物付着
44-47	SI516	土師器	坏	口縁～底部	11.3	4.6	4.4	回転糸切	内外面ロクロナデ	
44-48	SI516	土師器	坏	口縁～底部	11.2	4.2	5.1	回転糸切	内外面ロクロナデ	
44-49	SI516	土師器	坏	口縁～底部	11.8	5.0	5.0	回転糸切	内外面ロクロナデ	
45-50	SI516	土師器	坏	口縁～底部	12.0	5.4	5.3	回転糸切	内外面ロクロナデ	
45-51	SI516	土師器	坏	口縁～底部	11.6	4.7	4.4	回転糸切	内外面ロクロナデ	
45-52	SI516	土師器	坏	体部～底部	―	3.2	―	回転糸切	内面ナデ、外面ロクロナデ	糸切り痕に乱れ
45-53	SI516	土師器	甕	口縁～体部	(9.7)	―	―		内外面ロクロナデ	内面口縁上部、外面に煤状炭化物付着
45-54	SI516	土師器	甕	口縁～体部	(22.2)	―	―		内外面ロクロナデ	
45-55	SI516	土師器	甕	口縁～体部	―	―	―		内外面ロクロナデ	

第７表　竪穴住居跡出土遺物観察表（３）

挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備　　考
45-56	SI516	土師器	甕	口縁～体部	―	―	―		内外面ロクロナデ	
45-57	SI516	土師器	甕	口縁～体部	(23.2)	―	―		内外面ロクロナデ	
45-58	SI516	土師器	甕	口縁～体部	―	―	―		内外面ロクロナデ	
45-59	SI516	土師器	甕	口縁～体部	(21.2)	―	―		内外面ロクロナデ	
45-60	SI516	土師器	甕	口縁～体部	(21.1)	―	―		内外面ロクロナデ	
45-61	SI516	土師器	甕	口縁～体部	―	―	―		内外面ロクロナデ、内面ナデ、外面ケズリ	
45-62	SI516	土師器	甕	口縁～体部	(22.4)	―	―		内外面ロクロナデ	
46-63	SI516	土師器	甕	口縁～底部	21.3	9.0	29.3	調整？	内面ﾅﾃﾞ、口縁外縁～体部指頭ｵｻｴ･ﾅﾃﾞ、体部～底部ｹｽﾞﾘ	
46-64	SI516	土師器	甕	口縁～体部	21.4	―	―		内外面ロクロナデ→内面ナデ、外面ケズリ	65と同一個体　　内外面に黒斑
46-65	SI516	土師器	甕	体部～底部	―	9.8	―	調整？	内面ナデ、外面ケズリ	64と同一個体　　内外面に黒斑
46-66	SI516	土師器	甕	口縁～体部	22.6	―	―		内外面ロクロナデ、外面ケズリ	
46-67	SI516	須恵器	甕	体部	―	―	―		内面カキ目、外面タタキ目摩滅	
46-68	SI516	土製品	支脚	天井～体部	天井径10.2cm	―	―	天井上面に砂付着	天井外縁部指頭オサエ	体部外面灰白色　　輪積痕明瞭
47-69	SI718	土師器	坏	口縁～底部	10.1	5.4	4.8	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面に煤状炭化物付着
47-70	SI718	土師器	坏	口縁～底部	12.1	4.8	3.8	回転糸切	内外面ロクロナデ	
47-71	SI718	土師器	坏	口縁～底部	13.6	6.0	4.4	回転糸切	内外面ロクロナデ	
47-72	SI718	土師器	甕	体部～底部	―	10.0	―	ナデ	内外面ケズリ、底内面ナデ	
47-73	SI718	土製品	支脚	天井部	天井径10.4cm	―	―	天井上面に砂付着	内外面指頭オサエ	外面灰白色、輪積痕
47-74	SI719	土師器	甕	口縁～体部	(19.3)	―	―		内外面ロクロナデ	
47-75	SI897	土師器	坏	体部～底部	―	5.4	―			
47-76	SI897	土師器	甕	体部～底部	―	9.8	―			
47-77	SI897	土師器	甕	口縁部	22.6	―	―			
47-78	SI897	土師器	甕	体部～底部	―	11.6	―			支脚転用
48-79	SI900	土師器	坏	体部～底部	―	5.4	―		内外面ロクロナデ	
48-80	SI1000	土師器	坏	口縁～底部	13.8	5.8	5.0		内外面ロクロナデ	
48-81	SI1000	土師器	坏	口縁～底部	13.5	5.6	4.8		内外面ロクロナデ	
48-82	SI1000	土師器	甕	体部～底部	―	10.6	―		内外面ケズリ	
48-83	SI1000	土師器	坏	口縁～底部	12.4	5.6	5.0		内外面ロクロナデ	

2　竪穴状遺構

平面形が方形で、竪穴状に掘り込まれているが、住居跡に比べ、小規模で、カマドの付設が見られない遺構を竪穴状遺構とした。2 基確認されており、出土遺物などからいずれも平安時代の集落を構成していた遺構であると考えられる。また、カマドは確認できなかったが、壁溝とこれに沿う柱穴や四隅の柱穴が明確に確認できたＳＩ719は、竪穴住居跡に含めた。

なお、竪穴状遺構に伴う柱穴等の規模などについては「第 8 表　竪穴状遺構ピット計測表」に掲載している。

ＳＫＩ444（第49図）

位置：ＭＳ･ＭＴ42グリッドに位置する。

確認：第Ⅴ層において黒褐色土の方形の落ち込みとして確認した。

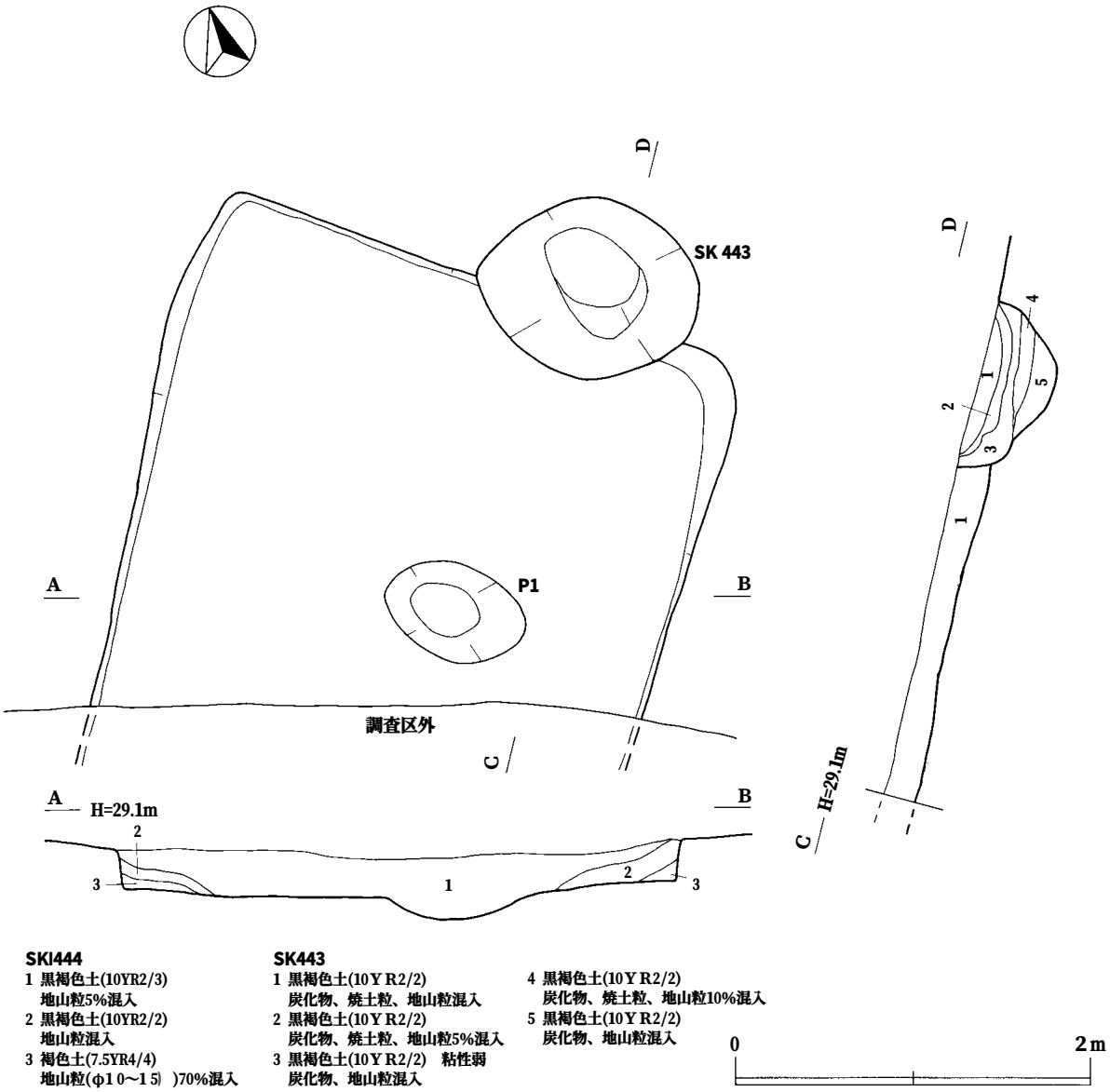
重複：ＳＫ443土坑と重複する。本遺構が古い。

規模と平面形：南西側が、調査区の境界となる現代の水田側溝によって失われており、南西壁は全く残っていない。完全に残る北東壁の長さは3.06m、部分的に残る北西壁と南東壁の残存長はそれぞれ3.06mと1.96mである。本来は一辺３mほどの隅丸方形であったものと推測される。北東壁の中軸線の方位は、Ｎ－32°－Ｅである。

埋土：3層に分層できた。自然堆積と思われる。

壁：現状では、底面から確認面まで25cmほどの高さで、底面からやや外傾して立ち上がる。北東壁東寄りでＳＫ443に切られている。

底面：ほぼ平坦で堅く締められている。底面中央南寄りに長径80cm、短径55cm、深さ20cmほどの楕



SKI444
1 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒5%混入
2 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒混入
3 褐色土(7.5YR4/4)
地山粒(φ10～15)70%混入

SK443
1 黒褐色土(10ＹＲ2/2)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
2 黒褐色土(10ＹＲ2/2)
炭化物、焼土粒、地山粒5%混入
3 黒褐色土(10ＹＲ2/2) 粘性弱
炭化物、地山粒混入
4 黒褐色土(10ＹＲ2/2)
炭化物、焼土粒、地山粒10%混入
5 黒褐色土(10ＹＲ2/2)
炭化物、地山粒混入

第49図　ＳＫＩ４４４竪穴状遺構

円形の落ち込み(P1)がある。

出土遺物：土師器が出土した。

ＳＫＩ743（第30図）

位置：ＭＡ48･49、ＭＢ48･49グリッドに位置している。

確認：方形の黒褐色土の落ち込みとして確認した。

重複：ＳＩ718、ＳＤ751、ＳＫＰ711と重複する。本遺構は、ＳＩ718、ＳＤ751より新しく、ＳＫＰ711より古い。

規模と平面形：長軸3.28m、短軸3.0mの隅丸方形である。長軸の方位はＮ－85°－Ｅである。

埋土：10層に分層した。

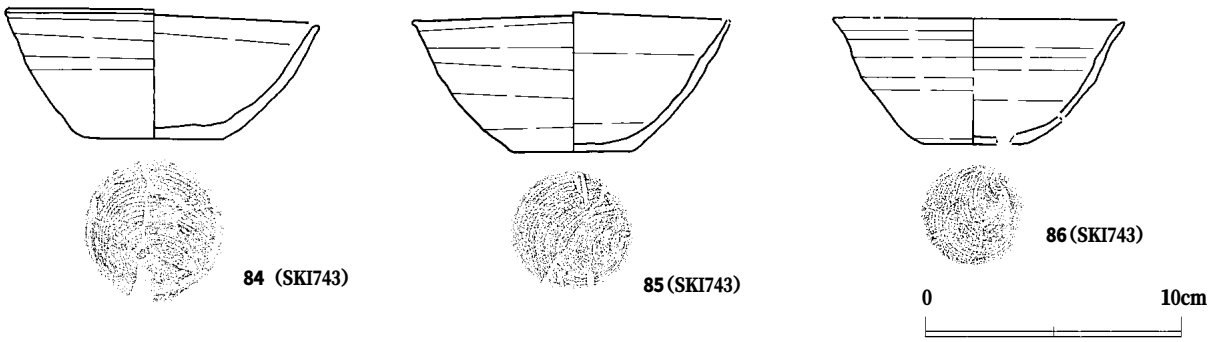
壁：現状で、床面から20cmほどの高さがある。

底面：起伏があり、北西側にある長径1.4m、短径1.1m、深さ20cmほどの不整楕円形の窪みをはじめ、柱穴様の落ち込み(P37～39他)が底面に見られる。

出土遺物：土師器、支脚などが出土した。この内、土師器坏3個体(50－84～86)を図化した。

第８表　竪穴状遺構ピット計測表

N0. Pit番号	地　　区	長　軸(cm)	短　軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	埋　　土
SKI444						
Ｐ１	MS42	81	54	12	28.79	黒褐色土
SKI743						
P37	LT・MA49	34	30	28	29.59	黒褐色土
P38	LT48･49	46	38	18	29.71	暗褐色土
P39	LT48･49	50	40	11	29.67	黒褐色土



第50図　竪穴状遺構出土遺物

第９表　竪穴状遺構出土遺物観察表

挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備　　考
50-84	SKI743	土師器	坏	口縁～底部	12.3	5.4	5.2	回転糸切	内外面ロクロナデ	
50-85	SKI743	土師器	坏	口縁～底部	12.5	4.6	5.5	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面に煤状炭化物付着
50-86	SKI743	土師器	坏	口縁～底部	11.4	4.0	4.9	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面に煤状炭化物付着

3　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、これを構成する各柱穴の形状･規模･埋土の特徴･配置、柱穴間距離の他に、建物の方位と竪穴住居跡や溝跡、柱穴列などの他遺構の主軸や長軸方位との対応関係などを総合的に検討して確認したが、その過程については概ね次の３種に分けられる。ａ：調査中に現地において検出し確認したもの(ＳＢ311･906)。ｂ：現地において検出したものを整理作業において再検討した結果、規模･形状等を改めたもの(ＳＢ321･612)。ｃ：現地では建物跡を確認できなかったが、整理作業において柱穴様ピット等を検討した結果、掘立柱建物跡として確認したもの(ＳＢ255･608)である。確認した計6棟の掘立柱建物跡は、すべてＳＤ50の南西側に位置しており、集落内で掘立柱建物がまとまっていたことがわかる。

なお、掘立柱建物跡を構成する各柱穴の規模等については、「第10表　掘立柱建物跡柱穴計測表」に掲載している。

ＳＢ255（第51図）

位置：ＬＬ57･58、ＬＭ57･58･59、ＬＮ57･58･59グリッドに位置している。

確認：整理作業において確認した。第Ⅴ層で検出した22基の柱穴様ピットから構成される。

重複：ＳＩ438、ＳＫＰ818と重複し、ＳＩ438より古く、ＳＫＰ818より新しい。

規模：桁行3間、梁行2間の南北棟建物で、その方位は、Ｎ－10°－Ｗである。柱穴の切り合いの状況から3回の建て替えがあったと考えられ、建物を最終的に構成した柱穴については、最も北側の梁をP1･4･6が支え、中央北寄りの梁は、西側のP9のみ確認できるが、東側はＳＩ438によって失われているため不明である。中央南寄りの梁は、主にP10･14によって支えられ、P12･13が補助的な役割を果たしたのだろう。ここに間仕切りがあった可能性がある。最も南側の梁は、P17･19･20によって支えられていたものと推定される。各柱穴間の距離は、P1－P4間2.48m、P4－P6間2.76m、P1－P9間3.18m、P9－P10間3.18m、P10－P17間2.84m、P17－P19間2.78m、P19－P20間2.58mである。総間は、桁行9.20m、梁行5.20mである。

出土遺物：P6より土師器甕(59－87)が、P6･9･14･21より鍛冶滓やフイゴの羽口などの鍛冶関連遺物(第27表)が出土している。

ＳＢ311（第52図）

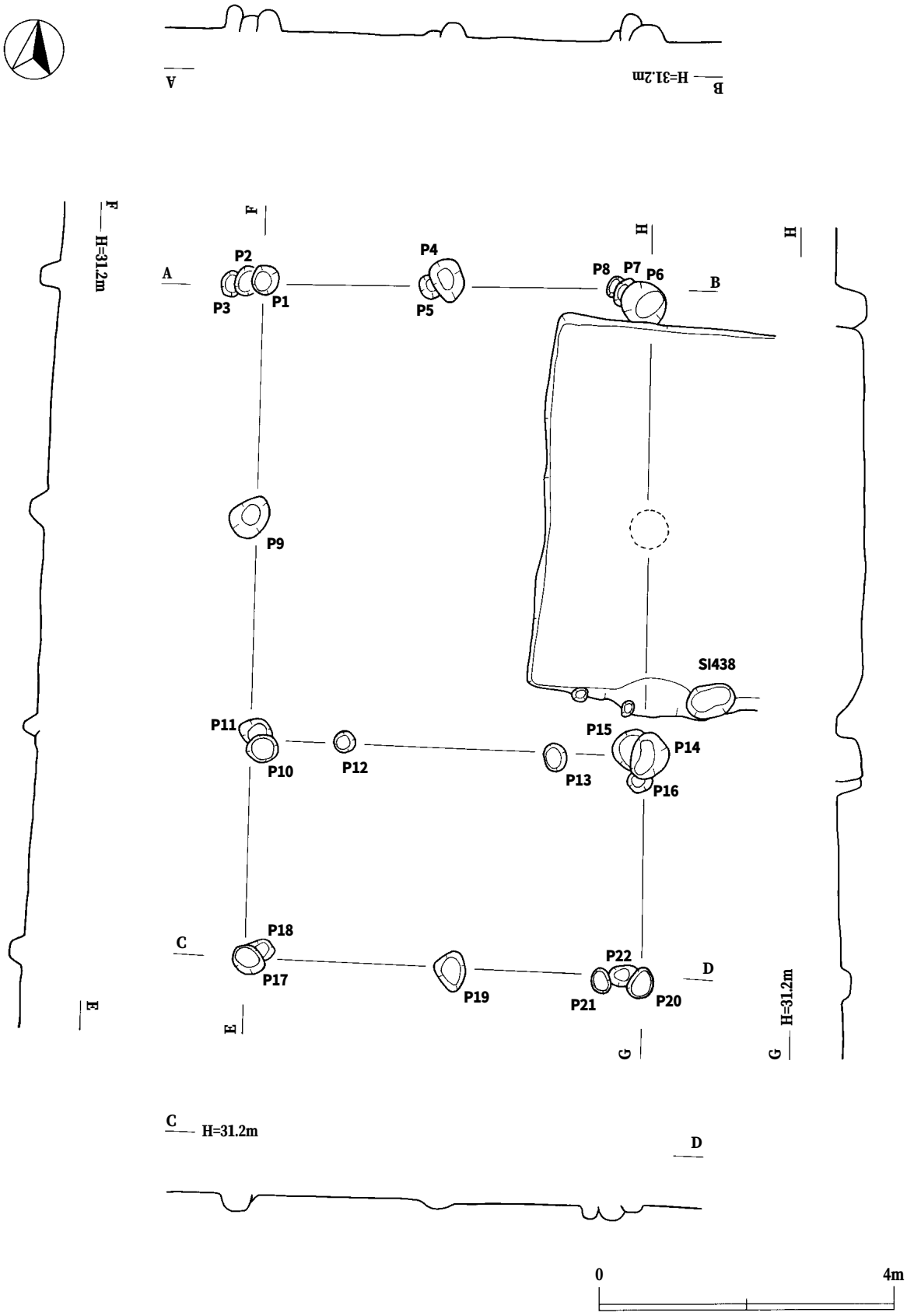
位置：ＬＲ54･55、ＬＳ54･55に位置している。

確認：第Ⅴ層において、等間隔に配置される複数の柱穴様ピット群として確認した。重複は無い。

規模：本来は、桁行４間、梁行２間の南北棟総柱の建物で、これを構成する柱穴は合計15基であったと考えられる。しかし現状では、削平や倒木痕により北西側２基と南東側４基の柱穴は底面から失われ、確認できた９基も削平により上部を大きく失っているものと思われる。各柱穴間の距離は、P1－P2間1.80m、P2－P3間1.65m、P3－P4間1.81m、P5－P6間1.85m、P7－P8間1.78m、P8－P9間1.90m、P3－P5間1.87m、P5－P7間1.75m、P4－P6間1.61m、P6－P8間2.01mである。推定される総間は、桁行7.2m、梁行3.6mほどである。建物方位は桁行で、Ｎ－8°－Ｗである。

出土遺物：本遺構の埋土中から遺物の出土は無かった。

ＳＢ321（本遺構の詳細は「５　土師器焼成遺構」参照、第53･75図、図版９）



第51図　ＳＢ２５５掘立柱建物跡

ＳＢ608（第54図）

位置：ＬＬ59･60、ＬＭ59･60グリッドに位置している。

確認：整理作業において確認した。第Ⅴ層から検出された４基の柱穴から構成される。

重複：P3がＳＫ629を切っている。また、本遺構の範囲内では、ＳＮ479がＳＤ460に切られている。ＳＤ460とＳＫ629の新旧関係は不明である。

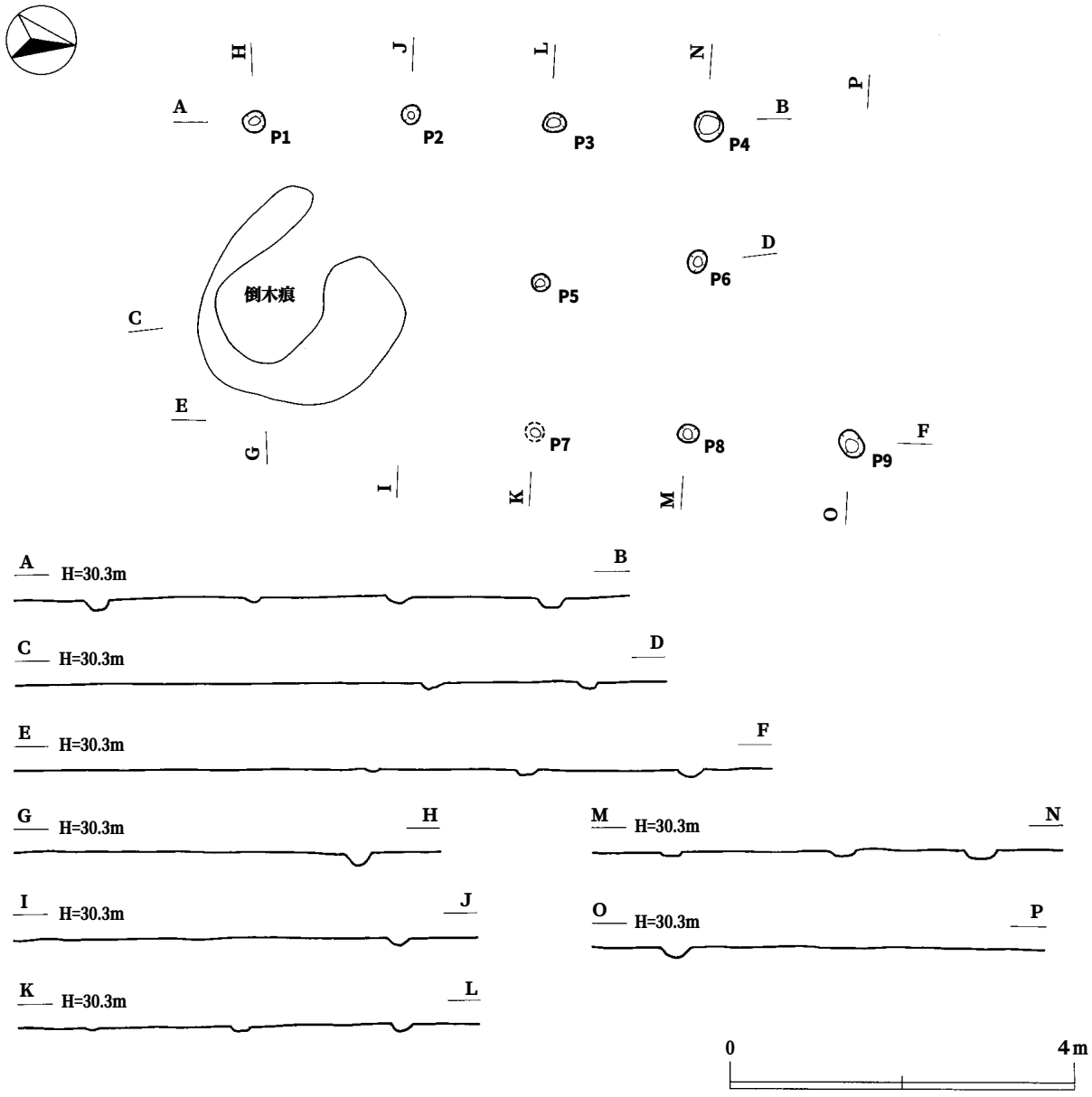
規模：本遺構は、４本柱の建物跡で、軸方向はほぼＳＢ255と同じである。四辺の長さは、各柱穴の心々間で、北辺4.07m、南辺4.18m、東辺2.09m、西辺2.07mである。

出土遺物：本遺構の埋土中から遺物の出土は無かった。

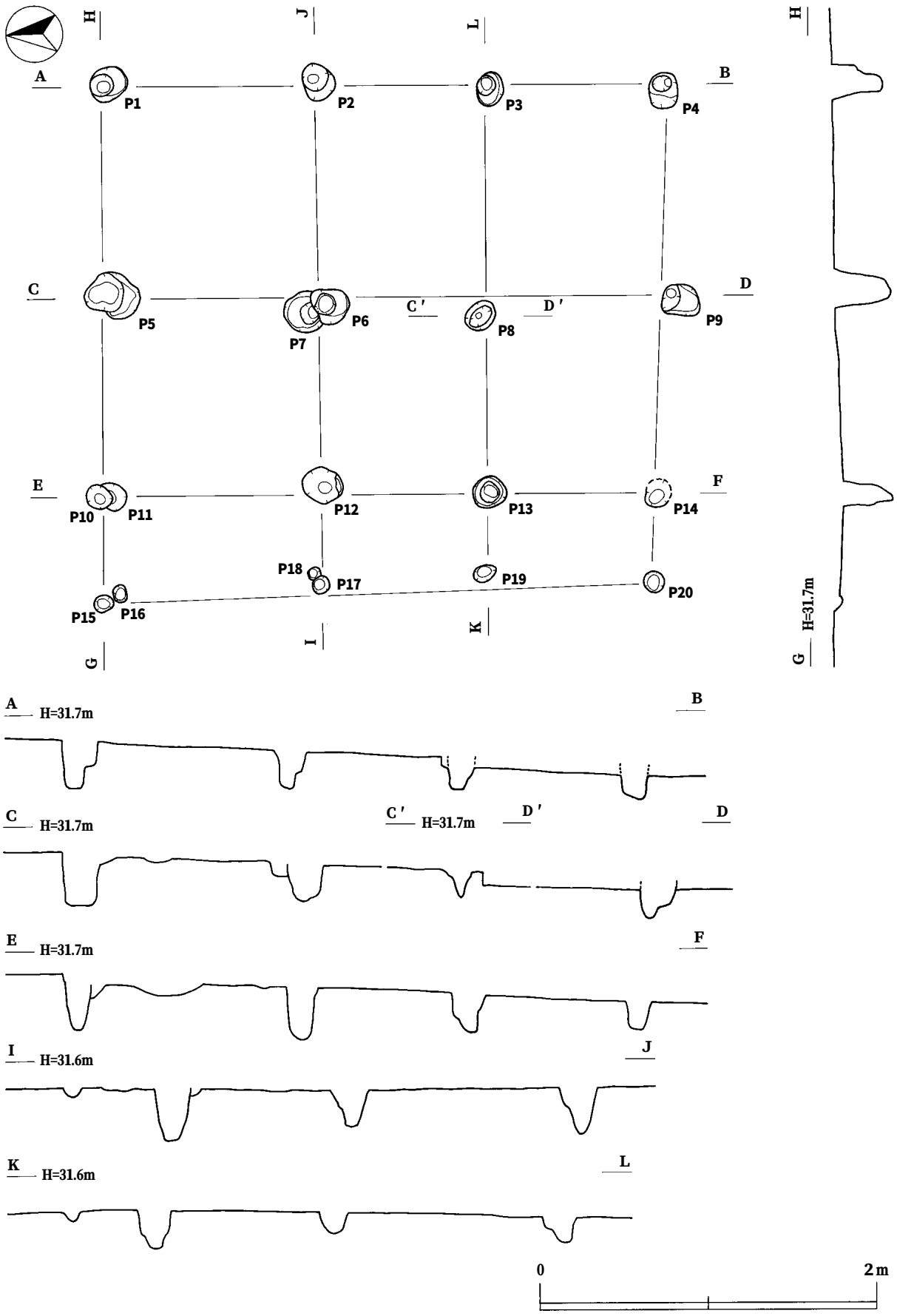
ＳＢ612（第55図）

位置：ＭＯ43･44、ＭＰ42～44、ＭＯ43･44、ＭＲ43･44グリッドに位置している。

確認：現地において、第Ⅴ層上面の精査中に、２間×２間の建物を構成する8基の柱穴を確認した。



第52図　ＳＢ３１１掘立柱建物跡



第53図　ＳＢ３２１掘立柱建物跡

しかし、整理作業時の再検討の結果、現地で確認した８基の内の１基を、規模や柱穴間距離が他の７基と比べかけ離れているため、これを独立した柱穴様ピットに振り替え(ＳＫＰ845)、新たに東側の梁を構成する３基の柱穴を加え、合計10基の柱穴からなる建物跡に改めた。

規模：桁行３間、梁行２間の東西棟建物で、その方位は、Ｎ－77°－Ｗである。各柱穴間の距離は、P1－P2間2.61m、P2－P3間2.67m、P3－P4間3.61m、P7－P8間2.44m、P8－P9間3.13m、 P9－P10間3.34m、 P1－P5間2.45m、P5－P7間2.91m、P4－P6間2.59m、P6－P10間2.35mである。総間は、北側の桁が8.93m、西側の梁が5.36mである。

重複：北西端の柱穴(P1)が、ＳＸ634を切る。また本建物跡の範囲内には、ＳＫＰ845、ＳＡ492のP3～P5が存在する。ＳＫＰ845については、梁P3－P9の軸線上にあるため、本遺構の構造に関わっていた可能性がある。ＳＡ492については新旧関係は不明である(付図１)。

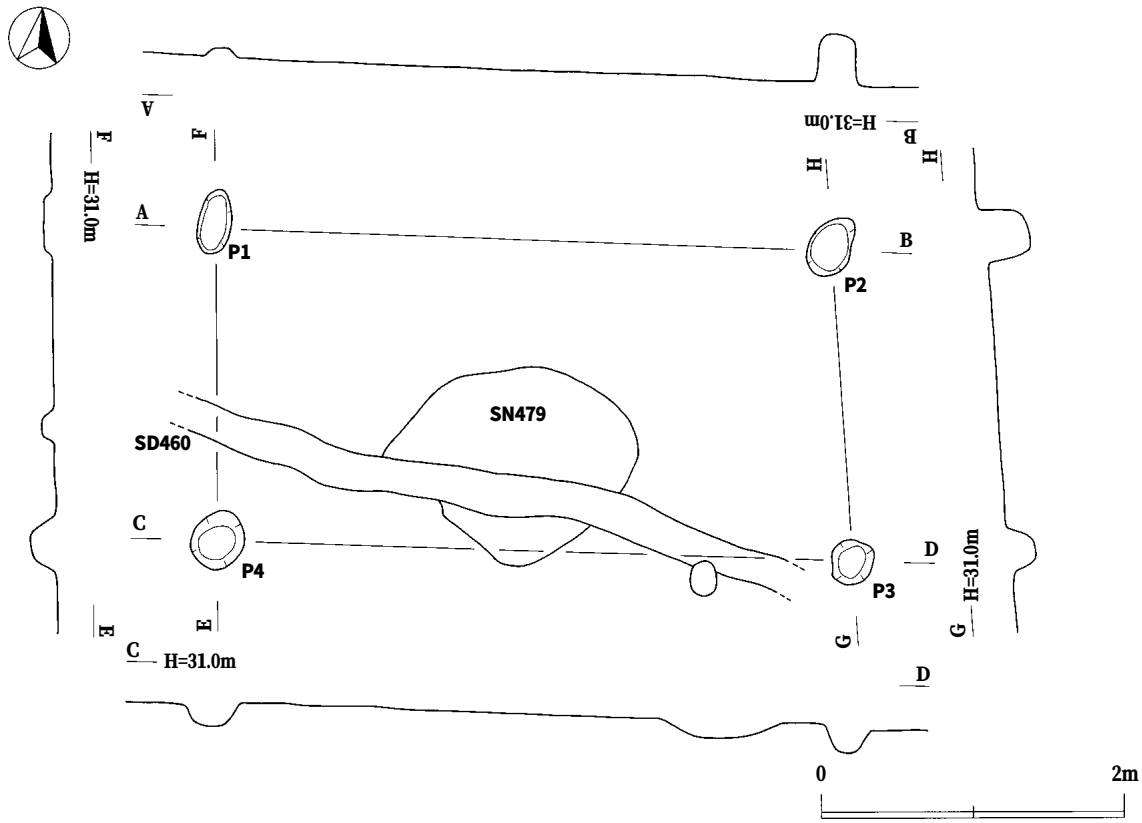
出土遺物：土師器の坏と甕の破片が、P1･3･5･7･9より出土している。

ＳＢ906（第56･57･58図、図版６･11･14）

位置：ＭＤ44グリッドに収まる。

確認：トレンチで黒褐色プランを確認。同時に付近の第Ⅲ層中から土師器片が出土したため精査したところ、第Ⅴ層で黒褐色の不整方形のプランを確認した。精査を進めていくうちに北西側の土坑(ＳＫ01)と中央部の土坑(ＳＫ02)、方形に巡るように並ぶ複数の柱穴(P1～14)などを確認した。しかし竪穴の掘り込みは無く、壁溝も検出できなかった。他の遺構との重複は無い。

規模：隅柱と考えられる4基(P1･6･12･14)とその中間などに位置する柱穴からなる、南北2間、東西２間のほぼ正方形の建物である。四辺の長さは、各隅柱の心々間で、南辺が3.78m、北辺が3.73m、

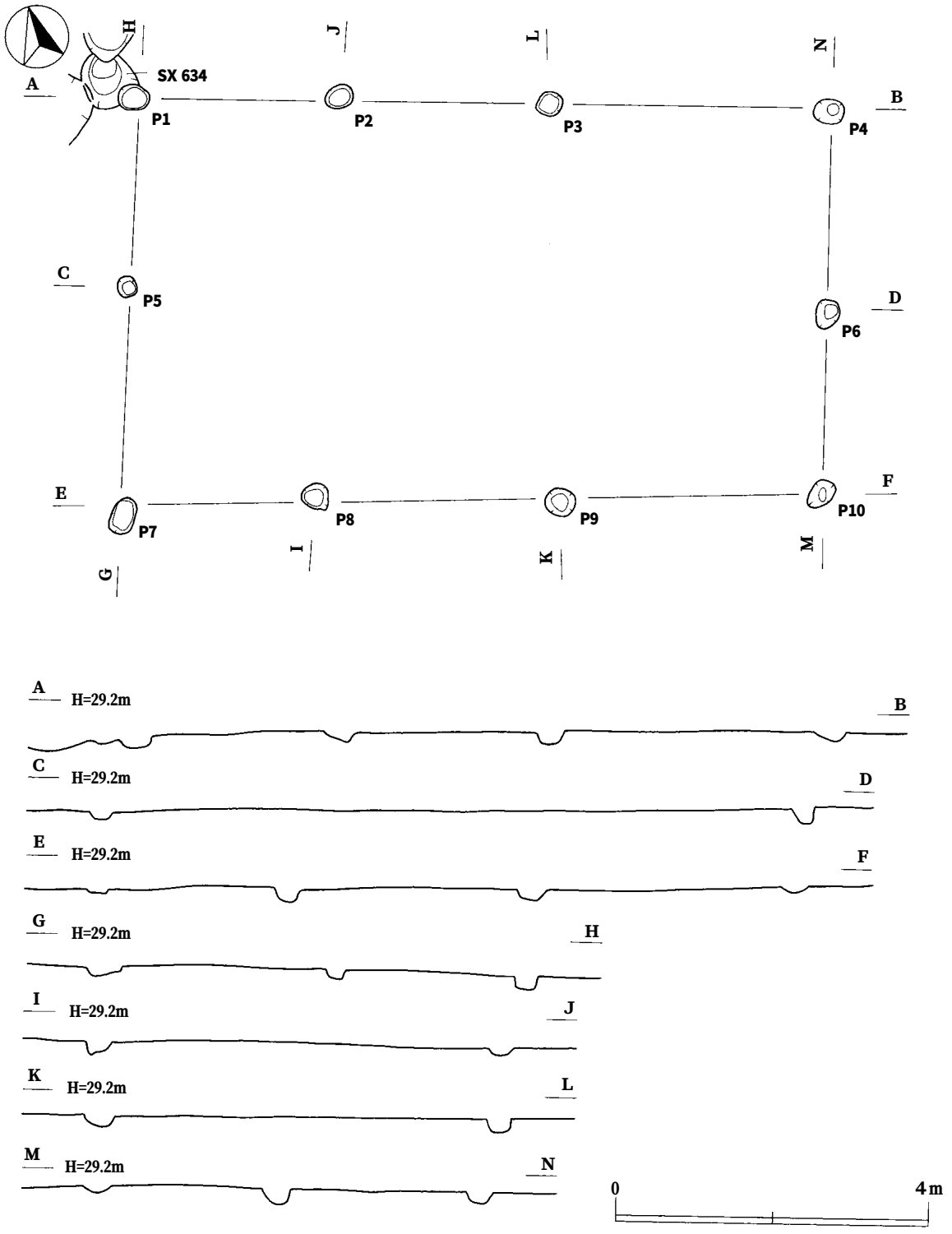


第54図　ＳＢ６０８掘立柱建物跡

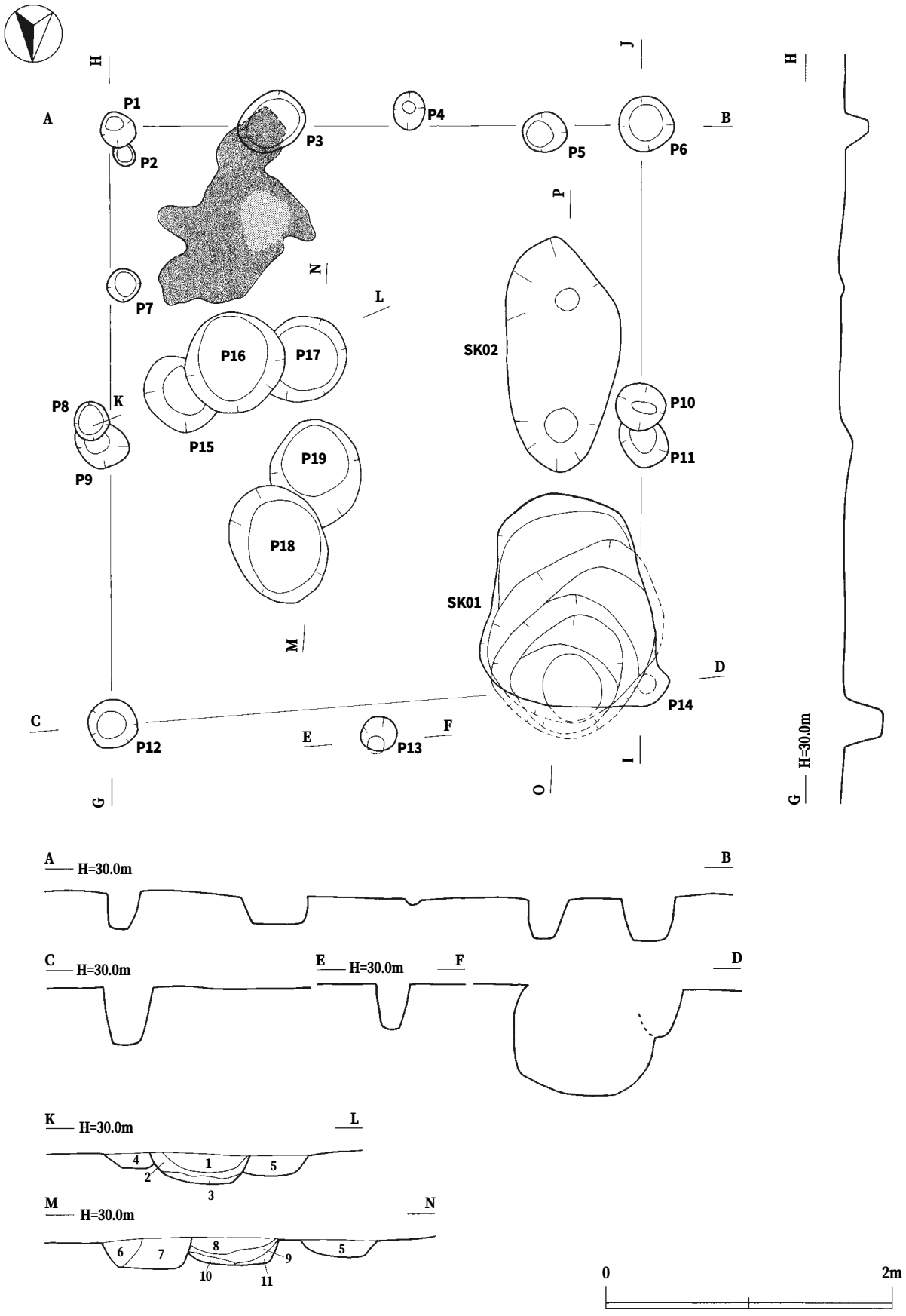
東辺が4.21m、西辺が3.93mである。カマドがある南辺の中軸線の方位はＮ－3°－Wである。

床面：平坦で堅く締まる床面である。床面から土坑２基(ＳＫ01･02)とピット５基(P15～19)が検出された。ＳＫ01は貯蔵穴と思われ、長軸1.48m、短軸1.20m、床面からの深さは92cmである。上端平面形は隅丸方形であるが、底面は径45cm前後の円形で平坦である。北壁は底面からオーバーハング気味に立ち上がるが、南壁は階段状である。

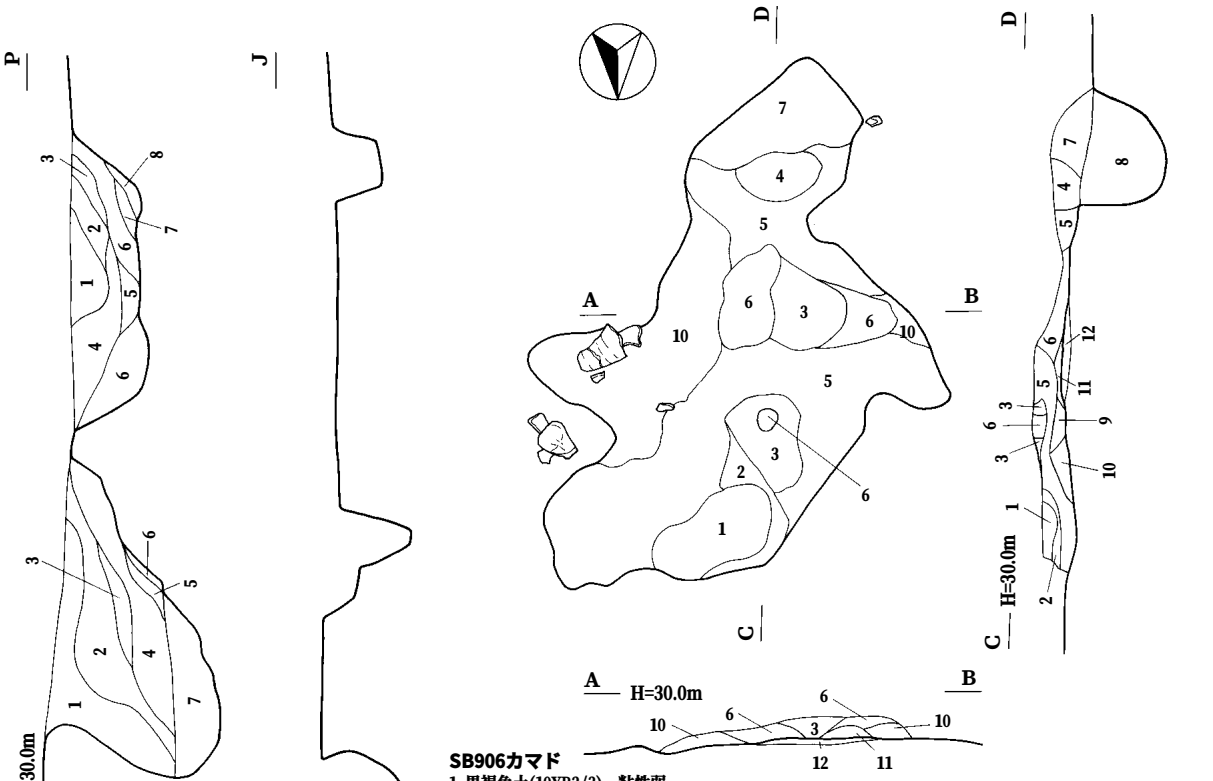
カマド：南辺の東側に確認した。遺存状況は不良であり、構築材と天井の崩落部、火床面が確認で



第55図　ＳＢ６１２掘立柱建物跡



第56図　ＳＢ９０６掘立柱建物跡（１）



SB906カマド

1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　橙色土(5YR6/6)(φ1～5㎜)40%混入
　にぶい黄褐色土(10YR5/4)5%、炭化物8%混入
2 にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまり強
3 褐色土(7.5YR4/4)　しまり強
　炭化物5%、焼土粒5%混入
4 褐色土(7.5YR4/4)　しまり強
　明黄褐色土(10YR6/6)10%、焼土粒(2.5Y5/8)混入
5 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性弱
　炭化物、焼土粒、地山粒混入
6 黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり強
　炭化物10%、焼土粒10%、かまど構築材5%混入
7 黒褐色土(10YR3/2)　粘性弱
　炭化物8%、焼土粒5%、地山粒5%混入
8 黒褐色土(10YR2/1)
　炭化物8%、焼土粒、地山粒混入
9 暗赤褐色土(5YR3/6)　しまり強
10 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強
　炭化物混入
11 赤褐色土(5YR5/6)　しまり強　粘性弱
12 赤褐色土(5YR4/8)　しまり強　粘性弱

SB906　P16（第56図）

1 黒褐色土(10YR3/2) カマド構築材
　炭化物10%、焼土粒10%、地山粒20%混入
　明黄褐色土(10YR6/6)10%混入
2 黒褐色土(10YR3/2)
　炭化物、焼土粒混入
3 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性弱　構築材
　焼土粒8%、明黄褐色土(10YR6/6)5%混入

SB906　P15

4 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強
　炭化物5%、焼土粒8%、地山粒10%混入

SB906　P17

5 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強
　炭化物、焼土粒混入

SB906　P18

6 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強
　炭化物混入
7 黒褐色土(10YR3/1)　しまり強
　炭化物8%、地山粒(φ1～7mm)15%混入

SB906　P19

8 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強
　炭化物10%、焼土粒8%混入
9 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強
　赤褐色土(5YR4/6)40%、明黄褐色土(10YR7/6)10%混入
　炭化物10%混入
10 にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまり強
　炭化物60%混入
11 暗褐色土(10YR3/4)　しまり強
　炭化物5%、焼土粒5%混入

SB906　SK01（第57図）

1 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性弱
　炭化物5%、焼土粒8%、地山粒(φ1～5mm)40%混入
2 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性弱
　炭化物5%、焼土粒、地山粒(φ1～20mm)40%混入
3 黒褐色土(10YR3/3)と黒褐色土(10YR3/2)の混合土　しまり強　粘性弱
　炭化物、焼土粒混入
4 黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性弱
　炭化物5%、焼土粒8%、黒褐色土(10YR3/2)10%混入
5 黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性弱
　炭化物5%、焼土粒8%、地山粒10%混入
6 黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性弱
　炭化物5%、焼土粒8%、地山粒40%混入
7 黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性弱
　炭化物、焼土粒、地山粒30%混入

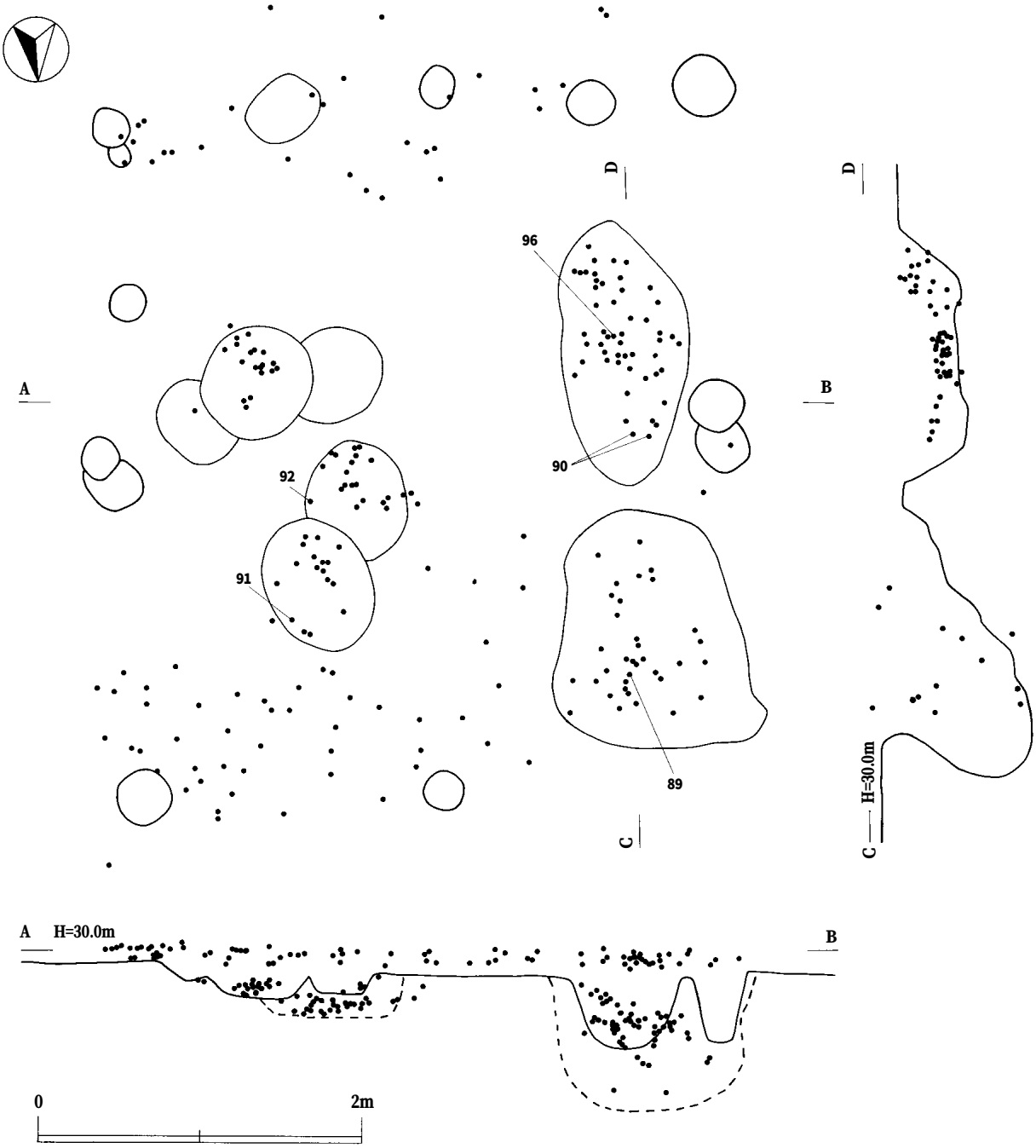
SB906　SK02

1 黒褐色土(10YR3/2)
　炭化物5%、焼土粒、地山粒(φ1～20mm)40%混入
　橙色土(5YR6/6)40%混入
2 黒褐色土(10YR3/2)
　炭化物、焼土粒、橙色土(5YR6/6)10%混入
3 黒褐色土(10YR3/2)
　炭化物、焼土粒、橙色土(5YR6/6)25%混入
4 黒褐色土(10YR3/2)
5 暗褐色土(10YR3/3)
　焼土粒5%、地山粒(φ1～7mm)15%混入
6 褐色土(10YR4/6)黄褐色土(10YR5/6)黒褐色土(10YR3/2)
　　1　：　2　：　1　で混じる
　炭化物5%、焼土粒5%混入
7 黒褐色土(10YR3/1)
　炭化物5%、焼土粒混入
8 黄褐色土(10YR5/6)　しまり強
　黒褐色土(10YR3/2)5%混入

第57図　ＳＢ９０６掘立柱建物跡（２）

きた。袖に使っていたと思われる自然石がカマドより30cm西で出土している。火床は高熱により焼き締まり硬化していた。煙道部は確認でなかった。

出土遺物：土師器を中心に多数出土した。この内、ＳＫ01底面から出土した土師器坏(59－89)、ＳＫ02底面から出土した土師器坏(59－90)、刀子(59－96)、P18から出土した土師器坏(59－91)、P19から出土した土師器坏(59－92)、建物の範囲内から出土した土師器坏(59－88)、土師器甕(59－93･94)、須恵器甕(59－95)を図化した。また、建物の範囲内から採取した4点の炭化材による放射性炭素年代測定では、床面から採取した炭化材が、1,170年±35年前(yrBP±1σ)、ＳＫ01の底面から採取した炭化材が、1,120年±35年前(yrBP±1σ)、ＳＫ02の底面から採取した炭化材が、1,175年±35年前(yrBP±1σ)、P19の埋土から採取した炭化材が、1,120年±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。



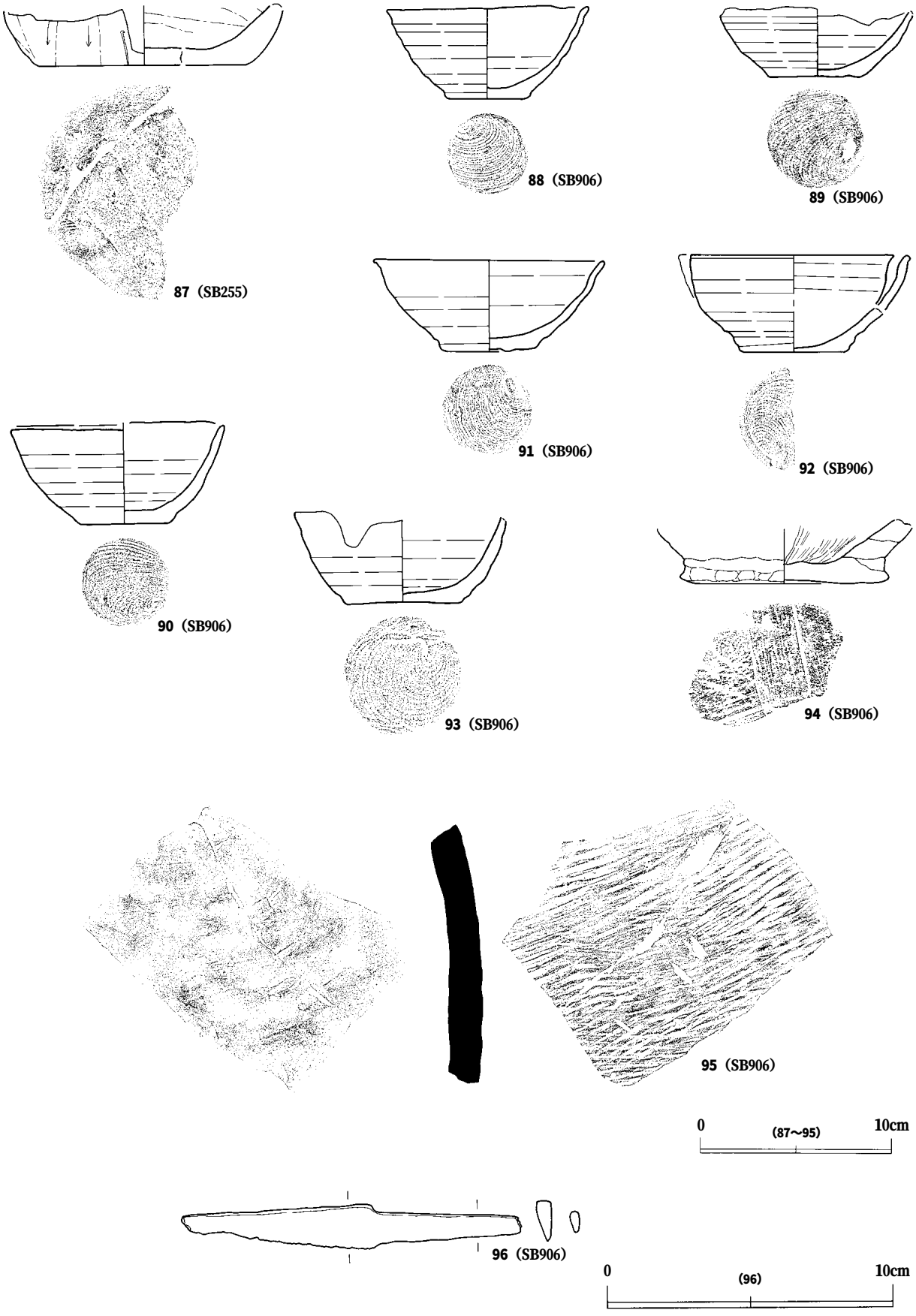
第58図　ＳＢ９０６掘立柱建物跡（３）

第10表　掘立柱建物跡柱穴計測表

N0. 柱穴番号	地　区	規模（cm）			底面標高 （m）	埋　土	N0. 柱穴番号	地　区	規模（cm）			底面標高 （m）	埋　土
		長軸	短軸	深さ					長軸	短軸	深さ		
SB255							SB321						
P 1	LN59	41	37	28	30.41	黒褐色土	P13	LD59	40	38	46	30.71	黒褐色土
P 2	LN59	43	40	26	30.39	黒褐色土	P14	LD58	35	27	34	30.73	黒褐色土
P 3	LN59	32	30	30	30.35	黒褐色土	P15	LD60	22	19	7	31.32	黒褐色土
P 4	LM59	58	42	24	30.40	黒褐色土	P16	LD60	23	17	7	31.26	黒褐色土
P 5	LM59	34	20	10	30.64	黒褐色土	P17	LD59	23	23	11	31.15	黒褐色土
P 6	LM59	67	59	36	30.38	黒褐色土	P18	LD59	17	15	9	31.17	黒褐色土
P 7	LM59	40	12	29	30.41	黒褐色土	P19	LD59	28	20	9	31.06	黒褐色土
P 8	LM59	30	10	11	30.61	黒褐色土	P20	LD58	26	26	12	30.95	黒褐色土
P 9	LN58	59	50	31	30.26	黒褐色土	SB608						
P10	LN57	41	38	26	30.27	黒褐色土	P 1	LL59	72	68	36	30.32	暗褐色土
P11	LN57	39	35	26	30.26	黒褐色土	P 2	LM59	42	32	13	30.60	黒褐色土
P12	LM57	28	28	10	30.46	黒褐色土	P 3	LM60	44	18	20	30.55	黒褐色土
P13	LM57	35	26	6	30.51	黒褐色土	P 4	LL60	42	32	34	30.44	黒褐色土
P14	LL57･58	66	56	36	30.30	黒褐色土	SB612						
P15	LL57･58	55	27	18	30.44	黒褐色土	P 1	MQ44	40	32	17	28.58	黒褐色土
P16	LL57	32	18	33	30.26	黒褐色土	P 2	MQ44	36	30	13	28.73	黒褐色土
P17	LN57	46	38	24	30.16	黒褐色土	P 3	MP44	38	32	17	28.74	黒褐色土
P18	LM･LN57	42	30	23	30.18	黒褐色土	P 4	MO44	41	32	13	28.83	黒褐色土
P19	LM57	50	42	17	30.29	黒褐色土	P 5	MR44	27	26	13	28.67	黒褐色土
P20	LL57	44	30	15	30.36	黒褐色土	P 6	MO43	39	33	21	28.78	黒褐色土
P21	LL57	32	23	20	30.26	黒褐色土	P 7	MR43	48	32	12	28.67	黒褐色土
P22	LL57	36	30	24	30.25	黒褐色土	P 8	MQ43	38	33	18	28.66	黒褐色土
SB311							P 9	MP42	38	38	16	28.74	黒褐色土
P 1	LS54	28	26	16	29.86	黒褐色土	P10	MP42	44	29	9	28.89	黒褐色土
P 2	LS54	22	21	9	29.93	黒褐色土	SB906						
P 3	LS54	27	23	9	29.95	黒褐色土	P 1	MC44	22	20	26	29.57	黒褐色土
P 4	LS55	36	34	10	29.91	黒褐色土	P 2	MC44	16	13	30	29.58	暗褐色土
P 5	LR54	20	20	6	29.97	黒褐色土	P 3	MD43･44	46	38	20	29.56	黒褐色土
P 6	LR55	26	22	8	29.94	黒褐色土	P 4	MD43･44	26	21	45	29.38	黒褐色土
P 7	LR54	14	10	1	30.01	黒褐色土	P 5	MD43･44	30	28	27	29.48	黒褐色土
P 8	LR55	24	20	5	29.96	黒褐色土	P 6	MD43･44	38	37	31	29.55	黒褐色土他
P 9	LR55	34	25	12	29.91	黒褐色土	P 7	MC44	23	22	10	29.77	黒褐色土他
SB321							P 8	MC44	26	24	21	29.64	黒褐色土
P 1	LB60	46	39	60	30.81	黒褐色土	P 9	MC44	39	31	48	29.36	黒褐色土
P 2	LB59	45	37	60	30.75	黒褐色土	P10	MD44	33	33	36	29.41	黒褐色土他
P 3	LB･LC58	41	33	29	30.77	黒褐色土	P11	MD44	34	30	18	29.69	黒褐色土
P 4	LB･LC58	45	36	30	30.66	黒褐色土	P12	MC･MD45	36	34	40	29.57	黒褐色土
P 5	LC60	67	56	65	30.75	不明	P13	MD45	27	24	31	29.53	黒褐色土他
P 6	LC59	47	43	43	30.71	黒褐色土	P14	MD44	31	24	26	29.54	黒褐色土
P 7	LC59	48	48	56	30.70	黒褐色土	P15	MD44	56	45	10	29.72	黒褐色土
P 8	LC58･59	40	31	35	30.80	暗褐色土	P16	MD44	70	67	21	29.58	図参照
P 9	LC58	49	41	35	30.54	黒褐色土	P17	MD44	64	45	16	29.65	黒褐色土
P10	LD60	31	28	60	30.76	黒褐色土	P18	MD44	84	64	20	29.58	図参照
P11	LD60	35	30	16	31.14	黒褐色土	P19	MD44	76	63	18	29.63	図参照
P12	LD59	49	40	63	30.63	黒褐色土							

第11表　掘立柱建物跡出土遺物観察表

挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外底部	器面調整
59-87	SB255	土師器	甕	体部下端～底部	―	11.0	―	砂底、ナデ	内面ナデ、外面ケズリ
59-88	SB906	土師器	坏	口縁～底部	10.6	4.4	4.9	回転糸切	内外面ロクロナデ
59-89	SB906	土師器	坏	体部～底部	―	4.8	―	回転糸切	内外面ロクロナデ
59-90	SB906	土師器	坏	口縁～底部	11.0	4.0	5.1	回転糸切	内外面ロクロナデ
59-91	SB906	土師器	坏	口縁～底部	12.0	4.8	4.9	回転糸切	内外面ロクロナデ
59-92	SB906	土師器	坏	口縁～底部	12.0	5.6	5.1	回転糸切	内外面ロクロナデ
59-93	SB906	土師器	坏	体部～底部	―	6.0	―	回転糸切	内外面ロクロナデ
59-94	SB906	土師器	甕	体部下端～底部	―	10.8	―	木葉痕	
59-95	SB906	須恵器	甕	体部	―	―	―		内面アテ目、外面タタキ目
59-96	SB906	鉄製品	刀子	ほぼ完形	刀部長 6.7cm	柄部長 5.1cm	最大幅 1.6cm	重量 7.9g	



第59図　掘立柱建物跡出土遺物

4　土坑

土坑は全調査区から85基確認されている。この内、平安時代の集落範囲と考えられるＳＤ50以西から検出されたものは、出土遺物や確認状況などから平安時代の遺構であると判断した。また、ＳＤ50の北東約6.4mのＬＡ61･62グリッドより検出されたＳＫ59とその周辺のＳＫ58･70などについては、検出状況や遺物の出土状況などから平安時代の遺構であると判断したが、ＳＤ50以東から検出されたその他の土坑のほとんどは、時期決定の根拠に欠く状況である。なお、各土坑の位置、形状、規模等に関しては、次の土坑観察表に記載している。

第12表　土坑観察表（１）

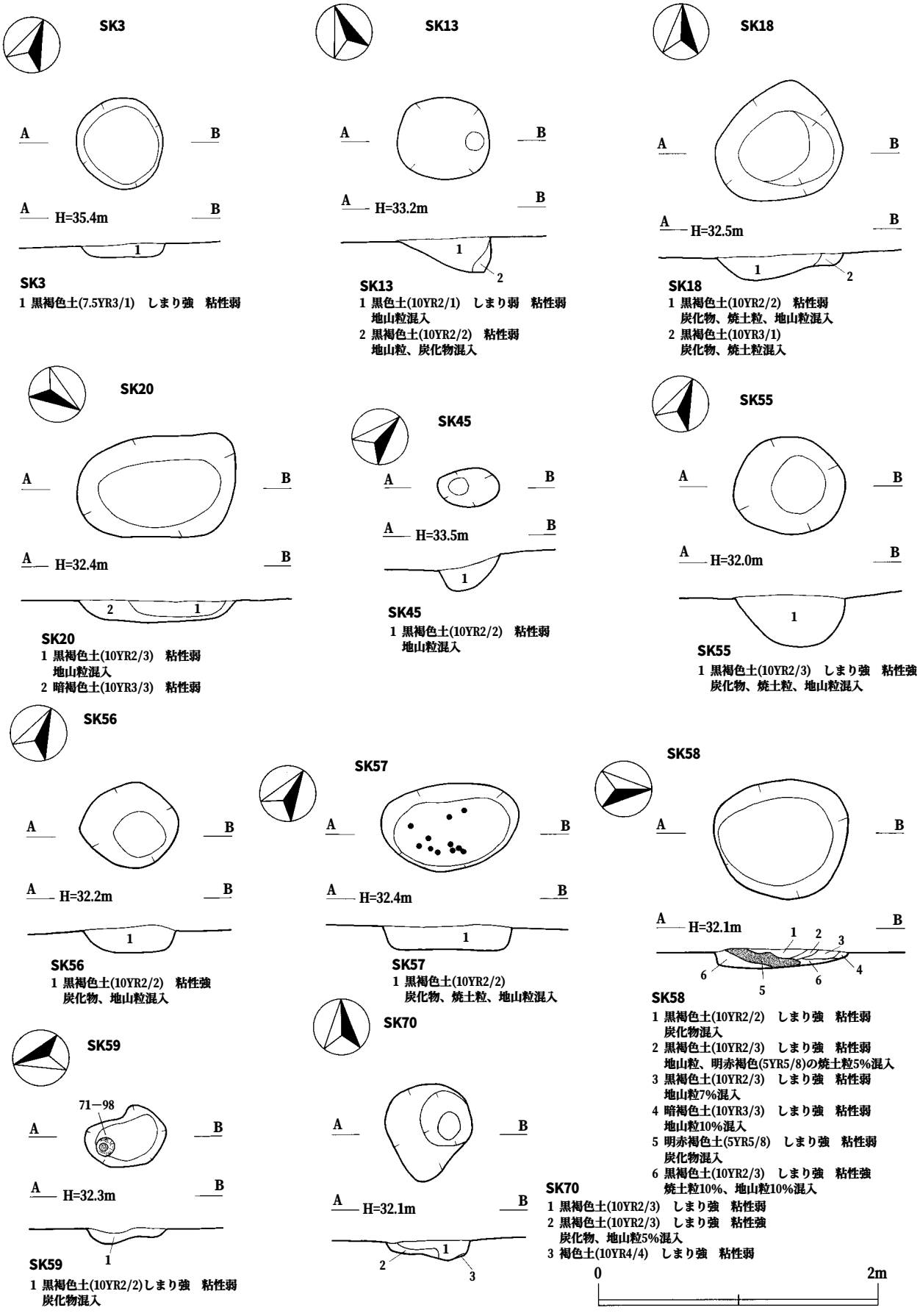
遺構番号	地　区	検出面	平面形状	規模（cm）			特徴、出土遺物、その他	挿図番号
				長軸	短軸	深さ		
3	KQ68	Ⅴ	円形	65	60	10	底面は平坦である。遺物の出土はない。	60
13	KA58	Ⅴ	楕円形	66	58	26	西壁の立ち上がりは急である。遺物の出土はない。	60
18	KG65	Ⅴ	円形	91	85	17	壁は緩やかに立ち上がる。遺物の出土はない。	60
20	KI65	Ⅴ	楕円形	118	72	16	底面は平坦である。遺物の出土はない。	60
45	KB66	Ⅴ	楕円形	42	27	16	北東壁が緩く立ち上がる。遺物の出土はない。	60
55	KN63	Ⅳ	円形	78	70	37	断面形は椀形である。遺物の出土はない。	60
56	KN63	Ⅳ	不整円形	70	62	18	底面は平坦である。土師器片が出土している。	60
57	KN63	Ⅳ	楕円形	96	60	18	底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。土師器と須恵器の破片が出土し、土師器甕を図化(71－97)した。	60
58	KT61	Ⅴ	円形	96	86	12	底面は平坦である。遺物の出土はない。	60
59	LA61･62	Ⅴ	不整楕円形	60	44	8	土師器坏(71－98)が伏せられた状態で出土した。〔図版7〕	60
70	KT61	Ⅴ	円形	70	62	14	底面の東側が窪む。遺物の出土はない。	60
82	KA68	Ⅴ	円形	108	106	48	ＳＤ24の底面を精査中に検出した。本遺構が24よりも古いと考えられる。埋土は人為的に埋め戻されたものであると推定される。底面中央に径36～48cm、深さ26cmの小穴があり、小穴底面に下端、土坑上面中央に上端を置く、ほぼ直立した長さ68cm、径8cmの丸太材が出土した。その状況から土坑を埋め戻す際に差し込まれた可能性がある。分析の結果、丸太材の樹種はマツと同定され、放射性炭素年代測定では345±30年前(yrBP±1σ)という値を得ている。〔図版7〕	61
92	KG71	Ⅴ	楕円形	70	54	10	底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。遺物の出土はない。	61
93	LE56･57	Ⅳ	円形	108	104	24	底面は平坦である。土師器甕(71－99)が出土した。	61
114	LE56･57	Ⅴ	円形	148	139	18	ＳＫＰ323に切られる。底面は平坦である。壁の北西側と北東側、南側に3つのピット状の窪みがある。埋土から土師器の甕(71－100)、鍛冶滓が出土した。	61
115	KL65	Ⅴ	円形	106	104	20	底面中央に、径32cm、深さ8cmほどの小穴を持つ。遺物の出土はない。	61
117	LE･LF59	Ⅴ	楕円形	160	104	13	底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。土師器片が出土した。	61
118	LC60	Ⅳ	円形	142	140	36	底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。土師器甕の破片が出土した。	61
119	KC･KD69	Ⅴ	不整楕円形	84	72	10	底面東側がやや窪む。遺物の出土はない。	61
120	KC69	Ⅴ	楕円形	76	58	10	底面には緩い起伏が見られる。遺物の出土はない。	61
121	KC68	Ⅴ	円形	51	50	6	底面はほぼ平坦である。遺物の出土はない。	62
122	KC68	Ⅴ	円形	80	76	8	底面には起伏が見られる。遺物の出土はない。	62
123	KD68	Ⅴ	不整楕円形	102	86	16	木根などの影響で土層が乱れている。本来の底面は平坦であったと思われる。遺物の出土はない。	62
124	KC67･68	Ⅴ	不整円形	116	100	10	底面には起伏が見られる。遺物の出土はない。	62
125	KC67	Ⅴ	不整楕円形	(112)	58	5	ＳＫ155に切られる。遺物の出土はない。	62
126	KC67	Ⅴ	円形	96	88	12	底面には起伏が見られる。遺物の出土はない。	62
150	KK･KL65	Ⅴ	円形	112	104	10	底面から緩く立ち上がる。遺物の出土はない。	62
155	KC67	Ⅴ	楕円形	116	102	28	円形の底面から緩く立ち上がる。遺物の出土はない。	62
156	KP63	Ⅴ	不整形状	(87)	(32)	3	削平により東半が失われている。土師器片が出土した。	62
184	LD59	Ⅳ	楕円形	85	74	34	底面には起伏が見られ、壁は急に立ち上がる。土師器坏･甕(71－101)、須恵器甕の破片が出土している。〔図版7〕	62
221	LD57･58	Ⅳ	円形	141	139	19	底面に緩い起伏が見られる。ＳＫ223、ＳＮ224、ＳＫＰ268との重複関係および新旧関係は判然としない。これらは本遺構に伴う可能性がある。土師器坏･甕(71－102)が出土した。〔図版7〕	62

第13表　土坑観察表（２）

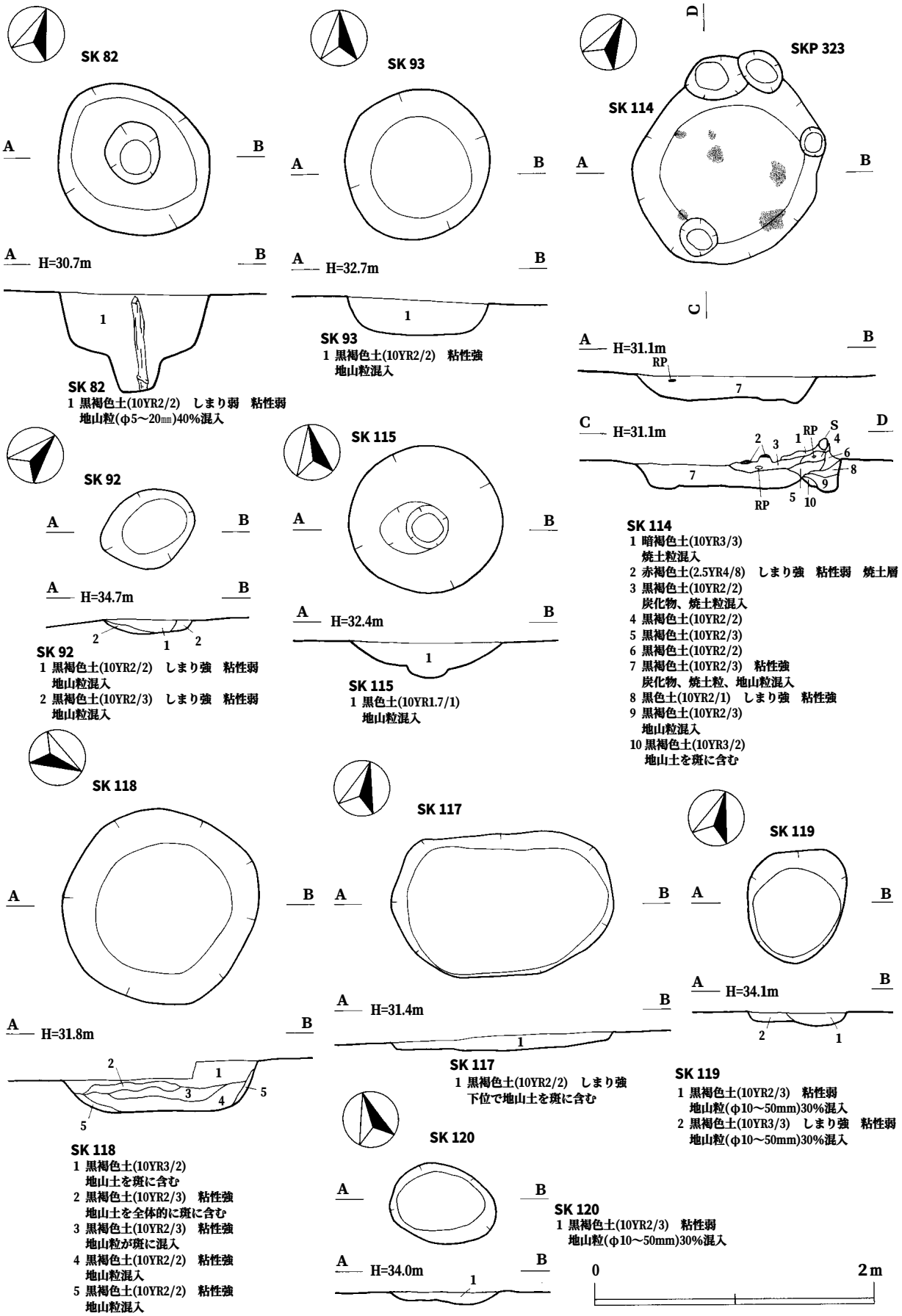
遺構番号	地　区	検出面	平面形状	規模（cm）			特徴、出土遺物、その他	挿図番号
				長軸	短軸	深さ		
223	LD58	Ⅳ	円形	41	39	10	ＳＮ224と重複するが、本土坑と一体の遺構である可能性がある。ＳＫ221との関係は判然としない。遺物の出土はない。〔図版7〕	62
240	LF58	Ⅳ	楕円形	(104)	(50)	8	ＳＤ113、ＳＫＰ239と重複する。113は本遺構より新しく、239は更に新しい。遺物の出土はない。	63
243	LD59	Ⅳ	楕円形	129	104	31	ＳＫＰ272を切る。また、東半がＳＢ321の範囲内にあり、321に伴う掘り込みの壁を切ることから、本遺構が新しいと判断した。底面北東側に浅い窪みが見られ、壁は底面から急に立ち上がる。土師器甕(71－103)が出土した。	63
253	LS55	Ⅴ	不整楕円形	160	138	16	楕円形の底面から壁は外傾して立ち上がる。土師器が出土した。	63
267	LF59・60	Ⅴ	楕円形	106	74	14	底面には起伏が見られる。遺物の出土はない。	63
443	MS42	Ⅴ	楕円形	126	102	42	ＳＫⅠ444を切る。土師器片、鍛冶滓が出土した。	49
445	MR42	Ⅴ	ほぼ円形	148	136	12	底面は平坦で壁は急に立ち上がる。土師器が出土した。	63
447	MT42	Ⅴ	楕円形	112	88	7	ＳⅠ446を切る。埋土は黒褐色土単一層。遺物の出土はない。	26
448	LJ60・61 LK60・61	Ⅴ	楕円形	293	237	33	底面には起伏が見られ、南西側に深さ22cmの長楕円形の窪みがある。埋土の北西側上位に焼土が見られる。土師器の坏、甕(71－104)が出土している。	64
453	LH57	Ⅴ	円形	72	68	18	壁は底面から急に立ち上がる。遺物の出土はない。	64
455	MC47	Ⅳ	不整楕円形	83	62	21	断面形は擂り鉢状である。土師器が出土している。	64
458	MC47・48	Ⅳ	円形	108	100	8	底面は平坦である。遺物の出土はない。	64
489	MM40・41	Ⅴ	楕円形	197	164	22	平坦な底面から、壁が急に立ち上がる。土師器が出土した。	64
514	NA43	Ⅴ	不整楕円形	(126)	(92)	42	遺構の一部が調査区外となっている。断面形は擂り鉢状である。遺物の出土はない。	64
522	MR44	Ⅴ	不整円形	120	104	20	ＳＫ578と接するが、新旧関係は不明である。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。埋土上位に焼土が堆積している。土師器甕(71－105・106)が出土している。	65
531	LL・LK57	Ⅴ	楕円形	66	54	12	埋土上位に焼土層が見られる。壁は外傾して立ち上がる。土師器甕の破片が出土した。	65
562	LI58	Ⅳ	楕円形	66	(31)	6	ＳＤ560・460・459と重複する。560より新しく、460、459より古い。遺物の出土はない。	89
564	LG57	Ⅴ	（円形）	(62)	(33)	10	調査区内南北に走るＵ字溝によって、東側が失われている。底面はほぼ平坦で焼土が認められる。遺物の出土はない。	65
573	MQ45	Ⅴ	ほぼ円形	100	88	16	上端部に比べ二回りほど小さい底面から緩く立ち上がる。土師器細片が出土している。	65
574	MQ44	Ⅴ	不整楕円形	92	68	26	ＳＸ634を切り、ＳＫ575に切られる。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。土師器甕片、土玉(71－107、図版13)が出土した。	65
575	MQ44	Ⅴ	不整楕円形	108	88	22	ＳＫ574・576を切る。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。 土師器片が出土した。	65
576	MR44	Ⅴ	不整円形	182	160	18	ＳＫ575に切られる。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。土師器片が出土した。	65
578	MR44	Ⅴ	楕円形	138	104	18	ＳＸ634と重複し、ＳＫ522と接するが、新旧関係はともに不明である。土師器甕の破片が出土した。	65
580	MD45	Ⅴ	円形	156	146	28	底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。埋土の上位から中位にかけて焼土が堆積している。埋土各層より多数の土師器や鍛冶滓が出土した。この内、土師器坏(71－108、72－109)、土師器甕(72－110・111)を図化した。埋土下位から採取した炭化材による放射性炭素年代測定の結果、1,210±35年前(yrBP±1σ)という数値を得ている。〔図版7〕	66
592	LI57	Ⅳ	楕円形	(75)	42	33	ＳＤ560、ＳＫＰ561と重複する。本遺構は560より新しく、561より旧い。底面南側にピット状の窪みがある。壁の立ち上がりは垂直に近い。遺物の出土はない。	89
610	MI50	Ⅴ	隅丸方形	108	84	12	底面は平坦で、壁は外傾している。土師器の破片と須恵器甕(72－112)が出土した。	66
629	LL59	Ⅴ	不整円形	72	68	36	ＳＢ608-P3に切られる。本遺構は608-P3の掘り方とも考えられたが、埋土の堆積状況等から個別の遺構であると判断した。土師器坏の破片が出土している。	66
630	LS48	Ⅳ	不整円形	168	148	36	底面は平坦で西側に緩く傾斜する。壁はやや外傾して立ち上がる。土師器、鍛冶滓が出土している。この内、柱状高台の土師器皿(72－113、図版11)を図化した。	66
631	LS・LT49	Ⅳ	不整楕円形	64	46	5	底面は平坦である。土師器片が出土した。	66
632	LT49	Ⅳ	不整円形	132	126	24	底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。土師器片と須恵器甕(72－114、図版13)が出土した。	66
653	LQ53	Ⅴ	不整楕円形	60	46	8	底面はほぼ平坦である。遺物の出土はない。	66

第14表　土坑観察表（３）

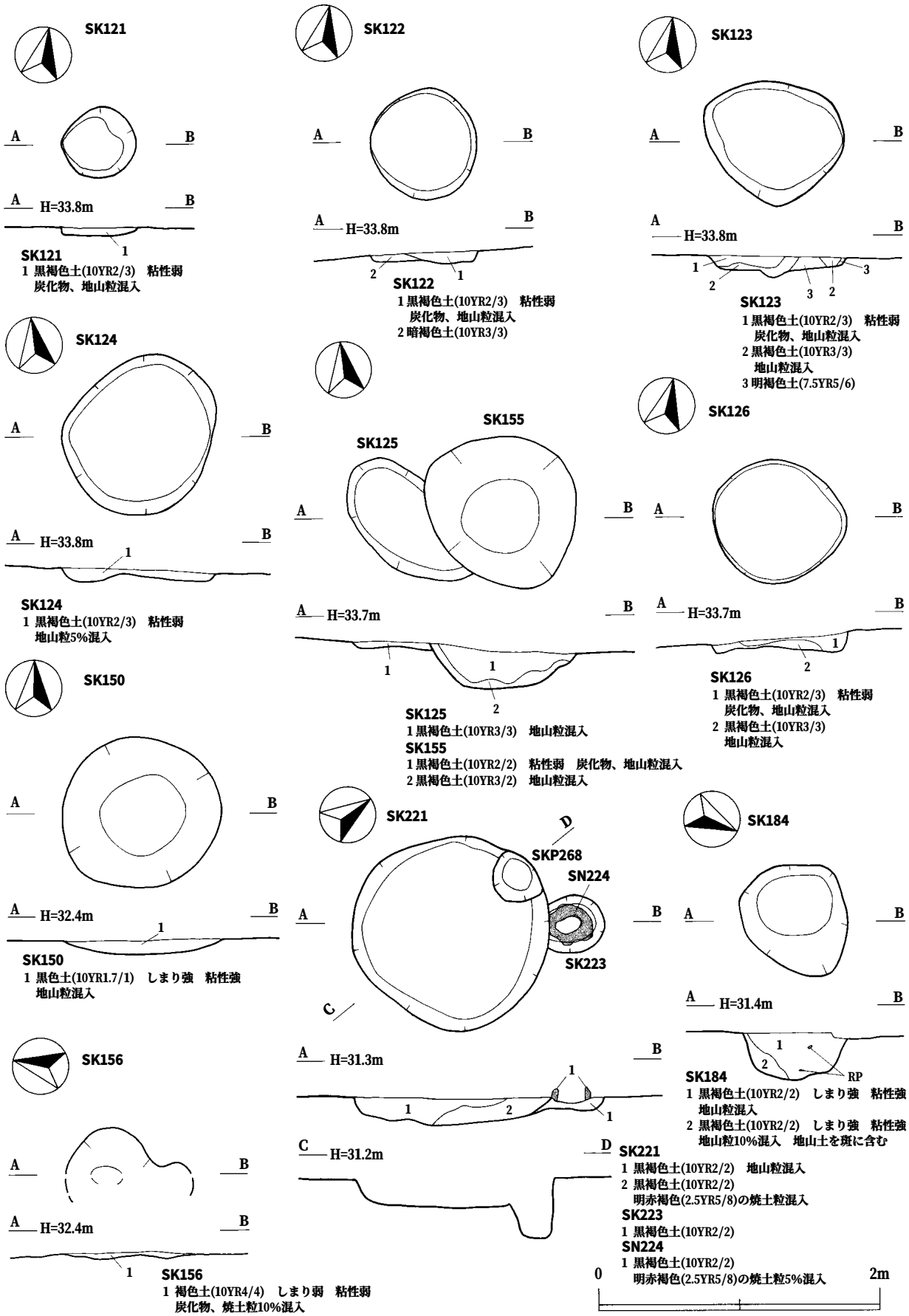
遺構番号	地　区	検出面	平面形状	規模（cm）			特徴、出土遺物、その他	挿図番号
				長軸	短軸	深さ		
660	ML40	Ⅴ	不整楕円形	70	31	10	西壁は底面から緩く立ち上り上端に至る。東壁は垂直気味に立ち上がる。土師器片が出土した。	66
664	MO41	Ⅴ	楕円形	66	40	10	底面は平坦である。遺物の出土はない。	66
689	MD46	Ⅳ	不整楕円形	102	74	16	ＳＫＰ688に切られる。遺物の出土はない。	67
690	MD45･46	Ⅳ	不整楕円形	120	98	8	底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩い。土師器が出土した。	67
702	LT47･48	Ⅳ	（隅丸方形）	（184）	（68）	（20）	14･15年度の両調査区に跨って検出された遺構である。第68図Ａ－Ｂがほぼその境界となる。また、本遺構は、ＳＫ969に切られる。969も両年度調査区を跨ぐと推定されるが、14年度調査では検出されていない。このため、本遺構の14年度調査分の西壁は、本遺構より新しい969の壁である可能性が高い。埋土中から土師器と須恵器が出土している。この内、土師器鍋(72－115、図版12)を図化した。	68
703	LS･LT48	Ⅳ	楕円形	62	41	51	底面西側がピット状に深く掘り込まれており、柱穴の可能性がある。埋土より土師器片、鍛冶滓が出土している。	67
721	MA･MB47	Ⅳ	ほぼ円形	147	133	23	底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。第2層が焼土層である。土師器が出土し、この内、坏(72－116)と甕(72－117)を図化した。	67
769	MA48	Ⅳ	楕円形	140	126	8	底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。土師器、須恵器甕(73－118、図版13)が出土している。	67
773	LT47	Ⅳ	（楕円形）	（84）	72	8	14･15の両年度調査区に跨ぐ遺構であると推定されるが、14年度調査後の本工事において南東側が失われた。遺物の出土はない。	67
840	MA46･47	Ⅴ	楕円形	61	48	15	底面にはやや起伏があり、壁は緩く立ち上がる。遺物の出土はない。	67
861	JO69	Ⅴ	楕円形	67	58	6	底面は平坦で、ほぼ炭化材で覆われており、炭窯の可能性がある。ここで採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,130±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。遺物の出土はなかった。	67
894	LF54	Ⅴ	楕円形	145	117	120	深く掘り込まれており、地山層を貫き砂層に達する。平坦な底面は径56cmの円形で、壁はこの底面から外傾し立ち上がり上端に至る。土師器坏や須恵器壺(73－119～121)、フイゴの羽口(102－157、図版14)、鍛冶滓が埋土中位より出土している。〔図版7〕	69
898	MC42	Ⅳ	ほぼ円形	204	192	40	ＳＤ431に切られる。平坦な底面から壁は緩く立ち上がっている。6層に分層できたが、第2層が焼土層である。また、第5層を含むこの上位各層より土師器片約80点など多数の遺物が出土し、この内、土師器坏(73－122)、土師器甕(73－123)、支脚(73－124、図版13)を図化した。埋土中位から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,080±35年前(yrBP±1σ)という結果が得られている。〔図版7〕	69
901	MH42･43 MI42･43	Ⅴ	ほぼ円形	99	86	42	ＳＩ900、ＳＫ903を切る。底面には起伏が見られ、壁は外傾気味に立ち上がる。土師器75点が出土した。検出した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,155±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。	35 37
903	MH42･43 MI42･43	Ⅴ	（円形）	－	－	－	ＳＩ900の南壁を切る。ＳＫ901によりに大部分が失われており東縁部分が僅かに残存する。遺物の出土はない。	35
928	LS47	Ⅳ	不整円形	140	123	18	ＳＤ924に切られる。底面には起伏が見られ、緩やかに立ち上がり上端に至る。埋土の中上位よりおはじき状の礫が850点余り出土した。この他に土師器甕(74－125)、須恵器壺(74－126、図版13)、椀形鍛冶滓が出土している。埋土中より採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,145±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。〔図版7〕	70
969	LT47	Ⅳ	（円形）	（118）	158	16	14･15の両年度調査区に跨ぐ遺構であると推定されるが、14年度調査では検出されていない。このため、遺構の北側については不明である。ＳＫ702を切ることから、702の14年度調査分の西壁の一部は、本遺構の北西壁である可能性がある。埋土各層より70点余りの土師器が出土した。埋土中から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,185±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。	68
991	LT44	Ⅳ	（不整円形）	60	（52）	22	トレンチにより西側が失われている。底面東側がピット状に窪んでおり、柱穴の可能性がある。遺物の出土はない。	69
992	LT44	Ⅳ	ほぼ円形	58	52	22	ＳＫ993に西側が切られている。断面形状は椀形である。遺物の出土はない。	69
993	LT44	Ⅳ	楕円形	52	36	6	ＳＫ992を切り、西端部はトレンチで失なわれている。遺物の出土はなかった。	69


SK3
A
B
H=35.4m
1
SK3
1 黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり強　粘性弱
SK13
H=33.2m
1
2
SK13
1 黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性弱
地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/2)　粘性弱
地山粒、炭化物混入
SK18
H=32.5m
1
2
SK18
1 黒褐色土(10YR2/2)　粘性弱
炭化物、焼土粒、地山粒混入
2 黒褐色土(10YR3/1)
炭化物、焼土粒混入
SK20
H=32.4m
2
1
SK20
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
地山粒混入
2 暗褐色土(10YR3/3)　粘性弱
SK45
H=33.5m
1
SK45
1 黒褐色土(10YR2/2)　粘性弱
地山粒混入
SK55
H=32.0m
1
SK55
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性強
炭化物、焼土粒、地山粒混入
SK56
H=32.2m
1
SK56
1 黒褐色土(10YR2/2)　粘性強
炭化物、地山粒混入
SK57
H=32.4m
1
SK57
1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
SK58
H=32.1m
1
2
3
4
5
6
6
SK58
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱
炭化物混入
2 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
地山粒、明赤褐色(5YR5/8)の焼土粒5%混入
3 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
地山粒7%混入
4 暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱
地山粒10%混入
5 明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強　粘性弱
炭化物混入
6 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性強
焼土粒10%、地山粒10%混入
SK59
71−98
H=32.3m
1
SK59
1 黒褐色土(10YR2/2)しまり強　粘性弱
炭化物混入
SK70
H=32.1m
1
2
3
SK70
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
2 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性強
炭化物、地山粒5%混入
3 褐色土(10YR4/4)　しまり強　粘性弱
0
2m

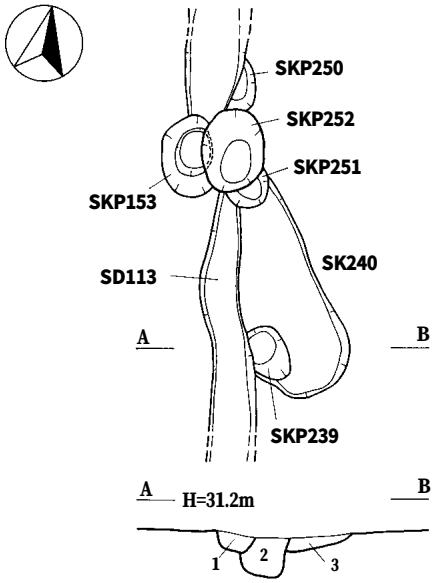
第60図　土坑（1）


SK 82
A
B
H=30.7m
1
SK 82
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性弱
地山粒(φ5～20㎜)40%混入
SK 93
H=32.7m
SK 93
1 黒褐色土(10YR2/2)　粘性強
地山粒混入
SKP 323
SK 114
D
C
H=31.1m
RP
7
H=31.1m
S
SK 114
1 暗褐色土(10YR3/3)
焼土粒混入
2 赤褐色土(2.5YR4/8)　しまり強　粘性弱　焼土層
3 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒混入
4 黒褐色土(10YR2/2)
5 黒褐色土(10YR2/3)
6 黒褐色土(10YR2/2)
7 黒褐色土(10YR2/3)　粘性強
炭化物、焼土粒、地山粒混入
8 黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性強
9 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒混入
10 黒褐色土(10YR3/2)
地山土を斑に含む
SK 92
H=34.7m
SK 92
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱
地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
地山粒混入
SK 115
H=32.4m
SK 115
1 黒色土(10YR1.7/1)
地山粒混入
SK 118
H=31.8m
SK 118
1 黒褐色土(10YR3/2)
地山土を斑に含む
2 黒褐色土(10YR2/3)　粘性強
地山土を全体的に斑に含む
3 黒褐色土(10YR2/3)　粘性強
地山粒が斑に混入
4 黒褐色土(10YR2/2)　粘性強
地山粒混入
5 黒褐色土(10YR2/2)　粘性強
地山粒混入
SK 117
H=31.4m
SK 117
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強
下位で地山土を斑に含む
SK 119
H=34.1m
SK 119
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
地山粒(φ10～50mm)30%混入
2 黒褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱
地山粒(φ10～50mm)30%混入
SK 120
H=34.0m
SK 120
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
地山粒(φ10～50mm)30%混入
0
2m

第61図　土坑（２）


SK121
A
B
H=33.8m
1
SK121
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
炭化物、地山粒混入
SK122
H=33.8m
2
1
SK122
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
炭化物、地山粒混入
2 暗褐色土(10YR3/3)
SK123
H=33.8m
1
2
3
3
2
SK123
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
炭化物、地山粒混入
2 黒褐色土(10YR3/3)
地山粒混入
3 明褐色土(7.5YR5/6)
SK124
H=33.8m
1
SK124
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
地山粒5%混入
SK155
SK125
SK125
H=33.7m
1
1
2
SK125
1 黒褐色土(10YR3/3)　地山粒混入
SK155
1 黒褐色土(10YR2/2)　粘性弱　炭化物、地山粒混入
2 黒褐色土(10YR3/2)　地山粒混入
SK126
H=33.7m
1
2
SK126
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
炭化物、地山粒混入
2 黒褐色土(10YR3/3)
地山粒混入
SK150
H=32.4m
1
SK150
1 黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性強
地山粒混入
SK221
D
SKP268
SN224
SK223
C
H=31.3m
1
1
2
1
C
H=31.2m
D
SK221
1 黒褐色土(10YR2/2)　地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/2)
明赤褐色(2.5YR5/8)の焼土粒混入
SK223
1 黒褐色土(10YR2/2)
SN224
1 黒褐色土(10YR2/2)
明赤褐色(2.5YR5/8)の焼土粒5%混入
SK184
H=31.4m
1
2
RP
SK184
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
地山粒10%混入　地山土を斑に含む
SK156
H=32.4m
1
SK156
1 褐色土(10YR4/4)　しまり弱　粘性弱
炭化物、焼土粒10%混入
0
2m

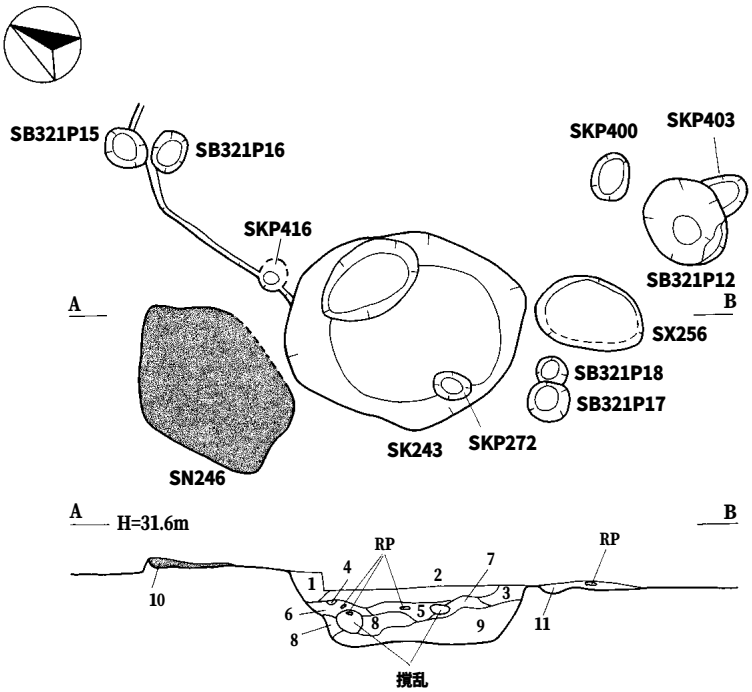
第62図　土坑（３）



SD113
1 黒褐色土(10YR2/2)
地山土を斑に含む

SKP239
2 黒褐色土(10YR2/2)

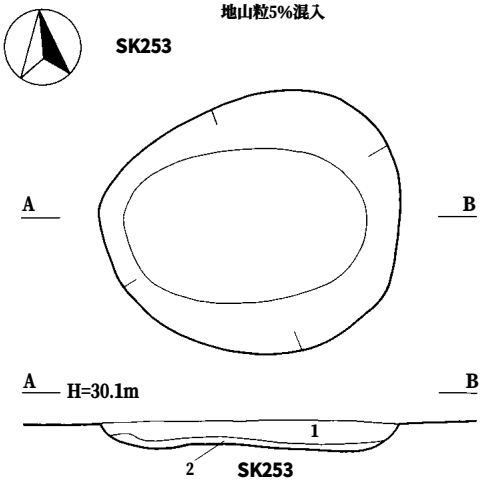
SK240
3 暗褐色土(10YR3/4)
地山粒5%混入



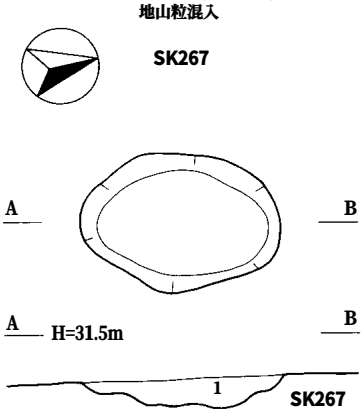
SK243
1 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、地山粒混入
3 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒混入
4 明赤褐色土(5YR5/8)　粘性弱
焼土粒、黒褐色土(10YR2/2)混入
5 黒褐色土(10YR2/3)
6 黒褐色土(10YR2/2)
焼土粒、地山粒混入
7 褐色土(10YR4/4)
地山粒7%混入　黒褐色土が斑に混入
8 褐色土(10YR4/6)　しまり強　粘性弱
黒褐色土が斑に混入
9 黒褐色土(10YR2/2)
地山色の土が斑に混入

SN246
10 明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強　粘性弱

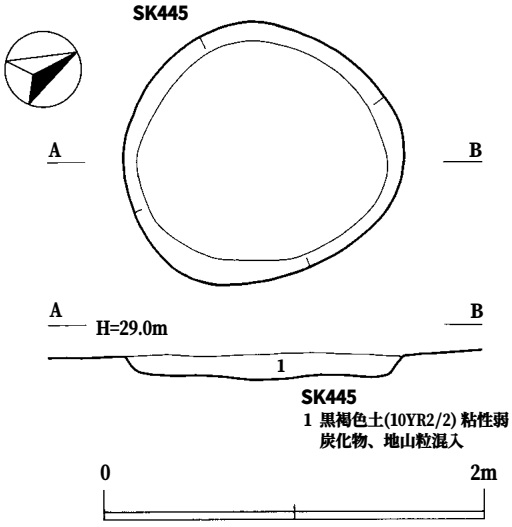
SX256
11 黒褐色土(10YR2/2)
灰オリーブ色土(5Y6/2)が斑に混入



SK253
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱
地山粒混入
2 明褐色土(7.5YR5/6)　しまり強　粘性弱
地山粒混入



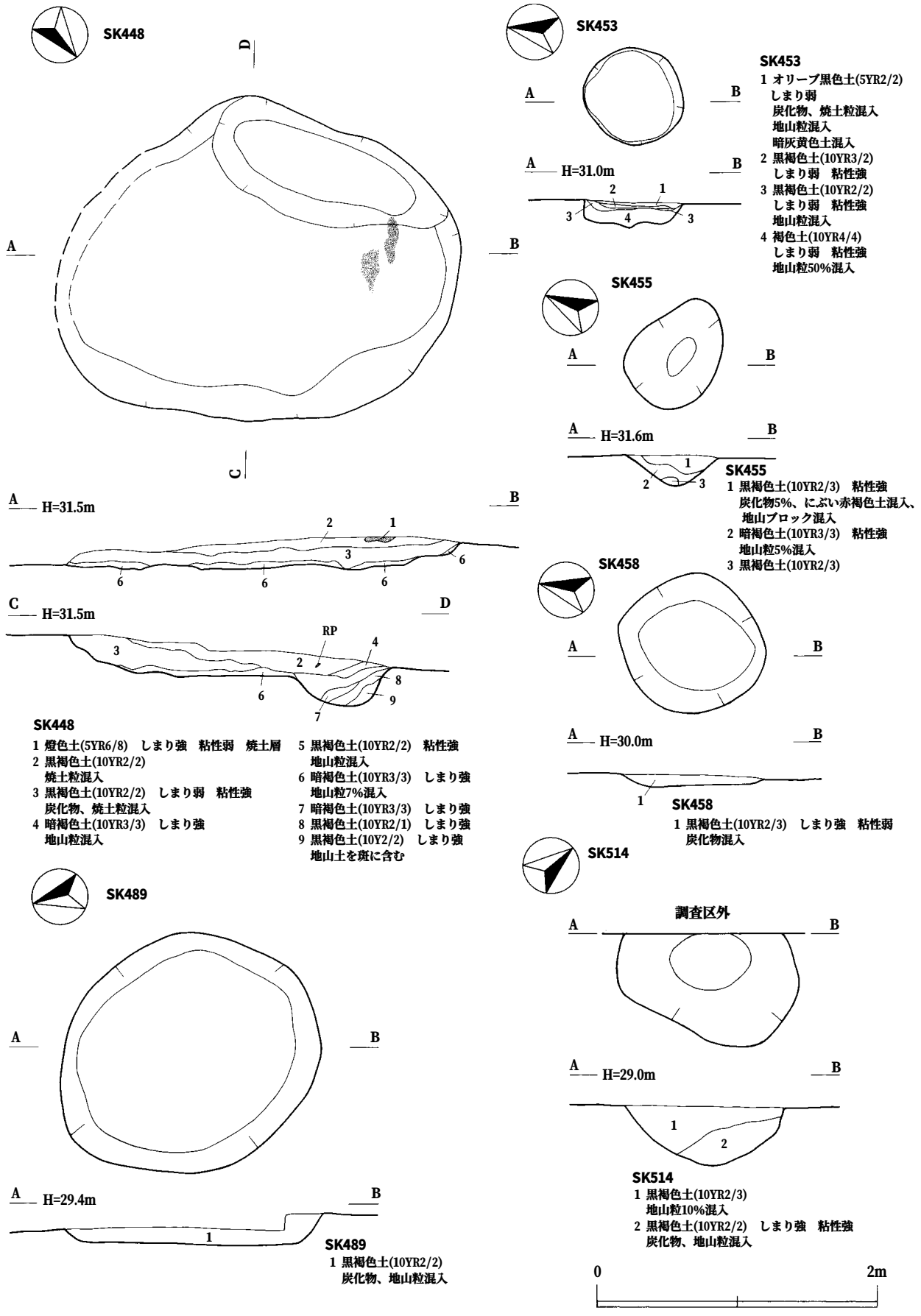
SK267
1 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強
地山粒10%を斑に含む



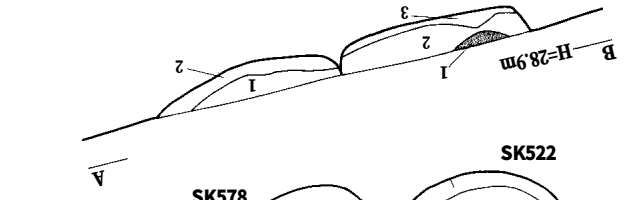
SK445
1 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱
炭化物、地山粒混入

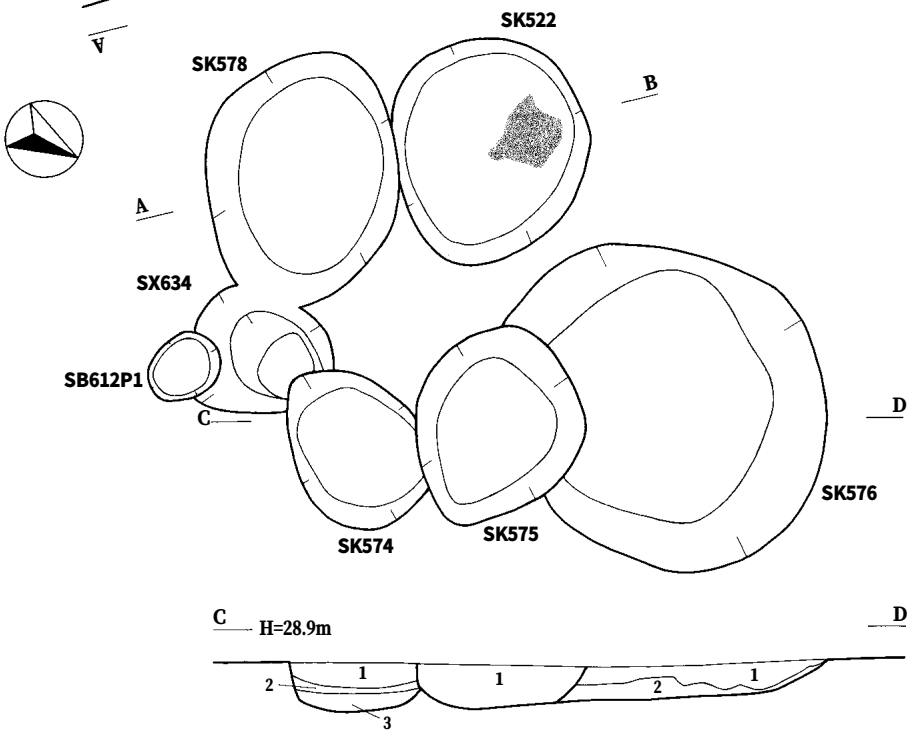
0　2m

第63図　土坑（４）


SK448
A
B
C
D
H=31.5m
H=31.5m
RP
SK448
1 燈色土(5YR6/8)　しまり強　粘性弱　焼土層
2 黒褐色土(10YR2/2)
焼土粒混入
3 黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性強
炭化物、焼土粒混入
4 暗褐色土(10YR3/3)　しまり強
地山粒混入
5 黒褐色土(10YR2/2)　粘性強
地山粒混入
6 暗褐色土(10YR3/3)　しまり強
地山粒7%混入
7 暗褐色土(10YR3/3)　しまり強
8 黒褐色土(10YR2/1)　しまり強
9 黒褐色土(10Y2/2)　しまり強
地山土を斑に含む
SK489
H=29.4m
SK489
1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、地山粒混入
SK453
H=31.0m
SK453
1 オリーブ黒色土(5YR2/2)
しまり弱
炭化物、焼土粒混入
地山粒混入
暗灰黄色土混入
2 黒褐色土(10YR3/2)
しまり弱　粘性強
3 黒褐色土(10YR2/2)
しまり弱　粘性強
地山粒混入
4 褐色土(10YR4/4)
しまり弱　粘性強
地山粒50%混入
SK455
H=31.6m
SK455
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性強
炭化物5%、にぶい赤褐色土混入、
地山ブロック混入
2 暗褐色土(10YR3/3)　粘性強
地山粒5%混入
3 黒褐色土(10YR2/3)
SK458
H=30.0m
SK458
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
炭化物混入
SK514
調査区外
H=29.0m
SK514
1 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒10%混入
2 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
炭化物、地山粒混入
0
2m

第64図　土坑（５）





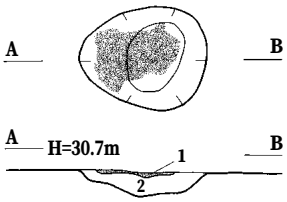
SK522
1 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱
　炭化物混入
2 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱
　炭化物、焼土粒、地山粒5%混入
3 暗褐色土(10YR3/4)　しまり強
　炭化物、焼土粒、地山粒15%混入

SK574
1 黒褐色土(10YR2/2)
　炭化物、焼土粒、地山粒20%混入
2 黒色土(10YR1,7/1)　しまり強　粘性強
　炭化物、焼土粒、地山粒5%混入
3 黒褐色土(10YR2/2)
　炭化物、地山粒混入

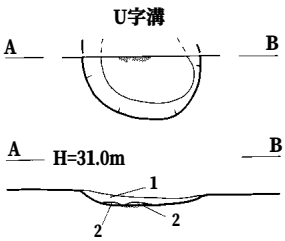
SK575
1 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強
　炭化物、地山粒5%混入

SK576
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強
　炭化物、焼土粒、地山粒30%混入
2 暗褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性強
　地山粒5%、黒色土(10YR1.7/1)混入

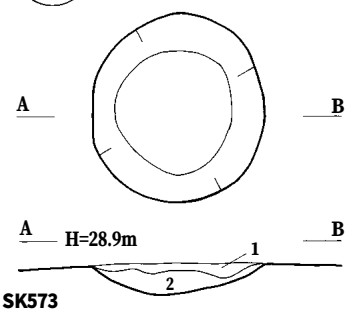
SK578
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱
　炭化物、地山粒10%混入
2 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
　炭化物、地山粒(φ1～10mm)40%混入



SK531
1 暗赤褐色土(5YR3/6)　粘性弱
2 黒褐色土(10YR2/2)

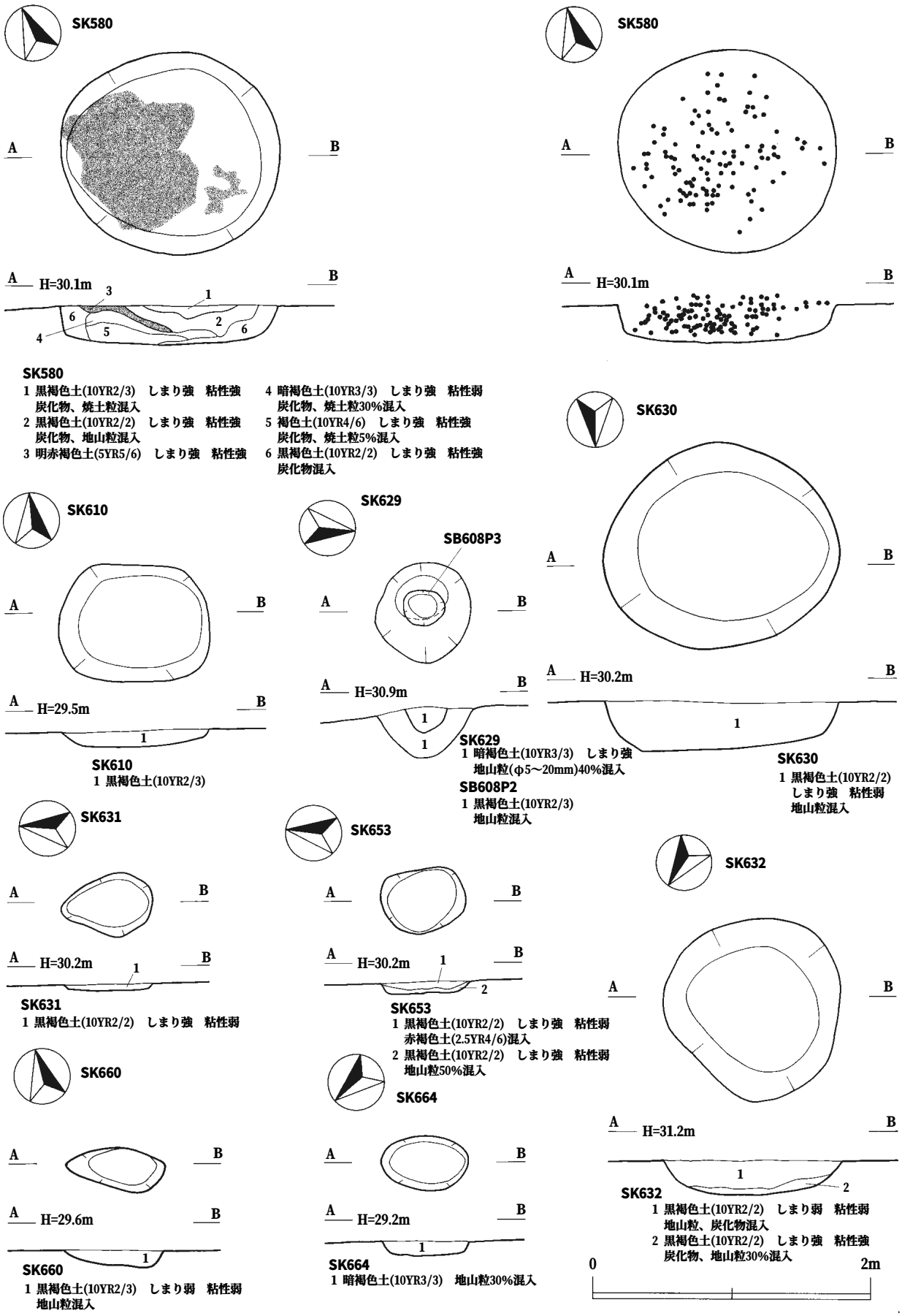


SK564
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
　炭化物混入
2 褐色土(10YR4/4)　しまり強
　地山粒混入

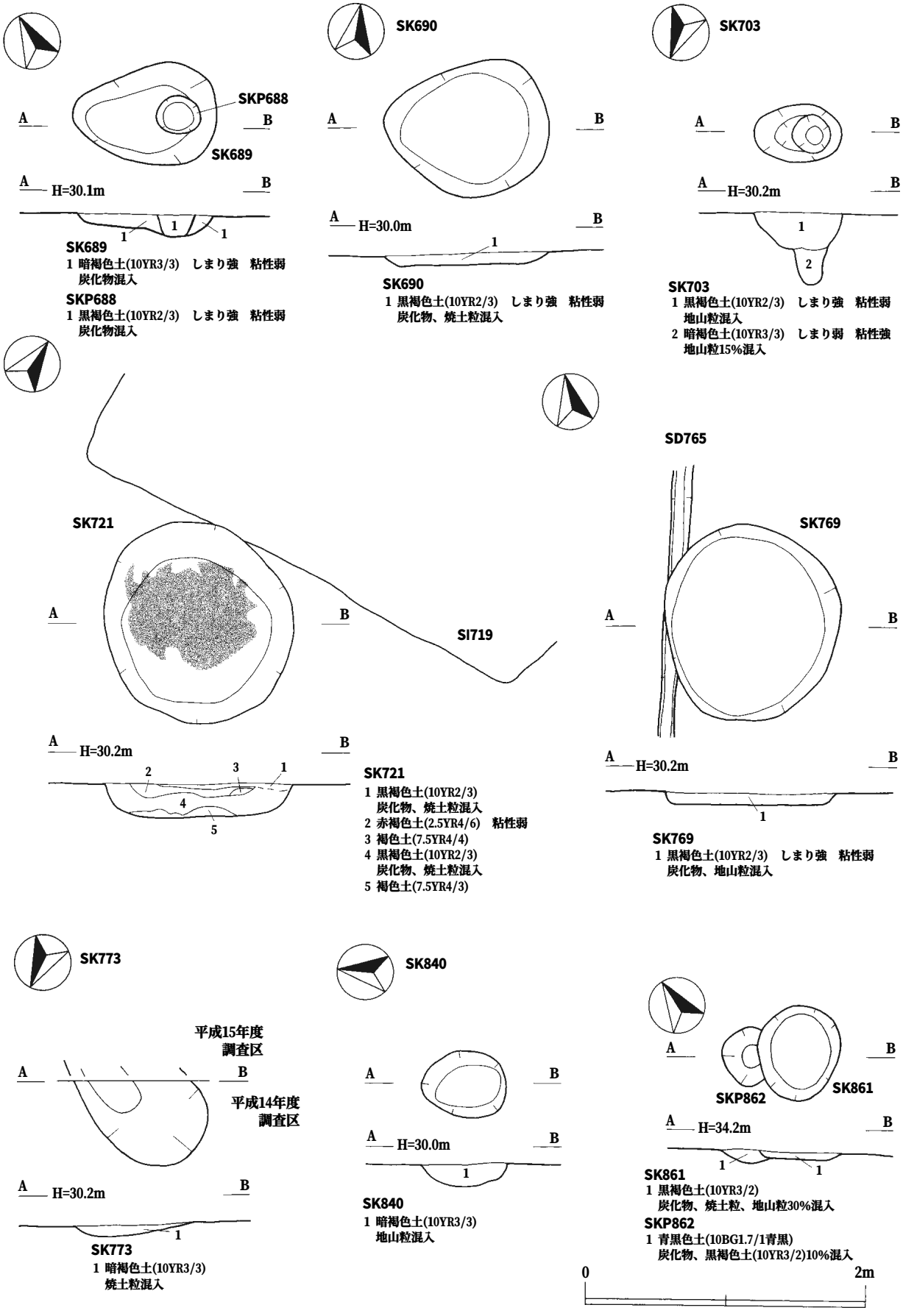


SK573
1 黒褐色土(10YR2/2)　粘性弱
　炭化物、焼土粒、地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強
　炭化物、地山粒10%混入

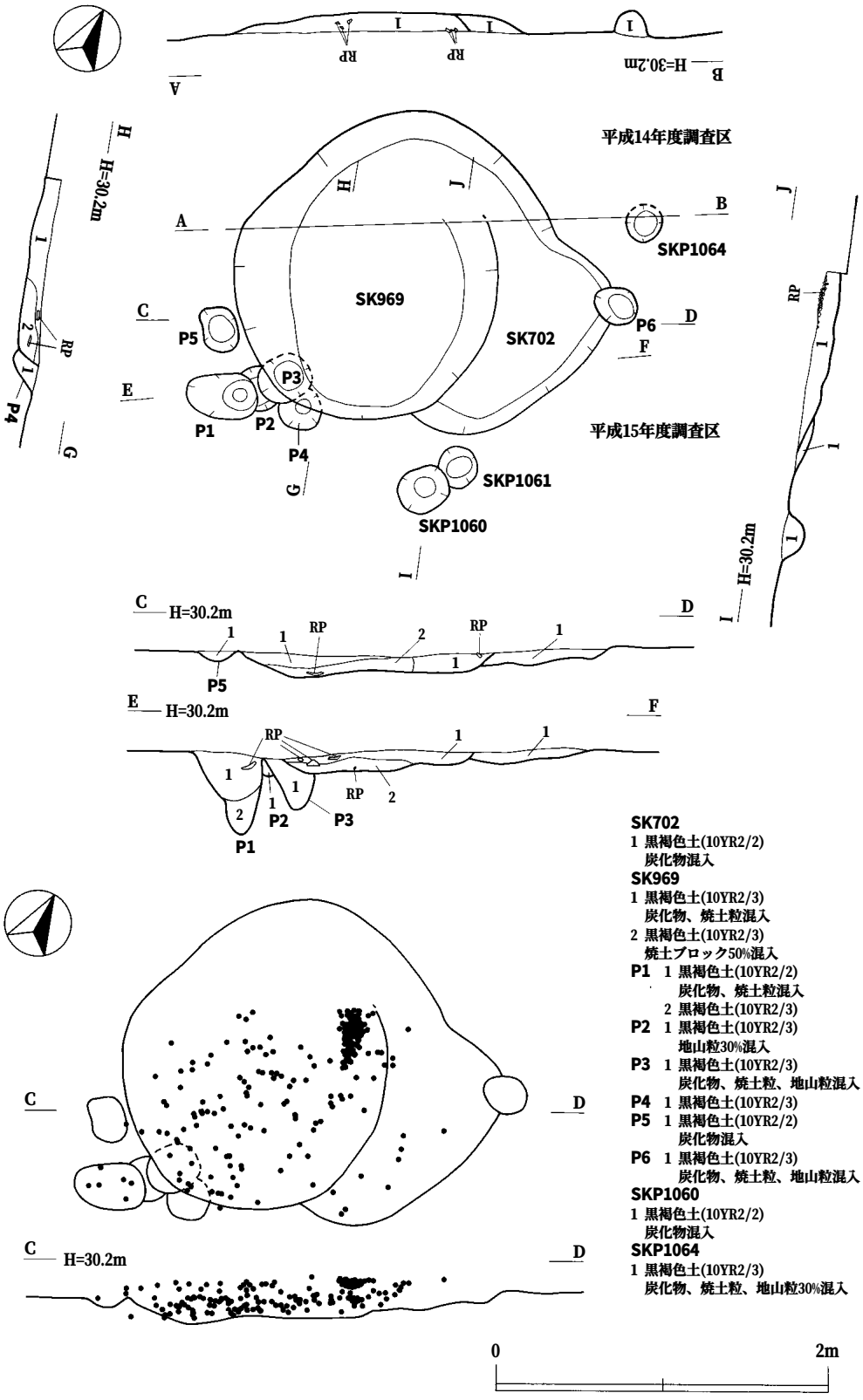
第65図　土坑（6）


SK580
A
B
A H=30.1m B
1
2
3
4
5
6
SK580
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性強
炭化物、焼土粒混入
2 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
炭化物、地山粒混入
3 明赤褐色土(5YR5/6)　しまり強　粘性強
4 暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱
炭化物、焼土粒30%混入
5 褐色土(10YR4/6)　しまり強　粘性強
炭化物、焼土粒5%混入
6 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
炭化物混入
SK580
SK610
A H=29.5m B
SK610
1 黒褐色土(10YR2/3)
SK629
SB608P3
A H=30.9m B
SK629
1 暗褐色土(10YR3/3)　しまり強
地山粒(φ5～20mm)40%混入
SB608P2
1 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒混入
SK630
A H=30.2m B
SK630
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり強　粘性弱
地山粒混入
SK631
A H=30.2m B
SK631
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱
SK653
A H=30.2m B
SK653
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱
赤褐色土(2.5YR4/6)混入
2 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱
地山粒50%混入
SK632
A H=31.2m B
SK632
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性弱
地山粒、炭化物混入
2 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
炭化物、地山粒30%混入
SK660
A H=29.6m B
SK660
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱　粘性弱
地山粒混入
SK664
A H=29.2m B
SK664
1 暗褐色土(10YR3/3)　地山粒30%混入
0
2m

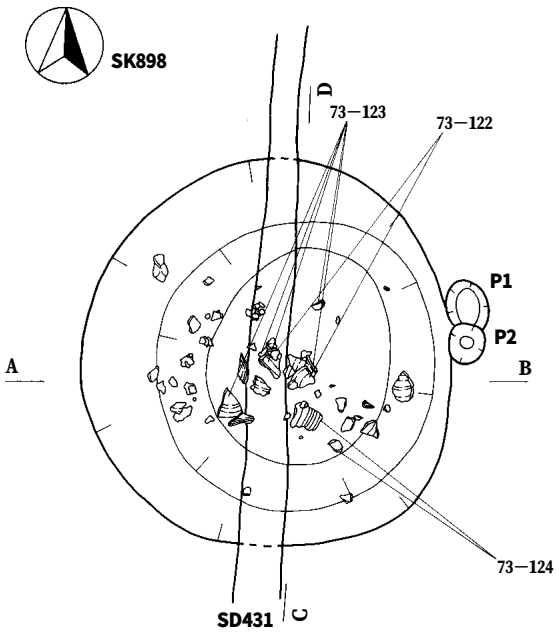
第66図　土坑（７）

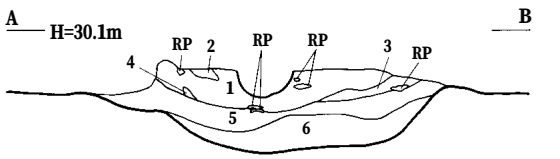

SKP688
SK689
A
B
H=30.1m
SK689
1 暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱
炭化物混入
SKP688
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
炭化物混入
SK690
H=30.0m
SK690
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
炭化物、焼土粒混入
SK703
H=30.2m
SK703
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
地山粒混入
2 暗褐色土(10YR3/3)　しまり弱　粘性強
地山粒15%混入
SK721
SI719
H=30.2m
SK721
1 黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒混入
2 赤褐色土(2.5YR4/6)　粘性弱
3 褐色土(7.5YR4/4)
4 黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒混入
5 褐色土(7.5YR4/3)
SD765
SK769
H=30.2m
SK769
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
炭化物、地山粒混入
SK773
平成15年度
調査区
平成14年度
調査区
H=30.2m
SK773
1 暗褐色土(10YR3/3)
焼土粒混入
SK840
H=30.0m
SK840
1 暗褐色土(10YR3/3)
地山粒混入
SKP862
SK861
H=34.2m
SK861
1 黒褐色土(10YR3/2)
炭化物、焼土粒、地山粒30%混入
SKP862
1 青黒色土(10BG1.7/1青黒)
炭化物、黒褐色土(10YR3/2)10%混入
0
2m

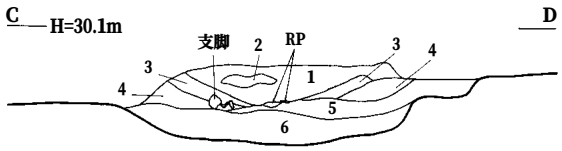
第67図　土坑（８）


平成14年度調査区
平成15年度調査区
SK969
SK702
SKP1064
SKP1061
SKP1060
P1
P2
P3
P4
P5
P6
RP
H=30.2m
SK702
1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物混入
SK969
1 黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)
焼土ブロック50%混入
P1 1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)
P2 1 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒30%混入
P3 1 黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
P4 1 黒褐色土(10YR2/3)
P5 1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物混入
P6 1 黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
SKP1060
1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物混入
SKP1064
1 黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒、地山粒30%混入
0
2m

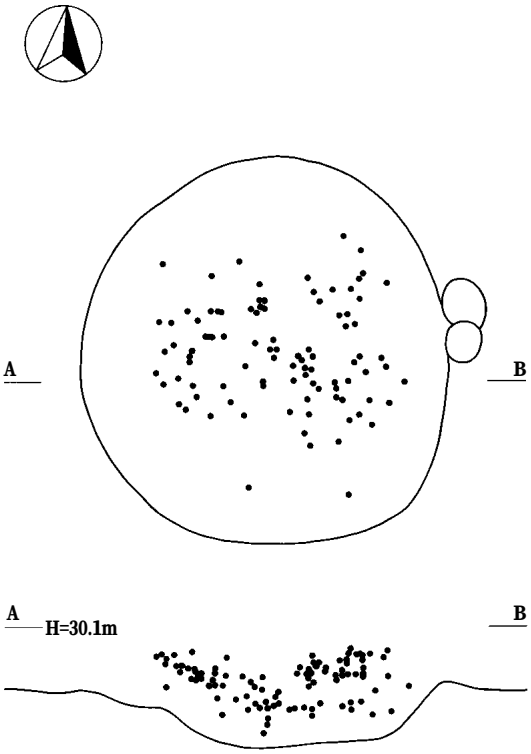
第68図　土坑（９）

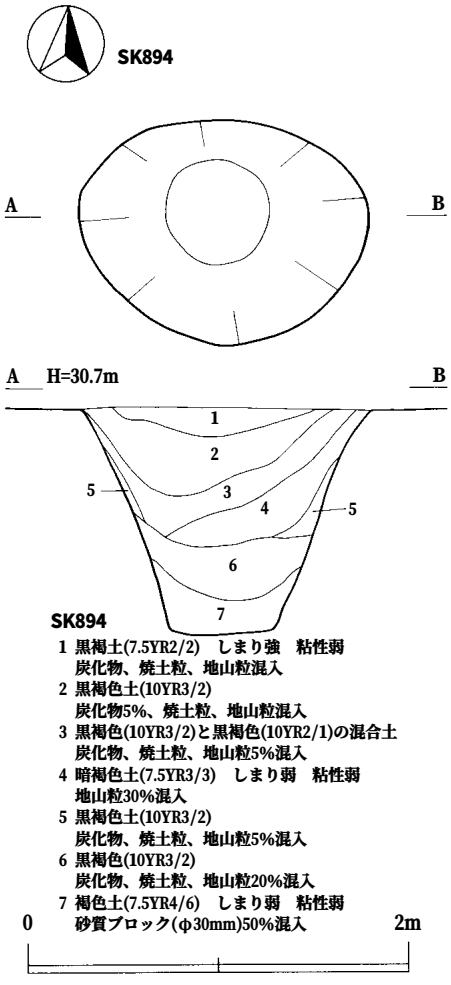






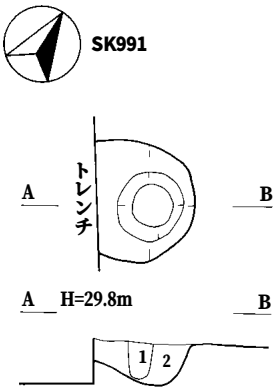
SK898
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　炭化物、焼土粒混入
2 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱
3 褐色土(10YR4/6)　粘性弱
　炭化物、赤褐色(5YR3/6)の焼土ブロック40%混入
4 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　炭化物、褐色(7.5YR4/6)の地山粒10%混入
5 黒褐色土(10YR2/2)
　炭化物混入
6 黒褐色土(10YR2/2)
　地山粒5%混入



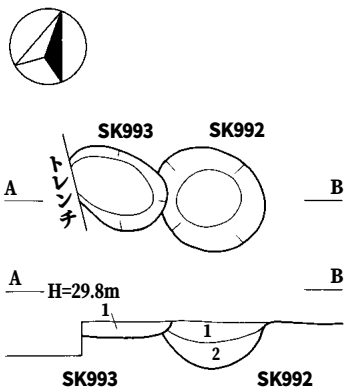


SK894
1 黒褐土(7.5YR2/2)　しまり強　粘性弱
　炭化物、焼土粒、地山粒混入
2 黒褐色土(10YR3/2)
　炭化物5%、焼土粒、地山粒混入
3 黒褐色(10YR3/2)と黒褐色(10YR2/1)の混合土
　炭化物、焼土粒、地山粒5%混入
4 暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり弱　粘性弱
　地山粒30%混入
5 黒褐色土(10YR3/2)
　炭化物、焼土粒、地山粒5%混入
6 黒褐色(10YR3/2)
　炭化物、焼土粒、地山粒20%混入
7 褐色土(7.5YR4/6)　しまり弱　粘性弱
　砂質ブロック(φ30mm)50%混入

0　2m



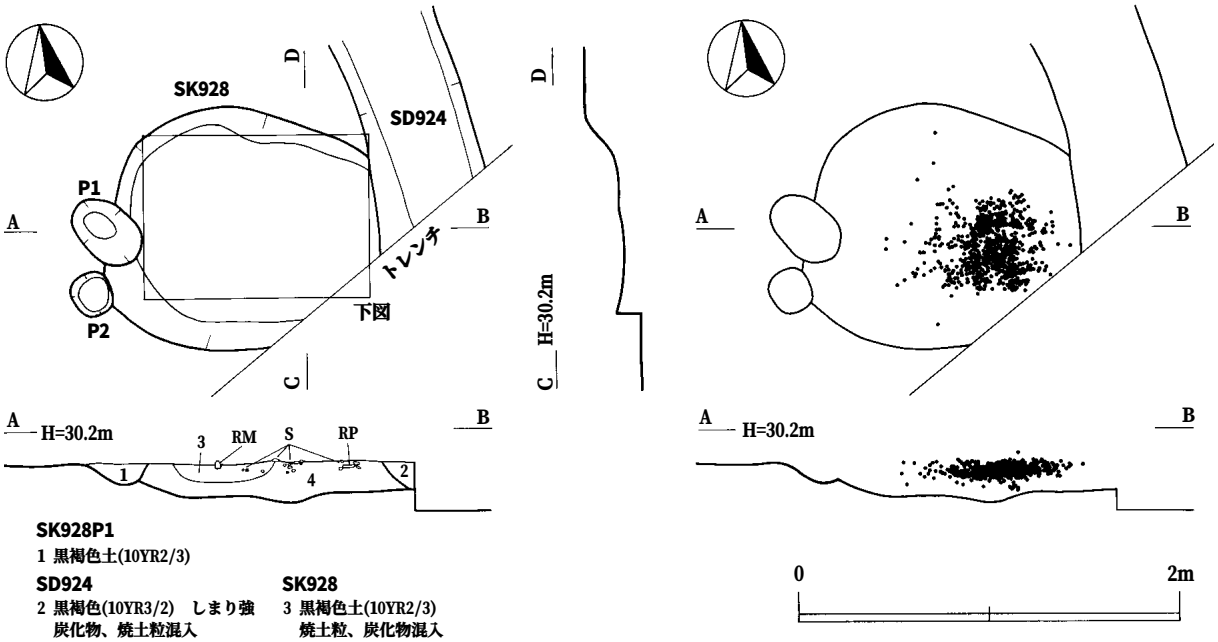
SK991
1 黒色土(10YR2/1)
2 黒褐色土(10YR2/2)
　炭化物、焼土粒混入



SK993
1 黒褐色土(10YR2/3)
　炭化物、焼土粒混入

SK992
1 黒褐色土(10YR2/2)
　炭化物、焼土粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)
　褐色土(10YR4/6)50%混入

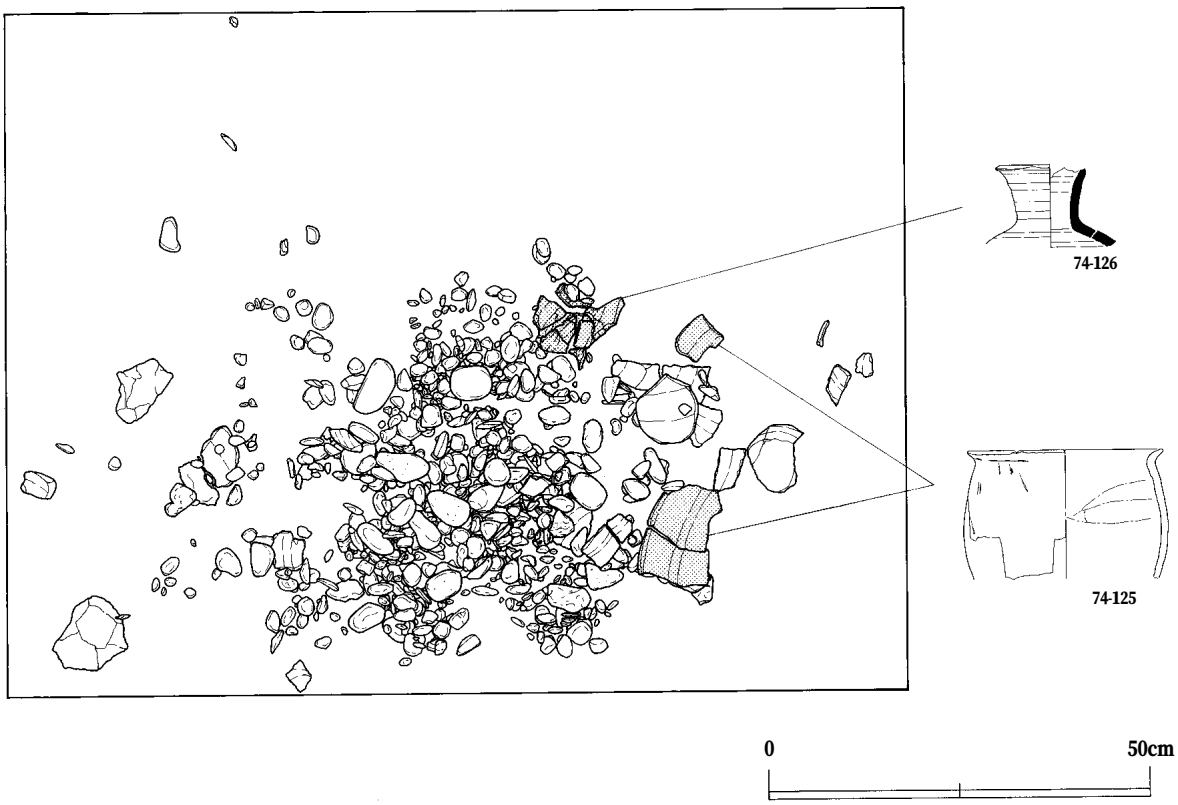
第69図　土坑（10）



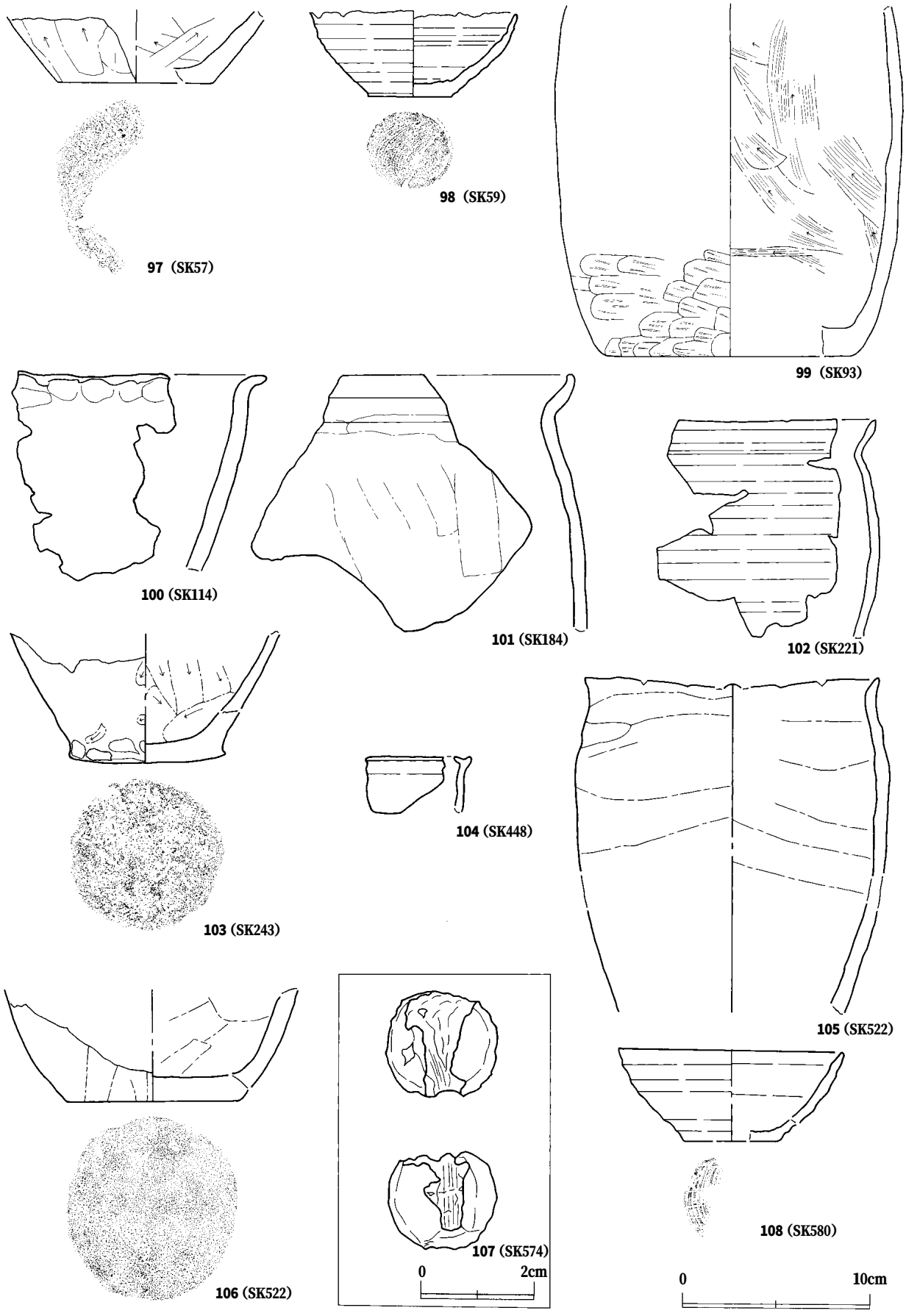
SK928P1
1 黒褐色土(10YR2/3)

SD924
2 黒褐色(10YR3/2)　しまり強
炭化物、焼土粒混入

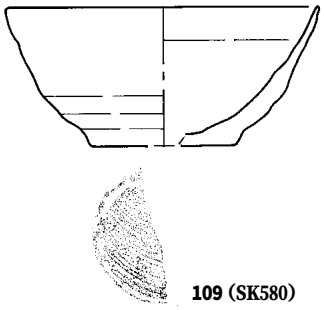
SK928
3 黒褐色土(10YR2/3)
焼土粒、炭化物混入
4 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒混入



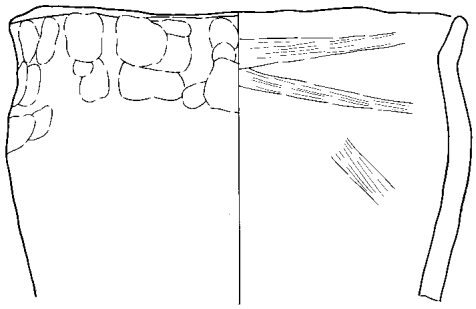
第70図　土坑（11）



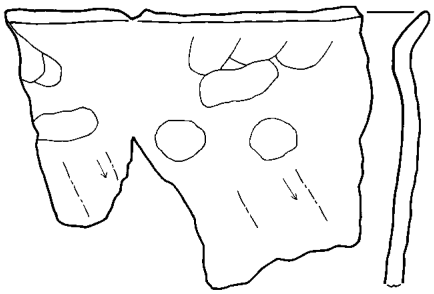
第71図　土坑内出土遺物（１）



109（SK580）

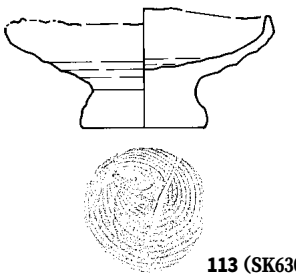


110（SK580）

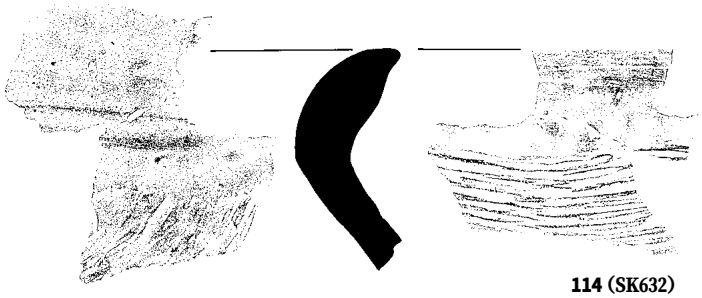


111（SK580）

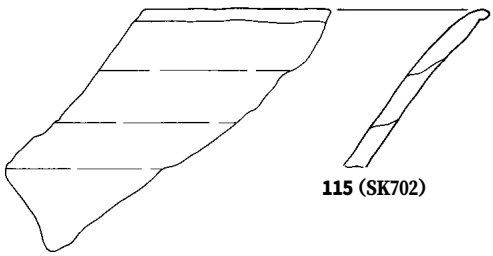
112（SK610）



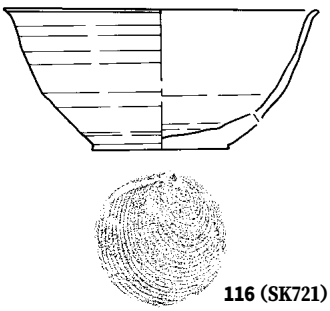
113（SK630）



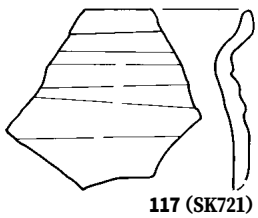
114（SK632）



115（SK702）



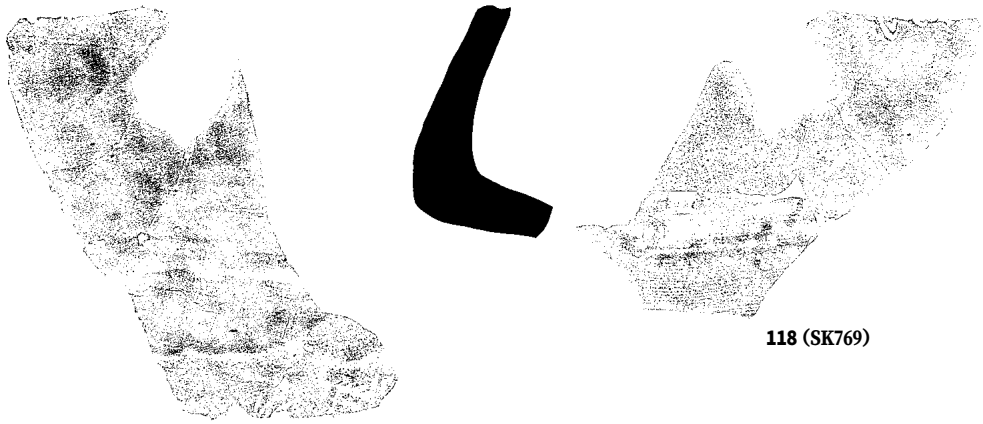
116（SK721）

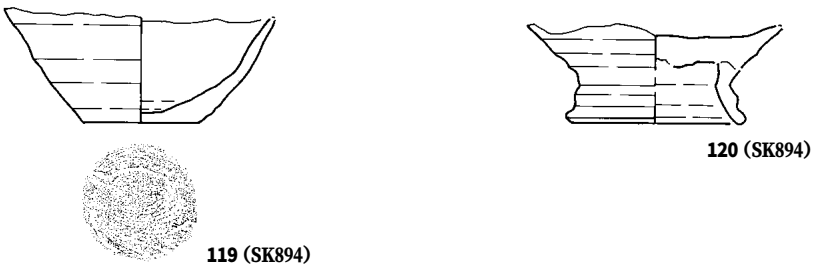


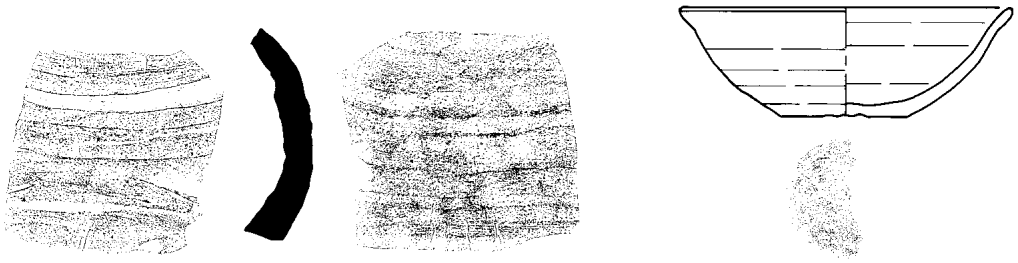
117（SK721）

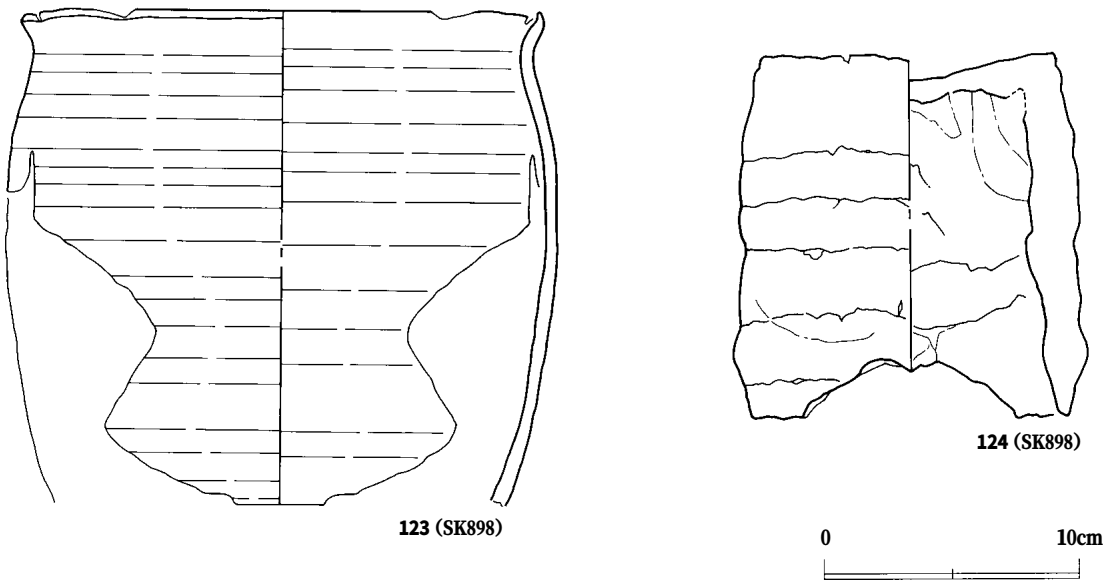
0　10cm

第72図　土坑内出土遺物（２）

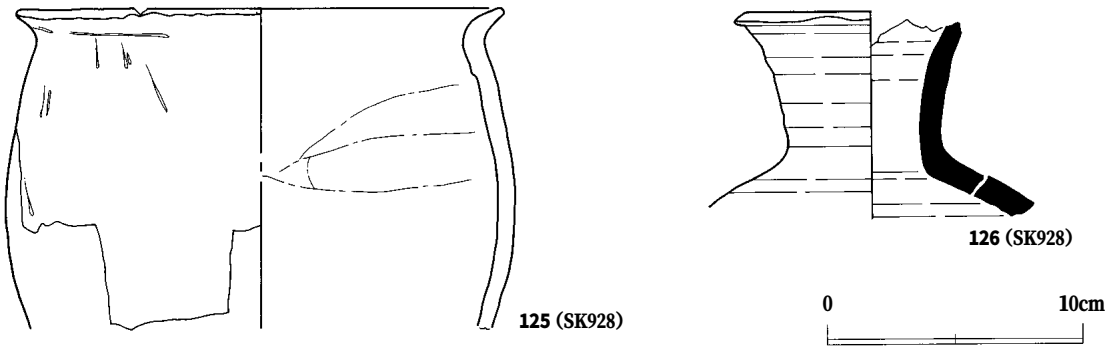








第73図　土坑内出土遺物（３）



第74図　土坑内出土遺物（４）

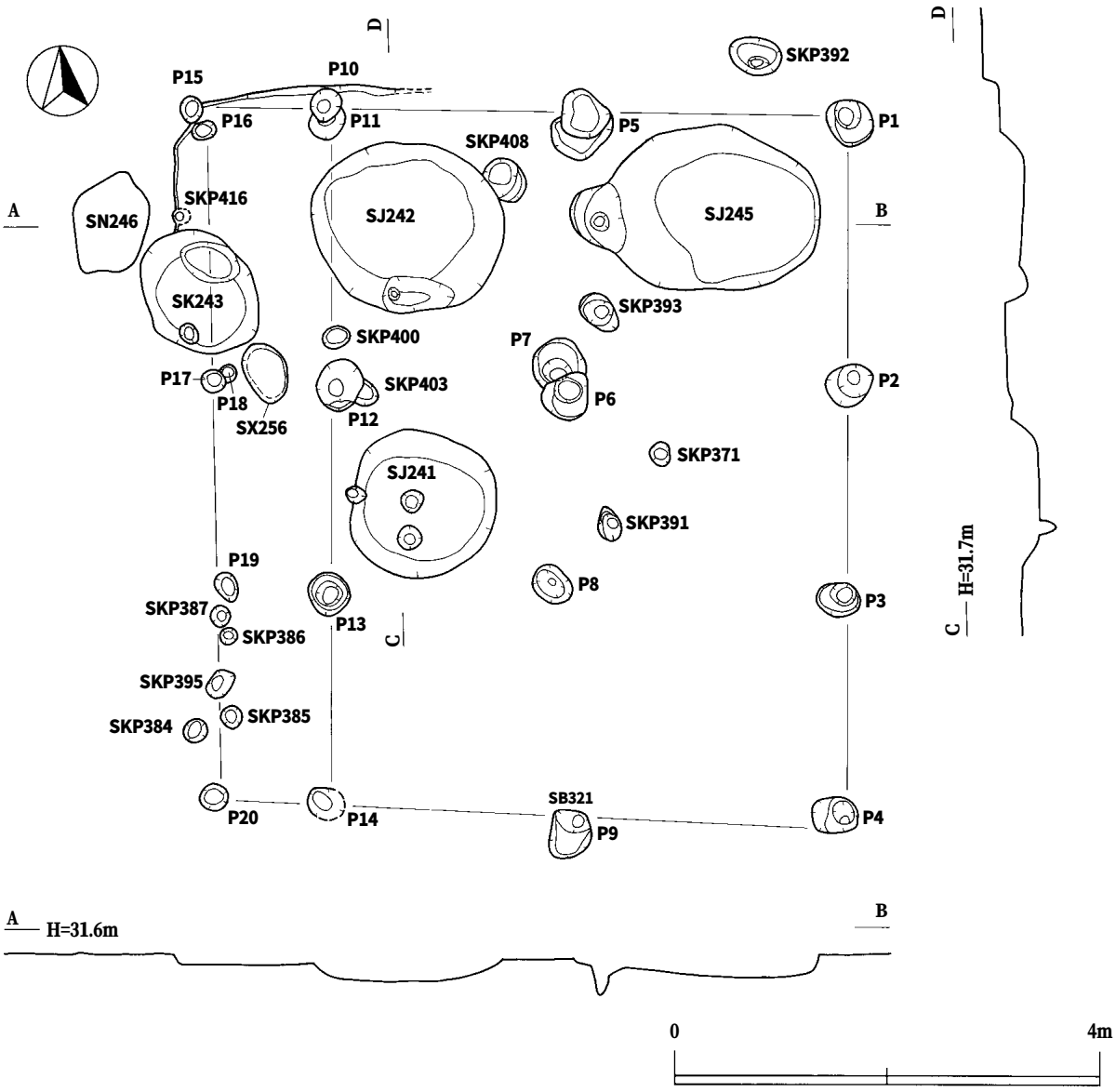
第15表　土坑内出土遺物観察表

挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備　　考
71-97	SK57	土師器	甕	体部～底部	—	8.2	—	調整？	内面ナデ、外面ケズリ	
71-98	SK59	土師器	坏	口縁～底部	11.0	4.5	4.6	回転糸切	内外面ロクロナデ	口縁内外面、外面に黒斑
71-99	SK93	土師器	甕	体部～底部	—	13.2	—	調整？	内面ナデ、外面ケズリ	
71-100	SK114	土師器	甕	口縁～体部	—	—	—		口縁外面指頭オサエ	
71-101	SK184	土師器	甕	口縁～体部	—	—	—		内面ナデ、外面ケズリ	
71-102	SK221	土師器	甕	口縁～体部	(14.2)	—	—		内外面ロクロナデ	体部上部に3条の沈線
71-103	SK243	土師器	甕	体部～底部	—	8.3	—	砂底	内面ナデ、外面ケズリ、体部下端指頭オサエ	内外面に煤状炭化物付着
71-104	SK448	土師器	羽釜？	口縁～体部	—	—	—		内外面ロクロナデ	
71-105	SK522	土師器	甕	口縁～体部	15.6	—	—		内面ナデ、外面指頭オサエ、ナデ	106と同一固体 外面に黒斑
71-106	SK522	土師器	甕	体部～底部	—	9.2	—		内面ナデ、外面ケズリ	105と同一固体 断面に黒斑
71-107	SK574	土製品	土玉	完形	最大径2.0cm	最小径1.9cm	重量4.7g			
71-108	SK580	土師器	坏	口縁～底部	12.0	5.0	5.0	回転糸切	内外面ロクロナデ	
72-109	SK580	土師器	坏	口縁～底部	12.2	5.6	5.5	回転糸切	内外面ロクロナデ	
72-110	SK580	土師器	甕	口縁～体部	17.5	—	—		内面ナデ、外面指頭オサエ、ナデ	
72-111	SK580	土師器	甕	口縁～体部	—	—	—		内面ナデ、外面指頭オサエ、ナデ	
72-112	SK610	須恵器	甕	体部	—	—	—		内面アテ目、外面タタキ目	
72-113	SK630	土師器	皿	口縁～底部	10.1	4.7	4.8	回転糸切	内外面ロクロナデ	柱状高台
72-114	SK632	須恵器	甕	口縁部	—	—	—		内面アテ目、外面タタキ目、頸･口縁ロクロナデ	中世陶器？
72-115	SK702	土師器	鍋	口縁～体部	—	—	—		内外面ロクロナデ	輪積痕
72-116	SK721	土師器	坏	口縁～底部	12.3	5.3	5.7	回転糸切	内外面ロクロナデ	
72-117	SK721	土師器	甕	口縁～体部	—	—	—		内外面ロクロナデ	
73-118	SK769	須恵器	甕	口縁～体部	—	—	—		内面ロクロナデ、外面カキ目、ナデ	
73-119	SK894	土師器	坏	体部～底部	—	4.6	—	回転糸切	内外面ロクロナデ	
73-120	SK894	土師器	有台坏	体部下半～台部	台径7.0cm	—	—		内外面ロクロナデ	
73-121	SK894	須恵器	壺？	体部	—	—	—		内外面ロクロナデ	
73-122	SK898	土師器	坏	口縁～底部	13.0	4.8	4.2	回転糸切	内外面ロクロナデ	
73-123	SK898	土師器	甕	口縁～体部	20.6	—	—		内外面ロクロナデ	
73-124	SK898	土製品	支脚	天井～下端	天井径11.4cm	下端径12.4cm	器高14.2cm			
74-125	SK928	土師器	甕	口縁～体部	19.0	—	—			
74-126	SK928	須恵器	壺	口縁～体部上半	10.5	—	—		内外面ロクロナデ	

5　土師器焼成遺構

本遺構は遺跡の平安時代における性格を決定づける重要な遺構の一つである。よってここでは土師器を焼成したと推定される３基の土坑状の遺構（ＳＪ241･242･245）とこれに関連すると考えられる掘立柱建物跡（ＳＢ321）を中心に述べる(第75図)。

３基の浅い土坑状の遺構が土師器焼成遺構である可能性が高いと考えられる理由としては、３基とも浅い鍋底状の底面、あるいはそれに近い層位にかなりの高温によって焼き締まり赤化した火床面、あるいは焼土層を形成していることと、埋土より焼き損じ等によると考えられる剥離片を含む土師器坏・甕の破片を出土していることの２点が挙げられる。また、遺跡内からは、ロクロピットは検出されていないが、白色粘土塊を出土する竪穴住居跡が２軒（ＳＩ430･440）検出されている。焼成失敗品と考えられる大きな歪みや黒斑、層状の剥離が見られる土師器が多数出土しているなど、近くに土師器焼成遺構が存在する可能性をある程度示す周辺の状況も加味し、上記の３基を、土坑、焼土遺構、炭焼き遺構とは区別される、土師器焼成遺構である可能性が高い遺構であると判断した。ただし、この



第75図　土師器焼成遺構配置図

周辺の土坑や焼土遺構には、上記２点の条件に関しては明確さを欠くが、焼き損じの土師器の破片を埋土に含み上記３遺構と類似した形状・規模のものも見られ、決して上記の３基以外は土師器焼成遺構としての可能性が皆無であるという訳ではない。

掘立柱建物跡(ＳＢ321)には、その範囲内に上記の土師器焼成遺構３基が位置し、３基とも柱穴との切り合いが全く無い。ただし窯跡の性質上、焼成遺構と柱穴との距離間にやや窮屈さを感じるなど両者に新旧関係が存在する可能性も否定できない。いずれ両者の間に新旧関係があるとしても、３基の土師器焼成遺構とＳＢ321の主柱穴12基の配置関係や軸方向等を考慮すると、両者間に密接な関係が存在していた可能性が考えられる。

ＳＪ241（第75･76図、図版９）

位置：ＬＣ59・ＬＤ59グリッド、ＳＢ321のP6、P8、P12、P13間に位置する。北側に隣り合うＳＪ242との間隔は約1.1m、北東側に隣り合うＳＪ245との間隔は約2.2mである。

確認：第Ⅳ層上面の精査中に円形のプランとして確認した。

重複：ＳＫＰ441･442を切る。

規模と形状：平面形は径1.41～1.44mの略円形で、３基の中では最も規模が小さく、西側に小さな張り出しが認められる。断面形は確認面からの深さ21cmの鍋底状である。西側の小さな張り出し部はピット状に掘り込まれておりその深さは21cmである。また、ほぼ円形であるため軸方向を決めかねるが、小さな張り出しは西方向(Ｎ－74.5°－W)を向く。

埋土：４層に分層した。第２層が火床と推定される焼土層である。ただし、上位が第２層の影響でやや赤化した第３層を挟み掘り方底面となるが、操業当時この面が露出していたと考えられる底面縁辺部もかなりの火熱により中央に第２層面を置く途切れたリング状に赤化しており、その硬化の度合いは第２層に比べ大きい。また、第２層火床面の中央部に炭化物が集中する箇所が確認される。

底面と壁：底面にはやや起伏が見られ、全体的には、ほぼ中心に当たる底面最深部より中華鍋状に緩やかに立ち上がる。ただしピットが取り付く西壁は他に比べ直立気味に立ち上がるとともに、略円形を成す全体形の中でもこの西壁のピットを中心とする60cm程の部分は直線的な掘り方となっている。この壁が窯の奥壁であるか前壁であるかは判然としないが、ピットが窯の奥と前などの位置関係や窯の構造、機能などに関わる可能性がある。

出土遺物：接合・復元し図化できる遺物は出土しなかったが、土師器坏の各部位と甕体部の破片・細片が、層状に剥落したものや黒変したものも交え多数出土した。また、径２～４cmほどの焼けた粘土塊が３点出土している。火床面から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,125±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

ＳＪ242（第75･76図、図版９）

位置：ＬＣ59･60、ＬＤ59･60グリッド、ＳＢ321のP5、P7、P11、P12間に位置する。東側に隣り合うＳＪ245との間隔は約60cmである。

確認：第Ⅳ層上面の精査中に楕円形のプランとして確認する。

重複：ＳＫＰ408を切る。

規模と形状：平面形は長軸1.83m、短軸1.62mの楕円形で、長軸方向西側がやや尖る。断面形は、

中心に最深部を持つ確認面からの深さ22cmの中華鍋底状であるが、南側縁辺に平面規模が65×30cm、深さが20cmほどの窪みがある。長軸の方位はN－70°－Wである。

埋土：12層に分層した。第10～12層が焼土層である。この内、第11層が火床と推定される焼土層で最も赤化が顕著である。その上層の第10層は暗褐色土を斑状に含む焼土とそのブロックの層で、下層の第12層は窯底面を整えるために敷き詰めた土であると思われ、火床の熱によって赤化している。また、火床面南側には炭化物の集中箇所が見られ、床面や壁面を塗り固めたと思われる粘土塊が南東側床面に埋没していた。

底面と壁：底面は比較的起伏が少なく、遺構中央部の底面最深部より中華鍋底状に緩やかに立ち上がる。ただし南側の窪みと一体を成す南壁とそれに対する北壁の立ち上がりは東西に比べ急である。

出土遺物：77－127は土師器坏である。内外面および割れ口に煤状の炭化物が付着しており、焼成失敗品である可能性が高い。この他、土師器坏の各部位の破片、細片が層状に剥落したものや黒変したものなどが多数出土したが、甕と断定できる破片の出土は皆無で、坏を中心に焼成していた可能性が考えられる。また、埋土上位より縄文土器が出土しているが後世の流れ込みによるものと考えられる。火床面から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,085±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

ＳＪ245（第75･76図、図版９）

位置：ＬＢ59、ＬＣ59･60グリッド、ＳＢ321のP1、P2、P5、P7間に位置する。

確認：第Ⅳ層上面の精査中に西側にこぶ状の張り出しを持つ楕円形のプランとして確認した。

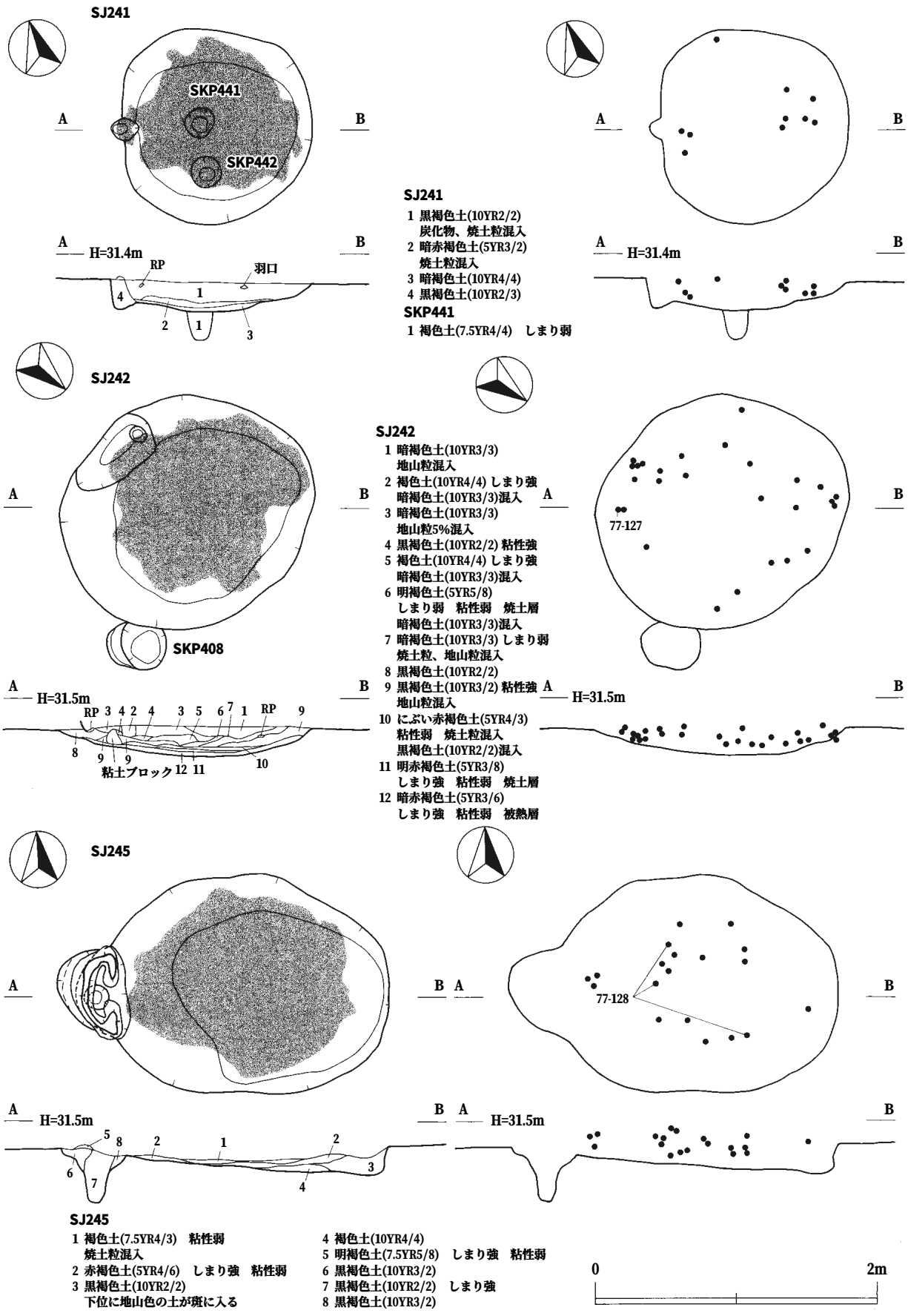
重複：なし。

規模と形状：平面形は張り出しを含め長軸2.35m、短軸1.55mの楕円形で、３基の中では最も規模が大きい。長軸の方位は(N－86°－W)である。全体的には東側に下方傾斜する浅い箱状の掘り方であるが、長軸方向の断面形では、こぶ状の張り出しに穿たれたピットの底面が最深で、確認面からの深さが37cmである。中央部は浅く５cm、東端部がやや深く14cmである。

埋土：８層に分層した。第２層が火床と推定される焼土層で、ＳＪ241と同様にその周辺部に硬化面を持つ。また、直上の第１層の褐色土には焼土粒子と灰状の白色土が斑状に見られ、焼成中あるいは直後に堆積した窯天井部内面の剥落物や藁灰等がこれに含まれているものと思われる。第３・４層は、掘り方とは異なる火床面を形成するために、人為的に盛られた可能性がある。張り出し部分およびそこに穿たれたピットと火床面の関係は不明であるが、ピットを取り巻き張り出しの形状に合わせる様に馬蹄形に堆積する第５層は、窯の上部構造や周壁、窯の奥と前の位置関係など、窯の構造に関し何らかの関わりを持つ可能性があると考えられる。

底面と壁：掘り方の底面は、やや起伏しながら東側へ傾斜し、掘り方の東壁は、明らかに他の壁と異なりほぼ垂直に立ち上がる。東側を嵩上げして作った火床面はほぼ平坦で、中央部が緩く窪む程度である。また、他の２基と異なり確認面から火床面までが浅く、現状では壁面の立ち上がりを明確に見出すことはできない。

出土遺物：77－128は土師器坏である。内外面および割れ口に煤状の炭化物が付着しており焼成失敗品である可能性が高い。この他、土師器坏の各部位や甕の体部の破片、細片が層状に剥落したものや黒斑したものなどが多数出土した。



第76図　土師器焼成遺構

ＳＢ321（第53･75図、図版９）

位置：ＬＢ58･59･60、ＬＣ58･59･60、ＬＤ58･59･60グリッドに位置する。

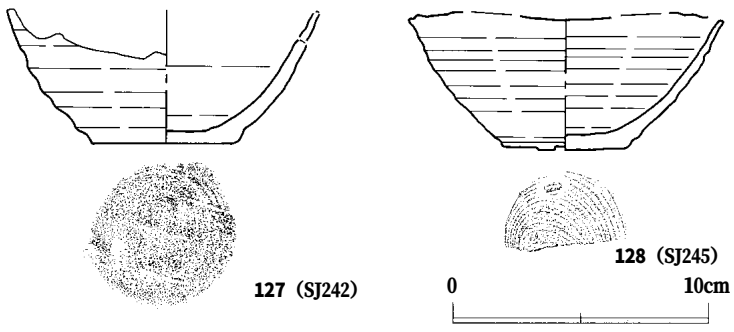
確認：第Ⅳ層上面の精査中に、北西隅の浅い掘り込みが確認され、ＳＪ241･242･245の確認面とほぼ同一レベルより北側の数基の柱穴が検出された。更に精査面を南側に広げた結果10数基の柱穴からなる掘立柱建物跡が確認された。

規模：桁行３間、梁行２間の南北棟建物で西側に庇が付き、現状では北西隅に確認できるのみであるが、建物に沿って地面が浅く掘り込まれていたと推定される。なお、庇については、整理作業時に再検討した結果確認したものである。建物方位は、桁行が座標北からやや東(Ｎ－５°－Ｅ)に傾く。庇を除き、総間は桁行が6.60～6.74mで平均6.66m、梁行が4.82～4.96mで平均が4.89mである。また各柱穴間の距離について、桁方向では北側の梁P1-5-10・P2-6-12間が最も広く平均が2.58m、中間の梁P2-6-12・P3-8-13間が最も狭く平均が1.94m、南側の梁P3-8-13・P4-9-14間が平均2.15mである。同様に庇部の桁方向の柱穴間も2.57m、1.98m、2.02mの順に並び、総間は6.57mである。梁方向では桁P10-12-13-14・P5-6-8-9間が平均2.27m、桁P5-6-8-9・P1-2-3-4間が平均2.59mである。庇の梁方向の柱穴間は平均1.10mである。

重複：柱穴の切り合いが数カ所見られた。検討の結果、ＳＢ321を構成する新旧の柱穴の切り合いとして明確なものはP6とP7、P10とP11である。共に前者が後者を切っている。また、ＳＫＰ403はP12に切られるが、柱穴間距離等の関係からＳＫＰ403はＳＢ321を構成する柱穴ではないと判断した。他に、明確さを欠くが平断面の形状等よりP5などが柱を建て替えた可能性がある。また、庇の柱穴ではP17とP18については切り合いがあり前者が新しい。P15とP16については切り合いが無いが梁方向の関係などから前者が新しいと判断した。ＳＢ321の庇と北西隅の浅い掘り込みを含めた範囲内には、前述のＳＪ241･242･245が、ＳＢ321の柱穴とは切り合わずに柱穴間に位置し、この他に、土坑(ＳＫ243)、性格不明遺構(ＳＸ256)、柱穴様ピットが存在する。北西隅の浅い掘り込みを切るＳＫ243はＳＢ321の建築後掘削されたと推定され、同時に存在した可能性もあるが、切り合い関係が無いＳＸ256と柱穴様ピットについては新旧関係が不明である。

埋土：北西隅の浅い掘り込みおよび庇部を含む20基の柱穴には、平安時代の遺物包含層である第Ⅲ層に由来する黒褐色土が堆積していた。

出土遺物：土師器坏と甕の破片が北西隅の浅い掘り込みと柱穴P1･2･3･6･7･9･10･11･12の埋土より出土している。また、建物北西隅の浅い掘り込みの埋土から採取した炭化材の放射性炭素年代測定では、1,125±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。



第77図　土師器焼成遺構出土遺物

第16表　土師器焼成遺構出土遺物観察表

挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備　考
77-127	SJ242	土師器	坏	体部～底部	－	5.6	－	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面、ワレロに煤状炭化物付着
77-128	SJ245	土師器	坏	口縁～底部	12.2	4.8	5.2	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面、ワレロに煤状炭化物付着

6　焼土遺構

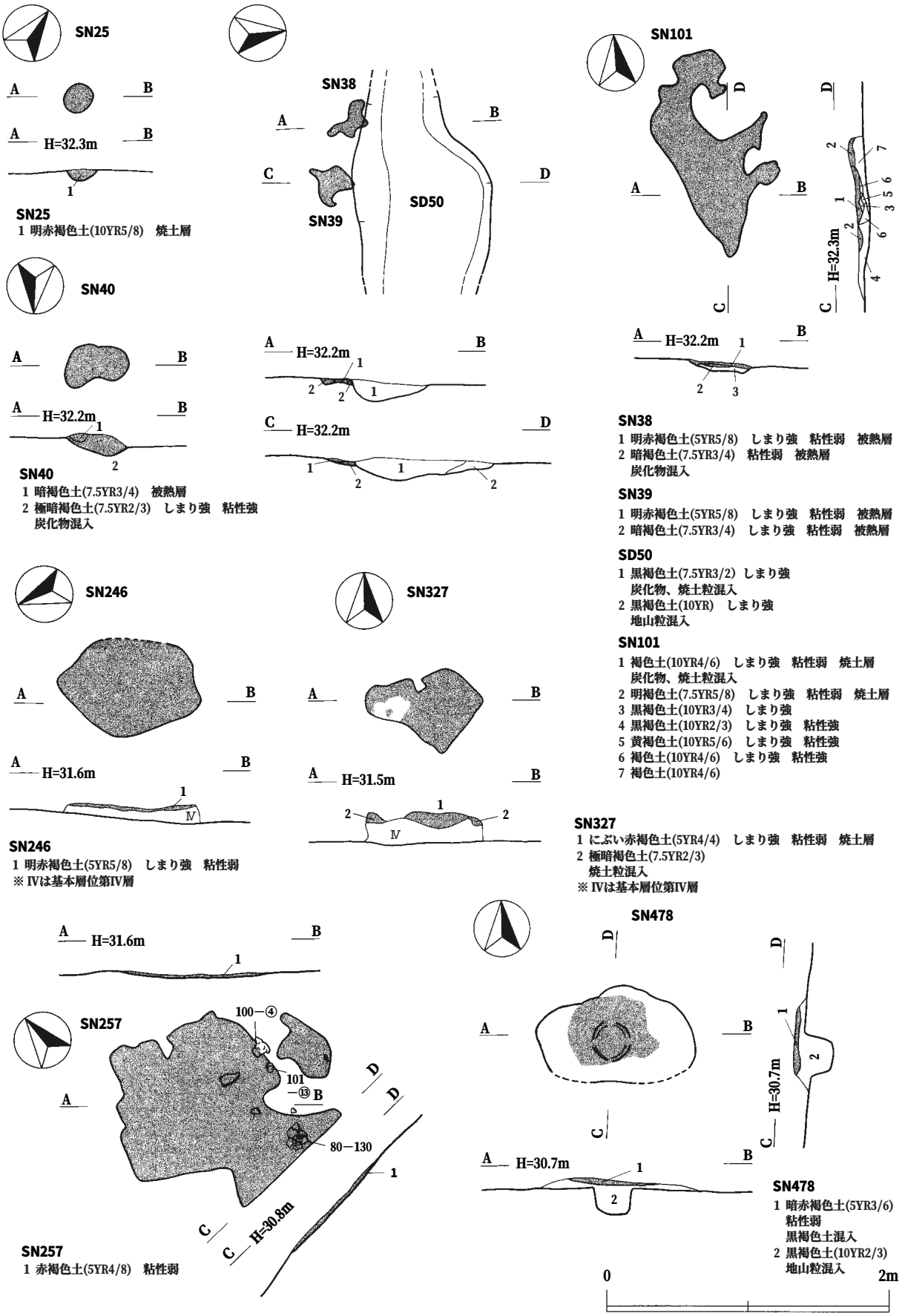
調査区内からは、鍛冶炉など性格が明確なもの、火床が見られるもの、土坑内に堆積したものなど、多様な形態の焼土が検出されている。この内、鍛冶炉と判断した2基については本章第5節で、土師器焼成遺構の可能性が高い3基については本章第4節の5で述べている。このほか、他の遺構に伴うと判断したものについては当該の遺構で扱っている。よってここでは、主に性格が不明確で、他の遺構に伴わない単体の焼土範囲等を焼土遺構として扱う。調査区内からは合計22基の焼土遺構が検出されている。この内19基は、平安時代の集落範囲と考えられるＳＤ50の南西側から検出されており、ＳＤ50の北東側から検出された焼土遺構は3基(ＳＮ25･40･101)である。なお、各焼土遺構の規模や切り合い関係、出土遺物などについては、次の観察表に記載している。

第17表　焼土遺構観察表（１）

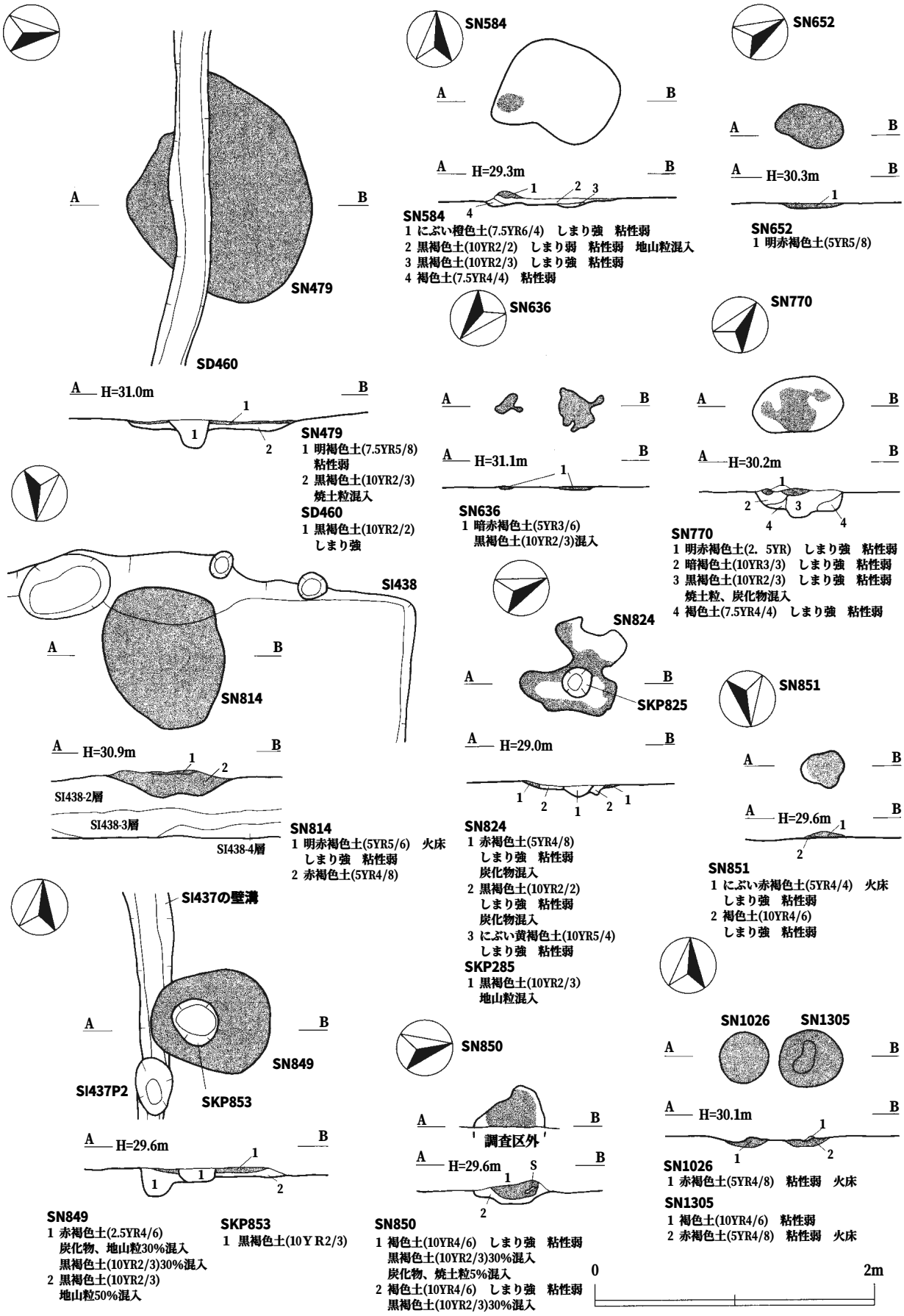
遺構番号	地　区	検出面	平面形状	規模（cm）			特徴、出土遺物、その他	挿図番号
				長軸	短軸	深さ		
25	KN63	Ⅳ	円形	21	21	7	掘り込みはなく、被熱層の断面形は浅い椀形である。遺物の出土はない。	78
38	LG62	Ⅳ	歪な形状	36	19	4	ＳＤ50に切られる。掘り込みはなく、焼土層は2層に分層できた。第1層上面が火床である可能性がある。遺物の出土はない。	78
39	LG62	Ⅴ	歪な形状	33	18	4	ＳＮ38の東20cmに位置する。38と同様にＳＤ50に切られることから、38と同時期の遺構であると思われる。これも第1層が火床である可能性がある。遺物の出土はない。	78
40	KM62	Ⅲ	不整楕円形	42	22	15	掘り込みは認められなかった。遺物の出土はなく、第Ⅲ層で検出されていることから比較的新しい時代の焼土であると思われる。	78
101	KO62	Ⅳ	歪な形状	146	80	4	浅い掘り込みが認められ、焼土層を含め、埋土は7層に分層できた。土師器片が出土している。埋土下位から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,405±35年前（yrBP±1σ)という結果を得ている。	78
224	LD58	Ⅳ	環状	41	39	10	ＳＫ223と重複する。本遺構の方が新しいが、223の範囲内に一回り小さい本遺構がはみ出さずに収まっていることから、223に伴う焼土である可能性がある。また、接するようにＳＫ221が存在するが新旧関係は判然としない。遺物の出土はなかった。	62
246	LD59･60	Ⅳ	不整楕円形	102	70	4	単層の焼土層である。堅く焼き締まっており上面は火床と考えられる。上面から土師器17点が出土し、この内、甕1点を図化(80－129、図版12)した。本遺構は、ほぼ東西方向の軸線上に2基の土師器焼成遺構とともに並ぶように位置している。本遺構から東へ1.6mの間隔を置きＳＪ242が、さらに60cmの間隔を置きＳＪ245が存在する。このことから土師器焼成遺構との関連も考えられる。	78 75

第18表　焼土遺構観察表（２）

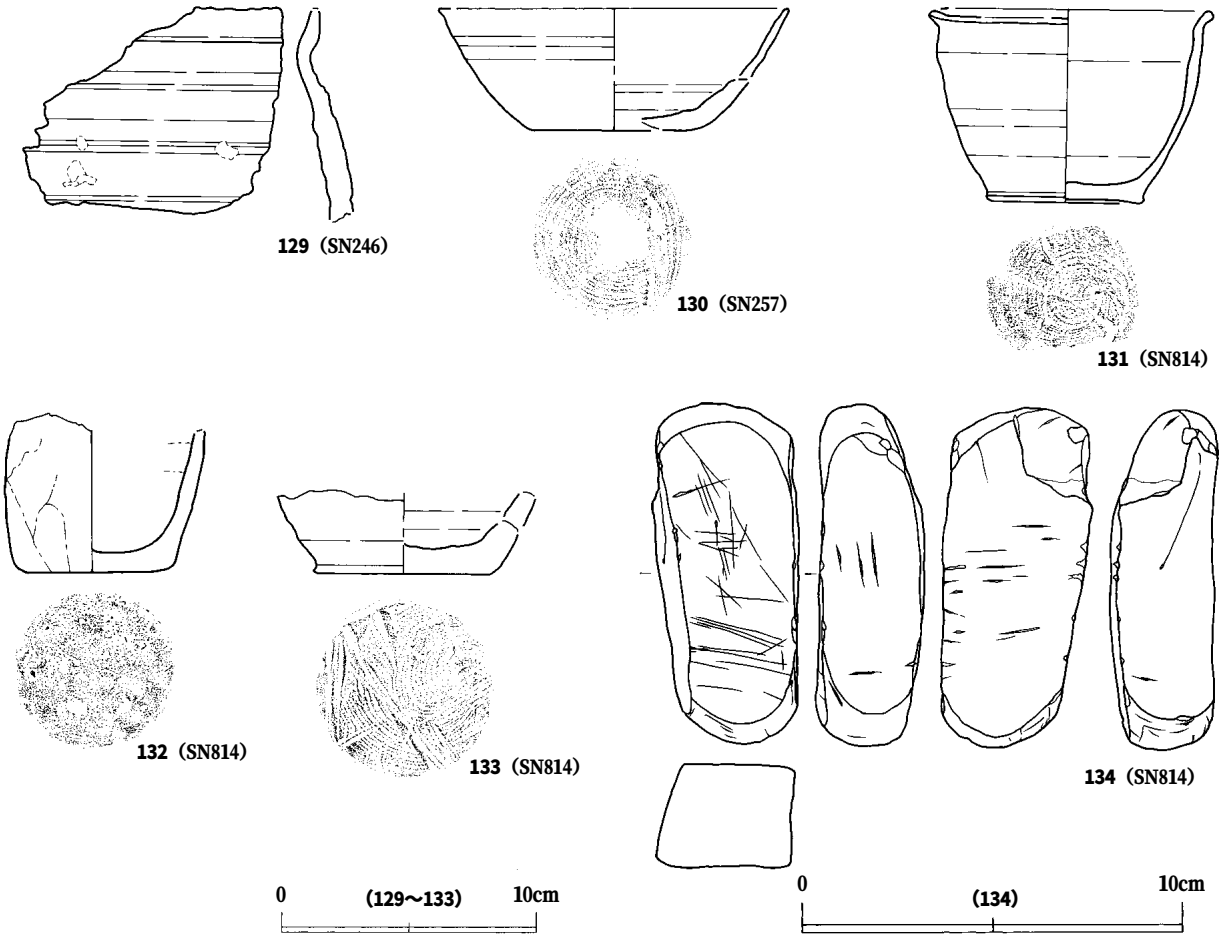
遺構番号	地　区	検出面	平面形状	規模（cm）			特徴、出土遺物、その他	挿図番号
				長軸	短軸	深さ		
257	LO58	Ⅳ	歪な形状	(164)	118	4	南側と西側の一部が失われている。東側に飛び地状の小さな焼土範囲が見られるが本来は一体のものであると考えられる。掘り込みが伴わない単層の焼土である。堅く締まっているが後世の土圧によるものと考えられる。本遺構の東1～2mの範囲内には2基の鍛冶炉(ＳＮ258･259)が存在する。また、本遺構からは土師器坏(80－130)の他、椀型鍛冶滓(100－④、図版14)、フイゴの羽口(101－⑬)、鉄製品(101－⑰)、が出土していることから、鍛冶と密接に関連する焼土溜まりであると考えられる。〔図版8〕	78 95 96
327	LE58	Ⅳ	歪な形状	83	60	10	本遺構上面からは土師器甕片が出土している。	78
478	LL56･57	Ⅴ	方形状	72	48	6	ＳＫＰ784と重複し、本遺構の方が新しい。本来は掘り込みを持ち、784を底部の一部とする一体の遺構であった可能性がある。土師器の坏･甕の破片が出土した。	78
479	LL59	Ⅴ	楕円形	168	132	3	ＳＤ460、ＳＢ608と重複する。本遺構は460より旧い。また、608とは、その範囲内に本遺構が収まることから同時に存在した可能性がある。本遺構には、深さ8cmの掘り込みが認められ、ここから土師器の坏･甕の破片、鉄滓が出土している。	79
584	MO43	Ⅴ	楕円形	20	12	5	深さ10cmほどの掘り込みが確認された。掘り込みはの平面形は、長軸96cm、短軸76cmの不整な隅丸方形で、ここから土師器が出土した。焼土範囲は遺構西端にある。	79
636	LG･LH59	Ⅳ	歪な形状	34 18	24 8	4 3	大小二つの範囲からなる焼土遺構として確認した。その間隔は25cmほどで、両者とも掘り込みのない、単一焼土層である。遺物の出土はない。	79
652	LN53	Ⅳ	楕円形	48	30	4	掘り込みのない、単一焼土層である。遺物の出土はない。	79
770	LT･MA47	Ⅳ	楕円形	64	40	5	深さ20cmほどの掘り込みを確認。遺物の出土はない。	79
814	LL58		楕円形	106	84	20	ＳＩ438の埋土第2層上面で確認された。掘り込みはなく、438の埋没過程において形成されたと考えられる。焼土上面は堅く焼き締まっており火床であると判断した。性格は不明であるが、何かしらの焼成炉の跡である可能性がある。本遺構からは、土師器甕(80－131～133)、砥石(80－134)が出土している。	79
824	MR44	Ⅴ	歪な形状	70	22	3	ＳＫＰ825にほぼ中央を切られる。深さ10cmほどの浅い掘り込みが見られる。本遺構からの遺物の出土はない。	79
849	MI46･47 MJ46･47		不整円形	85	76	4	ＳＩ437の精査中に焼土範囲として確認した。ＳＩ437、ＳＫＰ853と重複する。本遺構は437より新しく、853より旧い。掘り込みのない単一焼土層である。土師器片が出土した。本遺構とＳＮ850･851の3基の焼土遺構は、ＳＩ437より新しいと考えられる。また、すべてＳＩ437の範囲内にほぼ収まることから、3基はともに廃棄されて間もないＳＩ437を利用して操業した何かしらの炉跡の可能性がある。ただし、三者相互の新旧関係は不明である。	79
850	MI46		(円形)	(50)	－	15	ＳＩ437と重複する。本遺構は437より新しいと考えられる。437と同様に、農業用水のパイプラインの敷設によって東側が失われている。土師器片が出土している。	79
851	MI46		不整円形	27	25	4	ＳＩ437と重複する。本遺構は437より新しいと考えられる。本遺構からの遺物の出土はない。	79
1026	LT47	Ⅳ	円形	36	34	7	掘り込みはなく、焼土上面は堅く締まっており、火床であると考えられる。上層の黒褐色土からは土師器が多数出土した。西側にＳＮ1305が8cmの間隔をおいて並んでいる。1305との新旧関係は不明であるが、カマドの作り替えなどの関連性が考えられる。ただし、周辺からはこれに関係するような竪穴や柱穴などは検出されていない。	79
1305	LT47	Ⅳ	ほぼ円形	45	39	6	掘り込みはなく、第2層上面が火床にあたるものと考えられる。東側の1026と同様に上層の黒褐色土からは土師器が出土した。	79


SN25
A
B
H=32.3m
1
SN25
1 明赤褐色土(10YR5/8)　焼土層
SN38
SD50
SN39
C
D
H=32.2m
SN40
H=32.2m
SN40
1 暗褐色土(7.5YR3/4)　被熱層
2 極暗褐色土(7.5YR2/3)　しまり強　粘性強
炭化物混入
SN101
H=32.3m
H=32.2m
SN38
1 明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強　粘性弱　被熱層
2 暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性弱　被熱層
炭化物混入
SN39
1 明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強　粘性弱　被熱層
2 暗褐色土(7.5YR3/4)　しまり強　粘性弱　被熱層
SD50
1 黒褐色土(7.5YR3/2) しまり強
炭化物、焼土粒混入
2 黒褐色土(10YR)　しまり強
地山粒混入
SN101
1 褐色土(10YR4/6)　しまり強　粘性弱　焼土層
炭化物、焼土粒混入
2 明褐色土(7.5YR5/8)　しまり強　粘性弱　焼土層
3 黒褐色土(10YR3/4)　しまり強
4 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性強
5 黄褐色土(10YR5/6)　しまり強　粘性強
6 褐色土(10YR4/6)　しまり強　粘性強
7 褐色土(10YR4/6)
SN246
H=31.6m
IV
SN246
1 明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強　粘性弱
※ IVは基本層位第IV層
SN327
H=31.5m
SN327
1 にぶい赤褐色土(5YR4/4)　しまり強　粘性弱　焼土層
2 極暗褐色土(7.5YR2/3)
焼土粒混入
※ IVは基本層位第IV層
SN257
100—④
101
—⑬
80—130
H=30.8m
SN257
1 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱
SN478
H=30.7m
SN478
1 暗赤褐色土(5YR3/6)
粘性弱
黒褐色土混入
2 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒混入
0
2m

第78図　焼土遺構（１）


SN479
SD460
A H=31.0m B
1
1
2
SN479
1 明褐色土(7.5YR5/8)
粘性弱
2 黒褐色土(10YR2/3)
焼土粒混入
SD460
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり強
SN584
A H=29.3m B
1 2 3
4
SN584
1 にぶい橙色土(7.5YR6/4) しまり強 粘性弱
2 黒褐色土(10YR2/2) しまり弱 粘性弱 地山粒混入
3 黒褐色土(10YR2/3) しまり強 粘性弱
4 褐色土(7.5YR4/4) 粘性弱
SN652
A H=30.3m B
1
SN652
1 明赤褐色土(5YR5/8)
SN636
A H=31.1m B
1
SN636
1 暗赤褐色土(5YR3/6)
黒褐色土(10YR2/3)混入
SN770
A H=30.2m B
1
2 3
4 4
SN770
1 明赤褐色土(2. 5YR) しまり強 粘性弱
2 暗褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性弱
3 黒褐色土(10YR2/3) しまり強 粘性弱
焼土粒、炭化物混入
4 褐色土(7.5YR4/4) しまり強 粘性弱
SI438
SN814
A H=30.9m B
1 2
SI438-2層
SI438-3層
SI438-4層
SN814
1 明赤褐色土(5YR5/6) 火床
しまり強 粘性弱
2 赤褐色土(5YR4/8)
SN824
SKP825
A H=29.0m B
1 2 1 2 1
SN824
1 赤褐色土(5YR4/8)
しまり強 粘性弱
炭化物混入
2 黒褐色土(10YR2/2)
しまり強 粘性弱
炭化物混入
3 にぶい黄褐色土(10YR5/4)
しまり強 粘性弱
SKP285
1 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒混入
SN851
A H=29.6m B
1
2
SN851
1 にぶい赤褐色土(5YR4/4) 火床
しまり強 粘性弱
2 褐色土(10YR4/6)
しまり強 粘性弱
SI437の壁溝
SN849
SI437P2
SKP853
A H=29.6m B
1 1 1
2
SN849
1 赤褐色土(2.5YR4/6)
炭化物、地山粒30%混入
黒褐色土(10YR2/3)30%混入
2 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒50%混入
SKP853
1 黒褐色土(10YR2/3)
SN850
調査区外
A H=29.6m B
1 S
2
SN850
1 褐色土(10YR4/6) しまり強 粘性弱
黒褐色土(10YR2/3)30%混入
炭化物、焼土粒5%混入
2 褐色土(10YR4/6) しまり強 粘性弱
黒褐色土(10YR2/3)30%混入
SN1026
SN1305
A H=30.1m B
1
1 2
SN1026
1 赤褐色土(5YR4/8) 粘性弱 火床
SN1305
1 褐色土(10YR4/6) 粘性弱
2 赤褐色土(5YR4/8) 粘性弱 火床
0
2m

第79図　焼土遺構（２）



第80図　焼土遺構出土遺物

第19表　焼土遺構出土遺物観察表

挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備　　考
80-129	SN246	土師器	甕	口縁～体部	—	—	—		内外面ロクロナデ	
80-130	SN257	土師器	坏	口縁～底部	13.7	6.2	4.8	回転糸切	内外面ロクロナデ	口縁部に煤状炭化物付着
80-131	SN814	土師器	甕	口縁～底部	11.1	6.2	7.6	回転糸切	内外面ロクロナデ	
80-132	SN814	土師器	甕	体部～底部	—	6.2	—	調整？	内面ナデ、外面ケズリ	内外面に煤状炭化物付着
80-133	SN814	土師器	甕	体部下半～底部	—	6.8	—	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面に煤状炭化物付着
80-134	SN814	石製品	砥石		最大長 9.0cm	最大幅 3.9cm	最大厚 2.8cm	重量 127.5g	石質 流紋岩	砥面は4面、一部欠損

7　柱穴列

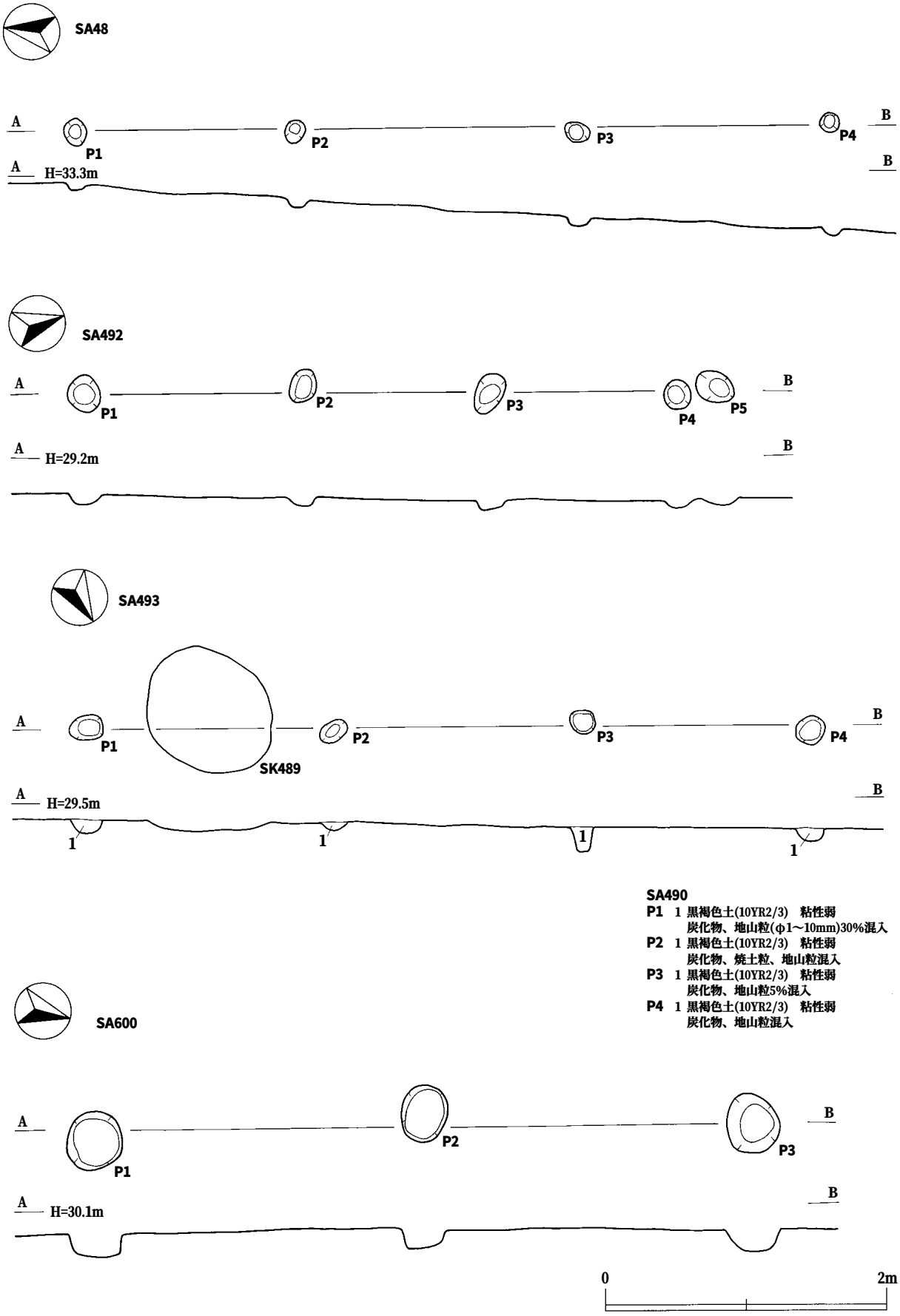
柱穴列は20条確認されている。確認に際しては、これを構成する各柱穴の形状・規模・埋土の特徴、柱穴間の距離、軸方位などを調査中に検討し、主に現地において確認したが、整理作業において柱穴様ピット等を検討した結果、柱穴列として確認したもの(ＳＡ922･1303)もある。計20条の柱穴列の内の19条は、平安時代の集落範囲と考えられるＳＤ50の南西側に位置している。また、20条の内、概ね南北方向(座標北を中心に東西各10°の振幅内）に延びるものが15条である。なお、各柱穴列およびこれを構成する各柱穴の規模などについては次の観察表に記載している。

第20表　柱穴列観察表（１）

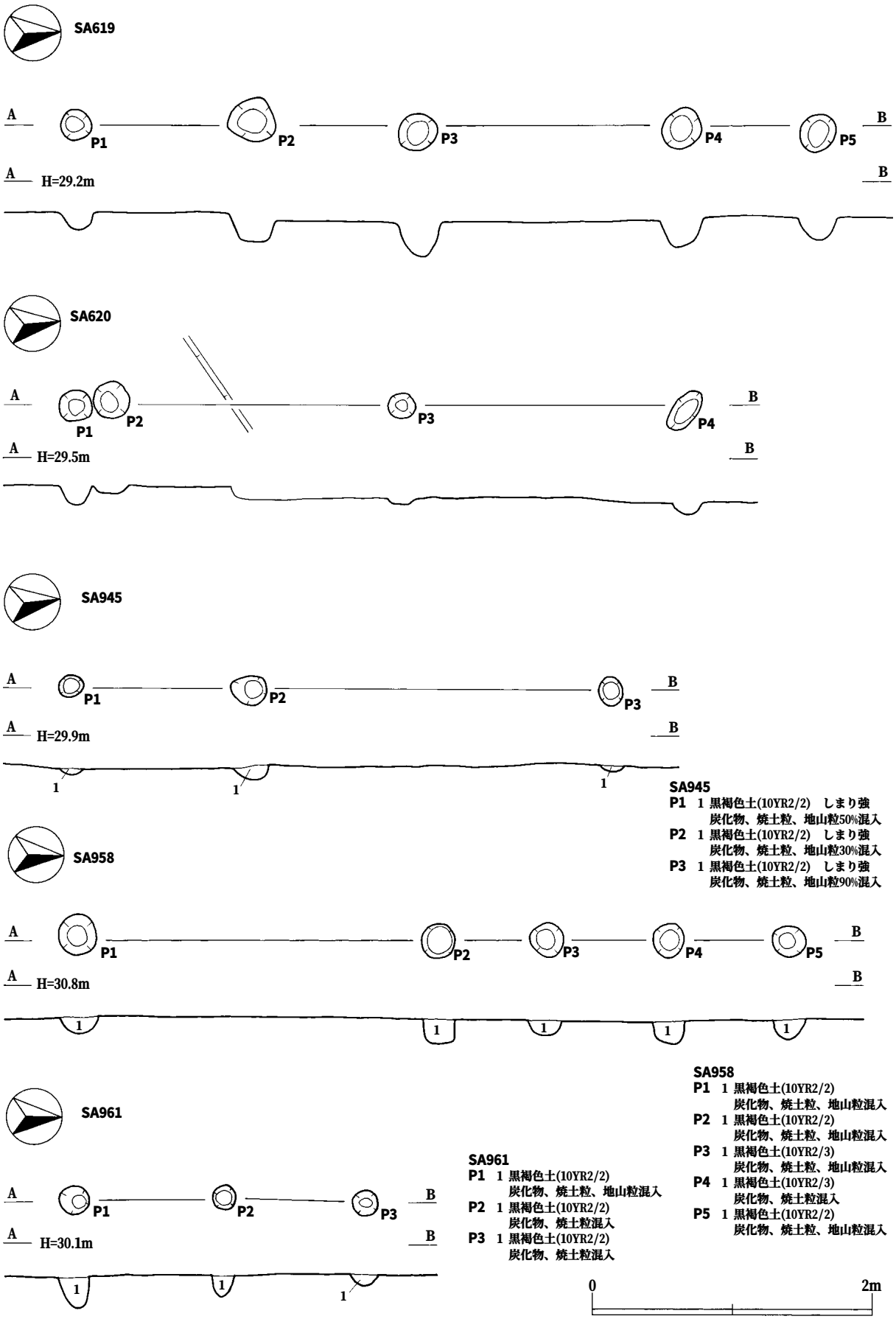
遺構番号	確認状況、全体規模など	柱穴番号	地　区	柱穴の規模（cm）			底面標高（m）	埋　土
				長軸	短軸	深さ		
48	第Ⅴ層上面において、南北方向(Ｎ－8°－W)に、ほぼ一直線に並ぶ4基の柱穴を長さ10.7mにわたり検出した。各柱穴の間隔は、心々間距離で、P1－P2間3.1m、P2－P3間4.0m、P3－P4間3.6mである。各柱穴からの遺物の出土はない。〔第81図〕	Ｐ１	KF68	40	32	10	33.10	黒褐色土他
		Ｐ２	KF67	34	28	12	32.94	黒褐色土
		Ｐ３	KF66	38	24	12	32.62	黒褐色土
		Ｐ４	KF65	24	24	11	32.38	黒褐色土
490	第Ⅴ層上面において、南北方向(Ｎ－10°－Ｅ)に、ほぼ一直線に並ぶ6基の柱穴を長さ6.9mにわたり確認した。P1がＳＫＰ639・640を切り、P6がＳＡ657－P1に切られる。また、ＳＡ675は、本遺構とほぼ同じ軸線上の北側に位置しており、一連の柱穴列である可能性がある。各柱穴間距離は、心々間で、P1－P2間1.82m、P2－P3間1.46m、P3－P4間1.52m、P4－P5間1.07m、P5－P6間1.34mである。各柱穴からの遺物の出土はない。〔第84図〕	Ｐ１	MO42	38	26	11	28.93	黒褐色土
		Ｐ２	MO42	33	26	10	28.96	黒褐色土
		Ｐ３	MO43	46	26	16	28.91	黒褐色土
		Ｐ４	MO43	34	26	13	28.95	黒褐色土
		Ｐ５	MO43	28	26	17	28.93	黒褐色土
		Ｐ６	MO43・44	35	33	25	28.81	黒褐色土
492	第Ⅴ層上面において、概ね北北東－南南西方向(Ｎ－15°－Ｅ)に、ほぼ一直線に並ぶ、5基の柱穴を長さ4.5mにわたり確認した。各柱穴間の距離は、心々間で、P1－P2間1.55m、P2－P3間1.32m、P3－P4間1.34m、P4－P5間0.32mである。P1より土師器坏の破片が出土している。〔第81図〕	Ｐ１	MP42	27	23	8	28.82	黒褐色土
		Ｐ２	MP42	26	19	7	28.80	黒褐色土
		Ｐ３	MP42	30	11	7	28.77	黒褐色土
		Ｐ４	MP43	21	20	6	28.76	黒褐色土
		Ｐ５	MP43	29	22	5	28.79	黒褐色土
493	第Ⅴ層上面において、Ｎ－62°－W方向に、ほぼ一直線に並ぶ、4基の柱穴を長さ10.28mにわたり確認した。切り合いはないが、本遺構軸線上のP1－P2間にＳＫ489土坑が位置する。各柱穴間の距離は、心々間で、P1－P2間3.52m、P2－P3間3.52m、P3－P4間3.24mである。〔第81図〕	Ｐ１	MM40・41	48	32	20	29.07	黒褐色土
		Ｐ２	MN41	42	28	12	29.08	黒褐色土
		Ｐ３	MN41	34	34	36	28.74	黒褐色土
		Ｐ４	MO42	44	40	18	28.88	黒褐色土
563	第Ⅴ層上面で南北方向(Ｎ－5°－W)に並ぶ3基の柱穴を確認した。P2がＳＫＰ749を切る。全長5.85m、各柱穴間の距離は、心々間で、P1－P2間2.94m、P2－P3間2.92mである。遺物の出土はない。〔第84図〕	Ｐ１	LG59	37	32	26	30.72	黒褐色土
		Ｐ２	LG58・59	37	34	42	30.50	黒褐色土
		Ｐ３	LG58	34	30	43	30.44	黒褐色土
600	第Ⅳ層上面でＮ－15°－W方向に並ぶ3基の柱穴を確認した。P2が軸線から若干西にずれる。全長4.66m、各柱穴間の距離は、心々間で、P1－P2間2.34m、P2－P3間2.34mである。遺物の出土はない。〔第81図〕	Ｐ１	MC・MD47	43	42	18	29.78	黒褐色土
		Ｐ２	MD47	42	33	14	29.82	黒褐色土
		Ｐ３	MD48	43	40	15	29.77	黒褐色土
615	第Ⅴ層上面において、Ｎ－20°－W方向に、ほぼ一直線に並ぶ3基の柱穴を長さ4.64mにわたり確認した。各柱穴間の距離は、心々間で、P1－P2間2.34m、P2－P3間2.30mである。遺物の出土はない。〔第85図〕	Ｐ１	LJ57	47	42	17	30.38	図参照
		Ｐ２	LK57・58	48	45	39	30.17	図参照
		Ｐ３	LK58	45	40	17	30.30	図参照
619	第Ⅴ層上面において、南北方向(Ｎ－5°－W)に、ほぼ一直線に並ぶ5基の柱穴を長さ5.27mにわたり確認した。各柱穴間の距離は、心々間で、P1－P2間1.27m、P2－P3間1.18m、P3－P4間1.88m、P4－P5間0.98mである。P3より土師器甕の破片が出土した。〔第82図〕	Ｐ１	MN45	12	12	13	28.86	黒褐色土
		Ｐ２	MN46	33	31	22	28.77	黒褐色土
		Ｐ３	MN46	30	26	24	28.67	黒褐色土
		Ｐ４	MN46	30	29	20	28.74	黒褐色土
		Ｐ５	MN47	26	26	16	28.79	黒褐色土
620	第Ⅴ層上面で、南北方向(Ｎ－5°－W)に並ぶ4基の柱穴を確認した。全長4.36m、各柱穴間の距離については、P1とP2は切り合いはないが、僅かな間隔を置いて軸線上に並んでいる。以下心々間距離で、P2－P3間2.1m、P3－P4間2.02mである。遺物の出土はない。〔第82図〕	Ｐ１	ML47	23	23	15	29.17	黒褐色土
		Ｐ２	ML47	26	26	6	29.24	黒褐色土
		Ｐ３	ML48	19	19	5	29.17	黒褐色土
		Ｐ４	ML48	33	17	9	29.11	黒褐色土
657	第Ⅴ層上面において、ほぼ南北方向(Ｎ－10°－Ｅ)に、一直線に並ぶ8基の柱穴を長さ6.86mにわたり確認した。P1がＳＡ490－P6を切る。ただし、ＳＡ490は本遺構とほぼ同じ方向の南側に位置しており、一連の柱穴列である可能性がある。各柱穴間の距離については、P4とP5、P7とP8は切り合いはないが、その間隔は僅かである。以下は心々間で、P1－P2間1.60m、P2－P3間1.28m、P3－P4間1.24m、P5－P6間1.14m、P6－P7間1.35mである。遺物の出土はない。〔第84図〕	Ｐ１	MO43・44	28	28	17	28.93	黒褐色土
		Ｐ２	MN・MO44	24	21	9	29.02	黒褐色土
		Ｐ３	MN44	35	24	9	29.01	黒褐色土
		Ｐ４	MN44	31	24	8	29.01	黒褐色土
		Ｐ５	MN・MO44	27	23	8	29.00	黒褐色土
		Ｐ６	MN44・45	32	29	19	28.91	黒褐色土
		Ｐ７	MN45	18	18	5	29.02	黒褐色土
		Ｐ８	MN45	17	16	5	29.02	黒褐色土
693	平成14年度調査においてＭＦ44～47グリッド第Ⅴ層より4基、15年度はＭＦ41～43グリッド第Ⅳ層より6基、計10基のほぼ一直線に並ぶ柱穴を検出した。P1がＳＫＰ902に切られている。本柱穴列は南北方向(Ｎ－	Ｐ１	MF41	38	32	13	29.29	黒褐色土他
		Ｐ２	MF42	36	34	23	29.22	黒褐色土他
		Ｐ３	MF43	40	29	18	29.31	黒褐色土他

第21表　柱穴列観察表（２）

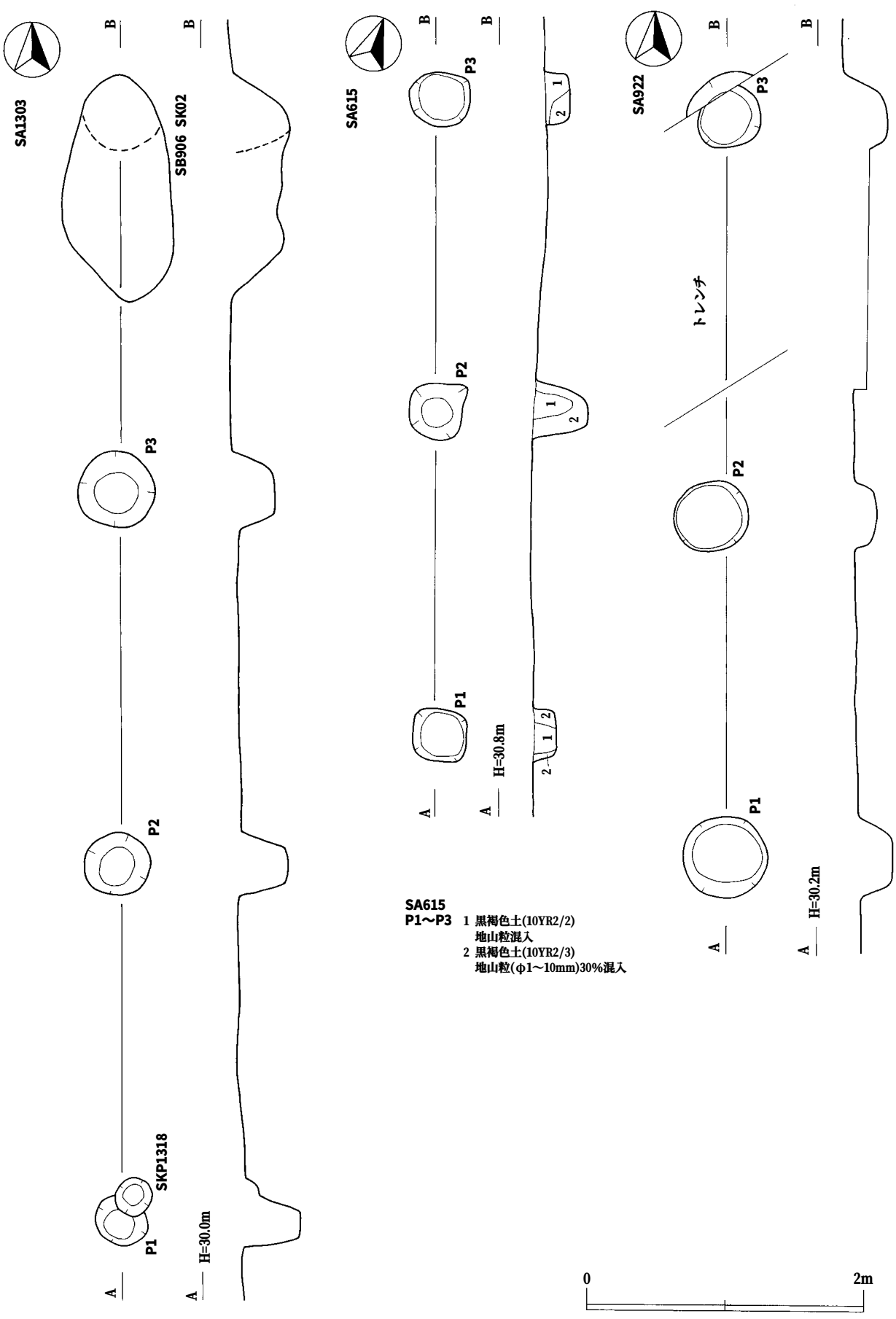
遺構番号	確認状況、全体規模など	柱穴番号	地　区	柱穴の規模（cm）			底面標高（m）	埋　土
				長軸	短軸	深さ		
	2°－W)に延びており、全長は25.56mである。調査区内では最も長い柱穴列であるが、南側は更に調査区外へ延びる可能性があり、北側は削平によって失われた可能性があることから、本来はもっと大きな規模であったと思われる。柱穴間の距離は、心々間で、P1－P2間2.68m、P2－P3間2.36m、P3－P4間2.56m、P4－P5間 2.84m、P5－P6間0.4m、P6－P7間2.74m、P7－P8間4.76m、P8－P9間4.16m、P9－P10間3.12mである。P7から土師器甕の破片が出土した。〔第83図、図版10〕	Ｐ４	MF44	32	28	12	29.37	明褐色土
		Ｐ５	MF44	34	27	11	29.40	明褐色土
		Ｐ６	MF44・45	28	26	11	29.31	明褐色土
		Ｐ７	MF44	20	20	10	29.28	黒褐色土
		Ｐ８	MF45	24	18	6	29.60	黒褐色土
		Ｐ９	MF46	20	16	6	29.64	黒褐色土
		P10	MF47	22	16	6	29.64	黒褐色土
805	第Ⅴ層上面でN－20°－W方向に並ぶ3基の柱穴を長さ4.64mにわたり確認した。P2がＳＩ446－P3を切る。各柱穴間の距離は、心々間で、P1－P2間2.34m、P2－P3間2.3mである。遺物の出土はない。〔第26図〕	Ｐ１	MS43	22	18	13	28.56	黒褐色土
		Ｐ２	MS43	23	16	20	28.58	黒褐色土
		Ｐ３	MT44	20	20	23	28.55	黒褐色土
922	整理作業時に確認した。第Ⅳ層から検出されたN－2°－E方向に並ぶ3基の柱穴から構成される。全長5.34m、柱穴の心々間距離は、P1－P2間2.46m、P2－P3間2.88mである。P2から土師器片が出土した。〔第85図〕	Ｐ１	LS47	58	58	23	29.66	黒褐色土
		Ｐ２	LS46	54	54	17	29.76	黒褐色土
		Ｐ３	LS46	(60)	(58)	13	29.70	黒褐色土
941	第Ⅳ層上面において、南北方向(N－5°－E)に、ほぼ一直線に並ぶ9基(P8～P16)の柱穴を長さ11.28mにわたり確認した。本遺構のP10がＳＫＰ957と、P11・P13・P14・P15・P16がそれぞれこの順にＳＡ942－P3・P4・P5・P6・P7と、P15・P16がＳＤ431と重複する。本遺構の柱穴が他のすべてを切っていることから本遺構が最も新しい。各柱穴間は心々間距離で、P8－P9間0.16m、P9－P10間1.36m、P10－P11間3.16m、P11－P12間1.4m、P12－P13間1.24m、P13－P14間1.32m、P14－P15間1.44m、P15－P16間1.2mである。P10、P12、P14から土師器片が、P12から鍛冶滓が出土している。本遺構はＳＤ431とＳＡ942(P1～P7)にほぼ平行しており、両者との関連が考えられる。〔第83・88図〕	Ｐ８	MC45	32	22	16	29.75	黒褐色土
		Ｐ９	MC45	28	28	18	29.76	黒褐色土
		P10	MC45	28	25	15	29.86	黒褐色土
		P11	MC44	32	28	8	29.57	黒褐色土
		P12	MC44	25	25	24	29.61	黒褐色土
		P13	MC43・44	32	32	16	29.68	黒褐色土
		P14	MC43	33	28	9	29.62	黒褐色土
		P15	MC43	25	20	6	29.73	黒褐色土
		P16	MC43	37	32	15	29.70	黒褐色土
942	第Ⅳ層上面において、ほぼ南北方向(N－8°－E)に並ぶ、7基(P1～P7)の柱穴を長さ11.96mにわたり確認した。本遺構のP3・P4・P5・P6・P7がそれぞれこの順に、ＳＡ941－P11・P13・P14・P15・P16に切られる。P6・P7がＳＤ431に近接するが新旧関係は不明である。各柱穴間は心々間距離で、P1－P2間3.04m、P2－P3間2.48m、P3－P4間2.6m、P4－P5間1.38m、P5－P6間1.2m、P6－P7間1.36mである。P3、P4、P6から土師器片が出土した。〔第83・88図〕	Ｐ１	MC45・46	24	20	16	29.80	黒褐色土
		Ｐ２	MC45	20	20	6	29.55	黒褐色土
		Ｐ３	MC44	32	24	15	29.78	黒褐色土
		Ｐ４	MC44・45	32	25	15	29.71	黒褐色土
		Ｐ５	MC43	32	25	20	29.59	黒褐色土
		Ｐ６	MC43	36	29	8	29.71	黒褐色土
		Ｐ７	MC43	28	21	12	29.66	黒褐色土
945	削平された第Ⅴ層で、南北方向(N－8°－E)に並ぶ3基の柱穴を長さ4.02mにわたり検出した。柱穴の心々間距離は、P1－P2間1.30m、P2－P3間2.56mである。P1から土師器片が出土した。〔第82図〕	Ｐ１	LR45	17	14	4	29.63	黒褐色土
		Ｐ２	LR46	26	22	11	29.58	黒褐色土
		Ｐ３	LR46	20	16	4	29.66	黒褐色土
953	削平された第Ⅴ層で、南北方向(N－8°－E)に並ぶ3基の柱穴を長さ7.76mにわたり検出した。柱穴の心々間距離はP1－P2間4.84m、P2－P3間2.64mである。P3より土師器片が出土した。〔第84図〕	Ｐ１	LR45	24	24	13	29.51	黒褐色土
		Ｐ２	LQ46・47	21	18	7	29.58	黒褐色土
		Ｐ３	LQ47	25	22	13	29.52	黒褐色土
958	第Ⅴ層上面において、南北方向(N－3°－W)に、ほぼ一直線に並ぶ5基の柱穴を長さ5.04mにわたり検出した。各柱穴の心々間距離はP1－P2間2.56m、P2－P3間0.76m、P3－P4間0.88m、P4－P5間0.84mである。P2より土師器片が出土している。〔第82図、図版10〕	Ｐ１	MA43	28	26	11	29.73	黒褐色土
		Ｐ２	MA44	24	23	17	29.68	黒褐色土
		Ｐ３	MA44	24	22	10	29.76	黒褐色土
		Ｐ４	MA44	24	22	16	29.67	黒褐色土
		Ｐ５	MA45	24	21	23	29.73	黒褐色土
961	第Ⅴ層上面で、南北方向(N－1°－E)に並ぶ3基の柱穴を、長さ2.26mにわたり検出した。各柱穴の心々間距離はP1－P2間1.02m、P2－P3間1.00mである。遺物の出土はない。〔第82図、図版10〕	Ｐ１	MB41	22	20	22	29.63	黒褐色土
		Ｐ２	MB42	17	15	15	29.73	黒褐色土
		Ｐ３	MB42	18	17	8	29.80	黒褐色土
1303	整理作業時に確認した。第Ⅳ層上面から検出された南北方向（N－2°－W)に並ぶ3基の柱穴から構成される。判然としないがＳＩ906－SK02の北側にもう1基の柱穴があった可能性がある。P1からP3までの長さは5.36m、各柱穴間は心々間距離で、P1－P2間2.64m、P2－P3間2.72mである。P2から土師器片が出土した。〔第85図〕	Ｐ１	MD42	38	31	40	29.32	黒褐色土他
		Ｐ２	MD43	46	44	34	29.36	黒褐色土他
		Ｐ３	MD43	54	53	31	29.46	黒褐色土


SA48
A
P1
P2
P3
P4
B
A
H=33.3m
B
SA492
A
P1
P2
P3
P4
P5
B
A
H=29.2m
B
SA493
A
P1
SK489
P2
P3
P4
B
A
H=29.5m
B
1
1
1
1
SA490
P1 1 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱
炭化物、地山粒(φ1～10mm)30%混入
P2 1 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱
炭化物、焼土粒、地山粒混入
P3 1 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱
炭化物、地山粒5%混入
P4 1 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱
炭化物、地山粒混入
SA600
A
P1
P2
P3
B
A
H=30.1m
B
0
2m

第81図　柱穴列（１）


SA619
A
B
P1
P2
P3
P4
P5
H=29.2m
SA620
P1
P2
P3
P4
H=29.5m
SA945
P1
P2
P3
H=29.9m
1
SA945
P1　1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強
炭化物、焼土粒、地山粒50%混入
P2　1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強
炭化物、焼土粒、地山粒30%混入
P3　1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強
炭化物、焼土粒、地山粒90%混入
SA958
P1
P2
P3
P4
P5
H=30.8m
SA961
P1
P2
P3
H=30.1m
SA961
P1　1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
P2　1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒混入
P3　1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒混入
SA958
P1　1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
P2　1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
P3　1 黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
P4　1 黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒混入
P5　1 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
0
2m

第82図　柱穴列（２）


SA1303
SB906 SK02
P3
P2
SKP1318
P1
H=30.0m
SA615
P3
P2
P1
H=30.8m
SA615
P1～P3 1 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒(φ1～10mm)30%混入
SA922
トレンチ
P3
P2
P1
H=30.2m
0
2m

第85図　柱穴列（５）

8　溝跡

調査区内からは溝跡が14条検出されている。この内ＳＤ50を含めこの南西側の11条は柱穴列とともに主に平安時代の集落を区画するなどの性格を持つものと考えられる。これに対し、ＳＤ50の外側(北東側)に見られる３条の溝跡(ＳＤ24･71･238)については、平安時代以降の遺構であると思われるが、明確さを欠く。

ＳＤ24（第86図、図版10）

ＪＳ63グリッドからＫＢ70グリッドまでの第Ⅴ層上面で確認された。総延長29.6m、幅2.08～2.56m、確認面からの深さ24～40cmで、ほぼ直線に、北北西－南南東方向(Ｎ－21°－W)に延びている。底面は平坦で、中央やや南寄りに浅い窪みがある。壁は、南側が底面から急に立ち上がるのに対し、北側の立ち上がりは緩い。ＳＫＴ78とＳＫ82を切っている。ＳＤ238とも重複するが新旧関係は不明である。埋土は５層に分層した。一部人為的な埋め戻しと考えられる箇所も見られた。南端部から土師器坏が出土している。

ＳＤ50（第86図、図版10）

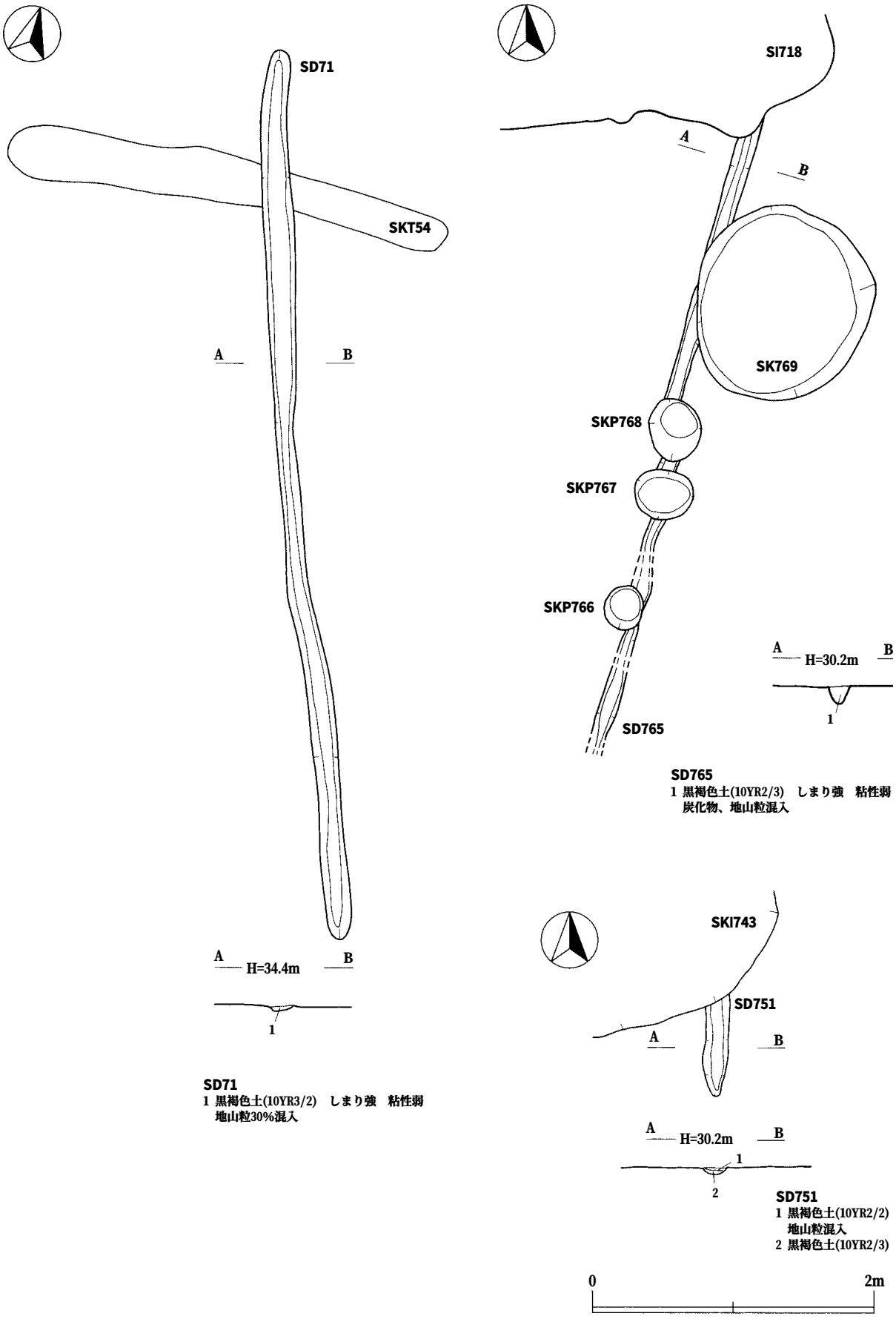
平成14･15の両年度調査区に跨り確認された溝跡である。ＫＰ59グリッドから西北西方向(Ｎ－73°－W)へＬＨ63グリッドまでの第Ⅲ～Ⅴ層で確認された。北側が第Ⅴ層、南側が第Ⅲ層、中央部が第Ⅳ層からの検出である。残存状況については、北側のＬＩ63以北では削平によって失われている。また、標高の低い南側は第Ⅲ層から確認できたが、本工事による切り土や確認調査用トレンチ、攪乱等によって所々寸断している。調査区内で確認されている規模は、最大幅82cm、確認面からの深さ８～46cm、総延長は約54mでほぼ真っ直ぐに伸びているが、北側が既に失われ、南側は調査区外南方へ更に延びていることから、本来はかなりの長さになるものと推定される。底面には起伏が見られ、底面南側に長さ1.2～2.1m、幅20cm、深さ７cmほどの溝状の掘り込みが所々に見られる。壁の立ち上がりは緩やかである。ＳＮ38･39、ＳＫＰ107･108･152･452を切り、ＳＫＰ103･106に切られる。遺物は、土師器坏・甕の破片の他、北側からは鍛冶滓が出土している。本遺構を境にその東西では、遺構の分布状況や分布密度が一変する。西側では竪穴住居跡や生産遺構をはじめとする平安時代の集落を構成する遺構が多数検出されているのに対し、東側では、遺構の検出数は少なく、縄文時代の陥し穴状遺構を除くと、そのほとんどは、時期決定の根拠に欠き、平安時代以降と推定される。

ＳＤ71（第87図）

ＫＢ70･71、ＫＣ70･71グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。長さ6.36m、幅14～22cm、深さ6cmである。ＳＤ24の北方延長線上に位置し、規模はＳＤ24に比べかなり小さいが、座標北からの傾きも同じ(Ｎ－21°－W)である。ＳＫＴ54を切る。遺物の出土は無い。

ＳＤ113（第88図、図版10）

ＬＥ56、ＬＦ56～60グリッドの第Ⅳ層上面で、北北西－南南東方向(Ｎ－12°－W)に延びる溝跡を確認した。ＳＫ240、ＳＫＰ153･239･250･251･252と重複し、本遺構はＳＫ240、ＳＫＰ239･250より新しく、ＳＫＰ153･251･252より古い。長さ18.44mにわたり検出したが、南北両端が削平により失われていることから本来の長さは不明である。幅は22～44cm、確認面からの深さは9～14cmである。土師器の坏・甕、鍛冶滓が出土している。


SD71
SKT54
A
B
A
H=34.4m
B
1
SD71
1 黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性弱
地山粒30%混入
SI718
A
B
SK769
SKP768
SKP767
SKP766
SD765
A
H=30.2m
B
1
SD765
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
炭化物、地山粒混入
SKI743
SD751
A
B
A
H=30.2m
B
1
2
SD751
1 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/3)
0
2m

第87図　溝跡（２）

ＳＤ238（第86図）

ＪＴ65グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。ＳＤ24の中央部東側壁に取り付くように検出された。重複関係があるものと思われるがその新旧は不明である。軸方位はＮ－58°－Ｅである。規模は全長1.28m、幅24cm、深さ６cmである。遺物の出土は無い。

ＳＤ431（第88図）

ＭＣ42グリッドから北北東方向(Ｎ－10°－Ｅ)へＭＢ49グリッドまでの第Ⅳ層上面で確認した。ＳＫＰ828を切り、ＳＡ941－P15･P16に切られる。確認した全長は28.6mである。しかし、北側は確認調査用トレンチに切られ、それ以北も削平により失われていると考えられる。また、南側はさらに調査区外南方に延びていることから本来の規模はもっと大きなものになると推定される。幅は14～32cm、確認面からの深さは８～16cmである。土師器甕の破片が出土している。

ＳＤ459（第89図、図版10）

ＬＩ56グリッドから北東方向(Ｎ－27°－Ｅ)へＬＧ61グリッドまでの第Ⅳ･Ⅴ層で確認した。ただし、削平の影響が強かったＬＨ58～60にかけての6.7mほどが精査中に失われ、完掘時には南北に離れて残存する状況となった。北側端部は、水路によって切られるが、その北方から溝跡が検出されなかったことから、水路付近が溝跡の北端であると考えられる。南側は、削平により失われているためＬＩ56グリッド以南にさらに延びている可能性がある。確認された総延長は18.96m、幅は８～28cm、確認面からの深さは４～８cmである。ＳＫ562、ＳＤ460、ＳＫＰ555･591を切り、ＳＫＰ485･486に切られる。土師器の甕の破片が出土している。

ＳＤ460（第89図、図版10）

ＬＩ57グリッドからほぼ北方(Ｎ－４°－Ｅ)へ４mほど延び、ＬＩ58グリッドで北西方向(Ｎ－70°－W)へ湾曲し、ここからほぼ直線的にＬＭ59グリッドまでの18mほどを第Ⅳ･Ⅴ層で確認した。ただし、削平によりＬＫ･ＬＬ59グリッドの４mほどが途切れているが、軸方向や埋土の堆積状況から同一の溝跡であると判断した。全長23.68m、幅12～26cm、確認面からの深さは６～20cmである。ＳＮ479とＳＫ562を切り、ＳＤ459とＳＫＰ742に切られる。底面は丸底、あるいは平坦で、壁の立ち上がりは場所によっては急である。また、ＬＩ58グリッドとＬＫ59グリッドに３基ずつ、ＬＪ59グリッドに５基、ＬＭ59グリッドに１基の計12基のピット状の掘り込みが底面で確認された。土師器の坏・甕、羽口、鍛冶滓が出土している。

ＳＤ560（第89図）

ＬＩ57･58グリッドの第Ⅳ層上面で確認した。ＳＤ459とＳＤ460の交点付近に位置している。ＳＫ562･592に切られる。軸方位はＮ－24°－Ｅを向き、長さ1.78m、幅24～31cm、確認面からの深さ２～９cmである。遺物の出土は無い。

ＳＤ633（第88図、図版10･11）

ＬＲ46グリッドからＬＳ52グリッドまでの第Ⅳ･Ⅴ層で確認した。ＳＩ1000、ＳＫＰ701･1321･1323と重複する。本遺構は、ＳＩ1000より新しく、ＳＫＰ1321より古いが、ＳＫＰ701･1323とは新旧関係が不明である。確認された全長は28.5m、最大幅は1.32m、深さは22cmである。軸方位はＮ－10°－Wである。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。土師器片、鍛冶滓など多数の遺物が出土しており、この内、柱状高台の土師器皿(91－135)を図化した。

ＳＤ751（第87図）

ＬＴ48グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。ＳＫＩ743に切られる。確認された長さは68cm、幅16～18cm、確認面からの深さは5cmで、断面形は逆台形状である。軸方位はＮ－8°－Ｅである。土師器片が出土している。

ＳＤ765（第87図）

ＭＡ47･48グリッドの第Ⅳ層で確認した。ＳＩ718、ＳＫ769、ＳＫＰ766･767･768と重複する。いずれよりも本遺構が古い。確認された長さは4.41m、幅9～14cm、深さ12cmで、断面形はＵ字状である。軸方位はＮ－15°－Ｅである。遺物の出土は無い。

ＳＤ924（第88図）

ＬＲ47、ＬＳ47･48グリッドの第Ⅳ層上面で確認した。北側については、平成14年度調査区では検出されていないため不明である。軸方位はＮ－10°－Ｗである。南側は確認調査時のトレンチによって失われているが、ＳＩ1000と重複していた可能性がある。確認された長さは2.97m、幅42～60cm、確認面からの深さは７cmである。底面は丸底である。土師器片が出土している。

ＳＤ940（第88図）

ＭＣ44グリッドの第Ⅳ層上面で確認した。北側はトレンチおよび削平のため失われており本来の規模は不明である。現状では長さ1.45m、幅24cm、深さ５cmであるが、本来はＳＤ431と平行するように南北方向に延びていたものと思われる。底面は平坦である。遺物の出土は無い。また、底面から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、1,175±35年前(yrBP±1σ)という結果を得ている。

9　性格不明遺構

性格が不明で、形状、規模などを検討した結果、既述の遺構の種類に帰属しないと考えられる遺構を性格不明遺構とした。調査区内では3基が検出されており、確認状況や出土遺物などからいずれも平安時代と判断した。

ＳＸ256（第63･75図）

ＬＫ58グリッドの第Ⅳ層で、黒褐色土に斑状に白色粘土が混じるプランを確認した。平面形と規模は、長径65cm、短径45cmの楕円形である。掘り込みおよび底面は判然としないが、上記の層中から土師器坏片が出土している。付近に土師器焼成遺構が存在することからこれに関係する可能性がある。

ＳＸ634（第55･65図）

ＭＱ44グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。平面形と規模は長径74cm、短径66cmの不整楕円形である。掘り込みおよび底面とも不明瞭である。ＳＫ574、ＳＢ612－P1に切られる。ＳＫ578とは新旧関係は不明である。遺物の出土は無い。

ＳＸ890（第90図、図版14）

ＬＧ53･54、ＬＨ53･54グリッドの第Ⅴ層から黒褐色土の長方形のプランとして確認した。規模は東西約2.60m、南北約１m、確認面からの深さ約10cmである。削平による影響のためか、東側と西側の壁のみ確認できた。底面は比較的平坦で堅く締まり、壁はやや急に立ち上がる。土師器、鍛冶関連遺物、鉄製品などが出土した。この内、土師器坏(91－136)と鉄鏃(91－137)を図化した。

10　柱穴様ピット（第90･91図、付図1・2）

調査区内から計373基の柱穴様ピットを確認した。この内ＳＤ50の南西側から検出したものは確認状況等から平安時代と判断したが、ＳＤ50の北東側のものについては、一部の地区を除くと、ほとんどが所属年代決定の根拠に欠く。なお、柱穴様ピットの配置図と柱穴様ピット計測表は付図２に記載し、ＳＫＰ151･497･616の３基は個々に図化(第90図)している。また、ＳＫＰ474から出土した土師器坏は第91図に、椀形鍛冶滓は第100図に載せている。また、鍛冶関連遺物を出土した柱穴様ピットに関しては第24･25･27表に記載している。

ＳＫＰ151（第90図）

ＬＥ59グリッドの第Ⅳ層において確認した。９層に分層できた。土師器の坏･甕の破片が出土している。

ＳＫＰ497（第90図）

ＭＯ41グリッドの第Ⅴ層において確認した。黒褐色土と地山土粒が混入した黒褐色土が相互に堆積している。遺物の出土は無い。

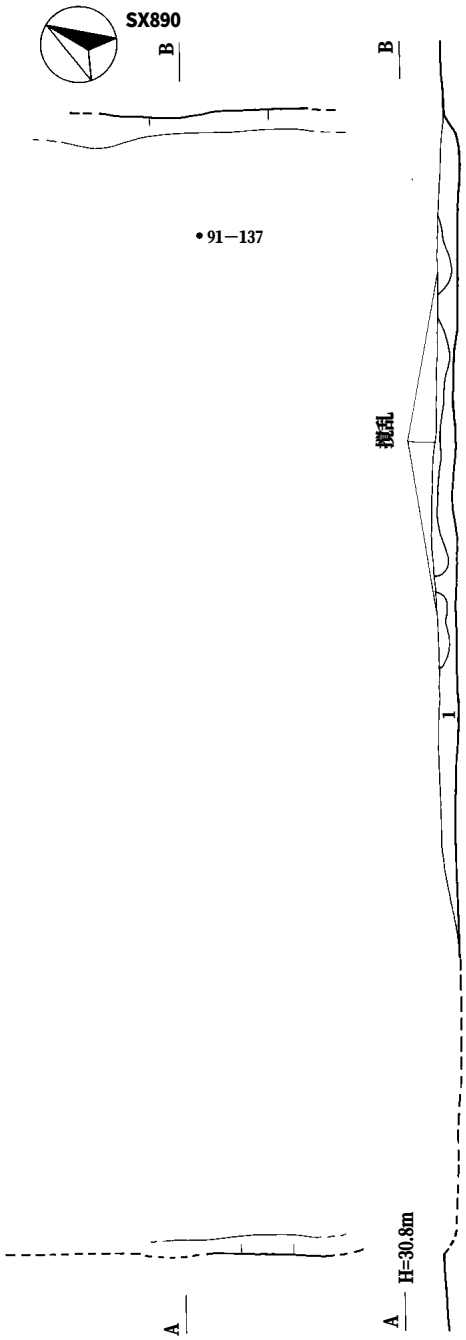
ＳＫＰ616（第90図)

ＬＫ58グリッドの第Ⅳ層において確認した。上面の形状は不整な楕円形であるが、北側は、ほぼ垂直に深く掘り込まれている。北側の平坦な底面の形状は隅丸方形に近い形状である。12層に分層できた。第２層が柱痕で、第４層以下が裏込め土と考えられる。土師器の坏・甕の破片が出土している。

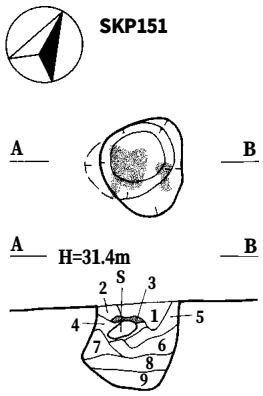
11　出土遺物（平安時代）

遺構内から出土した遺物については、本節において、各遺構種ごとに主な出土遺物を図示し、これらの法量等を観察表に記載している。ここでは、遺跡から出土した平安時代の土器を中心に、その概略を述べる。鍛冶関連の遺物については主に次節で述べる。

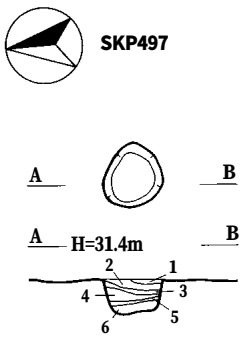
今調査における平安時代の遺物の出土量は、整理用コンテナ(54×34×10cm)に換算して合計58箱である。その内訳は、土師器が圧倒的に多くコンテナで44箱、須恵器が2箱、支脚などの土製品が２箱、鍛冶滓、フイゴの羽口などの鍛冶関連遺物が９箱、鉄製品が１箱である。器種を特定できる土師器は、そのほとんどを10世紀に属する坏と大小の甕が占める。坏は底部無調整で、回転糸切りによる底部切り離しのものがほとんどである。甕はロクロ成形のものと輪積み痕を留めるものが見られ、内外面ロクロナデ、内面ナデ・外面ケズリ、指頭オサエ等によって調整されている。また、支脚に転用され、カマド燃焼部より倒立して出土したもの(43－32、図版12他)もある。その他の器種としては、柱状高台の皿(72－113・91－135、図版11)と鍋の破片(72－115、図版12)が出土している。須恵器は、接合しない甕の体部の破片がほとんどを占める。外面にタタキ目、内面に当て具痕等が認められ、硯(43－29、図版13)に転用されたものも見られる。これに対し、口縁部(73－118、図版13)と底部(44－42、図版13)の出土は数点に過ぎない。他に壺の頸部(74－126、図版13)などが数点あるのみで、坏と特定できる須恵器の出土は無かった。土製品としては、支脚(73－124、図版13他)、土錘(93－154･155、図版13)などが出土している。なお、遺構外出土の遺物については、その主なものを第92･93図に示し、これらの法量等を第23表に記載している。



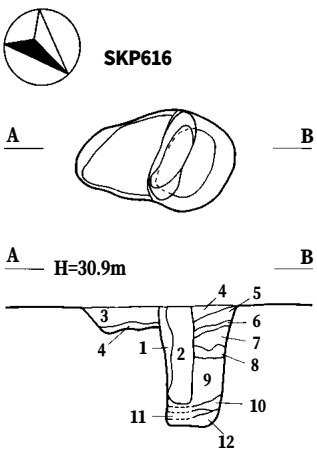
SX890
1 黒褐色土(10YR2/2) しまり強　粘性弱
炭化物、焼土粒、地山粒混入



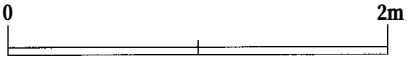
SKP151
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強
炭化物、焼土粒混入
2 暗褐色土(10YR3/3)
地山粒10%、黒褐色土(10YR2/2)斑に含む
3 暗赤褐色土(2.5YR3/3)　粘性弱
焼土粒混入
4 暗褐色土(7.5YR3/2)
焼土粒混入
5 暗褐色土(10YR2/2)
6 黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性強
地山粒混入
7 黒褐色土(10YR3/2)　しまり弱　粘性強
8 褐色土(10YR4/6)　しまり強　粘性強
黒褐色土(10YR3/2)を斑に含む
9 黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性強
地山粒混入



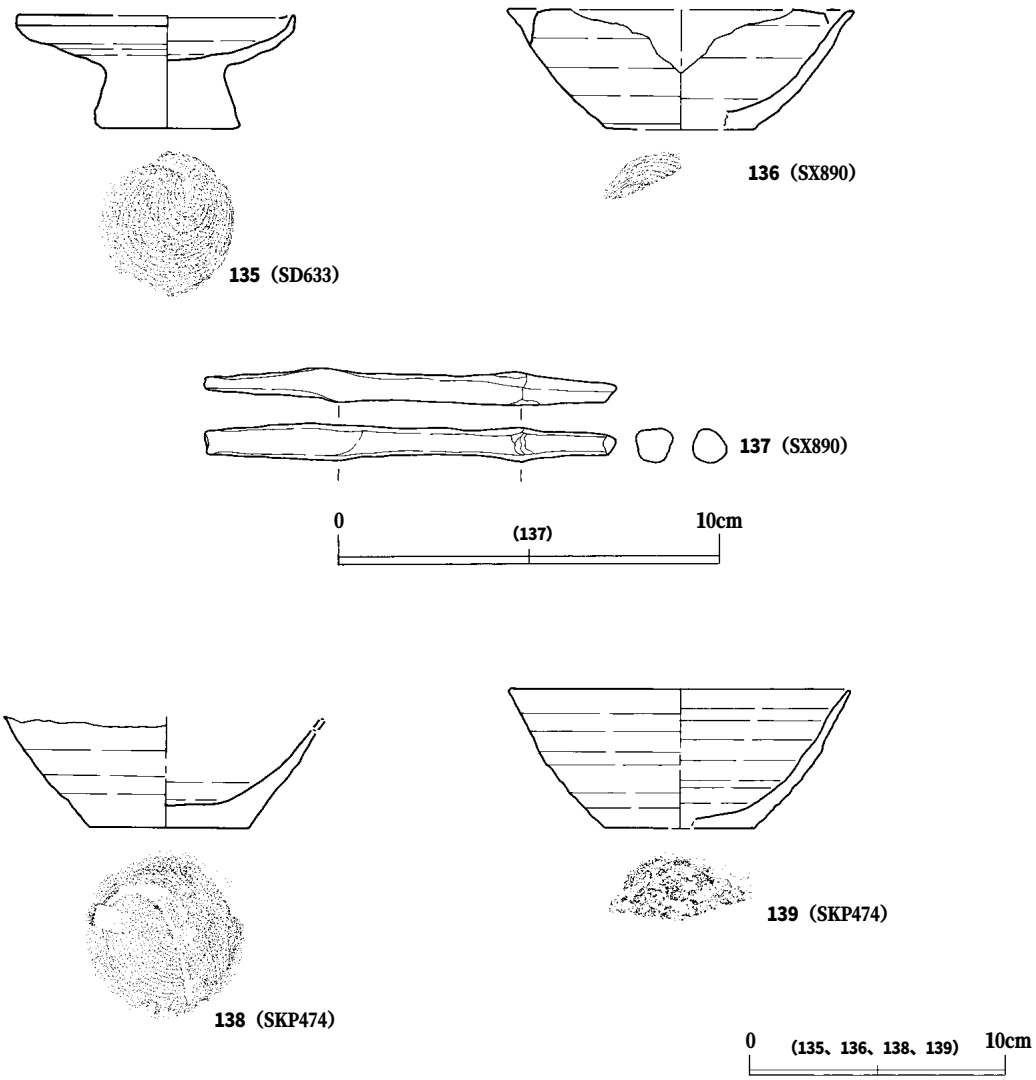
SKP497
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱
2 黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱
地山粒(φ5〜10mm)50%混入
3 黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱
4 黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱
地山粒(φ5〜10mm)50%混入
5 黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱
6 黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱
地山粒混入



SKP616
1 黒褐色土(10YR2/3)
2 黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、地山粒混入
3 黒褐色土(10YR2/2)
4 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強
地山粒混入
5 褐色土(10YR4/6)　しまり強
黒褐色土混入
6 褐色土(10YR4/6)　しまり強
黒褐色土10%混入
7 褐色土(10YR4/6)　しまり強　粘性強
8 褐色土(10YR4/6)　しまり強
9 褐色土(10YR4/6)　しまり弱　粘性強
黒褐色土混入
10 黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性強
11 褐色土(10YR4/4)
12 黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性強



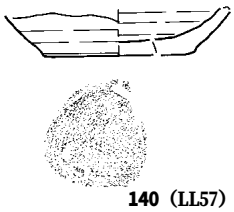
第90図　性格不明遺構・柱穴様ピット



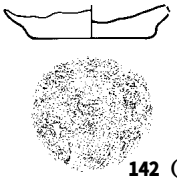
第91図　溝跡・性格不明遺構・柱穴様ピット出土遺物

第22表　溝跡･性格不明遺構･柱穴様ピット出土遺物観察表

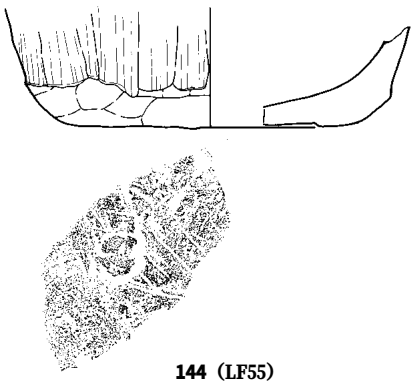
挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備考
91-135	SD633	土師器	皿	口縁～底部	10.8	台径5.4cm	4.5	回転糸切	内外面ロクロナデ	柱状高台
91-136	SX890	土師器	坏	口縁～底部	13.4	5.9	4.7	回転糸切	内外面ロクロナデ	
91-137	SX890	鉄製品	鉄鏃		最大長10.8cm	最大径0.9cm	重量19.2g			保存処理済
91-138	SKP474	土師器	坏	体部～底部	―	6.3	―	回転糸切	内外面ロクロナデ	
91-139	SKP474	土師器	坏	口縁～底部	13.4	6.0	5.5	摩滅	内外面ロクロナデ	底部内外・断面に錆付着

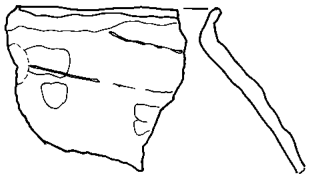

140（LL57）

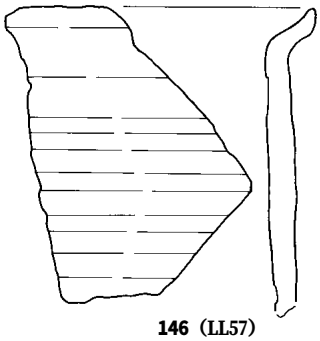
141（LM59）

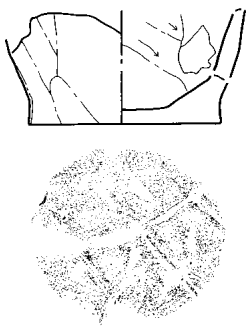

142（表採）

143（表採）


144（LF55）


145（LK57）

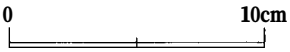

146（LL57）


147（LT48）

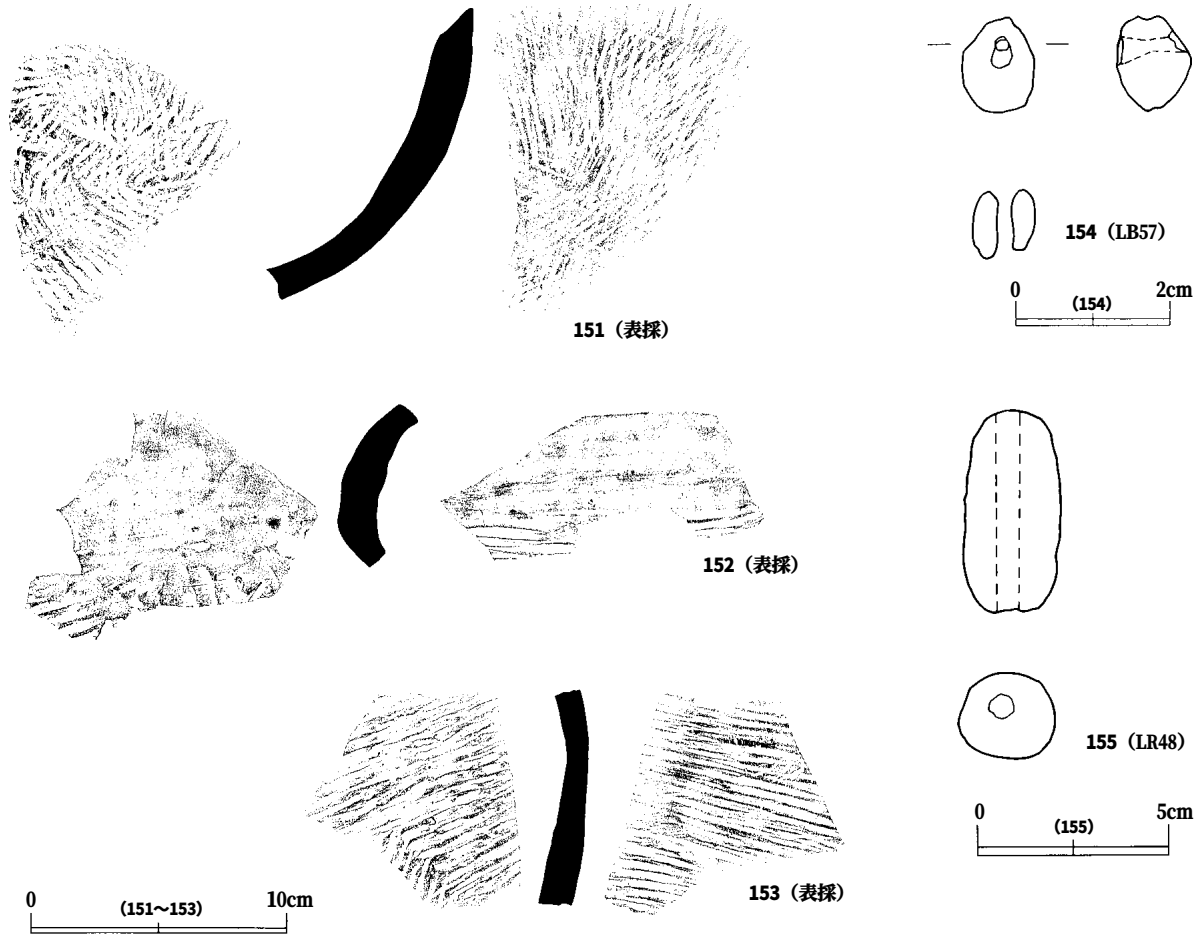
148（LT48）

149（MD52）

150（MR44）



第92図　遺構外出土遺物（１）



第93図　遺構外出土遺物（２）

第23表　遺構外出土遺物(平安時代)観察表

挿図番号	出土位置	種別	器種	部　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備考
92-140	LL57	土師器	坏	底部	—	5.9	—	摩滅	内外面ロクロナデ	
92-141	LM59	土師器	坏	底部	—	4.4	—	回転糸切	内外面ロクロナデ	内外面に煤状炭化物付着
92-142	表採	土師器	坏	底部	—	4.9	重量19.2g	回転糸切	内外面ロクロナデ	
92-143	表採	内黒	坏	底部	—	3.8	—	回転糸切		内黒
92-144	LF55	土師器	甕	底部	—	12.0	—	木葉痕	内面剥落、外面ケズリ	外面に煤状炭化物付着
92-145	LK57	土師器	甕	口縁～体部	—	—	—		内面ナデ、外面指頭によるオサエ	
92-146	LL57	土師器	甕	口縁～体部	—	—	—		内外面ロクロナデ	
92-147	LT48	土師器	甕	体部下半～底部	—	7.5	—	砂底	内面指頭オサエ、ナデ、外面ケズリ	外面に黒斑
92-148	LT48	須恵器	甕	体部	—	—	—		内面アテ目、外面タタキ目	
92-149	MD52	須恵器	甕	体部	—	—	—		内面アテ目、外面タタキ目	
92-150	MR44	須恵器	壺	体部	—	—	—		ロクロ調整、外面ケズリ	
93-151	表採	須恵器	甕	体部	—	—	—		内面アテ目、外面タタキ目	
93-152	表採	須恵器	甕	口縁部	—	—	—		内面アテ目、外面タタキ目	中世陶器？
93-153	表採	須恵器	甕	体部	—	—	—		内面アテ目、外面タタキ目	
93-154	LB57	土製品	土錘	完形	長径1.2cm	短径1.0cm	重量1.0g	最大孔径0.2cm		
93-155	LR48	土製品	土錘	完形	長さ5.4cm	最大径0.9cm	重量32.2g	孔径0.6cm		

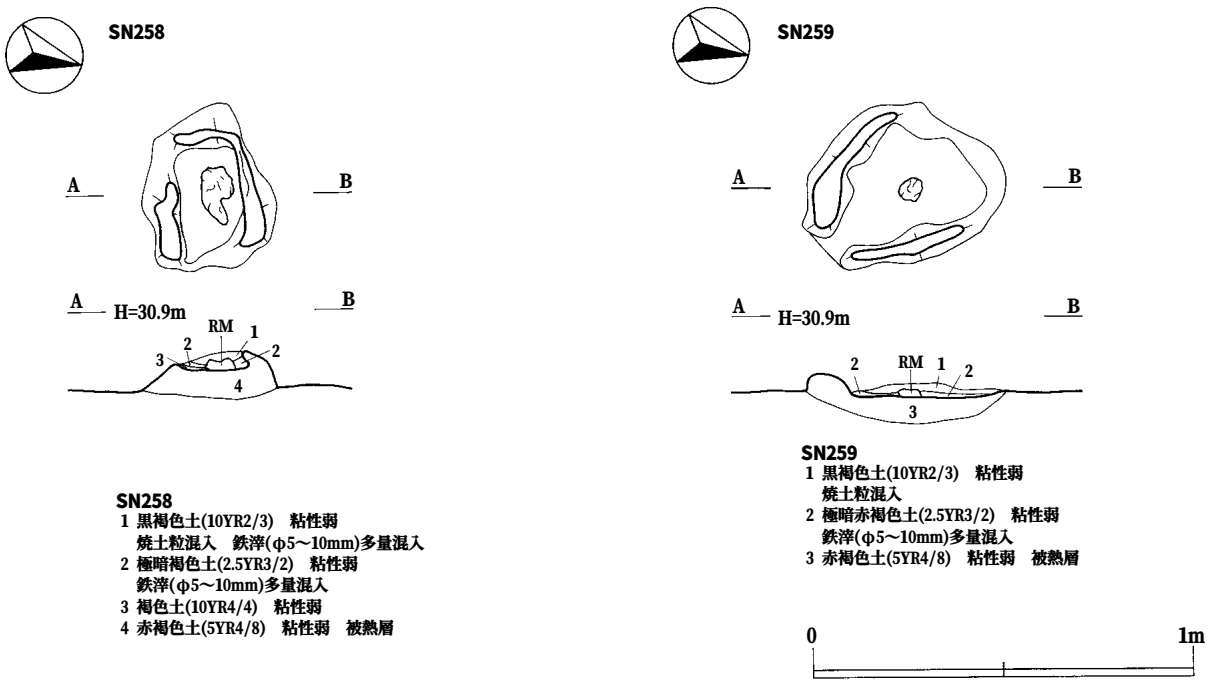
第5節　鍛冶関連の遺構と遺物

調査では、鍛冶炉が2基確認されている。検出状況などから平安時代と判断した。また、鍛冶関連遺物は主に調査区西側から出土している。鍛冶炉および鍛冶関連遺物の報告にあたっては、昭和町西野遺跡、琴丘町小林遺跡、本荘市大坪遺跡を参照した。

1　鍛冶炉

ＳＮ258・259（第94～96図、図版8）

2基の鍛冶炉は、調査区西側北寄りのＬＯ58グリッドの第Ⅳ層上面でほぼ同時に確認された。両者とも重複が無く、ＳＮ258の北東に約40cmの間隔を置いてＳＮ259が位置する。ＳＮ258は、第Ⅳ層を長軸30cm、短軸20cmほどの隅丸方形に掘り窪めて炉床を作っており、長軸の方位はＮ－67°－Ｅである。確認面から炉底までの深さは5cmほどで、炉床下の第Ⅳ層は熱を受けて赤褐色に硬化している。ＳＮ259は、第Ⅳ層を長軸40cm、短軸30cmほどの南東側が尖る楕円形に掘り窪めて炉床を作っており、長軸の方位はＮ－53°－Ｗである。確認面から炉底までの深さは5cmほどで、炉床下の状況はＳＮ258と同様である。また、両遺構の新旧関係は不明であるが、周囲のＳＫＰ598･780･776などの存在から、両遺構とも上屋を備えていた可能性がある(第95図)。これに関連する遺物に関しては、鍛冶炉を確認した第Ⅳ層の上層から微細な遺物を含む土を25cmメッシュで取り上げた(第96図)。これを各メッシュ毎に洗浄し、遺物を磁着するものとしないものに分け、更に4.0mm・2.0mm・0.8mmのフルイで分類した。次にこれを肉眼と磁着により、粒状滓、鍛造剥片などの各種鍛冶関連遺物に分類・計量し、遺物の種別に重量別分布図を作成した(第97･98図)。なお、北東隅の6メッシュは削平のため土の取り上げができなかった。各遺物の分布は、何れもＣ5、Ｅ2～4に集中し、ＳＫＰ789が位置するＦ3は極端に少ない。ここに鉄床石が据えられていた可能性がある。



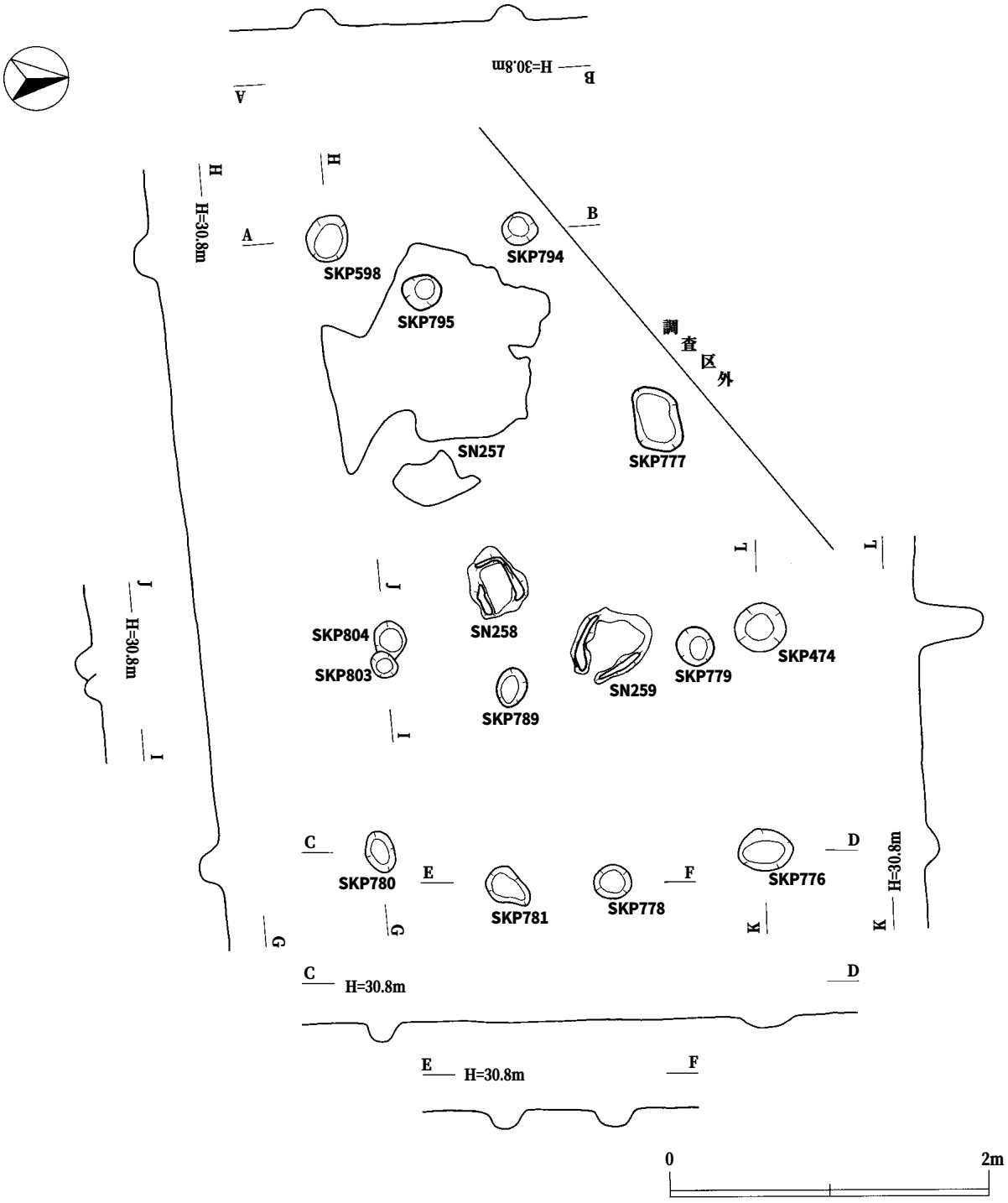
SN258
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　焼土粒混入　鉄滓(φ5～10mm)多量混入
2 極暗褐色土(2.5YR3/2)　粘性弱
　鉄滓(φ5～10mm)多量混入
3 褐色土(10YR4/4)　粘性弱
4 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱　被熱層

SN259
1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　焼土粒混入
2 極暗赤褐色土(2.5YR3/2)　粘性弱
　鉄滓(φ5～10mm)多量混入
3 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱　被熱層

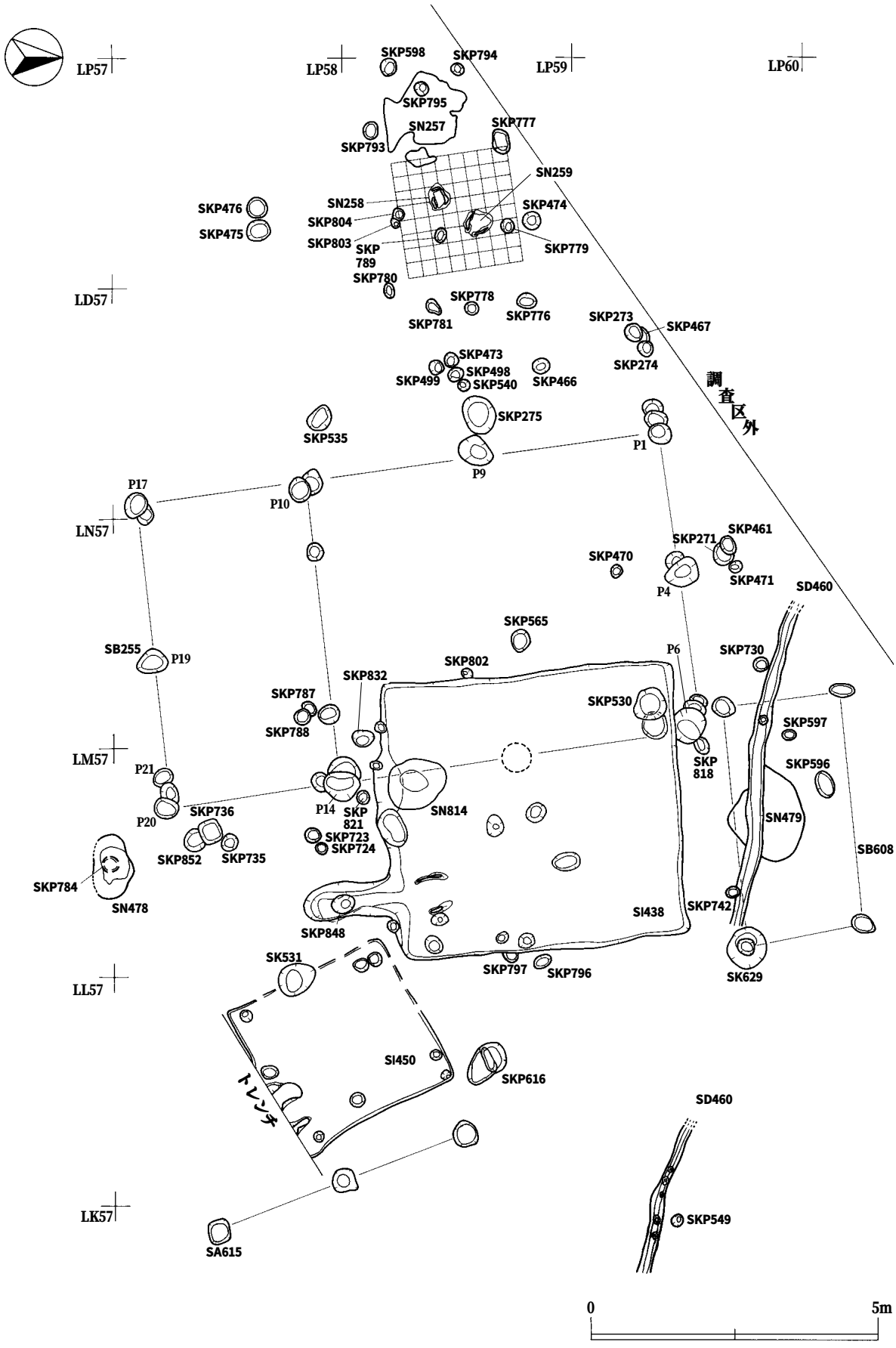
第94図　鍛冶炉（1）

2　鍛冶関連遺物

全調査区から25kg以上の鍛冶関連遺物が出土しており、出土地点と種別重量、構成比を第27･28表に記載している。これらは出土状況や形状などから平安時代と判断した。この他の鉄関連遺物としては、製鉄炉壁(102－158)がＳＩ429の埋土上位より出土しており、中世の可能性がある。鍛冶炉周辺(第96図)で出土した主な鍛冶関連遺物については、構成図(第99図)を作成し、記載遺物を実測し図化した(第100･101図)。各種の鍛冶滓の他に、フイゴの羽口、鉄床石の破片、鉄製品などが出土している。 99･101－⑯(図版14)は刀剣の兜金あるいは鞘尻金具と考えられ、搬入されたものと思われる。

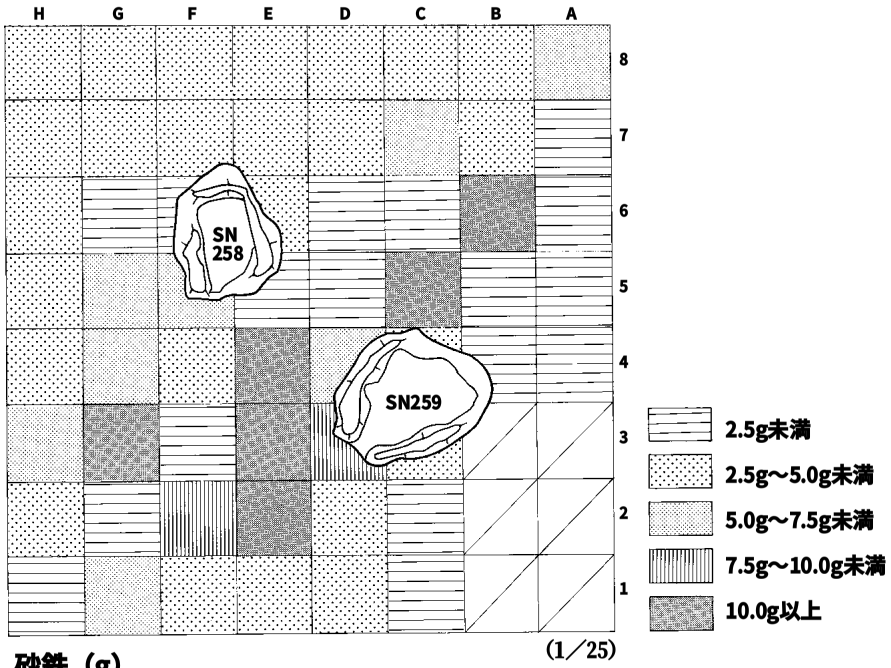


第95図　鍛冶炉（２）



第96図　鍛冶炉周辺遺構配置図

砂鉄分布図

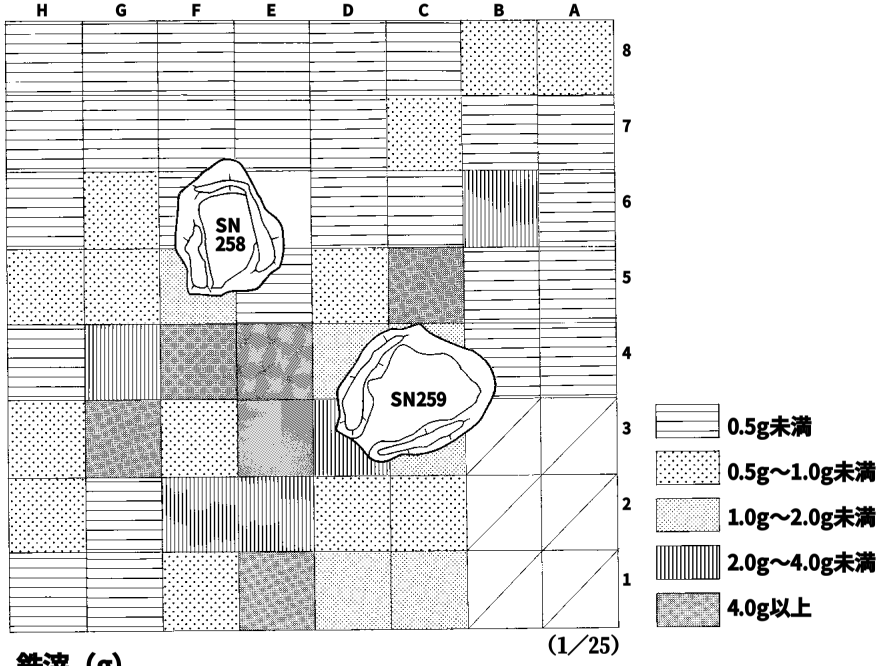


砂鉄（g）

H	G	F	E	D	C	B	A	
2.8	3.4	3.5	4.3	4.1	3.4	4.7	5.0	8
3.1	4.2	2.7	2.5	3.3	5.3	3.7	2.1	7
4.3	2.4	1.3	4.6	0.5	1.1	10.5	2.0	6
4.5	5.1	6.4	1.8	2.2	12.1	1.1	1.7	5
3.5	7.2	2.7	13.1	6.7	4.9	1.6	0.8	4
6.1	11.8	1.1	21.6	9.5	3.9			3
4.1	2.4	8.1	10.5	4.2	1.6			2
1.9	5.4	3.6	4.7	3.0	0.4			1

総計264.1g

鉄滓分布図



鉄滓（g）

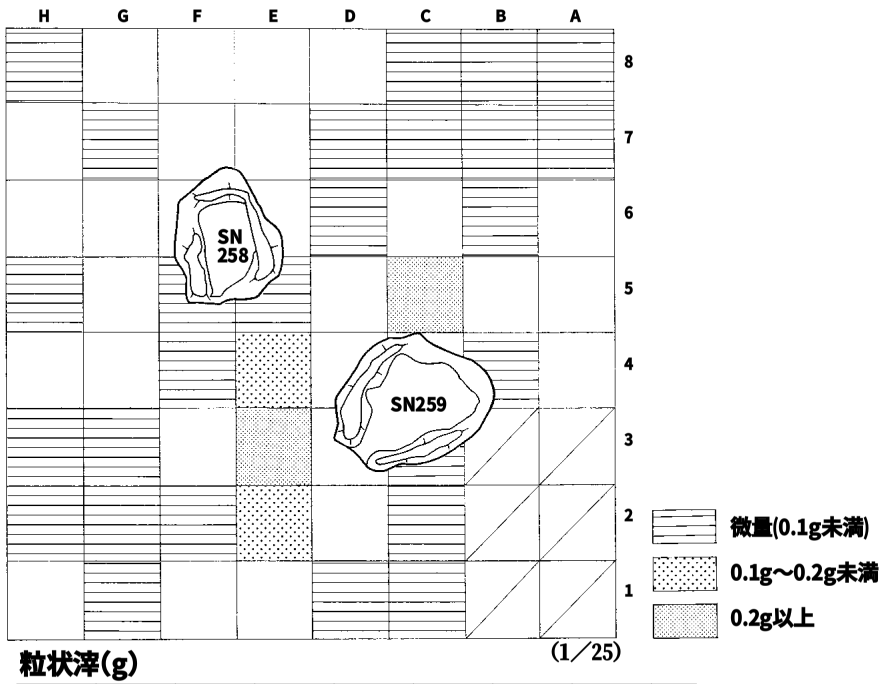
H	G	F	E	D	C	B	A	
0.2	0.4	0.2	0.3	0.3	0.2	0.7	0.8	8
0.4	0.1	0.3	0.1	0.3	0.5	0.4	0.1	7
0.3	0.5	0.1	0.0	0.3	0.1	2.9	0.3	6
0.6	0.9	1.0	0.4	0.5	7.3	0.1	0.1	5
0.2	2.9	12.9	8.2	1.5	1.9	0.2	0.1	4
0.7	4.4	0.5	14.9	2.1	1.8			3
0.6	0.1	2.2	3.7	0.5	0.7			2
0.3	0.4	0.5	10.7	1.1	1.0			1

総計256.2g

SN258炉内	46.7
SN259炉内	114.7

第97図　鍛冶炉重量別遺物分布図（１）

粒状滓分布図



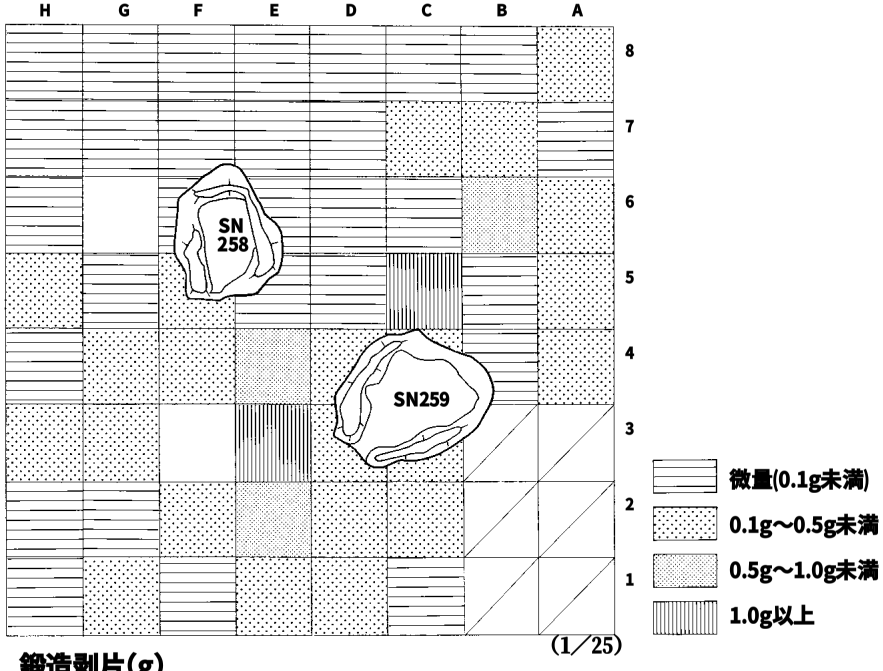
粒状滓(g)

H	G	F	E	D	C	B	A	
微量	0.0	0.0	0.0	0.0	微量	微量	微量	8
0.0	微量	0.0	0.0	微量	微量	微量	微量	7
0.0	0.0	0.0	0.0	微量	0.0	微量	微量	6
微量	0.0	微量	微量	0.0	0.3	0.0	0.0	5
0.0	0.0	微量	0.1	0.0	0.0	微量	0.0	4
微量	微量	0.0	0.2	0.0	微量			3
微量	微量	微量	0.1	0.0	微量			2
0.0	微量	0.0	0.0	微量	微量			1

総計2.2g

SN258炉内	微量
SN259炉内	1.5

鍛造剥片分布図



鍛造剥片(g)

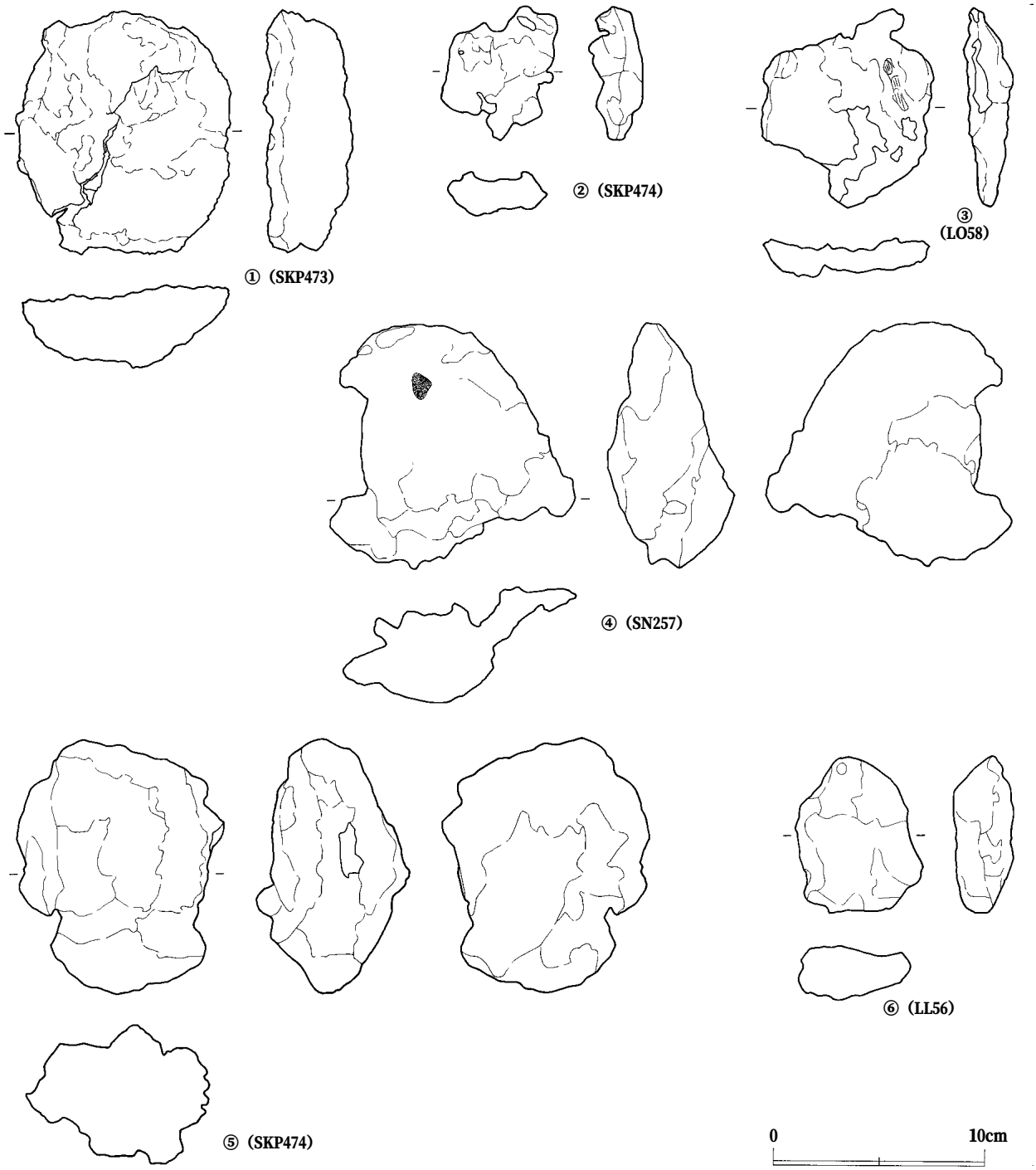
H	G	F	E	D	C	B	A	
微量	微量	微量	微量	微量	微量	微量	0.1	8
微量	微量	微量	微量	微量	0.1	0.1	微量	7
微量	0.0	微量	微量	微量	微量	0.7	0.1	6
0.1	微量	0.1	微量	微量	1.5	微量	0.2	5
微量	0.3	0.1	0.8	0.3	0.2	微量	0.1	4
0.1	0.3	0.0	2.5	0.4	0.2			3
微量	微量	0.2	0.7	0.1	0.1			2
微量	0.1	微量	0.1	0.2	微量			1

総計11.9g

SN258炉内	0.1
SN259炉内	2.0

第98図　鍛冶炉重量別遺物分布図（２）

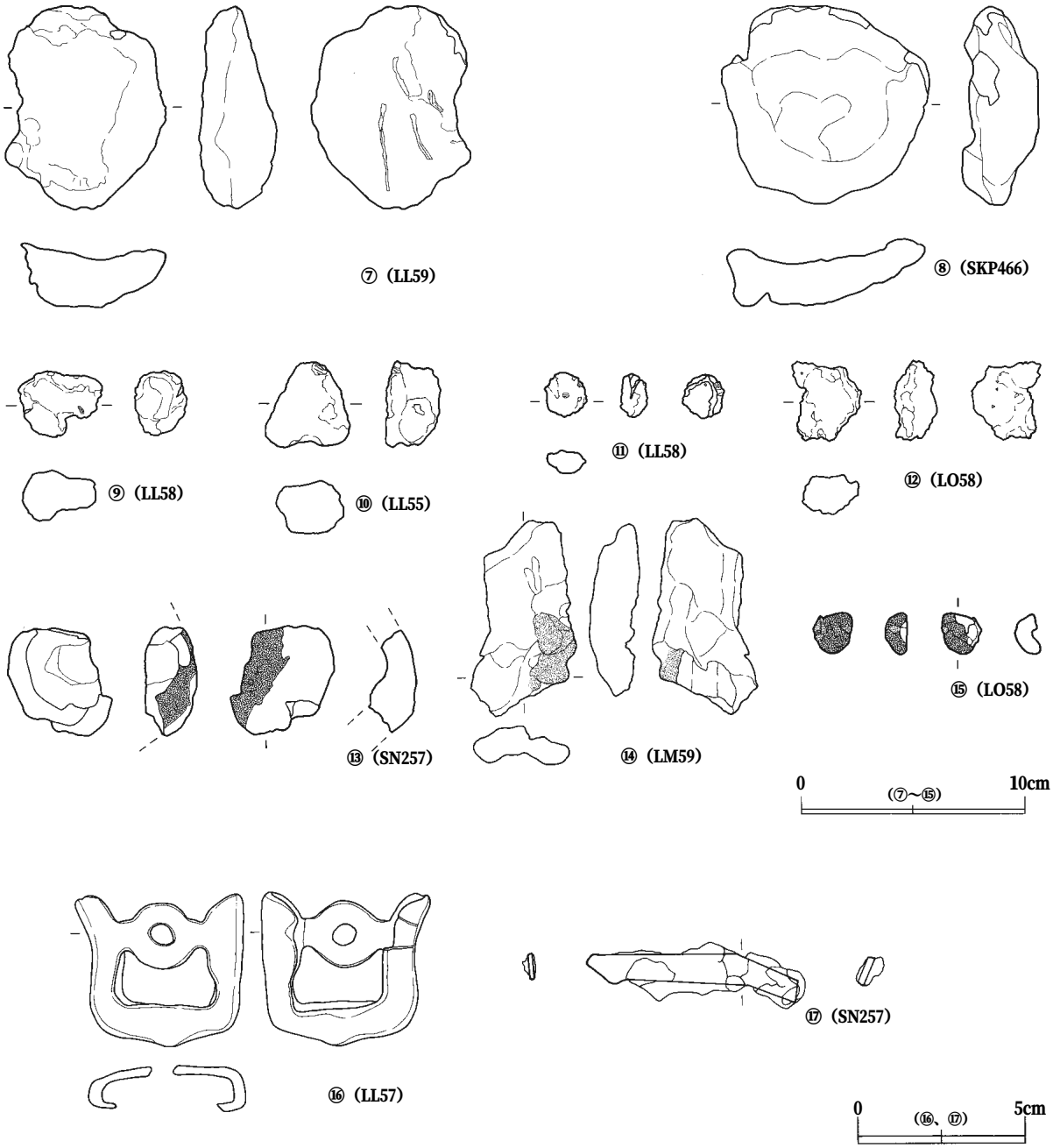
第99図　鍛冶関連遺物構成図



第100図　鍛冶関連遺物構成図記載遺物（１）

第24表　鍛冶関連遺物構成図記載遺物観察表（１）

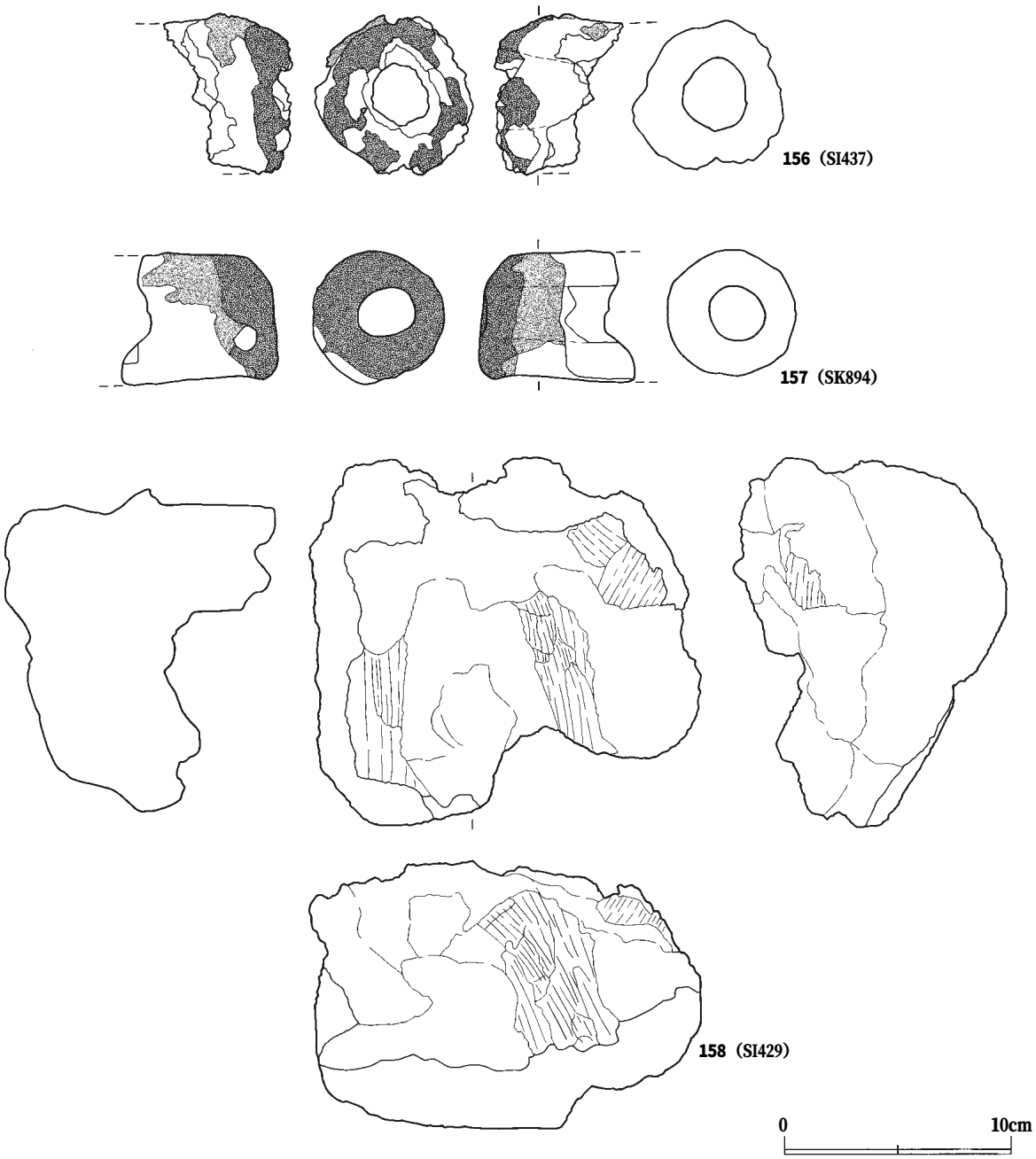
構成図番号	出土位置	遺物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度
①	SKP473	椀形鍛冶滓(中)含鉄	10.2	11.5	4.2	641.6	8	錆化
②	SKP474	椀形鍛冶滓(小)	5.4	6.5	2.3	62.4	4	なし
③	LO58	椀形鍛冶滓(小)	8.2	9.4	2.3	111.1	3	なし
④	SN257	椀形鍛冶滓(中)二段	11.5	11.6	6.0	549.1	4	なし
⑤	SKP474	椀形鍛冶滓(中)二段含鉄	9.8	12.0	7.3	796.5	8	H
⑥	LL56	椀形鍛冶滓(中)含鉄	6.0	7.4	2.8	175.7	7	M



第101図　鍛冶関連遺物構成図記載遺物（２）

第25表　鍛冶関連遺物構成図記載遺物観察表（２）

構成図番号	出土位置	遺物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度
⑦	LL59	椀形鍛冶滓(中)含鉄	7.1	9.1	3.5	207.6	7	錆化
⑧	SKP466	椀形鍛冶滓(中)含鉄	9.3	8.9	3.3	276.7	8	錆化
⑨	LL58	鍛冶滓(含鉄)	3.7	2.9	2.3	22.4	8	錆化
⑩	LL55	鍛冶滓(含鉄)	3.8	3.9	2.5	41.8	6	M
⑪	LL58	鍛冶滓粒状滓付	1.9	2.0	1.2	3.9	2	なし
⑫	LO58	鍛冶滓(鍛造剥片付)	2.8	3.6	2.0	16.2	3	なし
⑬	SN257	羽口	〔4.6〕	〔4.8〕	〔2.3〕	〔39.5〕	3	なし
⑭	LM59	羽口	〔8.8〕	〔4.7〕	〔2.7〕	〔60.9〕	2	なし
⑮	LO58	羽口溶解物	1.8	1.9	1.0	2.5	1	なし
⑯	LL57	鉄製品(兜金)	51.0	53.0	17.0	27.2	6	なし
⑰	SN257	鉄製品(刀子)	〔6.3〕	〔0.8〕	〔0.2〕	〔8.6〕	4	なし



第102図　鍛冶関連等遺物

第26表　鍛冶関連等遺物観察表

挿図番号	出土位置	遺物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考
102-156	SI437	羽口	5.6	7.0	7.1	112.2	5	なし	
102-157	SK894	羽口	6.9	5.8	5.9	151.9	5	なし	
102-158	SI429	製鉄炉壁	17.3	16.4	12.0	1950.0	1	なし	中世？

第27表　鍛冶関連遺物構成比（１）

※鉄製品以外の重量は小数点以下を切り捨てる。

種別 / 出土位置	椀型鍛冶滓		鍛冶滓		羽口		炉壁		鉄床石		被熱石		鉄製品		総重量 (g)
	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	
SI429													4.0	100.0	4.0
SI430			226	98.3									4.0	1.7	230.0
SI437			212	64.0	112	33.8							7.0	2.1	331.0
SI438			9	75.0									3.0	25.0	12.0
SI440			32	68.2									14.9	31.8	46.9
SI450			85	100.0											85.0
SI896			14	100.0											14.0
SI897	230	97.0											7.0	3.0	237.0
SI900			7	100.0											7.0
SKI743													9.0	100.0	9.0
SB255-P6			81	100.0											81.0
SB255-P9	95	100.0													95.0
SB255-P14					13	100.0									13.0
SB255-P21			14	100.0											14.0
SB906-SK02													7.9	100.0	7.9
SK114			30	100.0											30.0
SK443			10	100.0											10.0
SK580			7	100.0											7.0
SK630			36	100.0											36.0
SK703			4	100.0											4.0
SK894			314	84.9	56	15.1									370.0
SK898					5	100.0									5.0
SK928	490	100.0													490.0
SJ241					20	100.0									20.0
SN257	556	91.7			42	6.9							8.6	1.4	606.6
SN258			46	100.0											46.0
SN259			114	100.0											114.0
SN479			43	100.0											43.0
SN1026			6	100.0											6.0
SA941-P12			30	100.0											30.0
SD50			413	100.0											413.0
SD113			232	100.0											232.0
SD460			251	94.4	15	5.6									266.0
SD633			394	100.0											394.0
SX890			74	56.8	37	28.4							19.2	14.7	130.2
SKP275	277	96.2			11	3.8									288.0
SKP466	280	100.0													280.0
SKP467	124	100.0													124.0
SKP470			9	100.0											9.0
SKP473	645	100.0													645.0
SKP474	291	26.7	800	73.3											1091.0
SKP484			17	100.0											17.0
SKP541			5	100.0											5.0
SKP567			8	100.0											8.0
SKP710					19	100.0			4	100.0					19.0
SKP818			4	100.0											4.0
SKP908															4.0
KG58			3	100.0											3.0
KK57			4	100.0											4.0
KK62					22	100.0									22.0
KO59			25	100.0											25.0
KP59			28	100.0											28.0

第28表　鍛冶関連遺物構成比（２）

※鉄製品以外の重量は小数点以下を切り捨てる。

種別 / 出土位置	椀型鍛冶滓		鍛冶滓		羽口		炉壁		鉄床石		被熱石		鉄製品		総重量 (g)
	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	重量 (g)	構成比 (%)	
LB57			17	100.0											17.0
LC59			225	100.0											225.0
LD60			300	100.0											300.0
LE48			4	100.0											4.0
LE56			94	100.0											94.0
LE58			9	100.0											9.0
LG57			114	100.0											114.0
LG58			840	95.5	40	4.5									880.0
LG59			74	100.0											74.0
LG60			326	100.0											326.0
LG61			21	53.8	18	46.2									39.0
LH58					32	100.0									32.0
LL55			42	100.0											42.0
LL56	176	100.0													176.0
LL57			73	72.9									27.2	27.1	100.2
LL58			32	100.0											32.0
LL59			257	100.0											257.0
LM57			126	94.7	7	5.3									133.0
LM59			141	61.8	60	26.3							27.0	11.8	228.0
LN58			16	21.3	59	78.7									75.0
LO58	114	19.7	432	74.6	2	0.3			31	5.4					579.0
LQ49			40	100.0											40.0
LR49			45	100.0											45.0
LS45					5	100.0									5.0
LS47			120	100.0											120.0
LS49			227	100.0											227.0
LT47			80	36.0							142	64.0			222.0
LT48					94	100.0									94.0
MA47			32	100.0											32.0
MC44			160	96.4	6	3.6									166.0
MD44			67	100.0											67.0
表採	2170	16.3	10550	79.5	193	1.5	350	2.6					14.0	0.1	13277.0
	5448	21.7	18051	71.8	963	3.8	350	1.4	31	0.1	142	0.6	152.8	0.6	25137.8

【参考文献】

能代市史編纂委員会『能代市史 資料編 考古』 能代市 1995(平成7)年

秋田県教育委員会『此掛沢Ⅱ遺跡 上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第114集 1984(昭和59)年

秋田県教育委員会『国営能代開拓建設事業 埋蔵文化財発掘調査 上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第137集 1986(昭和61)年

秋田県教育委員会 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』秋田県文化財調査報告書第178集 1989(平成元)年

秋田県教育委員会 『日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ－西野遺跡－』秋田県文化財調査報告書第360集 2003(平成15)年

秋田県教育委員会 『日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ－大坪遺跡－』秋田県文化財調査報告書第375集 2004(平成16)年

秋田県教育委員会 『日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ－小林遺跡「　平安時代・中世編－』秋田県文化財調査報告書第376集 2004(平成16)年

第５章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

１　はじめに

上ノ山Ⅱ遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

２　試料と方法

試料は、土坑から出土した木片（マツ属単維管束亜属）1点、焼土遺構から出土した炭化物1点、土師器焼成遺構窯から出土した炭化物2点、竪穴住居跡から出土した炭化物12点から出土した炭化物1点、土坑から出土した炭化物9点、溝跡から出土した炭化物1点の併せて26点である。なお、試料番号１～12が平成14年度調査の検出試料、13～26が平成15年度調査の検出試料である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定した14C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した14C濃度を用いて14C年代を算出した。

３　結果

第29･30表に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した14C年代、14C年代を暦年代に較正した年代を示す。

14C年代値(yrBP)の算出は、14Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した14C年代誤差(±1σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の14C年代が、その14C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、14C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と14C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて14C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて14C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

14C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正値は14C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。

1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

４　考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の14C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第29表　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（１）

No.	測定番号 (測定法)	試料データ	δ13CPDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
					暦年代較正値	１σ暦年代範囲
1	PLD-1808 (AMS)	木片 (マツ属単維管束亜属) 土坑 SK82	-25.4	345±30	cal AD 1515 cal AD 1595 cal AD 1620	cal AD 1490 - 1525 (34.5%) cal AD 1560 - 1630 (65.5%)
2	PLD-1809 (AMS)	炭化物 焼土遺構　SN101	-29.2	1405±35	cal AD 650	cal AD 620 - 660 (100%)
3	PLD-1810 (AMS)	炭化物 土師窯 SJ241	-26.2	1125±35	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 945 cal AD 955	cal AD 890 - 905 (15.6%) cal AD 910 - 975 (84.4%)
4	PLD-1811 (AMS)	炭化物 土師窯　SJ242	-27.2	1085±35	cal AD 980	cal AD 900 - 920 (33.7%) cal AD 955 - 1000 (63.3%)
5	PLD-1812 (AMS)	炭化物 掘立柱建物跡 SB321北西隅	-25.3	1125±35	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 945 cal AD 955	cal AD 890 - 905 (15.6%) cal AD 910 - 975 (84.4%)
6	PLD-1813 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡 SI430カマド	-25.2	1095±35	cal AD 980	cal AD 895 - 920 (36.3%) cal AD 945 - 990 (63.7%)
7	PLD-1814 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡 SI438カマド	-25.8	1210±35	cal AD 780 cal AD 795 cal AD 800	cal AD 780 - 880 (100%)
8	PLD-1815 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡　SI440	-26.0	1145±35	cal AD 895	cal AD 875 - 905 (27.0%) cal AD 910 - 975 (67.5%)
9	PLD-1816 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡　SI450	-26.9	1180±40	cal AD 885	cal AD 780 - 795 (12.9%) cal AD 800 - 895 (87.1%)
10	PLD-1817 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡　SI718	-23.8	1380±40	cal AD 660	cal AD 640 - 685 (93.8%)
11	PLD-1818 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡 SI516	-25.2	1105±35	cal AD 905 cal AD 915 cal AD 965 cal AD 975	cal AD 895 - 925 (40.4%) cal AD 940 - 980 (59.6%)
12	PLD-1819 (AMS)	炭化物 土坑 SK580	-26.1	1210±35	cal AD 780 cal AD 795 cal AD 800	cal AD 780 - 880 (100%)
13	PLD-2400 (AMS)	炭化物 土坑 SK861	-26.3	1,130±35	cal AD 895 cal AD 925 cal AD 940	cal AD 890 - 905 (18.8%) cal AD 910 - 975 (81.2%)
14	PLD-2401 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡 SI896カマド	-30.7	1,115±40	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 960	cal AD 895 - 930 (45.8%) cal AD 935 - 980 (54.2%)

第30表　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（２）

No.	測定番号 （測定法）	試料データ	δ13CPDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
					暦年代較正値	１σ暦年代範囲
15	PLD-2402 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡 SI897カマド	-29.3	1,160±45	cal AD 890	cal AD 810 - 845 (22.0%) cal AD 855 - 900 (35.9%) cal AD 920 - 960 (35.2%)
16	PLD-2403 (AMS)	炭化物 土坑　SK898	-27.8	1,080±35	cal AD 980	cal AD 900 - 920 (30.4%) cal AD 955 - 1,000 (67.5%)
17	PLD-2404 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡　SI900カマド	-25.7	1,140±35	cal AD 895	cal AD 880 - 975 (98.5%)
18	PLD-2405 (AMS)	炭化物 土坑 SK901	-27.7	1,155±40	cal AD 890	cal AD 820 - 840 (17.5%) cal AD 860 - 900 (36.4%) cal AD 915 - 960 (40.5%)
19	PLD-2406 (AMS)	炭化物 掘立柱建物跡　SB906	-28.5	1,170±35	cal AD 885	cal AD 810 - 895 (79.7%) cal AD 925 - 935 (10.6%)
20	PLD-2407 (AMS)	炭化物 土坑　SK928	-28.0	1,145±35	cal AD 895	cal AD 875 - 905 (27.0%) cal AD 910 - 975 (67.5%)
21	PLD-2408 (AMS)	炭化物 溝跡　SD940	-29.9	1,175±35	cal AD 885	cal AD 780 - 790 (10.2%) cal AD 805 - 895 (84.3%)
22	PLD-2409 (AMS)	炭化物 土坑　SK969	-29.2	1,185±35	cal AD 785 cal AD 880	cal AD 780 - 790 (11.9%) cal AD 805 - 890 (88.1%)
23	PLD-2410 (AMS)	炭化物 掘立柱建物跡　SB906-SK01	-30.6	1,120±35	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 960	cal AD 895 - 925 (42.9%) cal AD 935 - 975 (57.1%)
24	PLD-2411 (AMS)	炭化物 掘立柱建物跡　SB906-SK02	-22.2	1,175±35	cal AD 885	cal AD 780 - 790 (11.4%) cal AD 805 - 895 (88.6%)
25	PLD-2412 (AMS)	炭化物 竪穴住居跡　SI1000	-31.7	1,170±40	cal AD 890	cal AD 805 - 895 (75.9%) cal AD 920 - 940 (15.4%)
26	PLD-2413 (AMS)	炭化物 掘立柱建物跡　SB906-P19	-27.9	1,150±35	cal AD 890	cal AD 865 - 905 (35.6%) cal AD 915 - 960 (50.1%)

第２節　樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１　はじめに

ここでは、上ノ山Ⅱ遺跡より検出された土坑(SK82)から出土した木材の樹種同定結果を報告する。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定(PLD-1808)が実施されている(第29表参照)。

２　方法

材の３方向から片刃のカミソリで薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、材組織の永久標本を作成した。この材組織標本を光学顕微鏡で40～400倍に拡大して観察を行ない同定した。

材組織標本は、秋田県埋蔵文化財センターに保管されている。

３　結果

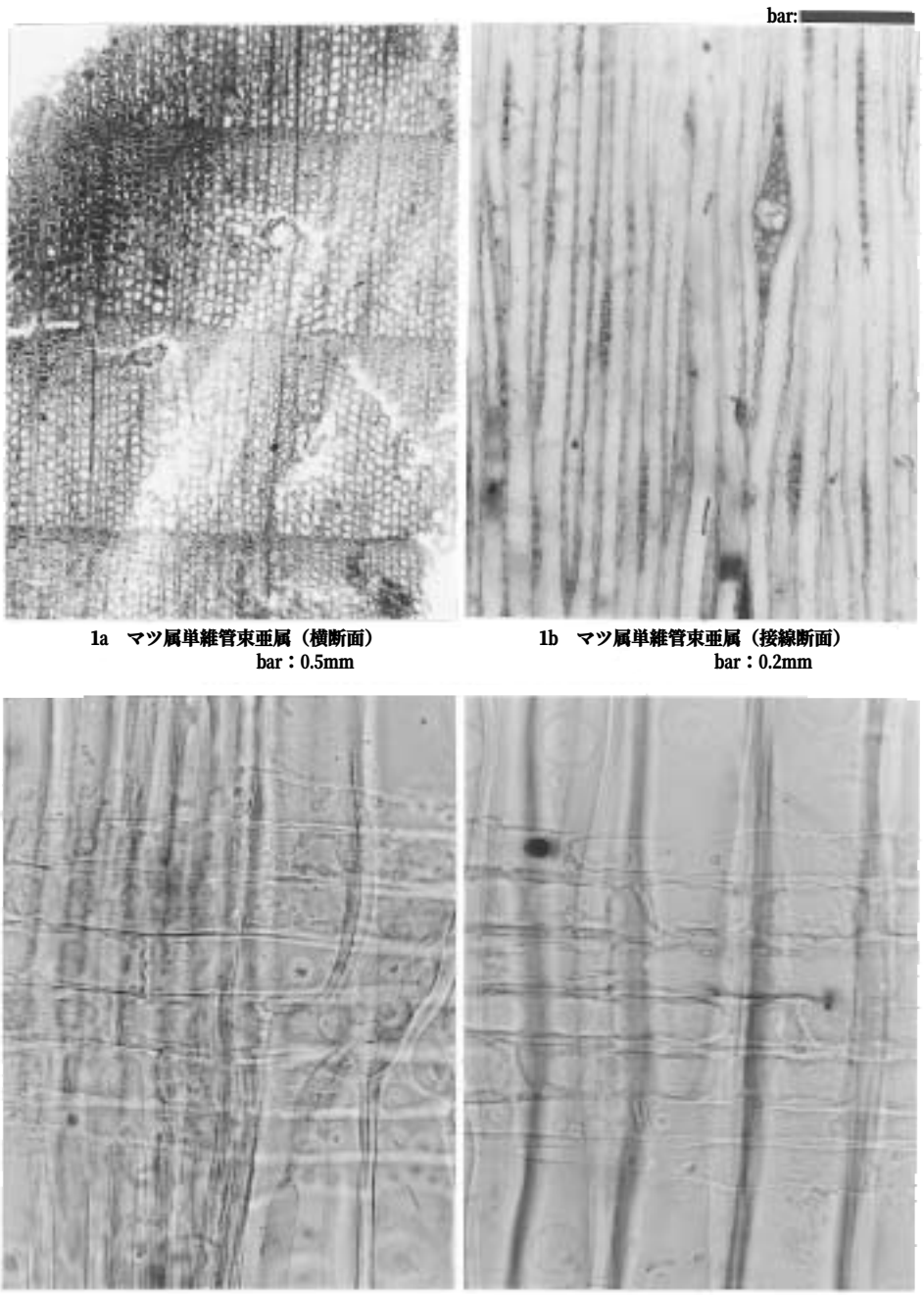
土坑(SK82)から出土した木材は、針葉樹のマツ属単維管束亜属(マツ科)であった。単維管束亜属は、一般に５葉松と呼ばれる種類を含む分類群である。当地域にはゴヨウマツ(ヒメコマツ)とハイマツが分布しているが、材組織は類似性が高いので種類までは識別できない。

以下に同定根拠を記す。

マツ属単維管束亜属 Pinus subgen.Diploxylon　マツ科　第103図 1a-1d(SK82)

軸方向の主な要素は仮道管で、垂直と水平の樹脂道があり、分野壁孔が窓状の針葉樹材である。マツ属複維管束亜属(アカマツ・クロマツ)に比べ、晩材部の量はあまり多くなく、年輪幅も狭い。放射仮道管の内壁は平滑である。このような特徴から、マツ属単維管束亜属と同定した。

註：本章で扱っている遺構の中で、整理作業中に遺構記号、遺構番号が変更になり、試料検出時とは異なった記号･番号になったものについては、編者の責任で変更後の遺構記号、遺構番号に置き換えた。



1a　マツ属単維管束亜属（横断面）　bar：0.5mm

1b　マツ属単維管束亜属（接線断面）　bar：0.2mm

1c　マツ属単維管束亜属（放射断面）　bar：0.05mm

1d　マツ属単維管束亜属（放射断面）　bar：0.05mm

第103図 ＳＫ８２木材樹種

第６章　まとめ

上ノ山Ⅱ遺跡は、131,500㎡と広大な面積を占める遺跡であるが、これまでに国営能代開拓建設事業に伴い、昭和58年度に2,645㎡、昭和60年度に4,270㎡が調査された。今回の調査面積12,790㎡（平成14年度9,610㎡・平成15年度3,180㎡）と合わせた総調査面積は19,705㎡となるが、遺跡の総面積の約15%に過ぎない。今回の調査区は遺跡中央部の南東寄りにあたり、本調査区の西北側には昭和58年度調査区東南端部が接し(第104図)、更に西150mほどには昭和60年度調査区がある。また、北西500mほどの台地北縁部には此掛沢Ⅱ遺跡(昭和58年度調査)、南西側には沢を挟み、ムサ岱遺跡(平成14年度調査)が隣接する。上記の何れの遺跡も標高30mほどの同じ台地面に立地している。

本遺跡は、昭和58･60年度の過去2回の調査から、主に平安時代の集落跡であることが確認されていた。今回の調査からは、縄文時代の陥し穴状遺構と平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出された。出土遺物のほとんどは平安時代の遺物に占められ、総量はコンテナで59箱である。

ここでは、主に、平安時代の検出遺構と集落の時期等について述べる。

(1)調査結果の概略

今回の調査区から検出された平安時代の遺構は、竪穴住居跡14軒、竪穴状遺構２基、掘立柱建物跡６棟、土師器焼成遺構３基、鍛冶炉２基、土坑85基、焼土遺構22基、溝跡14条、柱穴列20条などである。これらの内、竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・土師器焼成遺構・鍛冶炉の全てがＳＤ50の南西側から検出されており、その他の多くの遺構もＳＤ50の南西側に位置している。これに対し、ＳＤ50の北東側は遺構の分布が疎らで、遺物の出土数量も少なく、南西側とは様相が異なる。当時の集落はＳＤ50の南西側に展開し、ＳＤ50が集落の北東端を画していたものと考えられる。集落を構成する遺構群については、出土遺物、検出状況などから10世紀と判断したが、ＳＤ50の北東側から検出された遺構については、一部を除き、年代決定の根拠を欠くものが多く、平安時代以降とした。

本調査区と一部接する、昭和58年度調査区(第104図)から検出された竪穴住居跡を中心とする遺構群は、本調査区のＳＤ50南西側の遺構群と一体の集落を構成するものと見られる。また、本調査区のＳＤ431と昭和58年度調査区のＳＤ17、同様にＳＤ633とＳＤ07は、それぞれが同一の溝跡である可能性があり、本調査区のＳＤ50が、昭和58年度調査区外の北方にまで延びて集落の北側を区画していた可能性も考えられる。

(2)主な検出遺構について

竪穴住居跡：本調査区で確認された竪穴住居跡の平面形は何れも方形で、隅丸方形や長方形も見られる。規模は、最大壁長が5mほどのものが３軒、4m前後(3.7～4.5m)のものが最も多く７軒、3m前後とそれ以下のものが３軒、不明１軒である。これら14軒の内、壁溝が巡り、柱穴を壁隅とその中間等に配するものは７軒(ＳＩ429･437･440･718･719･897･900)である。昭和58年度調査区からは20軒の竪穴住居跡が検出されている。その規模は、一辺が7.2～9.1mと規模が大きなものが３軒、4.7～6.0mのものも６軒検出されており、本調査区に比べて規模の大きな住居が多い。また、壁溝が巡り、柱穴を壁隅とその中間等に配するものは11軒(ＳＩ06･15･16･18･19･27･32･37･38･43･44)である。カマドに

ついて、本調査区では、南壁の東あるいは西側に構築されているものが10軒、東壁に構築あるいは床面の東側に火床を持つものが２軒、西壁に設けられているものが１軒、カマドを検出できなかったものが１軒である。煙道については、住居壁外に突き出るトンネル式のものが８軒に見られ、明確な煙道は見られないがカマドが壁外に小さく張り出すものが１軒(ＳＩ897)、削平等により煙道が失われたと思われるものを含め不明が４軒で、これらの内、カマドが南壁にありトンネル式の煙道を備える住居が７軒(ＳＩ430･437･438･440･896･900･1000)を数える。昭和58年度調査区では、カマドが南壁に構築されている住居が16軒、この内トンネル式の煙道を備える住居が７軒(ＳＩ06･16･32･33･35･38･44)である。両調査区とも、トンネル式の煙道を南壁外に突き出す形態のカマドを持つ住居が多数を占めている。また、竪穴住居同士の重複は、本調査区と昭和58年度調査区を合わせて４カ所に見られるが、昭和58年度調査区のＳＩ37と43の重複以外は、ほぼ南北に軸線を置くもの同士の切り合いである。以上のことから、両調査区内の住居については、住居の構造やカマドの形態、住居の軸線に関する規制が、集落の存立期間にわたって働いていた可能性が考えられる。

掘立柱建物跡：本調査区からは６棟の建物跡が確認されている。この中で特徴的なものはＳＢ906である。この建物跡は一辺が４ｍほどの方形で、本調査区の竪穴住居の平均的な規模にあたる。四隅とその中間などに柱穴が検出されたが、竪穴の掘り込みや壁溝が検出されなかったことから掘立柱建物跡とした。建物の範囲内には、カマドと貯蔵穴、埋土に炭化物や焼土を含む土坑や複数のピットがあり、明らかに周辺の他の建物や住居跡とは異なる構造を持つ。床面と貯蔵穴、土坑、ピットの４カ所から採取した炭化材の放射性炭素年代測定では、9～10世紀という結果を得ている。また、建物跡と住居跡との重複は、両調査区を合わせて３カ所に見られるが、何れの場合も軸方向をほぼ南北に置くもの同士の重複であることから、ここでも上述と同様の規制が働いていたことが窺える。その新旧については、昭和58年度調査区のＳＩ47とＳＢ57は不明であるが、ＳＢ68の場合は、ＳＩ45･67によって棟を支えた南北２基の柱穴が失われた可能性があり、本調査区ではＳＢ255がＳＩ438より古い。このことから集落の初期的な段階では、南北に軸方向を置く竪穴住居と掘立柱建物の構成であったが、南北に軸方向を置いたまま、徐々に竪穴住居を主とする集落に移り変わった可能性がある。

土師器焼成遺構：集落の東側から検出された３基の土師器焼成遺構は、何れも掘立柱建物跡（ＳＢ321)の柱穴間に重複することなく位置しているため新旧関係は不明である。建物の規模は、庇を除き２間(約4.9m)×３間(約6.6m)で、土師器を焼く窯を含む工房全体に掘立柱で支えられた上屋が架かっていた可能性がある。建物北西隅の掘り込みの埋土とＳＪ241･242の３カ所から採取した炭化材の放射性炭素年代測定では、何れも10世紀という結果を得ている。ただし、ＳＪ241検出の試料がＳＪ242のものよりも若干古いことから、３基の窯の操業期間は、近接あるいは重複するが、それぞれが異なる可能性がある。

鍛冶炉：土師器焼成遺構の西側から検出された２基の鍛冶炉(ＳＮ258･259)の周辺からは、鉄床石の破片や粒状滓、鍛造剥片、フイゴの羽口、椀形鍛冶滓などが検出(第99図)されている。また、ＳＮ258の西約50cmには、焼土溜まり(ＳＮ257)があり、この焼土層からは椀形鍛冶滓(99－④)、フイゴの羽口(99－⑬)、刀子(99－⑰)に伴い土師器坏(80－130)が出土し、ＳＮ259の北50cmに位置するＳＫＰ474からは、椀形鍛冶滓(99－②･⑤)に伴い、土師器坏(91－138･139)が出土していることから、土師器

焼成窯と同様に10世紀頃に操業されていた鍛冶炉と判断される。また、鍛冶炉周辺の柱穴様ピットは、鍛冶工房に架かる上屋を支えていた柱穴の可能性がある(第95･96図)。また、昭和58年度調査区では 8 軒の住居跡(ＳＩ06･10･16･18･37･38･43･44)から鉄製品や鉄滓が出土しており、数10m東に位置する本鍛冶炉がこれらの遺物に関連している可能性がある。

(2)集落の時期について

本調査区から出土した遺物のほとんどが10世紀の土師器で占められていることから、集落の存立期間もほぼ同様の年代と考えられる。ただし、昭和58年度調査区の 5 軒の住居跡(ＳＩ06･10･16･43･44)からは、本調査区では見あたらない須恵器の坏が出土していることから、集落全体の年代幅はもう少し広がる可能性がある。本調査区の竪穴住居跡から採取した炭化材による放射性炭素年代測定では、9～10世紀という結果が得られている。また、両調査区の住居、建物には数カ所の重複が見られ、検出された遺構が全て同時期に存在したわけではない。しかし、多くの住居跡と建物跡の軸方位はＮ－20°－Ｗ～Ｎ－5°－Ｅに収まり、柱穴列と溝跡も南北方向に延びるものが多く、集落の存立期間中は、住居や諸施設の構造や軸方向に関する規制のもとに集落が営まれていた可能性を示している。なお、本調査区の西端部の遺構は、軸方位をＮ－60～70°－Ｗに置くものが多いが、これは本遺跡の南西側に隣接するムサ岱遺跡との間を隔てる沢の地形に規制されたためと考えられる。昭和60年度調査区も南側がこれと同じ沢に面しており、竪穴住居跡の主軸や掘立柱建物跡の桁方向を上記と同様の方位に置くものが多い。

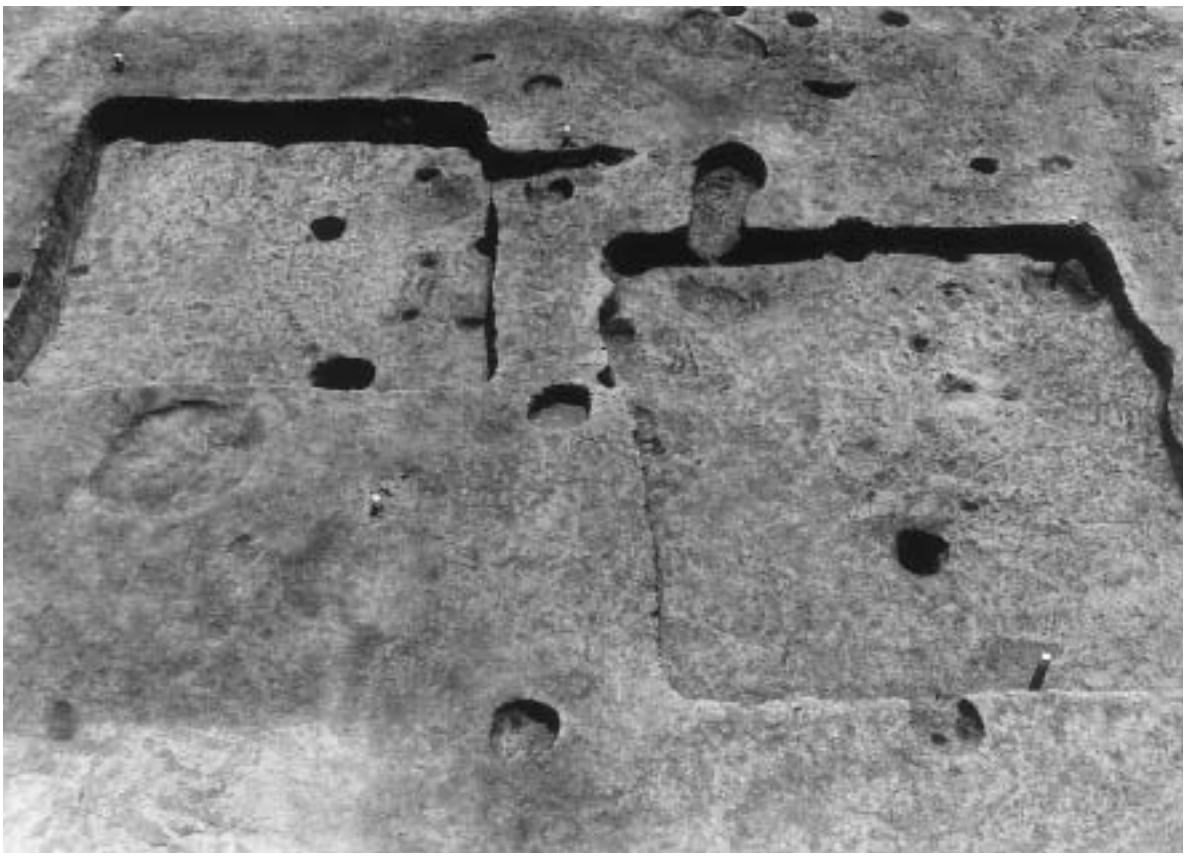
昭和60年度調査区と此掛沢Ⅱ遺跡からも、トンネル式の煙道を持ち、南あるいは南東壁にカマドを構築する竪穴住居跡が確認されており、10世紀頃には、遺跡が位置する台地の中央部から北西側にかけての広い平坦地には、大規模な集落が展開していたものと考えられる。集落内は溝や柵列によって区画され、集落東側には土師器や鉄製品を供給する工房が並んでいたものと推定される。また、集落と台地東側の斜面地との境界には、ほぼ等高線に沿ってＳＤ50が掘削され、集落の北東側を区画していたと考えられる。一方、遺跡の南西側には、同時代の大規模な集落跡であるムサ岱遺跡が存在する。しかし、住居の構造やカマドの形態が本調査区のものとは異なることと、各遺構の軸方位にも違いが見られることが報告されており、同じ台地面で同時期に、様相が異なる二つの集落が存在していた可能性がある。

調査結果は、10世紀頃に集落が最も拡大したことを示すが、放射性炭素年代測定では、7 世紀という結果を得る遺構(ＳＩ718など)も見られ、これ以前から人々が住み続けていたものと考えられる。また、平安時代後半以降の状況は明確ではないが、中世の製鉄炉壁と思われるものが 1 点出土(102－158)していることや、調査区東側の土坑(ＳＫ82)から出土した丸太材の放射性炭素年代測定では、近世初め頃という結果を得ていることから、本遺跡は、10世紀以降も人々の生活に何らかの関わりを持ち続けていたものと推定される。

【参考・引用文献】
能代市史編纂委員会「上ノ山Ⅱ遺跡」『能代市史 資料編 考古』 能代市 1995(平成7)年
秋田県教育委員会『此掛沢Ⅱ遺跡 上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第114集 1984(昭和59)年
秋田県教育委員会『国営能代開拓建設事業 埋蔵文化財発掘調査 上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第137集 1986(昭和61)年

平成14年度調査区（北東上空→）

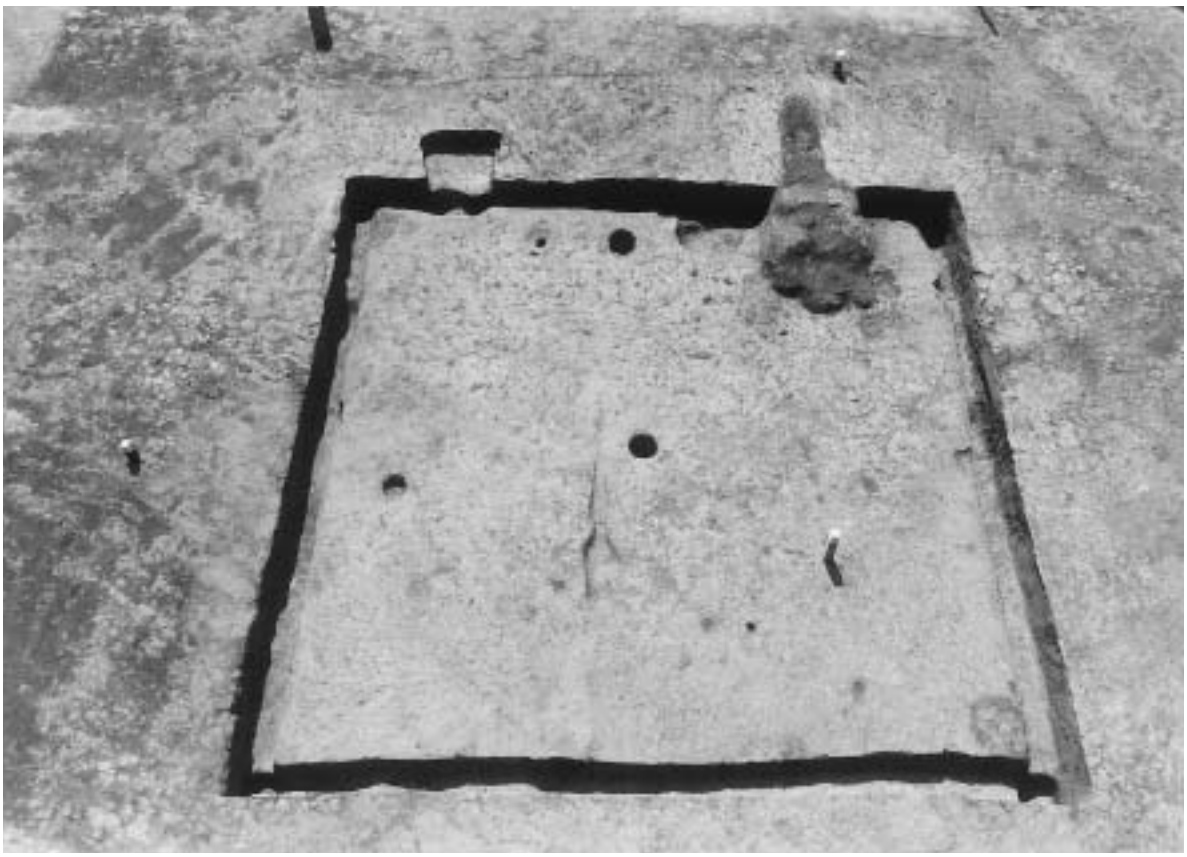
平成15年度調査区（南上空→）



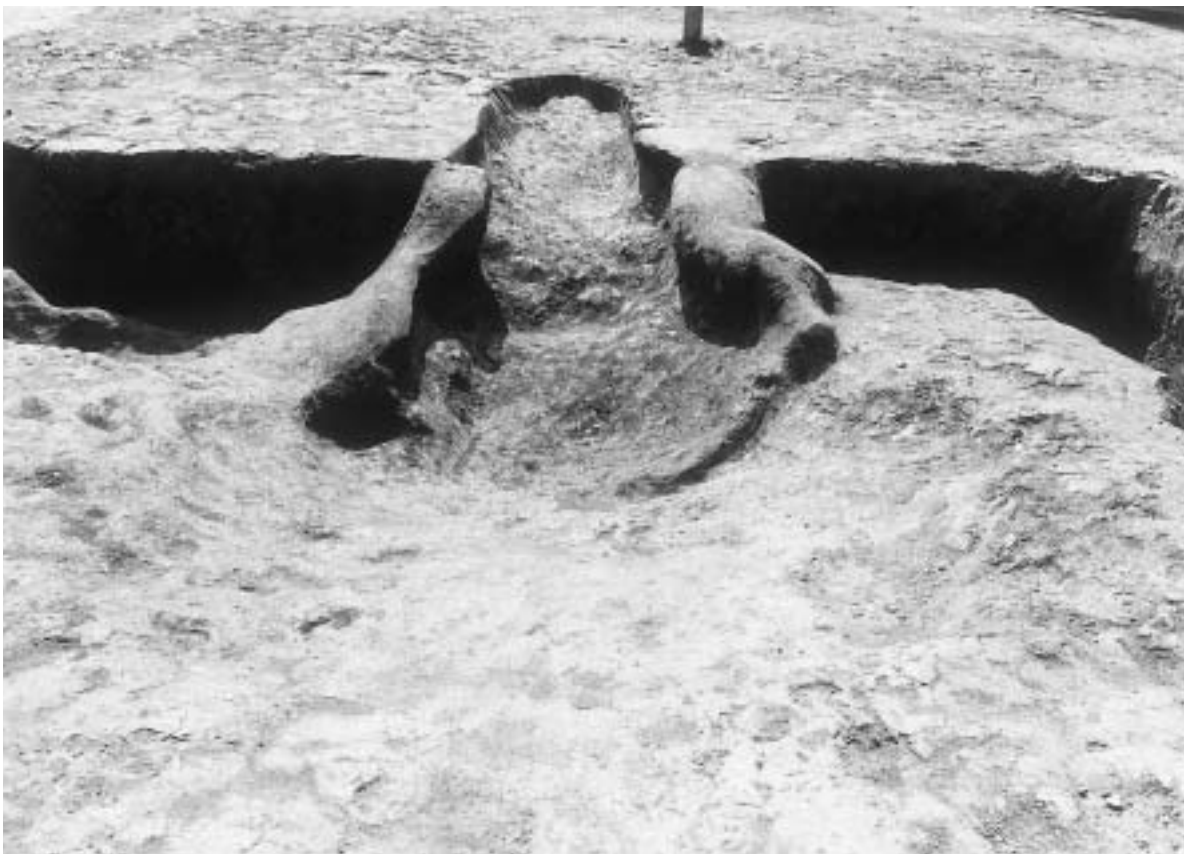
ＳＩ429（左）・ＳＩ430（右）完掘（北→）

ＳＩ429カマド（東→）

ＳＩ430カマド（北→）

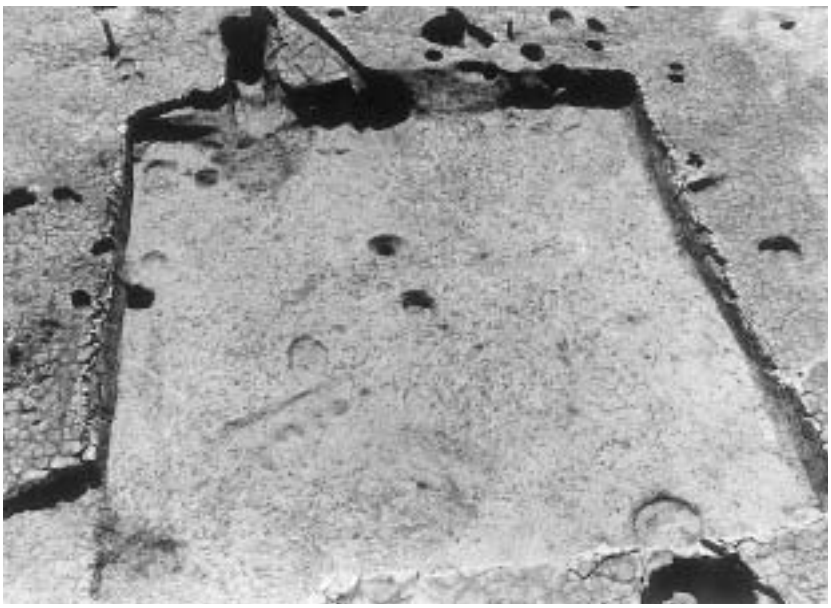


ＳＩ440完掘（北→）



ＳＩ440カマド（北→）

図版4　竪穴住居跡（3）



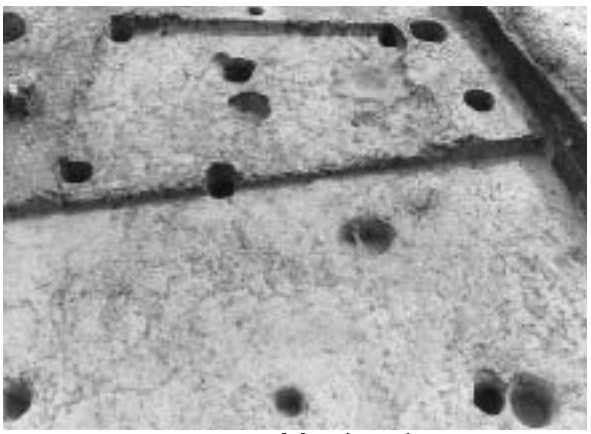
ＳＩ438完掘（北→）

ＳＩ516遺物出土状況
（北東→）

ＳＩ718完掘（北→）

ＳＩ437完掘（北→）

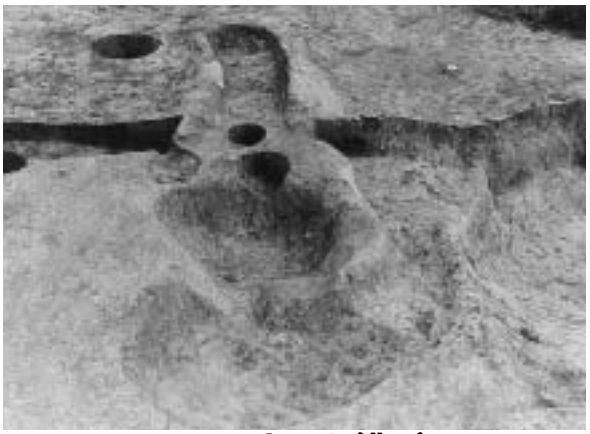
ＳＩ437カマド（東→）



ＳＩ897完掘（西→）

ＳＩ897カマド（北→）

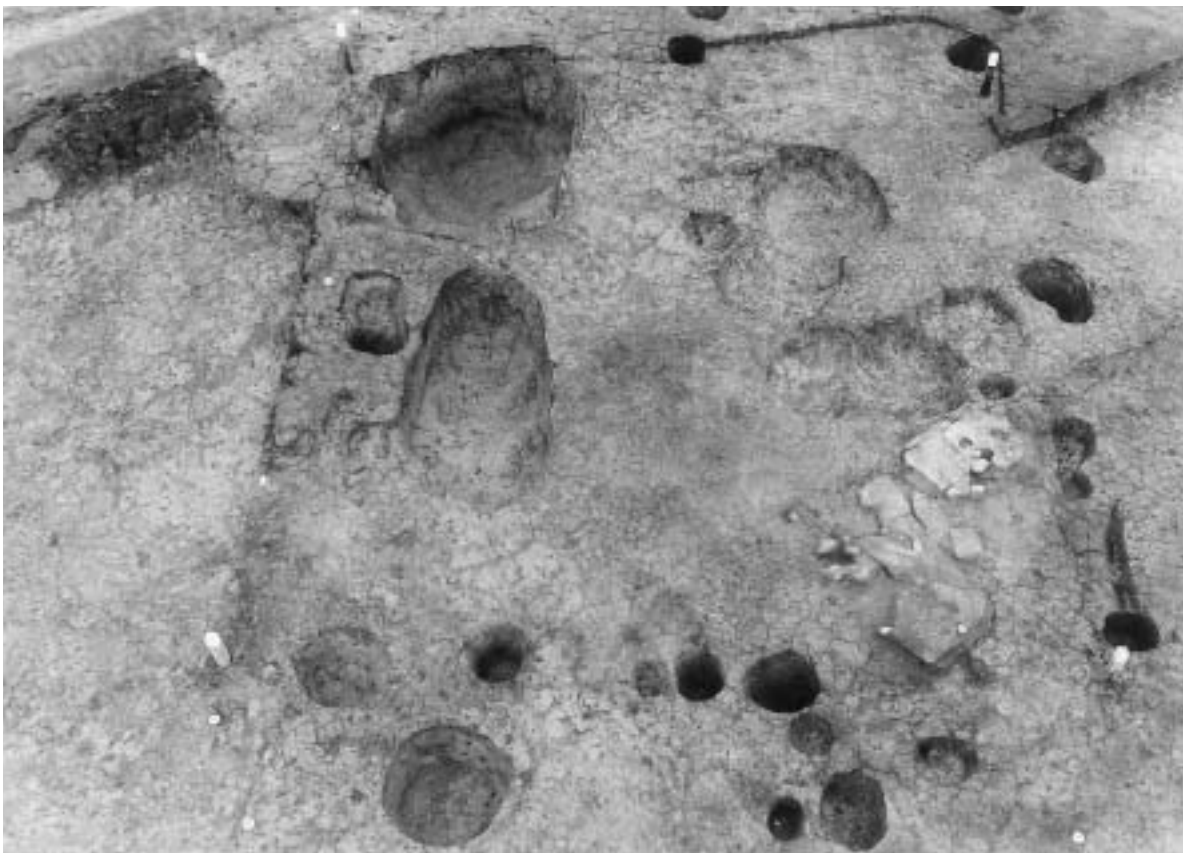
ＳＩ900完掘（北→）



ＳＩ900カマド（北→）

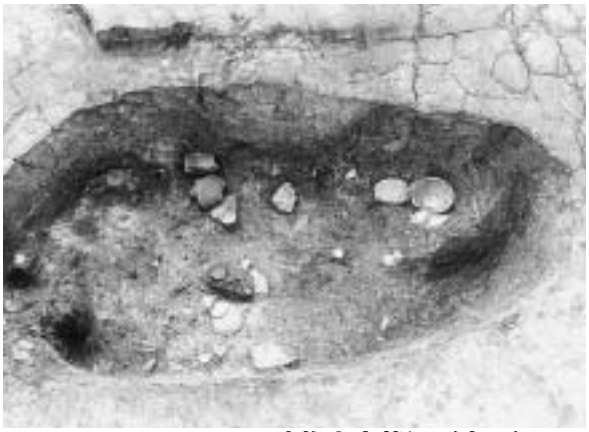
ＳＩ1000完掘（南→）

ＳＩ1000カマド（北→）



ＳＢ906完掘（南→）

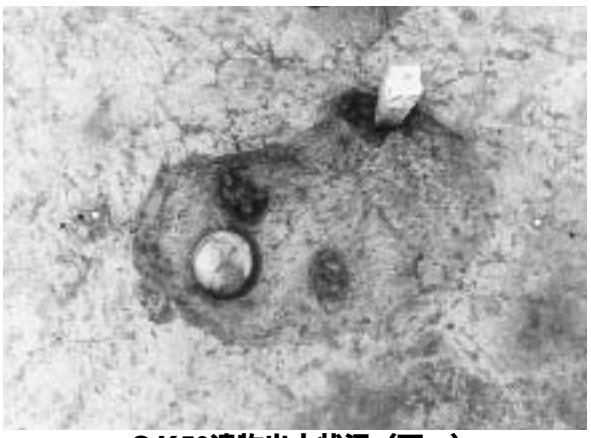
ＳＢ906－ＳＫ02断面（西→）



ＳＢ906－ＳＫ02遺物出土状況（東→）

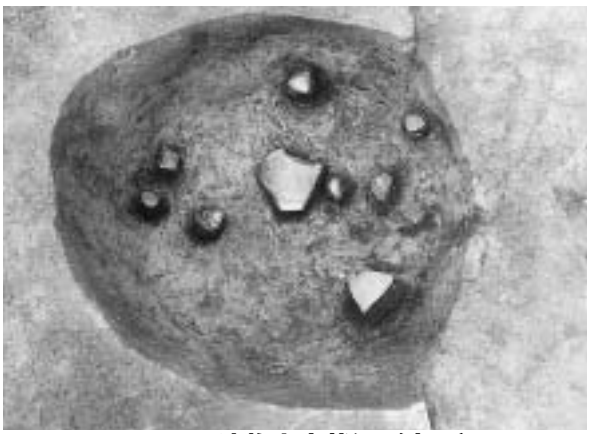
ＳＢ906－Ｐ18遺物出土状況（北西→）

ＳＢ906－ＳＫ01・02完掘（西→）

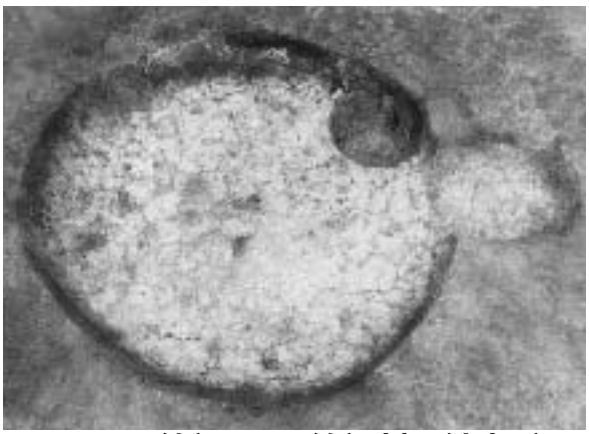


ＳＫ59遺物出土状況（西→）

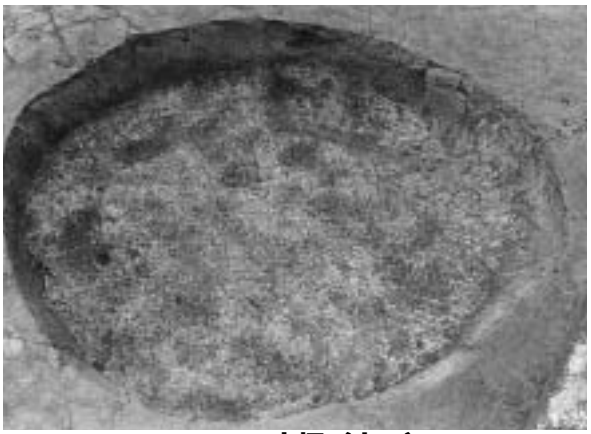
ＳＫ82断面（南→）



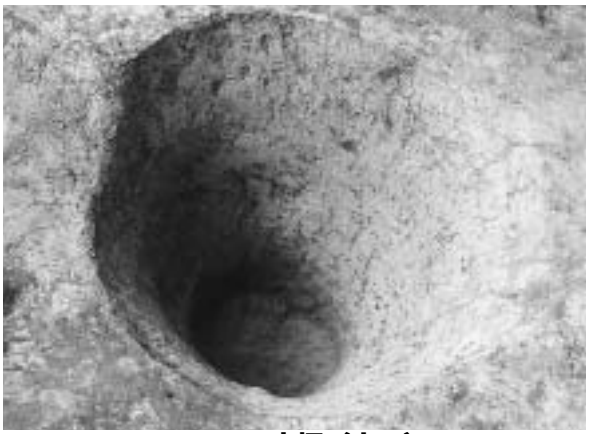
ＳＫ184遺物出土状況（東→）



ＳＫ221（左）・223（右）完掘（南東→）



ＳＫ580完掘（南→）



ＳＫ894完掘（南→）

ＳＫ898完掘（南→）

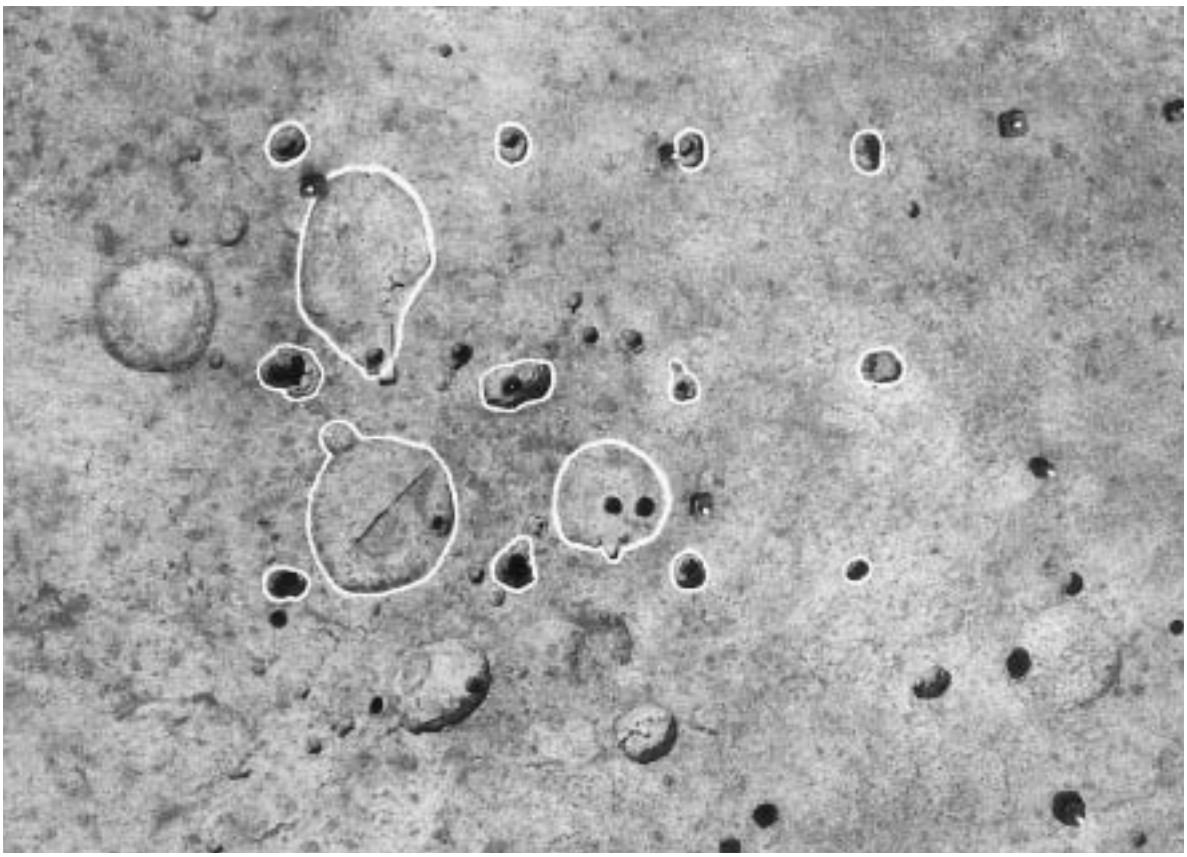
ＳＫ928遺物出土状況（南→）

図版8　鍛冶炉

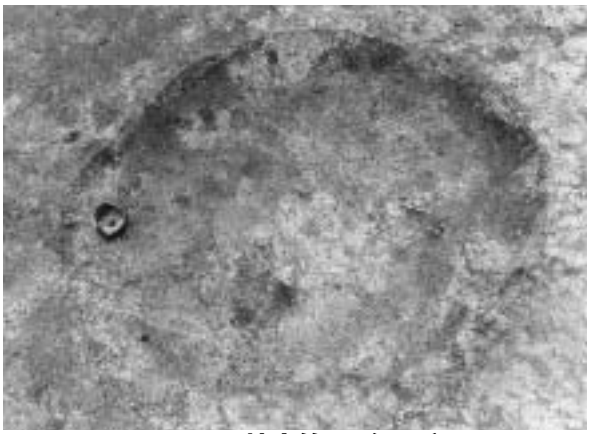
ＳＮ259（左）・258（中）・
257（右）確認状況（北→）

ＳＮ258（東→）

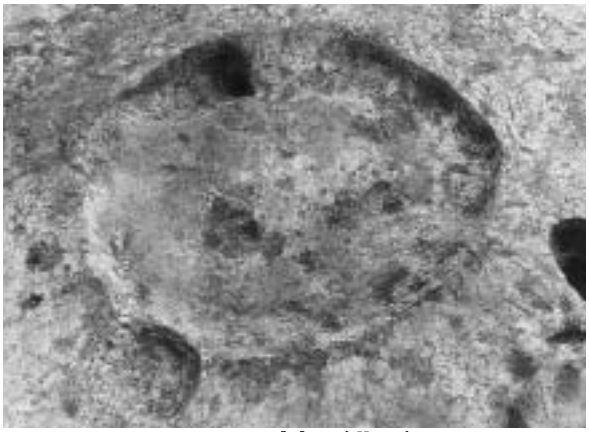
ＳＮ259（東→）



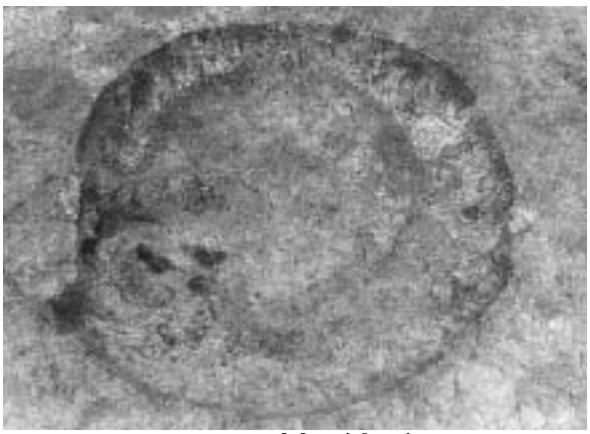
ＳＪ245（左上）・242（左下）・241（右）・ＳＢ321完掘（上：東）



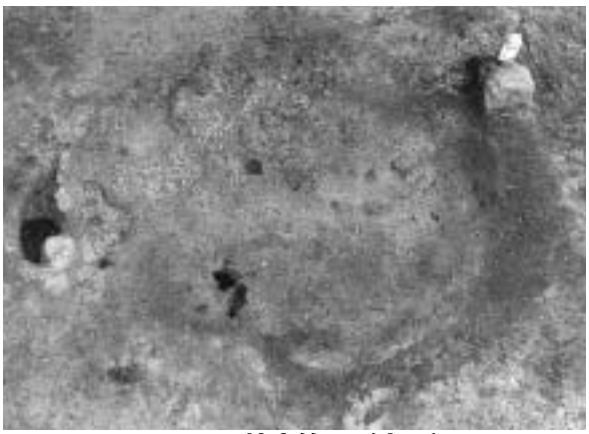
ＳＪ242焼土範囲（西→）



ＳＪ242完掘（北→）



ＳＪ241完掘（南→）



ＳＪ245焼土範囲（南→）

ＳＡ693南側完掘（南→）

ＳＡ958（右）・961（左）完掘（南→）

ＳＤ24完掘（南→）

ＳＤ50北側完掘（南東→）

ＳＤ113完掘（南→）

ＳＤ459・460確認状況（南→）

ＳＤ633南側確認（南→）

ＳＤ633北側完掘（南→）

41－10（ＳＩ429）

42－20（ＳＩ430）

44－48（ＳＩ516）

47－69（ＳＩ718）

48－81（ＳＩ1000）

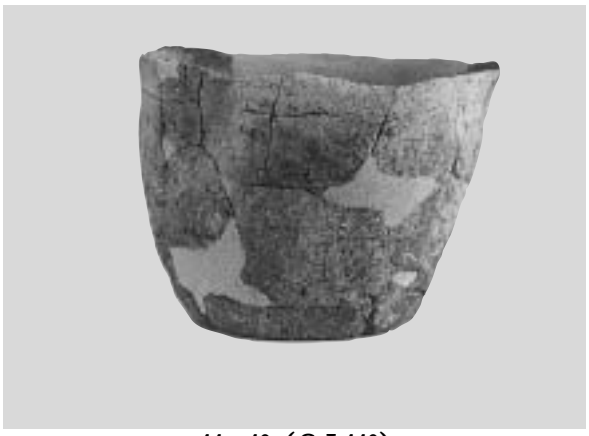
59－88（ＳＢ906）

72－113（ＳＫ630）

91－135（ＳＤ633）

46－63（ＳＩ516）

43－32（ＳＩ437）



44－40（ＳＩ440）

72－115（ＳＫ702）

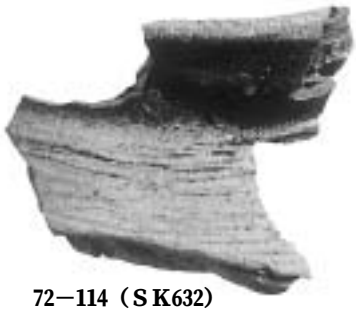
47－74（ＳＩ719）

80－129（ＳＮ246）

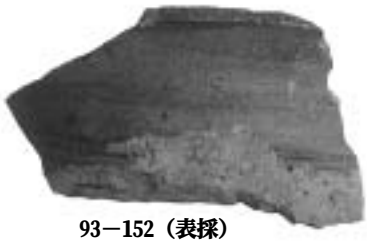
92－144（ＬＦ55）

41－16（ＳＩ429）

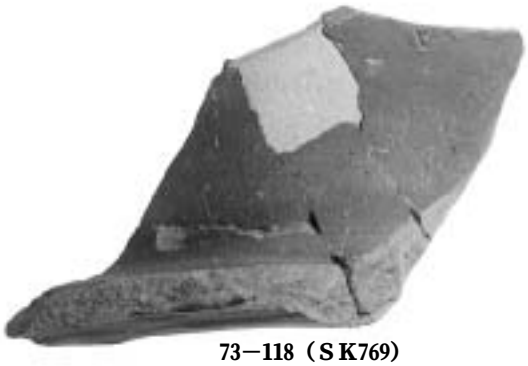
74－126（ＳＫ928）



72－114（ＳＫ632）

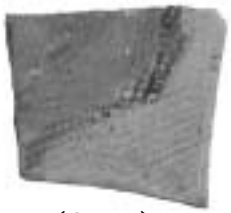


93－152（表採）

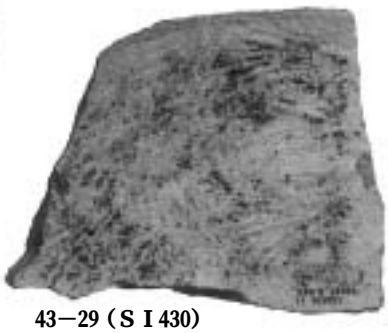


73－118（ＳＫ769）

44－42（ＳＩ440）



46－67（ＳＩ516）



43－29（ＳＩ430）

73－124（ＳＫ898）

71－107
（ＳＫ574）

93－154
（ＬＢ57）

93－155
（ＬＲ48）

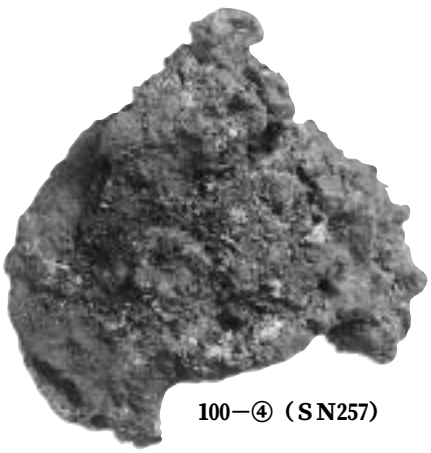
101－⑯（LL57）

44－44（SI440）

59－96（SB906）

91－137（SX890）

102－157（SK894）



100－④（SN257）

報告書抄録

ふりがな	うえのやまにいせき
書名	上ノ山Ⅱ遺跡
副書名	一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	ⅩⅢ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第397集
編著者名	菊池 晋・佐藤　信・菅原ゆかり
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　　電話0187－69－3331
発行年月日	西暦2005年３月

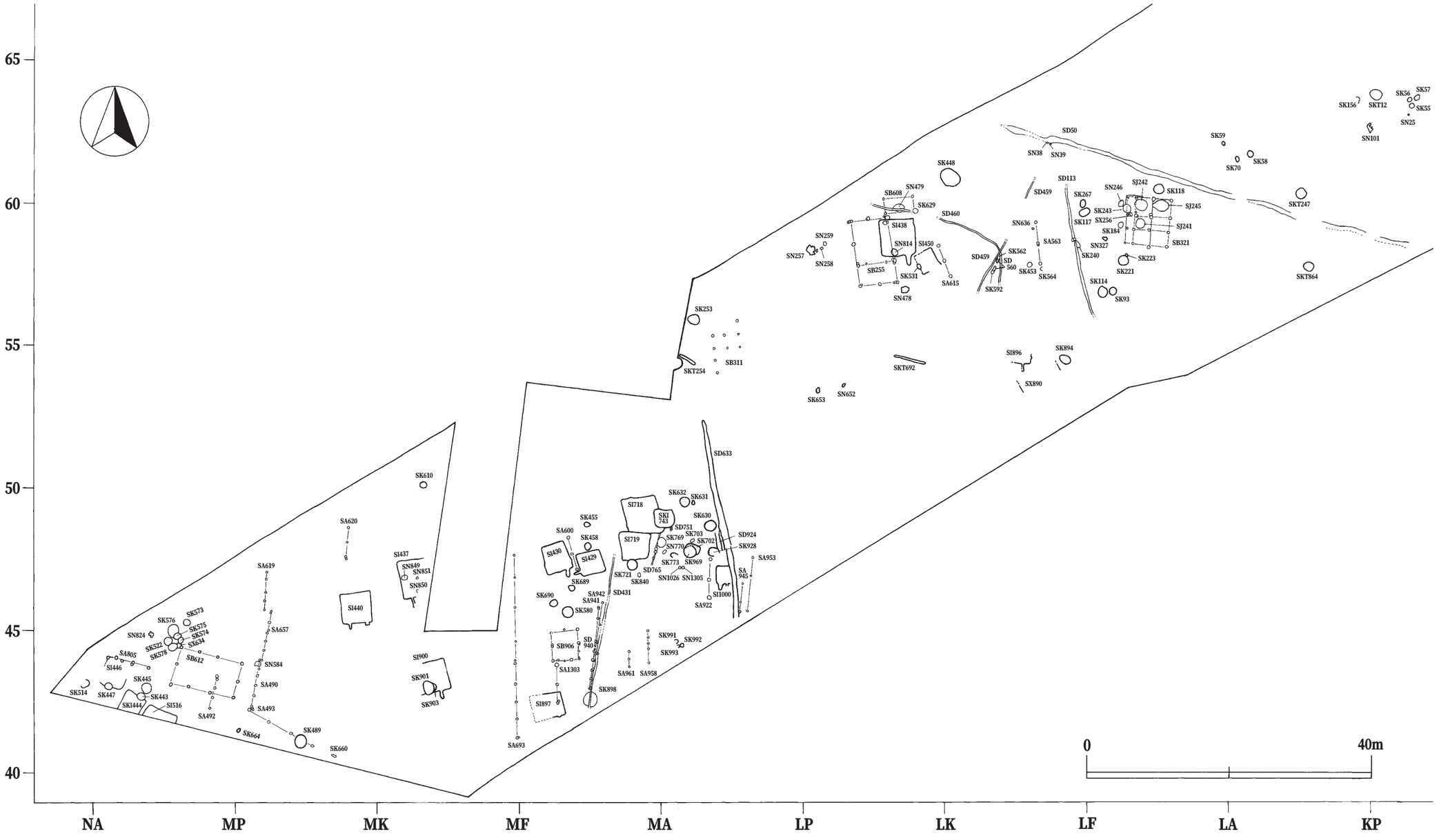
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
上ノ山Ⅱ遺跡	秋田県能代市浅内字上ノ山70－３外	05202	2-148	40° 9′ 33″	140° 1′ 58″	20020520 ～ 20020906 20030520 ～ 20030930	9,610㎡ 3,180㎡	一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ山Ⅱ遺跡	狩猟場 集落跡	縄文時代 平安時代	陥し穴状遺構 竪穴住居跡 竪穴状遺構 掘立柱建物跡 土坑 柱穴列 溝跡 土師器焼成遺構 鍛冶炉 焼土遺構 柱穴様ピット	縄文土器・石器 土師器・須恵器 土製品・石製品 鉄製品・鉄滓	縄文時代と平安時代の複合遺跡。主に10世紀の土師器や鉄製品を生産する工房を伴う集落遺跡。

秋田県文化財調査報告書第397集
上ノ山Ⅱ遺跡

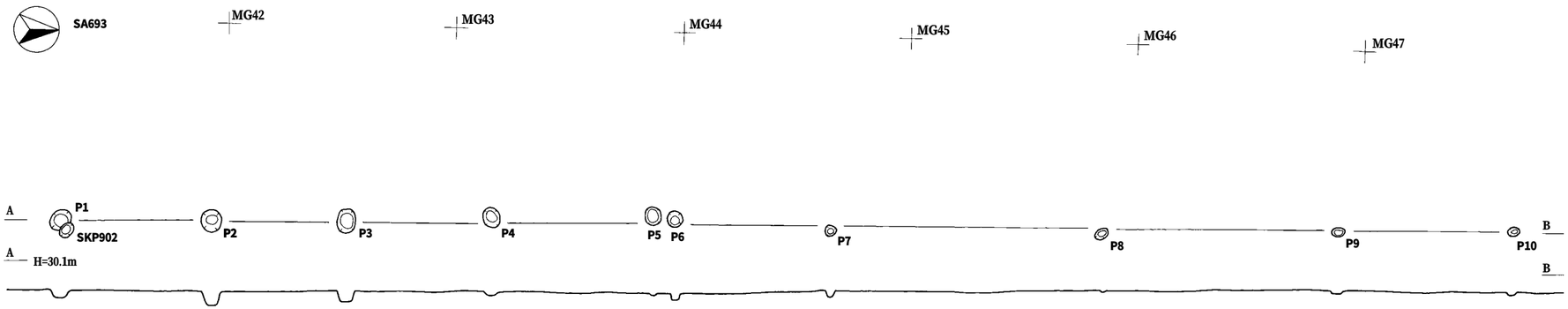
－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書XIII－

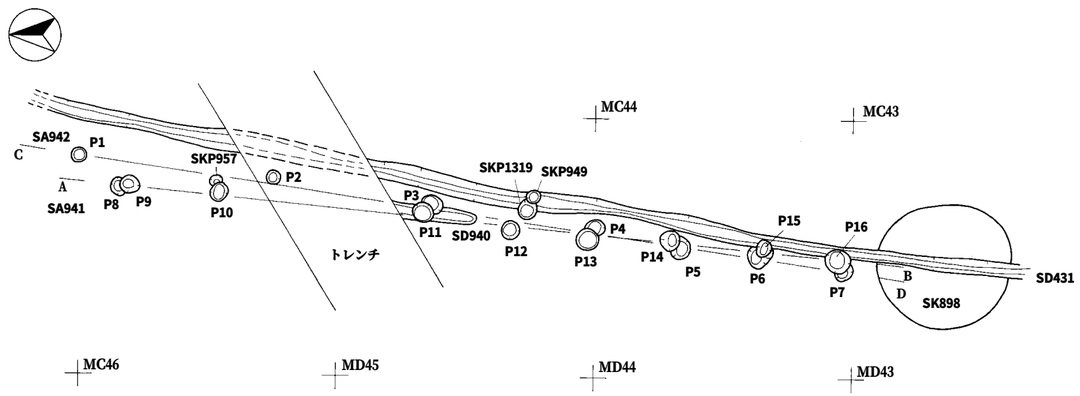
印刷・発行　平成17年３月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-3331
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目１番１号
電話(018)860-5193
印　　刷　秋田活版印刷株式会社



第15図　調査区西側および中央部遺構配置図

第30図　ＳＩ７１８・ＳＩ７１９竪穴住居跡・ＳＫＩ７４３竪穴状遺構



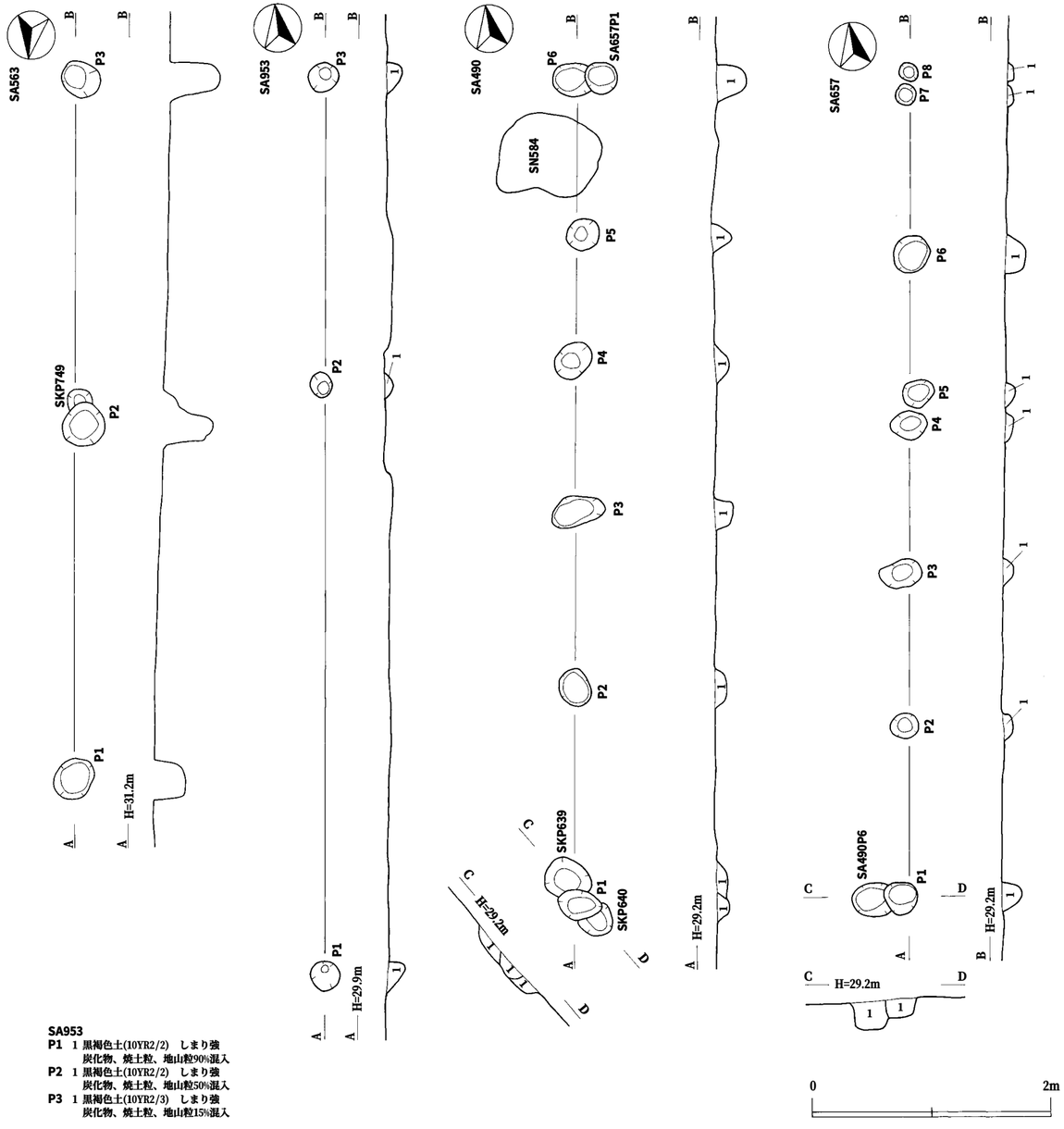


SA941
P8　黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、焼土粒8%混入
P9　黒褐色土(10YR2/2)
炭化物、地山粒15%混入
P10　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強
炭化物5%、焼土粒5%、地山粒混入
P11　黒褐色土(10YR3/2)
炭化物5%、焼土粒、地山粒20%混入
P12　黒褐色土(10YR3/2)
炭化物、地山粒30%混入
P13　黒褐色土(10YR3/2)
炭化物、焼土粒、地山粒10%混入
P14　黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒、地山粒混入
P15　黒褐色土(10YR3/2)
炭化物5%、焼土粒、地山粒混入
P16　黒褐色土(10YR3/2)
炭化物5%、焼土粒、地山粒5%混入

SA942
P1　黒褐色土(10YR3/2)　粘性強
炭化物、焼土粒5%、地山粒20%混入
P2　黒褐色土(10YR3/2)
炭化物、焼土粒8%、地山粒5%混入
P3　黒褐色土(10YR3/2)
炭化物、焼土粒5%、地山粒10%混入
P4　黒褐色土(10YR3/2)　粘性強
炭化物、焼土粒、地山粒5%混入
P5　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強
炭化物、焼土粒、地山粒混入
P6　黒褐色土(10YR3/2)　しまり強
炭化物、焼土粒、地山粒8%混入
P7　黒褐色土(10YR2/3)
炭化物、焼土粒、地山粒15%混入

0　4m

第83図 柱穴列（３）



SA953
P1　1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強
　　炭化物、焼土粒、地山粒90%混入
P2　1 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強
　　炭化物、焼土粒、地山粒50%混入
P3　1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強
　　炭化物、焼土粒、地山粒15%混入

SA490
P1　1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　　炭化物、地山粒(φ1～10mm)30%混入
P2　1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　　炭化物、焼土粒、地山粒混入
P3　1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　　炭化物、地山粒5%混入
P4　1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　　炭化物、地山粒混入
P5　1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　　炭化物、焼土粒、地山粒10%混入
P6　1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　　炭化物、焼土粒、地山粒混入
SKP639
　　1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
　　炭化物、地山粒(φ1～10mm)40%混入
SKP640
　　1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　　炭化物、地山粒(φ1～10mm)30%混入

SA657
P1　1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　　炭化物、地山粒15%混入
P2　1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
　　炭化物、地山粒5%混入
P3　1 黒褐色土(10YR2/3)　粘性弱
　　炭化物、地山粒混入
P4　1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
　　炭化物、地山粒混入
P5　1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
　　地山粒混入
P6　1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性弱
　　地山粒10%混入
P7　1 黒褐色土(10YR2/3)
P8　1 黒褐色土(10YR2/3)

第84図　柱穴列（４）

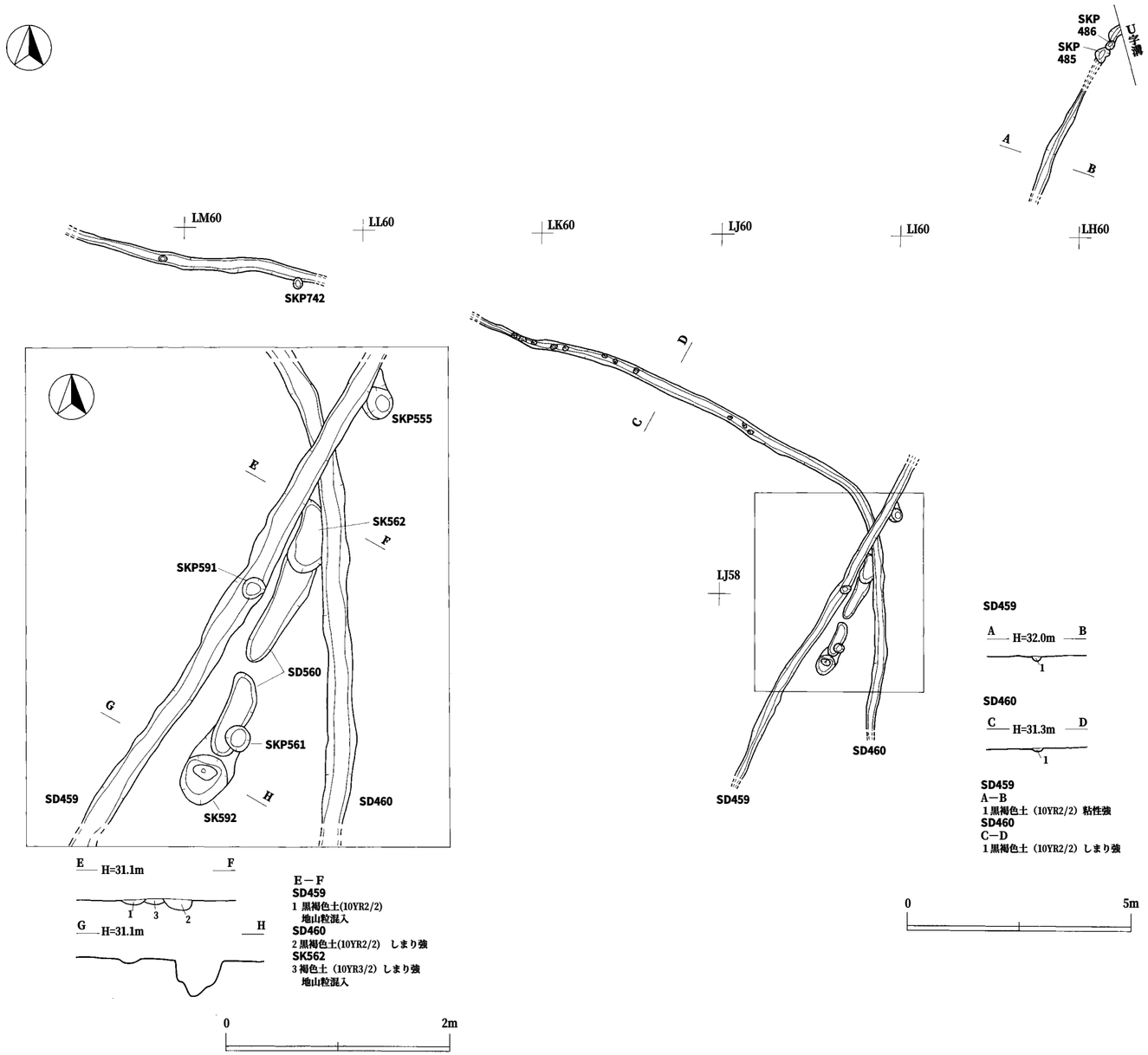
SD50
SKP452
SKP451
SN38
SN39
SKP152
SKP 106
SKP 105
SKP 103
第78図
LI63
LH63
LG63
LF63
LI62
LH62
LG62
LF61
LE62
LE61
LD62
LD61
LC62
LC60
LB61
LB60
LA61
LA60
KT61
KT59
KS60
KS59
KR60
KR59
KQ60
KP60
KO59
KQ58
KP58
KO58
トレンチ
トレンチ
本工事による切り上げ部分
調査区外
A
H=32.2m
B
C
H=31.7m
D
基本層位
第Ⅱ層
SD50
A－B、C－D
1 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒混入
5m
0

KA70
KA69
KA68
KA67
KB67
KC70
KC69
SD24
SK82
SKT78
A
B
撹乱
JT66
JT65
JS64
KB66
KA64
SD238
C
D
KQ58
KP58
KO58
A
H=34.7m
B
C
H=34.0m
D
SD24
A－B、C－D
1 黒色土(10YR2/1) しまり弱
地山粒混入
2 黒褐色土(10YR2/2) しまり弱
3 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒5%混入
4 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒・ブロック10%混入
5 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒混入
5m
0

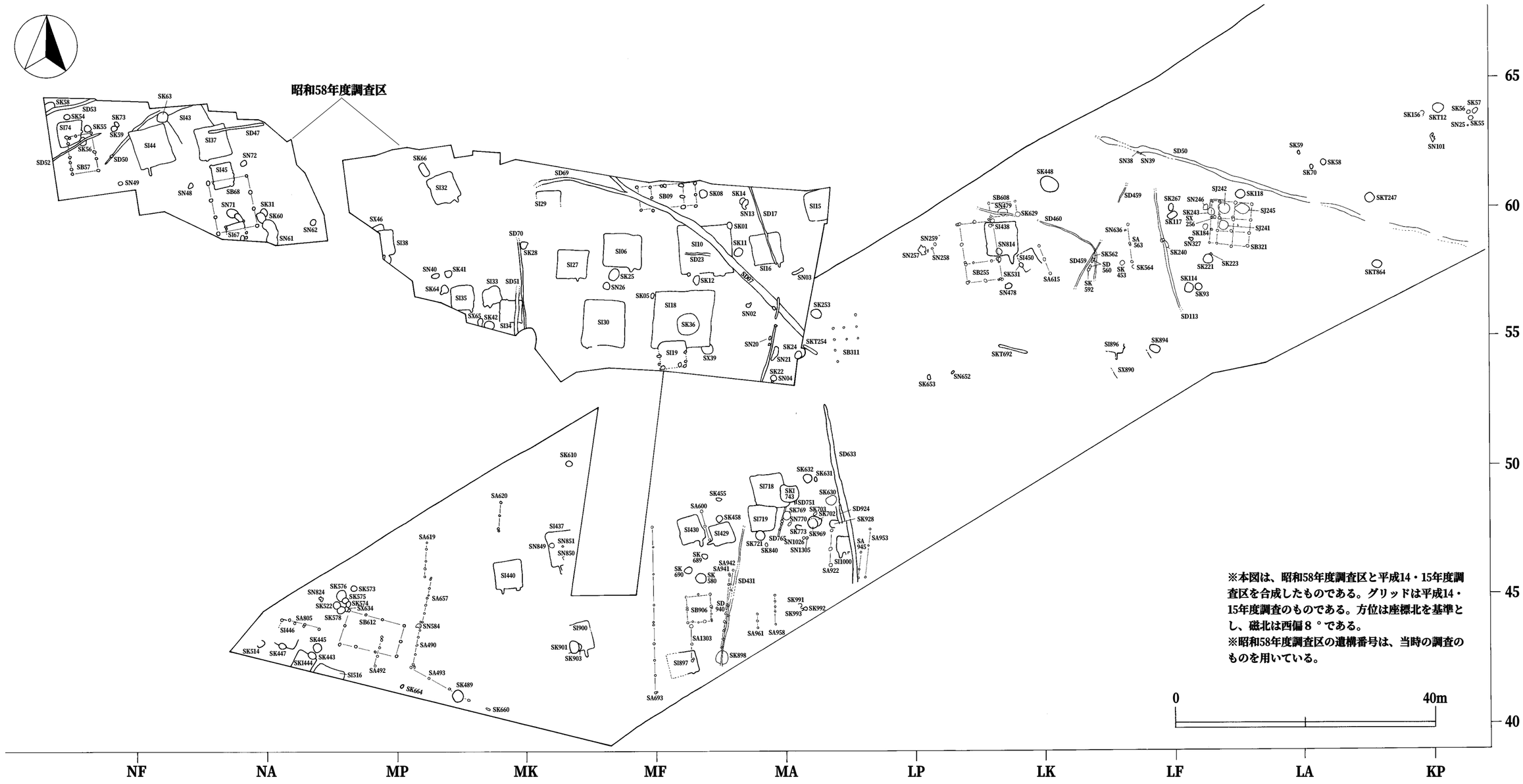
第86図 溝跡（1）

SD633
LS52
LT52
SKP701
LT51
LS50
LT50
LT49
SKP1320
SKP1321
SD924
SKP1323
LS47
SI1000
LS46
SKP1307
SKP828
SD431
MC49
MC48
MC47
SKP957
SKP1319
SKP949
MC44
MC43
SD940
SA942P6
SA941P15
MD44
MD43
SK898
SD113
LG60
LF60
LG59
LF59
第63図
SKP250
SKP252
SKP251
SK240
SK239
SKP153
LG58
LF58
LF57
A—B、C—D
SD633
1 黒褐色土（10YR2/2）しまり強、粘性弱
地山粒10%混入
E—F
SD633
1 黒褐色土（10YR3/2）
炭化物5%、焼土粒、地山粒20%混入
SD924
2 黒褐色土（10YR3/2）しまり強
炭化物、焼土粒混入
SD633
3 黒褐色土（10YR3/2）しまり強
炭化物、焼土粒、地山粒30%混入
A—B、C—D
SD431
1 黒褐色土（10YR2/2）粘性強
焼土粒、地山粒混入
G—H
SA941 P15
1 黒褐色土（10YR3/2）
炭化物5%、焼土粒、地山粒混入
SA942 P6
2 黒褐色土（10YR3/2）しまり強
炭化物、焼土粒、地山粒8%混入
SD431
3 黒褐色土（10YR2/2）粘性強
焼土粒、地山粒混入
A—B、C—D
SD113
1 黒褐色土（10YR2/2）
地山土を微に含む
SKP239
1 黒褐色土（10YR2/2）
炭化物5%、焼土粒、地山粒混入
SK240
2 暗褐色土（10YR3/4）
地山粒5%混入
C—D、
1 黒褐色土（10YR2/2）
0
5m

第88図 溝跡（３）


LM60
LL60
LK60
LJ60
LI60
LH60
SKP742
SKP555
SK562
SKP591
SD560
SKP561
SD459
SD460
SK592
E
F
G
H
E－F
SD459
1 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒混入
SD460
2 黒褐色土(10YR2/2) しまり強
SK562
3 褐色土 (10YR3/2) しまり強
地山粒混入
H=31.1m
0
2m
SKP
486
SKP
485
U字溝
A
B
C
D
LJ58
SD459
SD460
SD459
A—B
H=32.0m
SD460
C—D
H=31.3m
1 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強
1 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強
0
5m

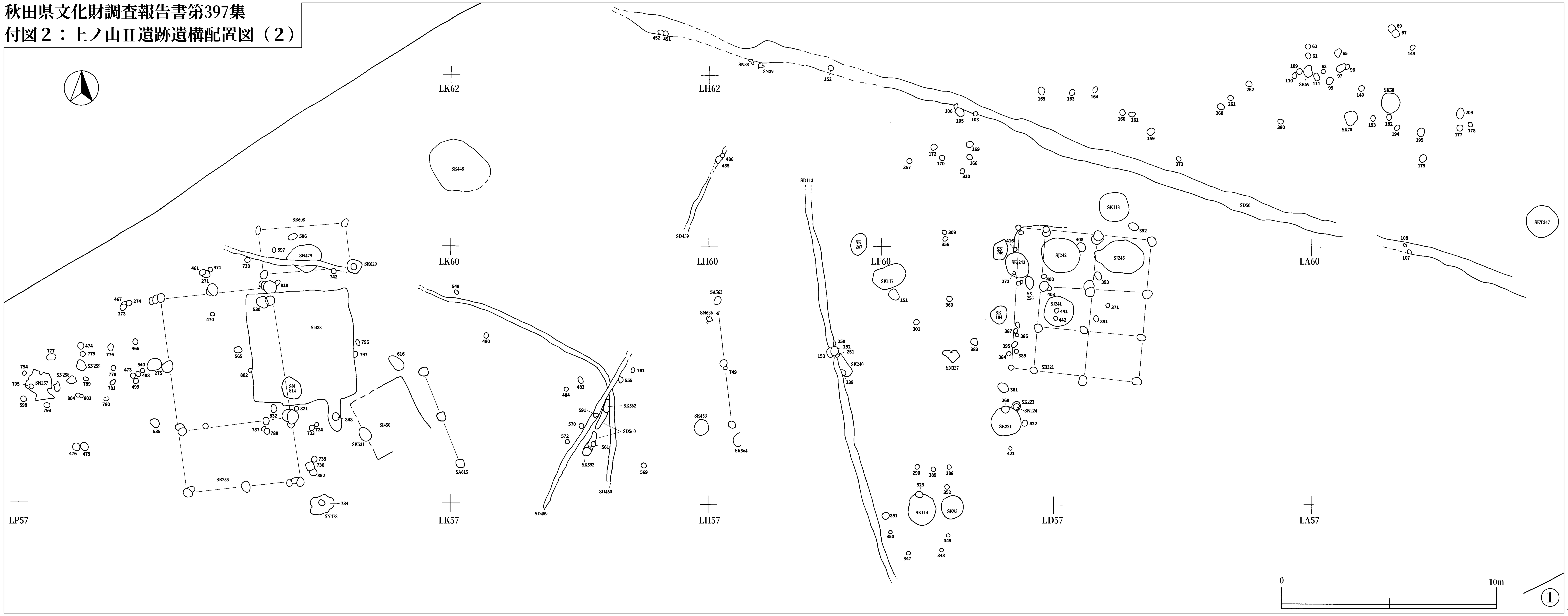
第89図 溝跡（４）



第104図　上ノ山Ⅱ遺跡 昭和58年度調査区および平成14・15年度調査区（西側）遺構配置図

秋田県文化財調査報告書第397集
付図１：上ノ山Ⅱ遺跡遺構配置図（１）

付図２：上ノ山Ⅱ遺跡遺構配置図（２）



※図中の数字のみのものは、SKPを示す。

柱穴様ピット計測表

Pit番号	地区	規模（cm）長軸	短軸	深さ	底面標高（m）	埋土
47	KH68	52	42	29	32.95	黒褐色土
52	KF65	36	29	33	32.33	黒褐色土
61	LA62	26	25	7	32.02	黒褐色土
62	LA62	25	22	7	32.02	黒褐色土
63	KT62	20	20	14	31.94	黒褐色土
65	KT62	40	29	17	31.93	黒褐色土
67	KT62	34	34	12	32.05	黒褐色土
68	KN63	30	30	5	30.27	黒褐色土
69	KT62	37	37	10	32.09	黒褐色土
80	KI68	51	39	20	33.07	黒褐色土
84	KG68	42	38	29	33.02	黒褐色土
95	KN64	45	44	39	30.82	黒褐色土
96	KT62	20	20	14	31.90	黒褐色土
97	KT62	49	29	17	31.90	黒褐色土
99	KT61	39	32	45	31.63	黒褐色土
103	LD61	18	18	17	31.65	暗褐色土
105	LE61	48	35	13	31.68	暗褐色土
106	LE61	26	20	11	31.71	黒褐色土
107	KS59	22	18	13	31.15	黒褐色土
108	KS60	18	12	8	31.18	黒褐色土
109	LA62	26	26	11	31.94	黒褐色土
110	LA61・62	28	24	11	31.94	黒褐色土
111	KT61・62	37	26	30	31.77	黒褐色土
144	KS62	24	19	19	31.89	黒褐色土
149	KT61	27	25	16	31.74	黒褐色土
151	LE59	53	45	46	30.70	第90図参照
152	LF62	23	23	17	31.72	暗褐色土
153	LF58	44	30	24	30.75	黒褐色土
159	LB61	40	31	19	31.47	黒褐色土
160	LC61	27	27	21	31.70	暗褐色土
161	LC61	32	23	16	31.75	黒褐色土
163	LC61	29	29	15	31.58	黒褐色土
164	LC61	30	22	52	31.41	黒褐色土
165	LD61	38	30	15	31.79	黒褐色土
166	LD61	29	26	21	31.43	黒褐色土
169	LD・LE61	30	24	14	31.53	黒褐色土
170	LE61	22	22	16	31.46	黒褐色土
172	LE61	29	28	19	31.43	黒褐色土
175	KS61	32	32	32	31.34	黒褐色土
177	KS61	31	28	18	31.61	黒褐色土
178	KS61	23	19	15	31.65	黒褐色土
182	KT61	30	20	22	31.65	黒褐色土
193	KT61	29	22	20	31.68	黒褐色土
194	KS・KT61	27	19	17	31.62	黒褐色土
195	KS61	41	33	29	31.50	黒褐色土
209	KS61	50	34	24	31.58	黒褐色土
225	KN63	27	24	50	30.12	黒褐色土
227	KN63	26	24	55	29.95	黒褐色土
230	KN62	42	22	28	31.49	黒褐色土
239	LF58	32	20	23	30.77	黒褐色土
250	LF58	27	12	7	30.94	黒褐色土
251	LF58	24	12	不明	不明	黒褐色土
252	LF58	44	33	13	30.86	黒褐色土
260	LB61	31	26	12	31.85	暗褐色土
261	LA61	25	25	22	31.77	黒褐色土
262	LA61	27	27	21	31.81	暗褐色土
268	LD58	38	32	43	30.59	黒褐色土
271	LM59	40	34	16	30.56	黒褐色土
272	LD59	19	16	16	30.86	黒褐色土
273	LN59	32	27	13	30.47	黒褐色土
274	LN59	29	24	28	30.33	黒褐色土
275	LN58	70	54	19	30.44	黒褐色土他
288	LE57	23	22	11	30.71	黒褐色土
289	LE57	20	20	13	30.72	黒褐色土
290	LE57	22	22	12	30.74	黒褐色土
301	LE59	28	24	36	30.74	黒褐色土
309	LE60	25	19	25	31.13	黒褐色土
310	LE60	23	22	16	31.38	黒褐色土
323	LE57	35	25	27	30.65	黒色土
347	LE56	17	17	11	30.70	黒褐色土
348	LE56	17	17	13	30.64	黒褐色土
349	LE56	17	17	13	30.68	黒褐色土
350	LE56	14	14	13	30.73	黒褐色土
351	LE56	33	33	15	30.73	黒褐色土
352	LE57	22	22	16	30.66	黒褐色土
356	LE60	24	20	26	31.18	黒褐色土

Pit番号	地区	規模（cm）長軸	短軸	深さ	底面標高（m）	埋土
357	LE60・61	23	23	14	31.42	黒褐色土
360	LE59	29	29	20	30.98	黒褐色土
371	LC59	22	19	18	31.05	黒褐色土
373	LB61	21	21	11	31.58	黒褐色土
380	LA61	25	23	11	31.76	黒褐色土
381	LD58	53	40	35	30.70	黒褐色土
383	LD58	34	26	36	30.77	黒褐色土
384	LD58	22	22	11	31.00	黒褐色土
385	LD58	20	19	12	30.98	黒褐色土
386	LD58	15	15	12	31.01	黒褐色土
387	LD59	17	17	13	31.01	黒褐色土
391	LC59	35	22	28	30.91	黒褐色土
392	LC60	50	37	20	31.25	黒褐色土
393	LC59	41	27	40	30.87	黒褐色土
395	LD58	32	20	14	30.98	黒褐色土
400	LD59	26	19	12	31.14	黒褐色土
403	LD59	30	23	7	31.17	黒褐色土
408	LC59・60	44	34	17	31.17	黒褐色土
416	LD59	17	15	41	30.90	黒褐色土
421	LD57	19	14	16	30.73	暗褐色土
422	LD57	25	25	19	30.77	黒褐色土
441	LC59	22	19	23	30.75	褐色土
442	LC59	23	23	27	30.73	黒褐色土
451	LH62	22	20	15	31.80	黒褐色土
452	LH62	30	24	22	31.73	黒褐色土
461	LM59	33	24	30	30.41	黒褐色土
466	LN58	26	23	11	30.52	黒褐色土
						第101図⑧参照
467	LN59	30	16	24	30.36	黒褐色土
470	LM59	19	19	13	30.57	黒褐色土
471	LM59	23	18	9	30.65	黒褐色土
473	LN58	24	24	20	30.40	黒褐色土
						第100図①参照
474	LO58	28	28	41	30.19	黒褐色土
						第91図138・139、第100図②⑤参照
475	LO57	39	39	12	30.29	黒褐色土
476	LO57	36	36	11	30.28	黒褐色土
480	LJ58	26	22	14	30.68	黒褐色土
483	LI58	33	22	11	30.70	黒褐色土
484	LI58	23	19	13	30.71	黒褐色土
485	LG61	35	25	11	31.21	黒褐色土
486	LG61	20	14	8	31.30	黒褐色土
494	MN41	27	20	6	29.11	黒褐色土
495	MN41	38	36	11	29.02	黒褐色土
496	MO41	29	28	10	29.01	黒褐色土
497	MO41	34	30	17	28.95	第90図参照
498	LN58	25	23	22	30.38	黒褐色土
499	LN58	25	25	24	30.36	黒褐色土
513	MD52	26	25	24	29.47	黒褐色土
515	MT42	60	55	20	28.58	黒褐色土
530	LM59	60	51	24	30.48	黒褐色土
535	LN57	46	36	21	30.23	黒褐色土
540	LN58	20	20	18	30.43	黒褐色土
549	LJ59	22	17	16	30.69	黒褐色土
555	LI58	28	26	13	30.72	黒褐色土
561	LI57	21	21	5	30.74	黒褐色土
565	LM58	39	28	11	30.44	黒褐色土
569	LH57	22	19	33	30.48	黒褐色土
570	LI57	25	25	19	30.61	黒褐色土
572	LI57	20	20	17	30.61	黒褐色土
579	MC48	18	16	5	29.87	黒褐色土
587	MO41	27	27	30	28.79	黒褐色土
591	LI58	23	18	5	30.70	黒褐色土
596	LL60	44	28	37	30.46	黒褐色土
597	LM59	22	17	22	30.56	黒褐色土
598	LO58	36	30	9	30.35	黒褐色土
604	MB48	17	12	10	29.81	黒褐色土
616	LK58	84	53	64	30.06	第90図参照
639	MO42	37	37	15	28.93	黒褐色土
640	MO42	28	28	10	28.97	黒褐色土
642	MQ44	36	26	27	28.49	黒褐色土
643	MQ44	27	27	13	28.62	黒褐色土
644	MR45	28	27	16	28.55	黒褐色土
645	MR45	34	34	11	28.60	黒褐色土
646	MR44	30	20	9	28.65	黒褐色土
647	MR44	26	12	9	28.66	暗褐色土

Pit番号	地区	規模（cm）長軸	短軸	深さ	底面標高（m）	埋土
648	MR44	44	35	21	28.53	黒褐色土
649	MS43	32	20	8	28.68	黒褐色土
650	MS44	58	26	14	28.59	黒褐色土
654	LN53	22	16	4	30.08	黒褐色土
655	LS50	36	22	14	29.88	黒褐色土
658	MP・MQ41	66	53	53	28.43	黒褐色土
665	MO41	50	42	8	28.98	黒褐色土
666	MO41・42	20	20	16	28.83	黒褐色土
667	MO41	21	18	8	28.93	黒褐色土
676	MD46	29	18	6	29.84	暗褐色土
677	MD46	20	20	15	29.78	黒褐色土
678	ME45	22	22	6	29.85	暗褐色土
679	ME45	22	19	15	29.75	黒褐色土
680	MD45・46	29	29	14	29.83	黒褐色土
681	MD46	34	28	13	29.83	黒褐色土
682	MD46	25	25	15	29.81	黒褐色土
683	MD46	30	21	12	29.82	黒褐色土
684	MC46	20	20	11	29.84	黒褐色土
685	MC46	26	26	15	29.82	黒褐色土
686	MC46	22	21	11	29.84	黒褐色土
687	MC46	33	33	7	29.87	暗褐色土
688	MD46	26	26	18	29.77	暗褐色土
691	MC・MD45	34	34	13	29.82	黒褐色土
694	MF45	20	20	10	29.04	暗褐色土
695	MF45	40	40	5	29.08	黒褐色土
696	MF45	22	22	8	29.08	黒褐色土
697	MF45	42	36	12	29.02	黒褐色土
698	MF46	42	42	12	29.05	黒褐色土
701	LS50	21	21	12	29.95	不明
707	MD46	21	21	12	29.81	黒褐色土
723	LL57	24	24	22	30.41	黒褐色土
724	LL57	18	18	6	30.60	黒褐色土
730	LM59	23	23	16	30.59	黒褐色土
735	LL57	29	29	33	30.27	黒褐色土
736	LL57	37	37	30	30.25	黒褐色土
742	LL59	24	18	8	30.69	黒褐色土
744	MB47	20	17	7	29.76	黒褐色土
745	MA49	24	20	10	29.88	黒褐色土
749	LG58	19	15	10	30.82	黒褐色土
761	LH58	21	18	16	30.70	黒褐色土
766	MA47	32	28	11	29.86	暗褐色土
767	MA47	40	35	20	29.77	暗褐色土
768	MA47	46	37	36	29.64	黒褐色土
771	LT48	28	20	49	29.54	黒褐色土
772	MA47	23	23	26	29.74	黒褐色土
775	MA47	46	36	31	29.79	黒褐色土
776	LN58	34	25	36	30.52	黒褐色土
777	LO58	38	29	16	30.37	黒褐色土
778	LN58	24	20	11	30.46	黒褐色土
779	LO58	26	21	12	30.39	黒褐色土
780	LO58	28	19	12	30.42	黒褐色土
781	LN58	30	23	10	30.45	黒褐色土
784	LL56・57	28	26	20	30.37	黒褐色土
787	LM57	24	19	8	30.51	黒褐色土
788	LM57	29	27	37	30.22	黒褐色土
789	LO58	26	16	12	30.34	黒褐色土
793	LO58	31	24	11	30.35	黒褐色土
794	LO58	21	21	10	30.38	黒褐色土
795	LO58	22	22	10	30.36	黒褐色土
796	LL58	28	16	14	30.52	黒褐色土
797	LL58	22	21	9	30.53	黒褐色土
802	LM58	21	13	10	30.53	黒褐色土
803	LO58	15	15	9	30.46	黒褐色土
804	LO58	21	21	12	30.41	黒褐色土
808	MD48	25	21	12	29.76	黒褐色土
809	MC48	20	14	9	29.80	暗褐色土
810	MD48	17	17	7	29.80	暗褐色土
811	MC48	20	18	11	29.78	暗褐色土
812	MC47	16	16	6	29.79	暗褐色土
813	MC46	46	40	12	29.72	黒褐色土
815	LS48	25	21	24	29.73	黒褐色土
816	LS48	36	36	44	29.53	黒褐色土
817	LS48	19	19	11	29.84	暗褐色土
818	LM59	30	20	23	30.49	黒褐色土
821	LL58	21	21	10	30.52	黒褐色土
825	MR44	23	23	8	28.64	黒褐色土

Pit番号	地区	規模（cm）長軸	短軸	深さ	底面標高（m）	埋土
827	MB47	24	22	14	29.73	暗褐色土
828	MB46・47	20	16	12	29.75	暗褐色土
829	MA47	20	16	9	29.80	暗褐色土
830	MA47	41	33	24	29.73	黒褐色土
831	LT48	23	20	10	29.80	暗褐色土
832	LM58	36	25	30	29.94	黒褐色土
833	LT・MA47	24	24	11	29.75	黒褐色土
834	LT48	28	23	32	29.60	黒褐色土
835	LT48	20	20	8	29.85	暗褐色土
836	LT48・49	32	26	33	29.60	黒褐色土
837	LT49	26	20	10	29.88	暗褐色土
838	MA・MB47	17	17	9	29.79	黒褐色土
844	MP42	28	20	16	28.82	黒褐色土
845	MP43	19	19	8	28.81	黒褐色土
848	LL57・58	40	30	45	30.25	黒褐色土
852	LL57	40	36	23	30.32	黒褐色土
853	MJ46	35	31	10	29.34	黒褐色土
862	JQ69	44	41	13	29.95	黒褐色土
902	MF41	26	20	17	29.33	黒褐色土
908	MH42	38	36	26	29.36	黒褐色土
913	MH42	32	31	14	29.45	黒褐色土
916	MH43	41	34	44	29.24	黒褐色土他
917	LT46・47	42	36	18	29.61	黒褐色土他
918	LT46	31	27	25	29.55	黒褐色土
919	LT46	22	20	17	29.61	黒褐色土
920	LT46	22	19	13	29.66	黒色土
921	LS47	22	21	13	29.69	黒褐色土
925	LS47	18	18	19	29.58	黒褐色土
927	LR47	28	25	9	29.66	黒褐色土
930	LS48	28	24	11	29.92	黒褐色土
932	LS48	34	32	16	29.87	黒褐色土
933	LS47	23	23	27	29.87	黒褐色土
934	LR47	28	28	10	29.66	黒褐色土
935	MD43	38	29	14	29.64	黒褐色土
936	MD43	38	28	14	29.65	黒褐色土
937	ME43	50	41	27	29.41	黒褐色土
938	ME44	41	30	11	29.60	黒褐色土
943	MC44	42	38	33	29.58	黒褐色土
944	MC44	30	30	17	29.74	黒褐色土
946	MC45	28	26	20	29.74	黒色土
947	MC45	27	24	13	29.83	黒褐色土
949	MC44	24	21	23	29.70	黒褐色土
952	MC44	24	22	11	29.82	黒褐色土
954	LR46	21	16	7	29.61	黒褐色土
955	MC43	30	28	13	29.78	黒褐色土
956	MC43	32	30	38	29.50	黒褐色土
957	MC45	24	20	11	29.82	黒褐色土
959	MC45	30	22	11	29.80	黒褐色土
960	MC45	24	24	16	29.72	黒褐色土
962	MB44	33	30	14	29.74	黒褐色土
966	MB44	20	18	24	29.60	黒褐色土
967	MB44	20	20	7	29.80	黒褐色土
968	MB44	16	13	10	29.77	黒褐色土
970	MC45	25	23	7	29.78	黒色土
980	LT45	24	20	23	29.61	黒色土
981	LS45	24	19	17	29.63	黒褐色土
982	LT45	20	14	13	29.70	黒褐色土
985	LS45	22	18	12	29.71	黒褐色土
986	LS45	15	10	8	29.74	黒色土
987	LT45	28	20	7	29.77	暗褐色土
988	LT45	24	18	9	29.76	黒褐色土
989	LS45	27	27	10	29.71	黒褐色土
990	LT44	26	22	11	29.70	黒褐色土
994	LT45	18	12	7	29.77	黒褐色土
995	LT45	25	22	11	29.73	黒褐色土
996	LT45	16	16	13	29.72	黒褐色土
997	LS・LT45	17	14	11	29.73	黒褐色土
998	LT44	23	15	12	29.67	暗褐色土
999	LT44	18	16	11	29.66	黒色土
1001	LT46	24	22	12	29.75	黒褐色土
1002	MD42	16	14	16	29.60	暗褐色土
1003	MD42	21	18	14	29.63	黒褐色土
1004	MD43	28	22	10	29.69	黒褐色土
1007	LT45	14	12	9	29.79	黒褐色土
1008	LT46	19	16	9	29.78	黒褐色土
1009	LS45	40	24	8	29.78	黒色土

Pit番号	地区	規模（cm）長軸	短軸	深さ	底面標高（m）	埋土
1010	LS45	32	32	23	29.66	黒色土
1011	LS45	20	20	13	29.75	黒色土
1012	MD43	19	16	12	29.69	黒褐色土
1017	LT45	21	18	10	29.75	黒褐色土
1021	LS45	14	13	8	29.75	黒褐色土
1022	LT46	31	22	10	29.82	黒褐色土
1023	LT46	48	40	13	29.74	黒褐色土
1034	LS46	25	18	16	29.74	黒褐色土
1035	LS46	15	15	15	29.74	黒褐色土
1053	MA46	26	24	21	29.72	黒褐色土
1054	LT47	31	25	13	29.82	黒褐色土
1055	LT47	37	32	32	29.61	黒褐色土
1056	MA46	34	20	17	29.75	黒褐色土他
1057	LT47	19	16	9	29.83	黒褐色土
1058	LT47	15	15	14	29.79	黒色土
1059	LT47	25	22	19	29.76	黒褐色土
1060	LS47	32	28	10	29.87	黒褐色土
1061	LS47	24	23	17	29.80	黒褐色土
1063	LS48	22	22	15	29.85	黒褐色土
1064	LS48	22	22	16	29.85	黒褐色土
1065	MA47	18	15	11	29.83	黒褐色土
1067	LS・LT47	17	12	18	29.77	黒褐色土
1117	LR46	22	20	11	29.78	黒褐色土
1118	LR46	27	27	24	29.66	黒色土
1119	LR46	-	-	17	29.71	黒褐色土
1120	LR・LS46	25	21	14	29.75	黒褐色土
1121	LS46	37	24	29	29.61	黒褐色土
1182	LS47	31	28	20	29.75	黒褐色土
1183	LS47	25	20	14	29.80	黒褐色土
1186	LT47	28	23	11	29.81	黒褐色土
1191	LT47	38	36	12	29.82	黒褐色土
1192	ME44	22	20	16	29.63	黒褐色土
1193	MA43	20	20	19	29.55	黒褐色土
1194	MA44	20	18	18	29.54	黒褐色土
1195	MB43	22	22	13	29.61	暗褐色土
1196	MB42・43	30	16	16	29.57	黒褐色土
1197	MB43	23	23	23	29.53	黒褐色土
1198	MB43	17	17	7	29.67	黒褐色土
1207	MA46	25	20	15	29.77	暗褐色土
1208	MA46	28	23	12	29.80	暗褐色土
1209	LT・MA47	27	25	12	29.73	黒褐色土
1210	MA46	20	20	9	29.85	黒褐色土
1211	MA46	26	21	8	29.82	黒褐色土
1212	MA46	30	22	12	29.78	黒褐色土
1213	MA46	21	21	11	29.81	黒褐色土
1225	LR・LS46	33	25	14	29.72	黒褐色土
1230	LT47	33	28	11	29.83	黒褐色土
1231	LT47	33	28	17	29.76	黒褐色土
1232	LT47	24	20	15	29.78	黒褐色土
1233	LT47	12	12	16	29.76	黒褐色土
1298	LS47	23	16	16	29.82	黒褐色土
1299	LS47	29	25	27	29.70	黒褐色土
1301	LS47	20	18	8	29.91	黒褐色土
1302	LS47	18	17	11	29.86	黒褐色土
1306	MB47	23	20	6	29.80	黒褐色土
1307	MB47	24	20	13	29.82	黒褐色土
1308	MC47	16	16	8	29.86	黒褐色土
1309	MD42	26	26	18	29.60	黒褐色土
1310	MC42	26	25	21	29.56	暗褐色土
1311	MC42	38	28	22	29.60	黒褐色土
1312	MC42	22	20	10	29.55	黒褐色土
1313	MC42	18	18	10	29.65	黒褐色土
1314	MC42	25	20	17	29.60	黒褐色土
1315	MC42	36	25	12	29.67	黒褐色土
1316	MC42・43	36	27	29	29.50	黒褐色土
1317	MD42	32	26	11	29.68	黒褐色土
1318	MD42	26	25	9	29.52	褐色土
1319	MC44	32	30	18	29.74	褐色土
1320	LR48	24	20	37	29.65	黒褐色土
1321	LR48	22	22	26	29.76	黒褐色土
1322	LS48	20	18	10	29.85	黒褐色土
1323	LR47	29	24	6	29.48	黒褐色土